

幻狼 FANTASIA NOVELS
GENTOSHA COMICS



THE HOME OF THE WINGS
Volume two
Lower volume

翼の帰る処[ところ]2

——鏡の中の空——

下



妹尾ゆふ子 YUFUKO SENOWO

Illustration

ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］2——下

——鏡の中の空——

妹尾ゆふ子

THE HOME OF
THE WINGS Volume two
Lower volume

YUFUKO SENOWO



Illustration

ことき——KOTOKI

GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
2
Lower volume



目次

第四章 ——— 11

第五章 ——— 91

第六章 ——— 159

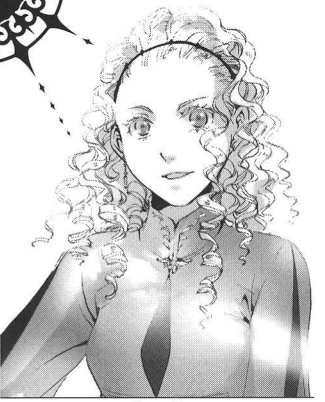
あとがき ——— 266

人物紹介



ヤエト

「過去視」の恩寵を持つ北嶺国の相であり、《黒狼公》



皇女

皇帝の娘であり、北嶺の王として着任する



エイギル

ルーギンの部下



ルーギン

皇女の騎士団長



タルキン

北嶺の民



ジェイサルド

《黒狼公》の騎士



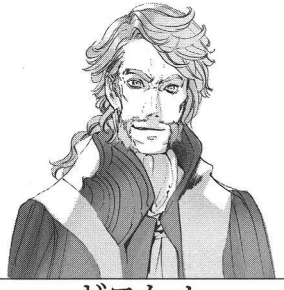
ラキニー

皇帝の妹



スラジャ

《黒狼公》の代官



ギスケル

博沙国の正使



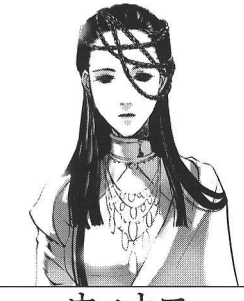
スーリヤ

ヤエトが救った少女



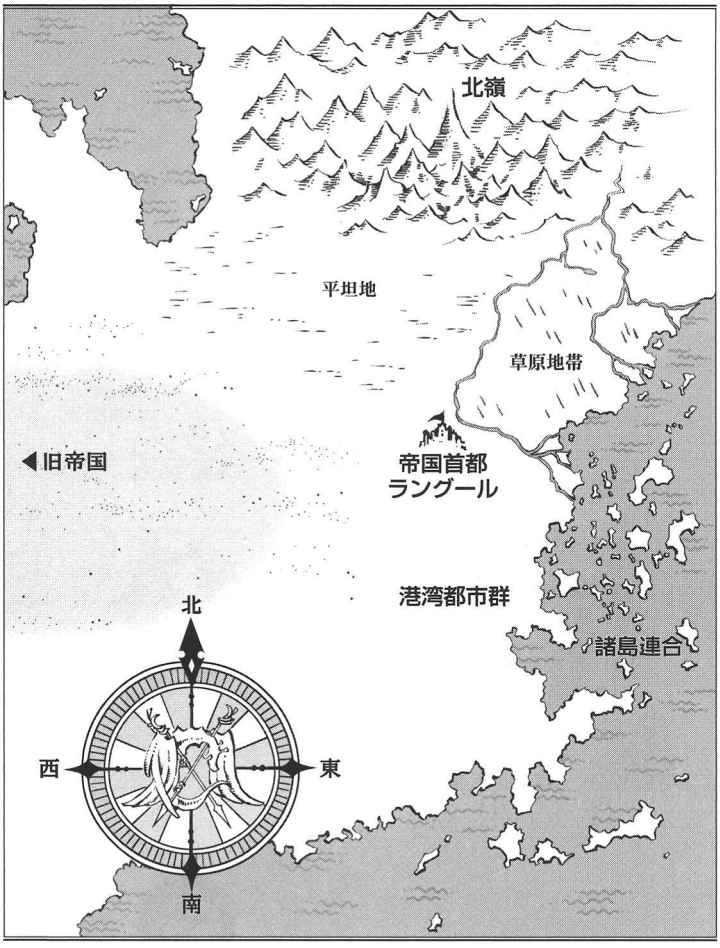
ファルバーン

アルハンの遺民



ウィナエ

ターンの預言者



THE HOME OF THE WINGS
2

第



章

1

皇女は寝たふりをしているようだった。

ほんとうに眠っているわけではない。ヤエトが露台から戻ったときに、さっと頭が動いたのが証拠だ。どうやら、様子を窺っていたらしい。

――寝ていることにしたいなら、そうさせるか。

そちらに歩み寄りながら、少し迷った。畏れ多くも真帝国の皇女殿下が《黒狼公》の寝台で一夜を明かすというのもどうなのか。漏れたが最後、おそろしい噂になるだろう。皇帝の耳に入る可能性を思えば、すぐにも荷物をまとめて逃げ出すべきだ。

彼は皇女を見下ろした。羽織っていた濃紺の外套は、身動きした拍子に肩からすべり落ちたらしい。白い夜着の袖が半分ほど覗いている。

横たわる少女を見下ろす三十男という構図を想い、ヤエトは少なからずげんなりした。よからぬ下心を抱いているようにしか見えないではないか。

こんな状況に追い込んだすべてを、彼は呪った。皇女はもちろん、妙な軽口を叩いたルーギンも、鳥の繁殖にあたって必要な気遣いを怠った厩舎長も呪うべきだ。無論、皇帝も呪うべき名前の一覧表に仲間入りしている。もっとも、彼を北嶺に左遷した、かつての同僚の名が最上位から動くことはない。

自慢できることではないが、ヤエトは実は執念深い。恨みつらみを忘れないというだけで、滅多に報復行動には出ないのだから、無害なものだが。

「起きてください」

皇女は動かない。男の部屋で寝るというのがどういうことか、わかっていないのか。それともヤエトを男扱いしていないのか。

壁の方を向いた白い横顔を見下ろす内に、なんとなく腹が立って来た。なぜなのかは、自分でもよくわからない。たぶん疲れているのだろう。

「斯様なむさ苦しい部屋で、お休みいただくわけには参りません。伝達官殿が使っていらした部屋に、王をお迎えする準備がととのっております」

やはり、皇女は動かない。

きっかけが必要なのだろうと思うのと、苛立ちが最高潮に達するのがほぼ同時だった。彼はため息をついて、寝台の端に腰を下ろした。

「襲われたいのですか？」

皇女が跳ね起きた。眼をまるくして、ヤエトを凝視している。脱げた外套を拾ってやろうと手をのばすと、壁の方へ後ずさった。

苦笑して、ヤエトは手を引いた。どう見ても、向こうから迫られるといった展開はなさそうだ。

「お気がつかれましたね。お寒くはありませんか」

「……からかったのか」

「少し、危機意識がご入用かと存じましたので」

皇女はくちびるを尖らせた。

「だが、そなたには、そんな気はないだろう」

高をくくっていたら襲うといわれ、一瞬本気にした……というところだろう。これから襲いますよと前置きしてから手を出すはずがないではないか。腕力でも体力でも、余裕で負ける自信がある。

「無駄死にするなとお命じになったのを、お忘れですか。左様な悪心を起こせば、王に手ずから成敗されることになりましょう。これこそ、まさに無駄死にと心得ます」

「わからぬぞ。宮廷の噂通り、よろこんで受け入れるかもしれぬではないか。嘘でも、命を懸けて手に入れたいと申してみればどうだ。その程度の気概も持ち合わせぬのか」

もちろん、そんなものの持ち合わせはない。豊富なのは、屁理屈と怠け心くらいのものだ。

「ヤエトのところは嫌だと、ご指名いただいた直後にですか？　そこまで無謀ではありません」

皇女はぐっと言葉に詰まった。俯いて黙られると、困ってしまう。虐めているようではないか。

できるだけやさしい口調で、責めているように聞こえないことを心掛けて声をかけた。
「遺憾ながら、ここ以外に王をお連れするのによい場所がないのです。わたしがルーギン殿の立場でも、同じようにしたでしょう。ご不快であれば――」
「違う」
顔を上げた皇女の表情は、必死だった。戸惑いを感じさせられるほど。
「……なにがでしょう？」
「嫌なのは、そなたではない。自分自身だ」
ヤエトは視線を落とした。なにげなく寝台についていた手に、皇女が手をかさねていた。手を引こうとすると、逆にしっかり握られてしまう。それも、引き倒されそうな勢いだ。本気で襲ってほしいのか！と思ったが、さすがに口にはできない。
ヤエトは眼を閉じ、深呼吸をしてから尋ねた。
「なにか、問題でもおありですか」
「大ありだ。わたしは北嶺王なのに……北嶺をまかされているのに、このていたらく。正気を失って、運び出されたのだぞ……」
情けないにもほどがある、と皇女は口の中でつぶやいた。なるほど、とヤエトは納得した。
――矜持が許さないわけか。
事態にうまく対処できず、保護者のところに送還されたと見ているわけだ。なるほど、それは我慢がなるまい。ヤエトのところは嫌だというはずだ。
理由がわかって、ヤエトも肩から力が抜けた。そういうことなら、話は簡単だ。
「では、暫しは王をお休みになられればよい」
「……休む？」
「皇女殿下は、まだお若くていらっしゃる。そのお歳で、民を背負って立とうとなさるのはご立派なこと。ですが、さぞお疲れでしょう。少々お休みになっても、誰も文句は申しません」
皇女はぽかんとしていたが、すぐに怒りだした。
「馬鹿を申せ！　上に立つ者が、休むことなどでき



るはずがなかろう」
「上だろうが下だろうが、人は休まねば死にます。身体だけの話ではありません、心も休ませねばこわれてしまうのですよ。どうかご理解ください」
ゆるんだ手のあいだから自分の手を引き抜くと、ヤエトは火のついていない燭台を手にとった。皇女がいつ来るかわからなかったので、室内の灯火は最小限にしてあったのだ。短くなった蠟燭の火を新しい燭台に移すと、ずいぶん明るくなった。例の御用達蠟燭屋の商品で、ほぼ原価で買える契約だ。
「そういうわけには……いかぬであろう。文句をいう者はいるはずだ」
「いわせません」
「だが――」
「わたしが黙らせます」
皇女はまじまじとヤエトをみつめた。蠟燭の炎が眸に映って、いつもとは違う色に見える。
本音をいえば、すぐにも仕事の話がしたい。何日も、まともに連絡がつかなかったのだ。皇女に直接問いただしたいことは、いくらでもあった。
しかし、今さら少し延びても変わらないだろう。
「……どうやってだ」
「そうですね。ジェイサルドに命じれば、なんとでもしてくれるでしょう」
「ジェイサルドでも、陛下のお口は塞げぬだろう」
どうだかな、と思ったがそれこそ言葉にはできない。ヤエトは恭しく一礼して答えた。
「それでしたら、わたしがお相手つかまつります。真上陛下を剣で脅したてまつることはできませんが、口喧嘩でしたらなんとかなるでしょう」
笑みのようなものが皇女の顔をかすめたが、すぐに消えてしまう。
「馬鹿なことを申すな」
「陛下もわかってくださいます」
皇子たちと並び立たせたというだけでも、皇帝の愛情の深さが伝わるではないか。父の愛に気づいて

いないのは、当の皇女だけだろう。
皇女の視線は室内をさまよっている。灯りが増えたから、少し視界がよくなっただろうか。書類棚がほとんどの部屋で、見るべきものもないのだが。
「万が一わかってくださらないようなら、おわかりいただけるまで説得します。陛下だけではありません、どなたであっても、なんとかします。ですから、暫しは王でいらっしゃることをお忘れください」
押しつけがましくならないよう気を遣ったつもりだが、皇女はどう感じただろうか。ヤエトの言葉に眼を閉じて、息を吐いた。
「無理だ。《天地輪》がある」
「ああ……そうでしたね」
あれは竜種を休ませないための仕掛けなのかもしれない。あるいは、意志の力がどこまでもつか、玉座への執着がどれくらい強いかを見極めるためのものなのかも。なんにせよ、こればかりはヤエトでは肩代わりができない。困ったことだ。
落ちた外套を拾い上げ、彼は話を進めた。
「では、せめて《天地輪》に繋がっておいでないときだけでも。先にも申しましたが、皇女殿下は北嶺王として立派につとめておいでです。お側に控えていなくとも、わかります。ですが、そういう人ほど早く燃え尽きるもの。うまく息抜きをなさることを覚えてくださらねば、下の者が困ります」
皇女は真面目に聞いていたが、話が進むにつれて、呆れたような顔になった。
「待て。それは、そなたのことではないか？」
ヤエトは首をかしげた。頑張り過ぎて燃え尽きるといった人物像に、自分が該当するだろうか？
「わたしに関して申せば、はじめから燃えてなどいなかったというのが正確なところではないかと」
「……いや、それでは困る」
「そうでしょうか？　そもそも発火していなければ燃え尽きもせず、お困りになることはなにも――」
「そういう問題ではない。わたしが困るといったら

困るのだ。そうだ、そなたも少しは燃えてみたらどうだ。なにか熱くなるようなことはないのか」
「発熱でしたら、容易なのですが」
「それはやめておけ」
「善処します」
皇女は外套を受け取ったが、肩にかけようとはしなかった。夜着一枚で、寒くないのだろうか。ヤエトは見ているだけで寒い。良識的にも問題がある。
膝の上の外套をひっくり返したり引っ張ったりしながら、皇女はつぶやいた。
「……そなたはわたしを甘やかしたいのか」
「わたしは、こうするべきと思うことを申し上げているに過ぎません。そのようにお感じになるのであれば、今の殿下は甘やかされる必要があるのです」
「ヤエト」
「はい」
「わたしはまだ、おかしいのかな」
皇女の視線が揺れている。なぜか膝立ちになろうとするので、あわてて手を貸した。
ヤエトの顔も見ず、ぼんやりとつぶやく。
「足もとがふわふわする」
「でしたら、このまま横におなりください」
「いや、伝達官の部屋へ案内せよ」
「無理をなさらずとも……ジェイサルドに運ばせましょう。今、呼んで参ります」
「嫌だ」
「……は？」
皇女はまたぺたんと座りこんだ。ヤエトの手は握ったまま、顔をしかめる。
「それくらいなら、ここで寝る」
急に調子がおかしくなってきた。ほっとして、気が抜けたのかもしれない。緊張がとけたのは結構なことだが、皇女をはるばる北嶺から運んだルーギンの苦労が偲ばれる。
「わかりました。どうか、お心のままに」
「あのな、知っておるか？」

「なにをでしょう」
「わたしは結婚してはならぬのだ」
話題が変わるにもほどがある。この調子で一晩つきあわされる覚悟は、ヤエトにはない。
「どういうことでしょうか」
嫌なら水を向けなければよいのだが、皇女がこんなことを口走った理由がわからないと気分が悪い。
「叔母上がな……」
「皇妹殿下が？」
「うん……新年祭のときに、……わたしの切り札は、結婚だけだから。いつでも結婚してやろうという雰囲気で、釣り上げるだけ男を釣り上げる以外、北嶺王としてこの先を生き抜く手段はない、と。だから、結婚をしたら最後だと……な」
不安げな眸が、ヤエトを見た。
そなたはどう思う、と皇女は尋ねない。だが答えないわけにもいかないだろう……と口を開きかけて、ヤエトは気を変えた。
グランダクの言葉を思いだしたのだ。考えさせたければ黙っていろ、というあれだ。
皇妹の話は、一面の真理ではある。女性は政略結婚の重要な駒だ。これから予想される帝国の内乱期を――それが訪れるとして、だが――北嶺を守りつつ切り抜けるなら、自身が女性である皇女にとって、結婚は最強の切り札だ。間違いない。
結婚は同時に弱点にもなる。寡婦は再婚ができない。子をなす前に夫が死んでしまえば、婚家の財産や地位を相続することもできない。へたをすれば、北嶺の主権だけもぎ取られ、捨てられることになるだろう。最悪の展開だ。
それを踏まえれば、皇妹の助言は正しい。色香を武器に男たちと渡り合うつもりなら、皇妹はよい見本といえるだろうが――皇女にできるのか。
「やらねばならぬなら、できると思った」
同じことを、皇女自身も考えていたのだろう。それでも自信はないに違いない。弱々しい声だった。

代替案もなく言下に否定はできないが、きっとできると励ます気にもなれない。無言のままのヤエトを見上げて、皇女はささやいた。

「鳥たちは、いいな」

また話題が変わったと思ったが、そうではなかったようだ。つづく言葉を聞いて、得心がいった。

「……自分の心にだけ正直に、相手を選ぶのだ。これだという相手に出会うと、すごいぞ。視界がぱあっと明るくなってな、この世はかくも美しいものかと思えるほど、すべてがかがやいて見える」

要は、恋愛への憧れが高まったという話なのだ。ただでさえ、結婚は禁じ手だと教わって逆に興味が湧いていたはずだ。そうでなくても年頃の娘なのだ。ルーギンのいう、箍のはずれた雰囲気というのもそれが原因に違いない。なんと面倒くさいことをしてくれた、と鳥たちに苦情をいいたい気分である。

しかも、ここで皇女が彼の意見を求めた。

「どう思う?」

――なにをだ!

と、問い返したいところだが、そういうわけにもいかない。ちょっとおかしくなっているとはいえ、相手は彼の主君なのだ。しかも、おかしくなった責任は本人にはない。いわば事故だ。

慎重に、ヤエトは答えた。

「好き嫌いだけで相手を選ぶのも、大変なものかと存じます」

「そうか?」

「それほど好きな相手がみつからなければ、どうします。家同士の決まりでしかたなく結婚した相手と、うまくいくこともありますし――」

ここまで語ってしまってから、結婚はよいものだと説いても意味がないことに気がついた。話の持って行き場を見失い、言葉が途切れてしまう。

皇女は、わけ知り顔でうなずいた。

「うまくいかぬことも、ある」

「好いた者同士でも、気もちが変わることもござい

ます。一概に、どちらがよいとは申せません」
「やはり、わたしは結婚せぬ方がよいのかな」
「どうしてもというお相手がおできになってから、あらためてお考えになればよいかと存じます」
皇女の肩から、少し力が抜けたようだ。
「そうか……そうだな」
「とにかく、今宵はもうお休みください。朝になれば、また新しいお考えも浮かぶかもしれません」
「そなたは、結婚はせぬのか？」
いつもの回答を口にしかけて、あやういところで思いとどまった。すぐ死ぬだろうからという理屈は、皇女にはいわない方が賢明だろう。
「今のところ、その予定はありません」
「好いた相手はおらぬのか」
「恋についてでしたら、ルーギン殿がよき教師となってくださいますよ。いや、副長の方が適任かもしれませんね」
皇女は微笑んだ。
「そうやって、また自分以外の誰かに話をふろうとするのだな」
「ご不快でしたら失礼を」
「許してとらす。その代わり、わたしが寝るまで側にいて、話をしてくれぬか」
「本気でいらっしゃいますか？」
不満げに口を尖らせ、皇女は彼を見返した。
「そなたが申したのだぞ、今のわたしは甘やかされる必要があるのだと」
「遠慮のないところを申し上げれば、わたしもとても疲れていて眠いのです」
これがヤエトの切り札で、結婚と違って何回でも使えるのだから、便利なことときわまりない。問題は、方便ではなくなる危険性が高いということか。
皇女はあわててヤエトの額に手をあてた。
「大丈夫か。熱は？」
「今はまだ……ご心配をおかけする状態になる前に、休ませていただいてもよろしいでしょうか。腑甲斐

ないことで、まことに申しわけありませんが」
「伝達官の部屋はどこだ、案内を呼べ。そなたはもう休め」
いきなり聞き分けがよくなった皇女に、ヤエトは苦笑を押し隠して応じた。
「隣室です。……お足もとは大丈夫ですか？」
「馬鹿者、わたしのことより自分の心配をせよ」
ヤエトの手を借りて寝台を降りると、皇女はきちんと自分の足で立った。若干、こころもとない感じは残っているが、歩くのに支障はなさそうだ。外套を肩にかけてやると、皇女はヤエトを見上げた。
ほんとうに心配そうな顔をしている。
「慣れておりますから」
安心させるつもりの言葉が、逆効果だったらしい。皇女は彼を睨みつけた。
「そなたを失いたくないのだ」
「ありがたいお言葉です」
「心から、いっておるのだぞ？」
「もったいないことです」
案じられているのはわかったが、なぜこう喧嘩腰なのだろうか。
ヤエトをみつめて、皇女は長いため息をついた。
「そなたの言葉は万事信じられると思うのだが、これだけは、どうもな……」

2

伝達官は、ほとんど自分の部屋から出ないで暮らしていた。おかげで、皇女が入れ替わってもほぼ問題ない。食事を運んだり、身の回りの世話をしたりする女官に口の固い者を選べば、ことは済む。ちょうどよいからスーリヤをこれにあてよう、とヤエトは娘を呼んで事情を説明した。ちょうどよいというのは、ギスケルと顔をあわせる機会を減らせるからだ。一応は解決済みだが、念のためだ。
娘は感激したようだった。ありがとうございます

と礼までいわれ、おどろいた。

仕事をまかされてはりきる人間が、ヤエトには理解できない。仕事は可能な限り楽な方がよく、もっとだらけたいと思う自分が、おかしいのだろうか。

「そなたの意見を聞きたいのだ」

やる気といえば、案の定、皇女は翌日にはすっかり休むのどうのという話を忘れ去っていた。説得に使った時間と体力を返してほしいものだ。

皇女は部下の思惑など知る由もない。手招きでヤエトを呼び寄せ、無言で書き付けを突き出した。

『一　恩寵(おんちょう)の力は嘘を排除する
二《天地輪》は声の個性を失わせる
三　第二皇子謀反、と糾弾する者がいる』

第二皇子の親書も達筆だったが、皇女も字はうまい。ヤエト自身は、いかにも人としての器が小さそうな窮屈な文字を書くのだが、皇女の字は闊達(かったつ)で、見るだに楽しい気分になる——もっとも、書かれている内容は楽しいどころの話ではなかったが。

皇女は紙を机に戻すと、また筆を走らせた。覗いてみると、そこにはこう書かれていた。

『盗み聞きの心配はないか？』

「……あり得ぬとは申せません」

ヤエトは筆をとり、ちまちまと書いた。

『皇宮で、三の君が「二の君ご謀反」の噂を流しておいでです』

書いてしまってから、ほんとうにこれでよいのか、と悩んだ。やったことを悩んでもしかたがないが、告げるのが正しいと確信できないのだ。しかし、黙っているべきとも思えない。

皇女は顔を上げ、ヤエトを見た。なにかいおうとするのを遮って、ヤエトは紙をとり上げた。口にするのもおそろしい話題だが、紙に書いて証拠が残る方が、さらに危険だ。処分せねばならない。

「閉じこもってばかりでは、気もふさぎましょう。

タルキンの鳥をお借りになっては？　御することは、おできになりますか」
「できるが……そなたは？」
「同乗をお許しくだされば光栄に存じます」
「わかった。手配せよ」
　そういう次第で、ヤエトの部屋の露台にまた鳥が来た。飾りもなにも置いていないからよいが、昨晩、ルーギンが乗って来た鳥は糞を残していた。かたづけはしたのだが、臭いが残っているらしく、タルキンの鳥はさかんにそのあたりを気にしている。また糞をされてはたまらない。急いで皇女を呼んだ。
　皇女はいつものように男装である。背丈はタルキンとあまり違わないし、髪さえまとめてしまえば、遠目には見分けられないだろう。
　タルキンが手綱を皇女に渡し、上着を交換した。肩幅が少し合わないようだが、この際、それも大した問題ではない。
「かなりの歳なので、あまり無理はできません。いつも姫様をお乗せしていたクラルに比べれば、持続力は半分以下、くらいです」
　乗り手よりも鳥のことを案じているような説明が、いかにもタルキンらしい。
「わかった。そなたにも面倒をかけたな。許せ」
「もうすっかり、よくなられたようですね」
　皇女は苦笑した。
「北嶺に戻れば同じことだろう。来年までには、なにか考えておかねばならぬ」
「厩舎長と相談します」
「たのむぞ。……ヤエト、乗れ」
　天井まである書類棚を有効に活用するため、ヤエトは部屋に踏み台を置いていた。大した高さではないが、意外に便利だ。鳥に乗るのにも役に立つとは思わなかった。踏み台の利便性は馬鹿にならない。
　よっこらしょとヤエトが鳥の背によじのぼるのを待って、皇女は彼の前にひらりとまたがった。行ってくる、とタルキンに声をかける。

「よい風を」
最近、そういう挨拶が流行らしい。
鳥が翼を広げて羽撃くと、一、二、三回でもう空の上だった。飛ぶのは久しぶりなので、あまりの呆気なさにおどろいてしまう。
暫くは風が冷たく、ふるえてしまうほどだったが、時間がたつにつれ馴染んできた。鳥が乗り手を守る力は、どこまで強いのだろうと思う。たとえば、地上から飛んで来る矢に対しては、どうなのか。
「なかなかよい街だな」
上空から望む街並は整然として美しく、ひとつの芸術品のようだった。塔を飾る漆喰は日射しを受けて白くかがやき、淡い緑に覆われはじめた平野を蛇行するタグワーン河は、銀色の光の帯に見える。
「空から見るのは、はじめてです」
「ああ……ここへ来るときは、馬を使ったのか」
「馬車でした。それより、先ほどのお話のつづきを。ここなら人に聞かれる心配はありません」
「うん。書いた通りなのだが……そなたとは、《天地輪》の話はあまりしていなかったな？」
「はい」
「誰かはわからぬが、二の兄上を糾弾する声があるのだ。謀反をたくらんでおられると」
恩寵の力がかかわっている以上、それは嘘ではあり得ない。しかし、同時にこういうことでもある。
「二の君は、ご自分の潔白を申し立てられなかったのですか？」
「無論、潔白だと仰せだ。しかし、それも誰かが身替わりにいっているのではない、と証明できぬ。たとえつづけて『自分は第二皇子だ』『自分は潔白だ』といったにせよ、途中で入れ替わっていないと誰にわかろう。『第二皇子になりかわって発言していない』と、全員が順に表明したとしても――たとえば、人数がたりなければ、誰かが二の兄上を陥れたくて、わざと口をつぐんでいるのやもしれぬ。返事の数が人数と合っていても、二の兄君がおひとりで二回、

返事をなされば済むことだ。自分で自分と入れ替わってはおられぬのだからな」
「なるほど……。どの声が誰かは、まったくわからないのですか？」
「皆、同じに聞こえる」
面倒なことになっているな、と思った。現状は第二皇子に不利といっていいだろうが、そう素直に受け取ってよいものかどうか。
「たとえば……わたしが王に、二の君が謀反をたくらんでおられると報告したとしましょう。王がお信じになれば、それを《天地輪》で口になさることも可能ではありませんか？　たとえ、わたしが嘘をついていたとしても、王がそれをご存じなければ」
「……そうであろうな」
「そういう話が出たのは、いつ頃からでしょう」
皇女は記憶を確認しながらゆっくりと答えた。
「はじめの数回は、陛下がまとめてくださった。そのあいだは、平和だったな……。あとは子どもらでやれと命じられてから三回目だったと思う、謀反をたくらむ者がいるという話が出たのは。当初は誰がという話ではなく、曖昧な報告だったのだが……二の兄上が謀反をたくらんでおいでだという明確な批難になったのは、この数回のことだ」
「皇宮では、三の君がそれをほのめかしておいでのようです。直接的にではなく、比喩表現でですが——二の君が謀反をたくらんでおいでだ、と」
皇女の肩に力が入ったのがわかった。鳥にも騎手の緊張が伝わったらしく、羽撃きが少し変化した。
「三の兄上が、たくらまれたことか」
「そう性急に結論づけられるものではありません。ご自分でご用意なさった材料でなくても、そこにあるものは利用なさることでしょう」
都の近く、皇帝の監視下に留め置かれ、後ろ楯もなく、第三皇子はぎりぎりのところにいるのだ。使えるものなら、なんでも使うだろう——もちろん、第三皇子が自分で仕掛けた可能性も高いが。

不意に、皇女がふり返った。
「如何なさいました」
「そなたのいう通りだ。もし、そなたがここで、三の兄上がすべての黒幕だと断言すれば、わたしは信じ、それを《天地輪》で語れるに違いない。たとえ証拠がなくとも、そなたの言葉であれば——わたしは信じて語るだろう」
「心得ました。では、議論の種を捏造したいときは、そのようにいたします」
皇女は眉を上げた。
「それは……そうだな。必要なら、そうするがよい。だが、わたしがいいたいのは違うのだ」
「わかります。光栄に存じます」
兄よりも臣下を信じると、決意を表明したいのだろう。ありがたいが、むず痒い。
これ以上そういう話になる前にと、急いでヤエトは言葉をつづけた。
「とにかく、信を置く情報提供者がいて、偽の証拠のひとつもあれば、結果的に嘘を語ることは可能であると推察いたします」
第二皇子の使者は、《黒狼公》を通じて皇女を味方につける方法を探っているのかもしれない。謀反の噂の真偽はともかく、味方を必要としているのは間違いない。それも切実に。
面倒くさいなぁ、と思いながらヤエトは顎をしごいた。皇女と連絡がとれないあいだは、早く《天地輪》の内容についてもっと知りたいと念じたものだが、こうなってみれば、やはり知りたくなかったと思う。身勝手でも、それが真情だ。
「二の兄上は、軍を増強しておられるのだ。それはご自分でお認めになった。少なくとも、二の兄上を名告る者がそういって、誰も否は唱えなかった」
「なんのためかは、ご説明がありましたか」
「沙漠の遺臣たちが凶悪な野盗と化し、博沙国のあちこちに害をなしているからと。掃討のため、追加の徴兵をおこなわれたそうだ」

「我が領にも博沙より使者が参っております」
「沙漠の賊を追って来たと申しておるそうだな」
「はい。我が領にも盗賊の被害はあり、それも沙漠の方から来るとの報告を受けております」
「辻褄は合うな」
「ただ、水場という水場は、潰されたはず。沙漠を根城にするにも、どうやって生き延びているのかという疑問はございます。水を運ぶのは、厄介な仕事です。運ぶあいだにも水は減ります。蒸発もしますし、運び手の渇きも癒さねばなりますまい」
真上皇帝の沙漠越えは、人の道にはずれたおこないだった。隊商道の命でもあり、手出しをしないという不文律があった水場を、すべて潰したのだ。猛毒を仕込み、何年かは使えないようにしたはずだ。
しかし、回復した水場があるのかもしれない。
――あれから、十七年は経過している……。
もうそんなにたったのか、と思う。十五歳の皇女は沙漠越えを知らない。皇子たちの多くも幼くて、当時のことなど記憶にないだろう。
そんな者たちが、やがて沙漠越えで作った負債の支払いを迫られるのかもしれない。内輪もめなど、している場合ではないということか……。
「どうした、ヤエト」
「いえ……陛下の沙漠越えを、なんとかしてお止めできなかったのかと……考えておりました」
「そういえば、ルーギンに聞いたぞ。そなた、沙漠越えのときに陛下に諫言をして、名を覚えられたのだそうだな」
ヤエトは顔をしかめた。
「まさか陛下がご記憶とは思いませんでした」
「そうだろうな。なんと申し上げた？」
「……偉大な君主も、時を戻すことはできぬ、と」
皇女はうすく笑って前方に向き直った。
「そなたが時を自在にあやつる魔法使いでなくてよかったぞ。もしできていれば、陛下の沙漠越えをやめさせたのだろう？　そうなれば、わたしが生まれ

たかどうかもあやしい」

「皇女殿下は、沙漠の向こう側でお生まれになったことでしょう」

第三皇子と皇女の母が皇帝のもとに輿入れしたのは、沙漠越えより前だったはずだ。だが、皇女は笑って彼の言葉を否定した。

「沙漠の西で、陛下がお命を繋がれるのは困難だったはずだ。わたしが生まれるまでに、沙漠越えと同じか、それ以上の血を流すことになったであろう。沙漠でなく、旧帝国の民の血になろうがな」

皇女の指摘は正しい。沙漠越えだから、土地を均していくような戦で終わることができたのだ。旧帝国が内乱となり、諸領がそれぞれの思惑で動きはじめたら、それこそ地獄だ。十年や二十年では終わらない戦になるのを覚悟せねばならないだろう。

——それもあって、皇帝は沙漠を渡ったのか。

はじめて、そんなことを考えた。自分の命を救うためが第一にしても、沙漠越えという思いきった決断を支えた理由のひとつではあるに違いない。

「……失礼を申しました」

「そう畏まるな。さて、少し鳥を休憩させよう」

あらためて眼下を見れば、皇女は河沿いに上流へと鳥を飛ばせたらしく、今いるのは切り立った崖や奇岩の並ぶ渓谷の上空である。

「おもしろい色の岩ですね」

橙から桃色へと変化する岩の層のあいだを、泥水が流れている。この泥が下流で堆積して、養分を含んだ耕地になるのだ。

「同じ山地でも、北嶺とは違うな」

皇女は見晴しのよい崖の上に鳥を着地させた。

「食べ物でも持ってくればよかったですね」

「携行食ならあるぞ。タルキンが持たせてくれた」

皇女が腰の袋から出したのは、冷えて固くなってはいたが、なつかしい北嶺の包み焼きだった。熱いのを厨房で貰って、ふうふう吹いていたのを思いだす。少し齧ってみると、中は肉と豆粉をまとめたも

ののようだった。かなり噛みごたえがある。
ヤエトが顎を動かしていると、そういえば、と皇女がなにかを思いだすように視線を泳がせた。
「厨房の者が、尚書官殿はちゃんと食べておいでなのだろうか、と案じておったぞ」
ヤエトは顔をしかめて答えた。
「我が騎士団長が、薬膳に凝っておりまして……」
「ああ。都へ行くときにふるまわれたが、あの粥はひどかったな！　飲み物もある。いるか？」
革袋の中は、薄めた酒のはずだ。身体が冷えるのを予防するため、乗り手全員に配られている。
「わたしは下戸ですので」
皇女は、ふうん、といって口をつけた。平気な顔をしているが、大丈夫なのだろうか。どうして世の人々は酒を好んで呑むのか。理解不能だ。だいたい、北嶺ではないのだから酒が必要なほど寒くはあるまい……という想いが顔に出ていたのか、皇女はヤエトを見て少したじろぎ、ひと口でやめた。
「それで、どうするのがよいと思う」
「《天地輪》は、いつ……？」
「毎日、夕刻と決まっておる。二の兄上が日没と同時に基盤をつくり、他の者はそこに入る仕掛けだ。昨夕は、《天地輪》を終えてから鳥に乗せられたと思う。……《天地輪》のあいだは、鳥に引きずられずに済むのだ。きっと、あっちもこっちもとは同調しきれなくなるのだろうな。よくはわからぬが」
「お貸しくださった伝達官との同調は、あまりうまくいっていなかったようですが」
「あれは、自分で接続を確立せねばならぬゆえであろう。鳥たちとの繋がりや《天地輪》は、むしろ、引きずられる感じでな。だが、同じではない……ずいぶん違う。鳥たちの方は、一羽ずつに圧倒される。《天地輪》は、その繋がり自体が恩寵を呼びこむように構築されている。だから、全体が視えるだけで、個人が薄い。……うまく説明できぬな」
固い包み焼きを咀嚼するのに難儀していたので、

ヤエトはかるく首を動かすだけでそれに答えた。皇女は顎や歯も丈夫に違いない。どんどん食べてしまう。それとも嚙まずに呑んでいるのだろうか。

口の中のものを一掃するあいだに、ヤエトは自分の思いつきを整理した。

「その《天地輪》ですが、何人が繋がっているかは、わかるのですか？」

「……いや」

「たとえば、伝達官にも同調させることは？」

皇女は眼をまるくした。考えてみたこともなかったようだ。あり得ないことなのか。

「無理だと思うぞ。《天地輪》には術式がある。あらかじめ、それに組み込まれた者しか入れない」

「では、皇帝陛下が紛れておいでも、わからないということでしょうか」

皇女の眼がますますまるくなった。今度は、あり得ないことではなかったようだ。

「それは……可能だろうな。当初は、陛下が主導してくださったのだ。術式の組みかたは全員が教わった。同じように組んでいれば、陛下と我々子どもたちしか入れないが……陛下はいつでも入れる」

「その、最初の術式自体も問題です。陛下が、たとえば皇妹殿下も参加できるように組み込んでおられないとは限りません。あるいは、伝達官の誰か」

「叔母上が……」

「皇妹殿下に限らず、皇家に授けられた恩寵の力のある者なら可能性はあるでしょう。それと――」

皇女は身構えた。

「まだなにかあるのか」

「その後は、二の君が術式の基盤を組んでおいでとのことですが、陛下が教えてくださったのと同じだと、確証はありますか？ 二の君に十分な知識がおありなら、参加者をさらに絞るなり、追加するなりが可能なのではないでしょうか」

「なんのために、そんなことをする？」

「それは、これから。可能性の有無で、推論の幅が

変わります。そういう話です」
　皇女は慎重に考えながら答えた。
「二の兄上は、兄弟の中では恩寵の力がお強くていらっしゃる。修行もかなり積まれたと聞いた。それゆえ、可能であろうとは思うが……」
「二の君が術式の基盤を組むという決まりは、陛下のご提案でしょうか」
「そうだ」
「では、二の君有利と見た何者かが、まず二の君を追い落とそうと考えたのかもしれませんね」
「そんな……」
「隊商双六をなさったことは、おありですか？」
　皇女は眼をしばたたいた。
「なんだ急に」
　名前の通り、骰子の目で駒を進める双六遊びで、それぞれの升目には、いくら儲かったとか損をしたとかいう事件が設定され、最後にもっとも資金が多かった者の勝ちだ。ただの双六と違うのは手札の存在である。骰子をふるたびに、各人が手札を手に入れる。使うかどうかは自由だが、任意の相手から金を奪うとか、相場が暴落して任意の物品を持っている者が全員損をするといった多様な効果が設定されており、手札の引きと使いかた次第で勝負が動く。同工異曲の双六がいくつも売りに出されたが、やはり双六といえば隊商双六だ。皇女なら、さぞ美しい盤と駒で遊んだだろう。
　尚書局でも流行したが、主流は賭け双六だったので、ヤエトはあまり遊んでいない。彼は自分の運を信じないし、隊商双六は戦略だけで勝てる遊技ではない。現実と同じで、運の要素が重要だ。
　しかし、運だけで勝ちつづけることもできない。
「はじめから終わりまで、ずっとひとり勝ちという勝負をご覧になったことがおありですか？」
「いや、……わたしが序盤で勝てば、そのまま終わらせようと画策する者はおったがな」
「うまくいきましたか？」

「そんなので勝ちたくないといったら、その女官は側仕えをはずされた。以後は、なかったと思う」

竜種も大変だ。しかし、ヤエトがしたかったのは、そういう話ではない。彼は舵を切り直した。

「不自然でなく、徹頭徹尾のひとり勝ちをおさめるのが困難なのには理由がございます。はじめに儲ける者は、注目されてしまうのです。皆の攻撃が集中し、叩き潰される——遊び巧者は序盤で目立つのを嫌います。そっと成り上がるのが勝つ秘訣だとか」

「だが、それは遊技の話だろう」

「遊技とは、すべて現実の縮図に過ぎません。あるいは、予行演習のようなものと申せばよろしいでしょうか。戦場に立つとき、指揮官は駒遊びの盤面を思い浮かべ、兵たちは幼い日に枝をふり回して遊んだことを想起するでしょう。そういうものです」

皇女は納得しがたい風情だったが、やがて口を尖らせてつぶやいた。

「わたしは二の兄上を攻撃したりしない」

——それは、勝負に参加していないからだ。

本人は、同じ遊技盤に駒を並べていないつもりでいる。あるいは駒を並べていても、違う規則で遊んでいると勘違いをしているのだろう。

皇子たちは違う。骰子は、もうふられている。

皇女はまだしも生き延びられればよいという目標を設定できるだけ、難易度が低い遊技をしている。

皇子たちは、そうはいかないだろう。

玉座に手が届かなければ、死を覚悟する——これは、そういう規則の遊技なのだ。

「そなたは、なにを思うのだ」

「は？」

「戦場に立つとき、尚書官はなにを考える」

ヤエトは微笑んで答えた。

「歴史に残る戦の数々を」

「遊技ではないではないか！」

「そうでしょうか。遊びのようなものと申せば、歴史という学問もまた然り。そのはじまりも、果てる

場所も知らずに眺めるばかり。役に立たぬと口さがない者は申します」
　皇女は口を歪めている。どう見ても、納得している風ではない。
「はじまりも果ても知らぬとは、どういう意味だ」
「歴史のはじまりを見た者は、誰もおりません。そして歴史が終わるとき、それを見届けて史書の結びを書く者もいないでしょう。終焉は、人が死に絶えたときに訪れるものですゆえ」
「人生と同じか」
「そのようなものです」
　人は自分の生まれたときを知り得ず、死後に一生を総括することもできない。できたらできたで面倒くさそうだ、とヤエトは思う。思い返さねばならない若気の至りの量を考えるだけで、うんざりする。
　歴史はよい。同じ若気の至りでも、他人の事例を眺めるのは楽しい。万事、責任が自分にないというのは気楽なことだ。
「そなたは、はじまりを視に行くことができるではないか」
「目的の時代に辿り着く前に、力尽きるかと」
「ああ、それは困るな……ところで、最近は恩寵の力が暴走したりということはないのか？」
「ございません」
「そうか。伝達官の訓練が実を結んだか」
　ヤエトは渓谷を飛んでいく鳥たちの姿を眺めた。水鳥、猛禽類、渡りの途中らしい群れ、崖に巣がある小鳥たち――多様な鳥が棲息しているのがわかる。ゆたかな土地なのだろう。
　残念ながら、人が集住するには不便な地形だ。
「これではいけないのです」
「なぜだ？」
「効果的に使うための修行です。使わないための鍛練ではありません」
「使う必要など、なければそれに越したことはない。そなたの秘密を守ることもたやすくなろう」

「御意」

皇女の言ももっともだが、この先、きっと恩寵の力が必要になる。今も、使おうと思えば使いようはあるのだ。博沙王の正使と副使が、彼がいないときにどんな会話をしていたか。代官が正使を連れて行った場所がわかれば、かれらの会話も正確になぞれる。盗賊に襲われた村に行けば、賊が退却した方へ追跡することも可能だ。

——どれか、やってみるべきだろうか。

倒れている暇がないから、どれも踏み切れない。ひとつ選ぶなら盗賊の追跡だろうが、ひとりではできないし、人を連れて行くとなれば説明がいる。

注目を集めると、叩き潰される——それはヤエトも同じことだ。ただでさえ、不意に《黒狼公》の家名を与えられて悪目立ちをしたところだ。奇矯な行動と、古王国に与えられた恩寵の伝説を結びつける者がいれば、そこで遊びは終わりだ。

現実の呪いが、彼に追いつく。

皇帝のように沙漠を横断し、圧倒的な距離をへだてれば逃れられるだろうか。隊商道の水場が、皇帝の思惑より早く復活していたとしたら？

もしそうなら、ヤエトが逃げるどころではない。

「なにを考えている、ヤエト」

「博沙王は、陛下のご信頼篤いかたなのだろう、と考えておりました。陛下の心胆を寒からしめるものがあるとすれば、沙漠の西を支配する悪夢に違いありません。それに備える位置に配されたほどです、きっと二の君を深く信頼しておいでなのでしょう」

「それはどうだろう。皇宮では皆、陛下は二の兄上がお嫌いなのだろうと申しておったぞ。あのような辺地に追いやられたのは、そのせいだろうとな」

皇女の耳に入れるべきとは思えない噂だ。疑念が顔に出たのだろう、なにも尋ねたわけではないのに、皇女は肩をすくめて答えた。

「前に教えただろう。老人どもは、小娘風情に耳があったり、聞いたことを考えたりするとは思いもよ

らぬ。腹蔵ない言葉とまではいわぬが、竜種の前で口にすべきではない噂も、あれこれ聞いたものだ」
「北嶺王になられましたからには、左様なこともなくなりましょう」
「だろうな。考えてみると、多少馬鹿にされているくらいの方が、情報は集めやすいのだな」
「一概にそうとも。今後は愚か者ではなく、聡い者の言葉がお耳に届くようになるものと存じます」
「それは楽しみだ」
ヤエトは立ち上がった。
「夕刻までに、邸へお戻りいただきませんと」
「ああ、そうだな」
答えたが、皇女は座ったまま動こうとしない。
「今後《天地輪》での会話は、可能な限り正確に教えていただきたいのですが……」
「やってみよう」
ため息混じりの答に、ヤエトは皇女を見下ろした。やはり、疲れているのだろう。休ませてやりたいが、《天地輪》だけは肩代わりのしようがない。
「お気が向きませんか？」
皇女は膝を抱えて座ったまま、つぶやいた。
「なぜ、こんな風になってしまうのか」
皇女ははじめて会ったときのようにおさなく見えた。皇帝の部下ではないかと疑われてから、まだ一年未満か、と思う。あのときは、寒さに鼻を赤くした皇女の姿に、泣きだしそうな妹の面影をかさねてみたものだ……。
今も、皇女の鼻は少し赤い。高所なので、風が冷たいのだ。あまり長居をすべき場所ではない。
まるでその風に向かって語りかけてでもいるかのように、皇女は虚空へと言葉を投げかけた。
「どうして、争わねばならぬのだろう。わたしには、わからぬ……。教えてくれるか、ヤエト」
同情などされたと知ったら、皇女は怒り狂うだろう。それでも、憐れみと呼ぶしかない感情がヤエトの胸に満ちたのは事実だった。

女と生まれたがゆえに、玉座争いの主役にはなり得ない。それは一面、幸せなことだ。一歩引いたところで命の心配をせずに眺めることができる——うまく立ち回れば、という前提は必要になるが、兄たちより楽ができるのはたしかだ。

だが、その余裕が少女を苦しめている。安全地帯から高みの見物よと割り切れる性格ではない。しかし、争わないでと訴えても、暢気(のんき)なものよと蔑(さげす)まれて終わりだろう。女はこれだから、と。

そうしておいて、かれらは殺しあいをはじめるのだ。望んでいるわけではないというだろうが、逃れる方法を真剣に模索したのか？ 支持者たちを満足させるため、あるいは薄っぺらな権力欲のためになにを犠牲にし、踏みにじっているかを、かれらは理解しているのだろうか。

なにごとも兄たちと同じにと頑張ってきた少女に与えられる酬(むく)いが、これなのか。

苛立たしいが、その無造作な差別から皇女を守るのは不可能だ。ヤエトに許されているのは、せいぜい皇女の身の安全をはかり、主権を保持するすべを探り、より多くの選択肢を用意してやることくらいだろう。根本的なところに、彼の手は届かない。

もどかしいな、と感じて彼は苦笑した。いつから自分はそんな偉い人間になったのか。

人の行動を左右できると勘違いするのは、たやすいことだ。だが、現実はそう簡単なものではない。

「わたしにお教えできるのは、なぜか、ではありません。どうなさるべきかということだけです」

ようやく皇女は顔を上げ、視線を彼に向けた。

「どうすればよい」

「我が王にしか、おできにならぬことです。……どうか、変わらずにいらっしゃいますよう」

皇女は眼をしばたたいた。

「変わらずに？」

「争いにさらされた人の心は、やがて疲れ果てます。周囲は敵ばかりと気を引き締めれば、すべてがそう

見えてしまうもの。剣を手に眉を吊り上げて迫って来る敵は、ほかならぬ自分であると……鏡に映ったおのれの姿であると、気づけなければ狂います」

それは西の皇帝が辿った道だ。同じ道に、彼の甥たちが迷い込まないという補償はない。

――皇女には、そうなってほしくない。

思いがけず強い衝動が、ヤエトに言葉をつづけさせた。

「……その孤独な景色にさす、一条の光とおなりください。凍えた心以外のものを映してさしあげる力を、お持ちください。鏡の外には生きた世界が、自由の空が広がっていることを、思い出していただくそのために――どうか、変わらずに。それがいつか、兄君たちをお救いするやもしれません」

暫し、皇女は無言だった。風にほつれた髪が、寒さに赤らんだ頬のまわりで揺れている。紫の眼の中には、ヤエトの顔が映っていた。ゆっくりと目蓋を下ろし、また開いて。皇女の眼差しは眼下にひろがる渓谷へ、そして無限の空へと向かった。

今までほとんど意識もしていなかった水音が、啼きかわす鳥の声が、そして風の唸りが聞こえた。

「……世界は美しいな、ヤエト」

「はい」

皇女が手をさしのべたので、ヤエトはその手を摑んで立たせてやった。彼が手を貸す必要があるとも思えないが、ルーギンなら義務だというだろう。

眼を閉じると、皇女はささやいた。

「目蓋の裏に、覚えていよう。そなたと見た景色は美しかった、と……」

長い睫毛が、頬に影を落としていた。間近で見ると、少し胸が騒ぐな、と思った。かわいらしい、あるいは凛々しいばかりだった表情が、たまに大人びて見えるようになった。たとえば今のように。

見慣れたようで、そうでもない。

――自分のあるじを、どれだけ知っているといえるだろうか。



性格はだいたい把握しているから、行動の先読みはできる。聡くても、年相応の幼い言動もする。だが、ヤエトの予測を上回ることも多いのだ。

皇女は彼を失望させない。呆れさせはしても、情けないと思わされたことはない。不思議な少女だ。

大きく息を吐いて、皇女は眼を開けた。

「もう大丈夫だ。わがままをいったな。許せ」

「わがままなど仰せになりましたか？」

「うん、いったのだ」

皇女は彼の手をはなし、風で乱れた髪をまとめ直しはじめた。

もう戻らねばならない頃合なのに、なかなか動かなかったことが、わがままなのかもしれない。その程度なら、かわいいものだが。

ともあれ、ヤエトは話題を変えた。

「お願いがあるのですが」

「なんだ？」

「今使える中で、もっとも速く飛べる鳥を寄越してほしいのです。伝達官を通じ、北嶺にご下命を」

「なにをする気だ」

「盗賊の塒をつきとめます」

過去視の恩寵を使えば確実だし、速い。

第二皇子の使者たちが追って来た罪人と繋がりがあるかどうかは不明だが、捕縛して引き渡せば、最低でも使者を追い出す口実にはなる。

「夜なら鳥も目立ちませんし、上空から過去の姿を追うだけです。危険は少ないでしょう。ただ、恩寵の力を使いますので、……騎手はルーギン殿にお願いしたい」

「わたしでは駄目か？」

「ルーギン殿に殺されます、そんな危険なところに護衛もなく王をお連れしたと知られたら。それ以前にまず、わたしが首をくくります」

「わかった、わかった。いってみただけだ。危険は少ないといいながら、危険なところにとはまた矛盾したことを申すものだ」

皇女は両手を組み合わせて背伸びをした。
「お言葉まことにごもっともですが、臣下は危険を進んで受けるもの、主君は危険を避けるものと決まっております。我らは王に危険を――」
「もうよい。今夕の《天地輪》が終わり次第、手配する。ルーギンのことだ、どうせなら帰る前にいってくれという意味のことを、婉曲かつ華麗に主張するであろう。苦情は、そなたにまかせたぞ」
「ご心配なく。すべて、お引き受けいたします」
皇女はヤエトをちらりと見上げてつぶやいた。
「しかしな、《金獅子公》の長子と《黒狼公》という組み合わせも、偵察要員としては無茶な手札を並べたものだと思われるに違いないぞ」
「では、隠密の札を使いましょう」
隠密の札とは、例の隊商双六で、即座に効果を発揮しない手札を場に出すとき、かさねて使うためのものだ。なにをしたのか、本人以外にはわからない。これが疑心暗鬼を招いてまたおもしろいのだが、今回はただ行為の隠蔽に使うだけだ。
「待ち合わせは郊外にて。そこまではタルキンに運んでもらいます。あの者ならば、たちどころにこのあたりの地理を把握し、鳥を扱いやすい場所をみつけてくれるでしょう」
「ルーギンを呼び寄せるのは明後日でよいな」
「御意。あ、お待ちください」
皇女が鳥を立たせようとしたので、ヤエトはあわてて声をかけた。
「不調法なことで申しわけありませんが、鳥に立たれてしまうと、乗れぬのです。シロバであれば、わたしの顔を見るなり座ってくれるのですが」
「……シロバが交配の相手をみつけていて、よかったと思うぞ。あれが使える状態なら、そなたは『危険なところ』へ、ひとりで行っただろうからな」
「はは、ご冗談を」
皇女は顔をしかめたが、口に出してはなにもいわなかった。

3

皇女は待ち合わせ場所まで同行すると口走ったが、ヤエトは丁重かつ断固として辞退した。

タルキンには、ルーギンとの合流場所は誰にも漏らすなと念を押し、出発は皇女が《天地輪》にかかりきりになる時間帯と決めた。これで、あきらめてくれるだろう。

「やはり、陸路で追います」

しつこかったのは、ジェイサルドである。はじめは鳥に同乗すると主張したが、これはタルキンに却下された。三人もは乗せられない、というのだ。

鳥のことで北嶺人に、それも厩舎の人間に譲らせるのは不可能だということくらい理解しているだろうに、ジェイサルドは食い下がった。もちろん、タルキンはまったく譲らなかった。

かなり懐柔されていたはずなのに、鳥については別勘定かと思うと、たのもしいやら怖いやらだ。

タルキンに見切りをつけたジェイサルドは、ヤエトに直訴して来た。

「馬を飛ばします」

「意味がありません。目立つのは困りますし、待って時間を浪費する気もありません」

「場所さえ教えてくだされば、先に――」

「案じる必要がどこにあります。博沙王の捕吏に見られても疚しいところはありませんし、盗賊の痕跡がみつかればよし、実際に盗賊に出くわしたとしても、このわたしが戦闘をはじめると思いますか？」

「場合によっては」

ヤエトは手を胸にあてて、誓った。

「戦いません。速い鳥に乗り換えますし、なにがあっても逃げきれます。……それより、ここ数日襲撃がなかったのは、たしかなことですね？」

「はい」

ヤエトは地図を眺めた。被害を受けた村にはその

日付けを書き入れ、前回からの間隔が何日かも併記してある。そろそろ次の襲撃があってもおかしくないし、現場に出くわせば、追跡に恩寵の力は不要だ。

——いや、それでも恩寵の力は使うだろうな。

察知されて警戒心を煽っても困るし、相手の姿が消えてから追跡した方が安全だ。それに、これは好機だ。近い過去だから身体への負担も少ないし、訓練が役に立ったかどうかも体感できる。ルーギンに恩寵の力を明かすきっかけにもなる。

露台に羽撃きの音を聞いて、ヤエトは地図を畳んで胸元にしまった。顔を上げると、老騎士と視線があった。あきらめきれない、という表情だ。なにがそんなに心配なのだろう。

「なにもないとは思いますが、わたしが戻らないときは、我が王をたのみます」

「たのむ、など。お命じください」

「死んだら命令もなにもないでしょう。あなたの好意にすがるしかない。……そうだ。あの名は我が王にお預けすればよいでしょう。かならず信頼に応えてくださるかたです。あなたは悪鬼の名を借り、力を借りたかもしれない。でも、それだけです。本質は人なのだということを、忘れぬよう。それ以外は、わたしが心配するまでもない。皆をたのみます」

「殿、ますますおひとりで行かせるわけには」

「大袈裟に案じるから、大袈裟に返しただけです」

ヤエトは上着を羽織り、露台に向かった。

鳥の横に立っていたタルキンは、ヤエトを見ると膝をついて礼をとった。誰が教えたのやら、まだ流れるような所作とはいかない。

「苦労をかけるね」

「とんでもない。こいつも喜んでます、このあたりの風は翼にやわらかくて、飛ぶのが楽しいと」

「そうか。では、行こう」

ジェイサルドが進み出て、ヤエトが乗りやすいように、手を組んで踏み台を作った。ヤエトが無事にまたがったのを見届けると、渋い声でタルキンに念

を押した。
「くれぐれも、殿の御身を第一に」
「はい」
「殿、ご無事のご帰還をお待ちしております」
「安心して休んでいなさい」
鳥が翼を広げ、ジェイサルドは後ろに退がった。
持久力のない老鳥だと聞いているが、羽撃きは力強い。風を巻き、孕み、露台を蹴ったかと思うとう空へ舞い上がっていた。
空は厚い雲に覆われ、視界はあまりよくない。だが、隠密行にはこれくらいの天候の方がよいだろう。関係ない者に目撃されても困りはしないが、積極的に歓迎もできない。
案じられるのは降雨である。雨が降っても鳥は飛べるが、問題はヤエトだ。本来の繋がりを築けている乗り手であれば、冷たい空気を感じずに済むのと同様、雨に対しても無防備にはならないという話だが、ヤエトはそうはいかないだろう。降らないでくれと、雲を眺めて祈るばかりだ。
――降れば、播種の時期が近くなるな。
このあたりでは、洪水の季節を過ぎてから種を蒔く。種が流されては困るのもあるが、雪解け水が行き渡れば土地も肥えるからだ。
タグワーンとは、南方の古い言葉で『暴れる水』を意味すると聞いた。川筋は何度か変わったようだし、都市の興亡にも深く関係したはずだ。記録を見たいところだが、もちろんそんなものは存在しない。文字の記録を厭う南方人が、支配力をおよぼした結果だ。まったく嫌になる。
水路の設計図を出させたときに受けた説明によれば、タグワーンは見た目より深く、水量の割に細い川なのだという。このあたりは、やわらかい地盤と固い地盤が交互に顔を出しており、水は土地を深く削りながら、やわらかいところを流れる。その細い流れが急激に増水すると、固い地盤もつらぬく破壊力を持ってしまう。それが洪水の原因らしい。

固い地盤は川沿いに傾斜した平坦地を形成し、耕作に使われている。そこに養分を含んだやわらかな土を運ぶのも洪水だが、都合のよいことばかりではない。住居や家畜も流されるし、死者も出る。増水が急で、事前に察知するのが難しいのだ。

水路が完成してうまく機能すれば、暴れる水がもたらす不利益を避け、利益だけを享受できる。

近郊の畑を視察したとき、ふっと視界が揺れ、あたり一面黄金の穂波に満たされた——それが、最近経験した唯一の、恩寵の暴走である。来るべき豊作を示唆する予祝の力ならよかったのにと思うが、彼に視えるのは過去だけだ。

「もう来ていらっしゃるようです」

タルキンの声で、我に帰った。

落ち合う場所は沙漠の縁に近い。低い岩山のあいだで、村落からも距離があり、人目につかない。雨が避けられる程度の岩棚もある。

「よい場所をみつけてくれたね」

率直な感想を伝えただけだが、タルキンはひどく喜んだ。厩舎長があまり褒める言葉を口にしないから、慣れていないのかもしれない。

「ありがとうございます！」

「いや……わたしが礼をいっているのですが」

地上に鳥の姿は見えなかったが、ルーギンのことだ、うまく姿を隠しているのだろう。

——それでも、タルキンにはわかってしまう。

鳥の存在を感知すれば、間接的に乗り手の存在もわかる。無造作に複数の鳥と心を繋ぎ得る能力は、使いようによってはおそろしい、と思う。

無事に着陸し、ヤエトがじたばたと鳥から降りたところで、声が降って来た。

「お久しぶりですね、尚書卿」

少し上方の岩棚から、騎士はこちらを見下ろしていた。これが婉曲かつ華麗な『帰る前にいってくれ』という挨拶なのだろう。久しいどころか、つい三日前に話したばかりだ。なるほど、簡にして要を得て

いる上に、見苦しくない厭味……かもしれない。
どうでもよいことだが、長い髪をなびかせて岩場を渡る姿は、非現実的なほど恰好がよい。敵も目をとられるかもしれない。美貌もここまでいくと武器だと思う。
「ご足労をおかけします」
「公のお呼びで姫様のご命令とあらば、いつなりと。それで……どこへ飛べばよいのです」
ヤエトは地図を出し、広げて見せた。
「この村に」
覗いたのはルーギンだけではない。タルキンもだ。少年はヤエトに先んじて目的地を、つづけて今いる岩山の位置を示した。
「今夜は月も星も目印になりません。地上を見ながら飛ぶしかないです。この低い岩山の尾根は、長くつづいています。沙漠と緑地の境界のようなもので、よい目印です。これに沿って飛ぶと、タグワーン河の支流が見えてきます。目的地は、支流のほとりの村です。その鳥なら、すぐ着きます」
ルーギンはわずかに眉を上げた。
「案内はなし？」
素早く、ヤエトは話を引き取った。
「こちらの鳥は、老鳥です。村から先、どれくらい飛ばねばならないかわかりません。帰らせます」
案の定、タルキンが口を挟んで来た。
「やはり村まではご案内した方が」
「この場所を探すだけでも、負担だったはずです。邸に戻って鳥を休ませなさい——自分自身も」
「ですが」
「その鳥は、北嶺王の命綱と心得なさい」
タルキンは口を閉じた。
叱ったつもりではないが、少し口調が厳しかったかもしれない。ヤエトは少年の肩に手をかけた。
「わたしが不在のあいだに異変があって、王をお逃がしする必要が生じたらどうします。鳥がいて、おまえがいてくれるとわかっているから、わたしも安

心して王のお側をはなれられる。わかりますか？」
「……はい」
少年の頬は紅潮している。どうやら、重要な仕事をまかせればはりきる人種と見たのは間違いではなかったようだ。気負い過ぎないとよいが、と思いながらヤエトは地図を畳んだ。
「では、先に帰りなさい」
「よい風を」
ルーギンの挨拶に、少年は鳥の背にひらりと飛び乗りざま答えた。
「そちらにも。……ご武運を！」
武運はいらないだろうと思ったが、別れの挨拶を口にする前に、少年と鳥は空へ消えた。身軽になったせいか、凄まじい速さだ。思わず、呆れたような声が漏れてしまう。
「……あれで老鳥というのだから、おどろきます」
「タルキンは、騎手としては一流だな」
「厩舎長いわく、鳥を疲れさせないすべを心得ているそうですよ」
ルーギンは腕組みをしてふり向いた。
「それで？　ここまで呼び出した理由を教えてもらいましょうか。単なる盗賊の根拠地捜索だったら、わたしを名指しはしないでしょう」
「口が固くて信頼できて、強くて、余分なことまで説明しなくて済む騎士が必要だったのです」
「わたしの部下は、皆そうですよ。いやまぁ……多少、おぼつかないのもいるかな」
「とにかく、我が王以外に恩寵の力の秘密を預けてもよいと思えるのは、貴殿くらいですので」
なにかいいかけて口を開いたまま、ルーギンの顔から表情が消えた。
ヤエトは肩をすくめた。そんなに身構えられると、却ってやりづらい。
「これから行く村は、十五日ほど前に盗賊の襲撃を受け、死者が出ています」
「十五日前？」

「そういう力なのです」
口にするのに、少し抵抗があった。明かすと決めていても、自分の意志とは関係のないところで反発が生じてしまう。その根源は恐怖だろう。
消そうにも消えぬ、封じても滲み出る。魂に刻まれたようなもので、容易にはなくならない。きっと、一生つきあうことになるだろう。あまり長いつきあいでなければよいのだが。
「行きましょう。時間を無駄にしたくありません」
ルーギンは納得した風ではなかったが、隠していた場所から鳥を連れ出した。ようやく、ヤエトが自力では鳥に乗れないことを覚えたようで、一段下の岩場へ鳥を誘導してくれた。他人のことなら美学より便宜を重んじるあたり、彼も立派な帝国人だ。
飛びたって少ししたところで、騎士はつぶやいた。
「どうでもよいことだとは思うけどね」
「はい？」
「男とふたり乗りって、すごくつまらないな」
「……そこまでどうでもよい話を口にせずとも」
「けっこう重要ですよ。志気にかかわるし」
「皇女殿下のためと思えば如何です？」
ふん、と鼻息が聞こえた。さすがに鼻息まで華麗とはいいがたい。
「あれは女性に勘定しません」
「しかたがないですね。では、わたしのことを女性だと思ってみてはどうでしょう。男らしさはないのですし、なんとかごまかせませんか」
「女らしさを身につけてからにしてください。……いや、駄目だ。撤回します。女らしい先生とか、想像したくありません。絶対やめてください」
「そういわれると、頑張ってみたくなります。次の機会までに、なにか考えておきましょう」
ルーギンの無駄口が止まった。静寂は美しい、とヤエトは思う。夜には静けさが似合う。
タルキンがいっていたように、この岩山は沙漠と緑地のゆるやかな境界をなしているようだ。尾根と

呼ぶのもはばかられる低い岩を眼下に辿れば、やがて細い流れが見えてくる。タグワーンの支流だ。

この名もない支流は、沙漠に入るか入らないかのところで地下へ姿を消すらしい。本流が洪水を起こすときも、こちらには被害が及ばないと聞いた。それは土地が肥える機会を失うということでもある。

「見えました。あれかな」

「そのようです。村のはずれに降ろしてください」

この地方の特色で、村落をなす家々は一か所に集まっており、耕地はその周辺に広がっている。どこからどこまでが誰の土地、という意識は稀薄らしい。村落という共同体が、ともに耕し、ともに実りを刈り入れる。そして、分け合う。

昔から土地に住んでいた者より、流れて来た民が多いのだと聞かされた。それも、先代《黒狼公》の采配したことだと。なるほど、土地への執着が薄く、所有意識がないからこそ可能な施策だ。

沙漠の民と、このあたりを支配していた南方系の藩王とのあいだに百年単位でつづいた争いのせいで、多くの民が逃げ散り、土地は荒れた。沙漠越えの功労者である先代《黒狼公》がその荒野を下賜されたのも妙な話だが、先代は皇帝の沙漠越えで生じた難民を集め、土地を与えて再生を進めようと、進んで動いていた節がある。スラジャに古い記録を掘り出させては読んでいると、今まで知られることのなかった先代の姿が見えてくるようで、おもしろい。

なにも過去視の恩寵にたよらずとも、調べればわかることはあるのだ——だが、今は違う。

——やらねばならない。

村はずれとは、耕地の端だ。洪水の心配がないせいだろう、ここはもう春の播種が終わっている。少し蹴っただけで埃のように舞い上がる砂。風が吹けば飛んでしまいそうな表土を、藁を編んだ網で押さえている。これがあるとないとでは、ずいぶん違うと聞いた——この手法を考案したのも、先代が連れて来た難民のひとりだったという。

「沙漠側に、逃げて行ったそうです」
「十五日前に？」
うなずいて、ヤエトは眼を閉じた。深く息を吐く。北嶺に去った伝達官の声が、耳によみがえる。
――よく吐くのです。焦って吸ってはいけません。まず、吐くところからはじめるのです。
「《金獅子公》家は、あまり皇家の血が強くないとは聞いていますが……やってみましょう。竜種の恩寵の力を意識してください。修行を積んだことがあるなら、呼吸法も有効だと思います」
「なんの話です？」
「鳥と心を繋ぐのとも近いかもしれない。……手を」
差し出した手に、ルーギンが手をかさねた。さすがに、男と手を繋ぐのは……と軽口を叩きはしない。緊張した面持ちであったが、騎士の表情の根底にあるのは興味と期待、純然たる好奇心だ。
だから、ルーギンのというよりは自分自身の心をほぐすために、ヤエトは微笑んだ。
「視える限りのものを、お視せします」
――自分の中を空にせねばなりません。器になるのです。ただ受け入れる、器に。
吐いて、吐いて、と伝達官はしつこく指示した。自身でやって見せてもくれた。
――器の用意ができれば、力が来ます。
その力とやらを、ヤエトには確保できたことがなかった。息を吐いて、呼吸を遅くして、もう無理だと思うところまで頑張っても。
それが、今。
なにを意識する暇もなかった。
彼方から、白銀の光が矢のように飛来した。空になった彼の中心に突き立ち、満たす。世界が白熱し、その光で焼灼された。
光が力なのだと感じたのは、満たされてからだ。なぜ、どこから、どうして……といった問いを、ヤエトは自分の中に押し戻した。そんな場合ではない。今なら、存分に恩寵の力を使うことができる。

彼は視線を村へ向けた。

――十五日前だ。

時間を握る感覚を、思いだす。指のあいだに、少しずつ力をこめる。あたりが明るくなり、暗くなる。防風用の網を、村人が剝がす。疲れた顔で歩き回る。日が西の沙漠から顔を出し、東の山地へと戻る。風が吹く。小雨が天へと駆け上がる。銀色の雫は針となり、雲を突き刺す。

逆回しの世界に呑まれ、ヤエトは風になり、あるいはその風に舞う砂粒となって空を舞った。

――十五日だ。

彼は気を引き締め直した。時の中に散らばりかけていた意識を、なんとか確保する。

砂煙が、沙漠にたっていた。盗賊団だ。戻って来る。ヤエトはルーギンの手を引いて、尋ねた。

「視えますか?」

「たぶん……いったい、なにが起きているんだ」

「十五日、遡りました」

ヤエトは盗賊団から視線をはずさずに答えた。馬群は後ろ向きに村へ突入する。村の方の空が明るい。火事だ。放火か、それとも動転した村人が灯りを倒しでもしたか。一件では死者が出ていたはずだ。

ヤエトは盗賊団の動きを止めた。

殺人をおかしたのが誰か、確認できるかもしれない。少し迷ったが、優先順位は決まっていた。死者はもう生き返らない。ヤエトがなすべきは、これ以上、無辜の民から犠牲を出さないようにすることだ。

「かれらを追いましょう」

「了解。ところで、手をはなしたら、わたしにはもう視えなくなるかな? 繋ぎ直せるだろうか」

「わかりません。それは試したことがないので」

ルーギンは唸ったが、すぐに心を決めた。

「わたしは鳥に集中しよう。指示さえあれば、追えるでしょう。手をはなして……飛びます!」

近いはずの羽撃きの音が、遠い。ルーギンの手がはなれた今、ヤエトと現世を繋ぐものはなくなった。

身体感覚が薄れ、今がまたたいて、消える。
「先生、聞こえていますか」
止めていた時間を、ヤエトは手放した。さっきの光はまだ彼の中にある。さあ来い、と招いているかのようだ。盗賊が動きはじめた。追い越してしまう。ヤエトは時間をせき立てた。握っていたものを、急いで虚空にはなつ。
砂煙が動きだし、汗に濡れた馬の首筋が見えた。血刀を風にさらした騎手が、馬腹を蹴る。煙がたつ。貴重な表土が、風に散っていく。
ルーギンの声が、ヤエトの意識を揺らす。
「方向を」
「左に、腕一本分くらい」
「……どういう指示だ」
鳥は、ヤエトの予測よりはるかに速かった。盗賊団の時間を進めるのが間に合わないほどだ。時間の流れを速めたり遅めたりするのにも力が必要なのだと、はじめて体感した。今までは、なにもかもがからみあっていたが、今はわかる。どの要素にどれくらい力をふり分けているか、意識できるのだ。
「なるほど……」
これが制値法だ。ようやく教えを理解した。
「なにが、なるほどですか？」
「少し逸れました。鳥の鼻先を、右にやる程度に」
盗賊団が襲撃をかけた夜は、雲がなかったようだ。沙漠は星明かりで銀色にかがやいている。
美しい、とヤエトは思った。砂煙までもが、魔法の光のようだ。
ルーギンの声が、幻視の光景に割り込んだ。
「賊は余分な荷を持っていなかった。補給部隊と合流しているのでもなければ、距離的には限界が近い。ちゃんと視ていてください」
ヤエトはまた時を進めた。砂煙が薄まり、馬群が姿をあらわす。大雑把には十騎以上、三十騎には満たない程度だろう。煙が少なくなったのは、足下が岩場にでもなったのか。遠くに、ごつごつとした黒

い影がある。その奥へと、馬群は消えた。
「岩山に、入って行くようですね」
「……いや、あれは……山じゃない」
ルーギンが声を低めた。
「山じゃない？」
「炊煙だ。誰かいる。高度を上げます」
遠ざかる地上を見下ろし、過去視を終わらせるべきか、少し迷った。ここが終着点とは限らない。中継地点に過ぎないなら、この先も辿る必要がある。
「あれは廃墟だ」
ささやいたルーギンの声は風にちぎれ飛び、聞き逃してしまいそうだった。
ヤエトは眼をしばたたいた。そして、ああ、とわずかに声をあげた。
力が、切れた。
とたんに、ひどい倦怠感に襲われた。過去の光景も一気に退いたが、今の景色もほとんど見えない。闇夜だからというばかりではない、焦点が合わないのだ。涙が滲み、ヤエトは手の甲で目もとをこすった。頭の奥の方が、ずきずきと痛みはじめている。
「先生？」
耳鳴りがする。誰かが耳に栓をしているようだ。指を耳に入れてみたが、少しも改善されない。
その手を、ルーギンの手が押さえた。
「大丈夫ですか」
「申しわけない……、かなり、駄目かも」
「降りましょう。背中で吐いたら、二度とこの鳥には乗せてもらえませんよ」
なぜ吐きそうだとわかったのか。理由を尋ねたいところだが、こみあげる吐き気との戦いに忙しく、口を開く余裕はなかった。
ずいぶん久しぶりだ。所領ではまだ吐いた記憶がない。気候が身体に合っているのだろうか。子ども時代は沙漠の近傍に住んでいたし、古王国自体も、沙漠の近くにあったはずだ。
あれはたしか第一王朝、古王国暦何年のことだっ

たか、とヤエトは記憶を探りながら、吐き気を一回、やり過ごした。これで少し、楽ができる。いや、また来た。我慢せねば。鳥に嫌われるのは困る。

湖が涸れ、沙漠化が進んでも、古王国の王は対策をしなかったという。恩寵の力さえあれば、荒れ果てた土地も往時の美しさを身に纏うのだから、と。

歴史に名を残す古王国の王たちは、皆が皆、体力馬鹿だったのだろうか。ヤエトはたかだか十五日前の光景を視ただけで、このありさまだ。今回は、外部から力を引き出すことができたというのに。

――力は、沙漠の方から来た。

あれはなんだったのかと考えるゆとりもなく、吐き気を呑み、鳥の背から転がり落ち、勘弁してくれと思いながら口に入りこんだ砂を吐いた。それから、おや、と思った。いつの間に地面に着いたのか。

とにかく地上に戻ったと確信したところで、我慢が切れた。

「水です」

ひとしきり吐いたところで、ルーギンが水筒を差し出した。そこでようやく、自分の迂闊さに気づいた。ヤエトひとりなら、食料はもちろん、飲料水もない。地図だけだ。なぜ、こうも学習しないのか。

「いつもこれが原因だったんですか、倒れるのは」

「いつもとは……限りません。生来虚弱なので」

ヤエトは慎重に水を含んだ。口の中が苦くて酸っぱい。なんとかしたいが、勢いよく口をすすぐと、それがきっかけになってまた吐いてしまう。

忍耐だ、と思いながら尋ねた。

「偵察は？」

「上空から、ひと通り。うまく隠れているわけでもないし、警戒もしていない。なぜ今まで発見されなかったのか、不思議なくらいだ。北嶺の騎士団を使えば、簡単に一網打尽にできます」

「北嶺の問題でもないのに、鳥を使うのは……」

「わたしが呼ばれたのは、北嶺の問題でもあるからでしょう？　違うのかな」

「違いませんが、ただでさえ王なし、相なしの北嶺から、将軍まで長期に渡って姿を消すわけには」

ルーギンは肩をすくめた。

「可能なら、朝までに戻りたいくらいですよ——でも、鳥もわたしも疲れました。一日休んで、明日の夜にでも帰らせてもらおうかな」

北嶺になにか問題でも——と尋ねようとしたが、痰がからんで声にならなかった。迂闊に痰を呑み下そうとして吐き気がぶり返し、すんでのところで堪えるのに成功した。

吐瀉物の匂いがよくないのだ。ヤエトは立ち上がり、気遣って差し出されたルーギンの手に摑まって二十歩ほど歩いたが、それが限界だった。

ヤエトを岩の上に座らせると、ルーギンは戻って砂を蹴りはじめた。暫く眺めてから、気がついた。吐いたものに砂をかけているのだ。なにをしているのかと尋ねる元気がなくてよかった。

作業を終えてヤエトの方に戻って来たルーギンに、彼はもう少し妥当な問いを投げた。

「ここは、どこです」

「距離は置いてますが、まだ廃墟の内ですね。往時はかなりの規模の都市だったのでしょう。先生が座っているのは、折れた柱かな……こういう石は、このへんの産ではないですよ。硬い石質なのに、表面はかなり荒れてしまっている。古いものだな」

ルーギンの目利きぶりには呆れる。彼の邸が隅々まで行き届いていたのも、納得だ。

「こんな場所に、都市はなかったはずです」

ヤエトは脳裏に地図を思い浮かべた。療養という名目で軟禁されていた時期に、ナグウィンとジェイサルドから聞き出して、頭の中に描いた地図だ。かつて沙漠に栄え、帝国に潰されて滅びた隊商都市群を、ふたりは厭味を応酬しながら教えてくれた。水の都アルハン、光の街イシン、星々の泉ウルラク、迷宮のシンリール、そして治癒の街シーハ……。どの街も、この位置には該当しない。

ルーギンがあたりを見回しながら答えた。
「ここが廃墟になったのは、沙漠越えより昔だよ」
ヤエトは自分が座っている石を見下ろした。遠方の産物を取り寄せるには、経済力が必要になる。
沙漠の端にあり、栄えた都市。帝国が来たときには、すでに滅びて久しかった――。
「ターンだ」
「……なんです？」
「太陽神ターンというのを奉じた都市があったのです。数百年の昔に滅びた……隊商道の起点として栄えたというから、この位置でもおかしくない」
「へえ。なぜ滅びたのです？」
「昔、《化鳥の騎士団》に策謀を仕掛けて、返り討ちにされたという伝説があるのです。たぶんそれだ」
「視たのですか？」
ヤエトは笑おうとして咳き込んだ。
「いや……無尽蔵の体力があればともかく」
「それはそうか。失礼」
ルーギンは彼の隣に腰を下ろした。案じるような視線に応じ、ヤエトはなんとか微笑んで見せた。
「大丈夫です。十五日くらいなら、倒れません。今回は、かなりうまくいった方ですよ」
「先生の身になにかあったら、姫様に殺されます」
「女性に殺されるなら本望なのでは？」
「だから、あれは女に勘定しませんと、何回も説明してるじゃないですか。……ひょっとして、北嶺に翼を取り戻したとき、これをやっていたんですか。つまり、神の名を、こういう方法で？」
「ええ」
「いったい何年前まで遡ったんです」
「さあ？　千年か、それとも二千年くらいかな。わかりませんよ、神代の昔のことなんて」
ため息をついて、ルーギンは頭を垂れた。
「無駄に勇敢なのも、そこまでいくと天晴れだ」
「無駄ではないつもりなのです、当人は」
「ま、そうですね。無駄ではなかった。おかげで、

北嶺は救われました。姫様も」
「救ったことになっていれば、よいのですが……」
ヤエトは空を見上げた。相変わらず、全体が厚い雲に覆われている。見えなくても、その雲の向こうにかならず月があり、星がある。時間の霧の彼方に、過去の真実が埋もれているのと同じように。
だが、それを明かすのが、無条件に善といえるだろうか？　晴天を望むのは人のわがままだし、望んだ晴天が幸運を呼ぶとも限らない。
翼は、北嶺を厄介な立場に追い込んだ。この先、翼の復活を呪わずに済むかどうか。
「最初に倒れたときは、なにを視たんです」
「最初？　ああ、あのときは、べつに視ようと思って視たわけではないのです。わたしの家系に伝わる恩寵の力は薄れ、途絶えたと思われていました。使いかたを指導してくれる人もいなければ、記録もなかった。秘伝だったのでしょうね……それで、両親はわたしに恩寵の力があることを伏せ、わたしもできるだけ意識はしないように過ごして来ました。ただ、たまに暴走することがあって……」
「そして倒れる？」
ヤエトは苦笑した。今度は咳にはならなかった。
「そう。ですが、ここ最近、恩寵の力が強まっているようで。皇家に伝わるもの同様、わたしに与えられた力も……こんなもの、ない方がよいのですが」
「どうして？　便利でしょう。姫様が行方不明になったときも、さっきのように追ったんですね」
「無駄に勇敢にね」
「まさに、そうだな！　誰か連れて行けばよかったんです。ひとりでなんて、無謀だ。どうやって鳥を使ったんですか」
去年のことを今さら叱られても困るが、当然の批難ではあったので、ヤエトは首をすくめて答えた。
「シロバにまかせました」
ルーギンは口を引き結んだ。
もう少し、いいわけをせねばならないようだ。ヤ

エトは小声で言葉をつづけた。
「自分がいる場所の過去しか視えないのです。城からは、捜せません。それで、しかたなく……」
「今後は、ひとりで追跡なんてことは禁じます」
「でも、いつもあなたを呼び出すわけにはいかない。増してや皇女殿下に護衛をお願いするわけにもね」
ルーギンはわずかに眉根を寄せた。
少ししてから、彼はまるで世間話でもするように、自分の考えを言葉にした。
「では、ジェイサルドのことは信じていないんだ」
「裏の多過ぎる人物です。とくに疑ってもいませんが、彼がわたしにすべてを明かしているとも思えません。わたしも秘密を持つしかないでしょう」
「姫様はともかく、わたしを信じていいのかな」
「ルーギン殿、騎士はそういう喋りかたはしないものではないのですか」
「どう答えれば満足するんです」
「貴殿の信頼に応え、剣に懸けて秘密を守る、と」
ルーギンは一瞬、眼をまるくした。それから、声をあげて笑った。いつもの胡散臭い笑顔ではない。純真な、少年のような表情だ。
この笑顔を、きっと皇妹は諦めてしまったのだ。惜しいことをしたと、後悔しているだろうか。
「いいでしょう。ただ、姫様に害をなすと判断したら、その限りではありませんよ。わたしが剣を捧げたあるじは、姫様ですからね」
「そのときは、存分にどうぞ。それと、覚えておいていただきたいことがあるのですが」
「なんです」
「わたしの先祖は、この力のために権力者に幽閉されました。権力者というのはつまり……皇祖なのですが。一族の無事と栄達のために、直接取り引きしたのでしょう。誓約の文言がわからないので憶測することしかできませんが、竜種に助力する方向に、恩寵の力を特化させたものと思います。それは、皇祖が惜しんだほどの力です」

「つまり？」
ヤエトが眼をしばたたくと、騎士は肩をすくめた。
「説明も結構だけどね。なにが必要かを端的に教えてほしい。命令とは、明解であるべきものです。誤解の余地なく、簡潔に」
「命令ではない。お願いです。……秘密を守ってほしいのです。くどいとは思いますが、人によっては、あなたが感じている以上の価値があると判断するでしょう。たとえば、真上陛下に知られたら――」
少し考えてから、ルーギンは乱れた髪をかき上げ、立ち上がった。
「たしかに。陛下のお耳に入れば、娘にはもったいないと、取り上げられてしまうでしょうね。それは困る。わかりました。でも、誰に知られようとも、先生が喜んで協力するとは思えませんが」
「世の中にはいろいろな強制の方法があるでしょう。薬を与えたり……まぁ、拷問だと体力がもたないんじゃないかと期待しているのですが」
「変な期待をしないでもらいたいな。とにかく、落ち着いたなら邸へ戻りましょう。あまりゆっくりしていると、寝る時間がなくなります」
「明日の昼は寝ると、自分でおっしゃったでしょう」
ルーギンは呆れたようにヤエトを見下ろした。
「わたしのじゃない。あなたの睡眠時間です」

4

ジェイサルドは露台で待っていた。どうやら寝ていないようだ。
ヤエトが足を床に付けるや、声をかけられた。
「ご首尾は」
「たぶん、みつけたと思います。ところで――」
かなり古い廃墟に心当たりはないか、と尋ねようとしたところで、ルーギンに声をかけられた。
「鳥はこのままここに繋いでも？」
「水と飼料は用意しておきました！」

同じく寝ずに待っていたらしいタルキンが、すかさず答えた。ああ、そう、とヤエトはうなずいた。この露台は第二の厩舎と考えて、いろいろ諦めるしかないようだ。

「ご随意に」

ジェイサルドが問いをかさねた。

「今宵は、賊は出なかったはず。どうやって発見なさったのですかな？」

ヤエトはジェイサルドを見た。老騎士は、彼を見返した。お互いに、相手が今の会話の意味を理解したことに気がついた。ほぼ、同時に。

確認するのは自殺行為だろうか。しかし、知らぬふりも通じないだろう。

彼は口を開き、思ったままを言葉にした。

「二日前に決まっていたから、根回しができたのですね。襲撃はするな、と」

《黒狼公》領全域を監視し、情報を瞬時に伝達する手段は存在しない。賊が出なかった、と確言できるはずがないのだ——領主が捜索に出るから、今夜は動くなと命じられる立場にいるのでなければ。

ジェイサルドがその問いに答えるより、ヤエトがさらに言葉をつづけるよりも、ルーギンがふたりのあいだに割り込む方が早かった。抜剣している。

ヤエトはあわてて騎士の腕を押さえた。相手は鬼神憑き、いかにルーギンが強くても勝ち目はない。

「わたしより、王を」

ルーギンは視線をジェイサルドから外さないまま、叫んだ。

「タルキン、姫を確保！」

風が起きた。

鳥が羽撃いたのではない。ジェイサルドが瞬時に移動し、手綱を奪ったのだ。もう一方の手は剣を抜いている。切っ先が向いているのは、鳥の胸だ。

タルキンは硬直していた。卒倒しないのが不思議なほどの表情だ。

ジェイサルドは、窘めるように告げた。



「皇女殿下はお休みです。無用にさまたげるのは、どうかと思いますな」
ルーギンがなにかいいかけたのを、ヤエトは手で制した。騎士は顔をしかめ、交換条件だとでもいうように身を捻って腕の自由を確保した。
鳥に突き付けられた剣のことを考えないようにしながら、ヤエトはゆっくりと口を開いた。
「無用かどうかを判断するのは我々ですよ」
「たしかに、儂が情報を流しました。殿が、裏切られたとお考えになるのも無理からぬこと。その批判は甘んじて受けます。ですが、これは先代の遺命を守るためになしたことなのです」
――嘘か？
ジェイサルドの嘘は表情や声音では判断できない。さっきも、論理的に変だと気づいただけだ。
考えてみれば、あの位置に水場があるのをジェイサルドやスラジャが知らないこと自体がおかしい。ターンの神殿がどこにあったのか尋ねたとき、ジェイサルドに答をはぐらかされたことがある。もちろん、老人は意図してごまかしたのだ。
いろいろ思うところはあるが、それはもう済んだ話だ。賊徒の居場所を隠していのは事実だと、相手は認めた。問題の焦点は、それを知ったヤエトが今後どうするかに移っている。
ジェイサルドは、信頼を回復しようとしている。その流れに乗りたい。でないと、この場にいる三人はもちろん、皇女の身もあやうい。
「どのような約束でしょう」
「それは――公にしかお話しできません」
ヤエトは少し考えた。ルーギンは自制心を発揮して黙っているが、彼を退けるのは無理だろう。
「ルーギン殿も同席してもらいます」
ジェイサルドはわずかに眼をほそめた。
「本人が承知なら」
「無論」
ルーギンは即答した。ヤエトは顎をしゃくって、

ジェイサルドの剣を示した。
「それを引いてください。ルーギン殿も剣を収めて。鳥の命をこれ以上、危険にさらしたくない。タルキン、隣の露台に鳥を移動させなさい」
タルキンと鳥さえ無事なら、皇女を逃がせる。
——皇女がもう、とらえられていたら？
落ち着くんだ、とヤエトは自分を説得した。ジェイサルドがヤエトと敵対する覚悟で待っていたなら、こういう展開にはなっていない。露見は偶然だ。万が一、はじめからそのつもりだったとしても、皇女ほど利用価値の高い存在に、いきなり危害をくわえたりはするまい。ジェイサルドの暴力に躊躇はないが、背景には周到な損得の計算がある。
ジェイサルドは剣を引き、手綱をはなした。
「仰せのままに」
老騎士が剣を鞘に収めても、ルーギンは動かない。
タルキンは鳥に乗り、許可を求めるようにヤエトを見た。まるで留まって戦おうかと尋ねているようだ——と考えて、ヤエトは愕然とした。
尋ねているようだ、ではない。少年は本気だ。
「行きなさい、タルキン。さっきも教えただろう」
彼と鳥が皇女の命綱なのだと、諭したばかりではないか。少年は、ヤエトの言葉にはっとしたようだ。思いだしたらしい。つまり、忘れていたんだな……と思うと、どっと疲れた。
気が立っているのか、鳥は足踏みをしたが、タルキンはすぐに主導権を握り、無事に移動した。
やれやれ、とヤエトは少し肩の力を抜いた。
「殿、中にお入りください。お疲れでしょう、夜食の準備があります。お疑いでしたら、すべて儂が毒見をつとめますゆえ、どうか」
「毒見など、必要ありませんよ」
びっくり虚弱人間を殺すのに、毒薬などもったいない。それより味見をしてほしい。
歩きだそうとしたヤエトを、ルーギンが袖を摑んで引き留めた。ジェイサルドを睨みつけて宣言する。

「おまえが先だ。次はわたし。中に危険がないか、確認する」
　不要だと口にしかけて、やめた。ルーギンの好きにさせないと、無駄に叱られそうだ。
「ジェイサルド、彼の指示に従ってくれ」
「御意」
　先に行くジェイサルドの背中は、実に無防備だ。見る者が見れば殺気が感じとれるのかもしれないが、武道の心得のないヤエトにはさっぱりだ。
　室内は暗い。灯火は用意されていても、隅々まで照らされているわけではない。人が潜めそうな物陰を、ルーギンは手早くあらためた。その方面はまかせることにして、ヤエトは皿が並んだ小卓の方へ向かった。ミアーシャ直伝の焼き菓子が盛られた皿を発見して、少しほっとする。これなら口が曲がるような味ではないはずだ。
　卓に面して置かれた椅子はひとつだ。さっさとそれに腰を下ろし、ヤエトはふたりに声をかけた。
「ご自分で椅子を持って来ていただけますか」
　ジェイサルドは諾々と従ったが、ルーギンはヤエトの横に立ったまま動かない。
「わたしはこれでいい」
「あなたも疲れているでしょう。休んでください」
　なにげなく見上げると、睨まれた。休める場合か、という顔だ。まぁそれもそうか、と思う。
　ヤエトは向いに座ったジェイサルドを見た。老騎士はかるく手を動かして卓上を示した。
「どれから毒見いたしましょう」
「必要ありません。気分が悪くなって、吐いたばかりでね。まだものを食べる気にはなれません。早く休みたいのです。……話を、してもらえますね？」
「ご命令とあらば」
「命じます」
「この秘密は、できれば儂が抱えていたかったのです。殿にご迷惑をおかけしたくありませんでしたのでな。かくなる上は、ご覚悟をと申し上げておきま

しょう……先代のご命令により、この土地では、沙漠の王族の生き残りが匿われております」

言葉の意味を理解するのに、少し時間がかかった。

「……アルハンの？」

「彼奴らは儂を信用せぬのです。訊いても答は得られませんのでな、仔細は不明とお考えください。ただ、王族はひとり、ふたりではない。いくつかの国の王族が生き延びております。その中に、アルハンの最後の王妃と王子がいることだけは、存じております……儂が、先代のご命令で手引きをしました」

思わず、ヤエトは口から顎のあたりを手で撫でた。油断をすれば、奇矯な声をあげて露台から身投げしてしまいそうな気がした。

「帝国の基準では、かれらは叛逆者ですよ」

沙漠越えにも、建前というものがある。皇帝は、野蛮な沙漠の国々から南方諸藩を救うために挙兵し、そのまま請われて支配者になったというのがそれだ。当然、沙漠の王族は帝国に歯向かう逆賊、叛逆者ということになる――もし、生きていれば。

帝国は、沙漠の国々をまるごと滅ぼした。かろうじて生き延びた者たちが呑んでいる恨みは深い。亡国の民を、集わせるわけにはいかない。昔日の栄光の象徴となり得る存在――すなわちかつての王族が生きているなど、あってはならないことだ。

「存じております」

ジェイサルドは顔色も変えない。ヤエトの方は、胃がひっくり返りそうな気分だ。

「それを、先代が匿っておられたと？」

「はい」

ルーギンが吐き捨てるようにいった。

「信じられるか」

「貴殿に信じていただく必要はない」

悠然と答え、ジェイサルドはヤエトを見た。それで、という顔だ――殿はお信じになりますか？

難しいところだな、とヤエトは思った。先代なら、そういうことをやりそうな気はする。

記録をあさるうちにぼんやりと見えてきた先代の人物像に、この告白は合致する。先代は、たしかに皇帝の懐刀だった。だが、ときには主君の意に染まぬこともすれば、堂々と反対することもやってのけた。自領での難民の保護、あらたな土地への定着の助力。沙漠越えと真帝国建国の影で犠牲になった民を救うために動いた貴族は、先代《黒狼公》くらいのものではないだろうか。

だが、王族は国の象徴だ。生かしておくのは、賢明ではない。いくら先代が滅びた国に同情的な人物でも——あるいは、だからこそ。王族を奉じて人が集まれば、帝国は喜んでかれらを一網打尽にするだろう。せっかく生き延びた民の命も、それで散る。

「陛下はご存じなのですか」

「いいえ」

そうだろうな、とヤエトは思った。真上皇帝は、そんな甘い人間ではない。そして——彼は微苦笑とともに認めざるを得なかった——自分は甘い。

それを、ジェイサルドは知っている。知っているから、こんな話をするのだ。奇想天外過ぎて、逆に嘘とは思えない。騙す気があれば、ジェイサルドならもっと説得力のある話をでっちあげるはずだ。

「スラジャも承知しているのですか」

「はい」

頭を抱えたい気分だ。もうひとつ、思いついた。

「着服した公金は、先代が匿われた民を守るために使っていたのですね」

ルーギンが、吐き捨てるように告げた。

「……事実としたら、正気の沙汰ではない」

「まったくです。陛下に知られたら、わたしひとりの首が飛ぶだけでは済まないでしょうね。今のうちに、北嶺の相を辞任した方がよいかもしれません。ろくに働きもせず、恐縮ですが……」

「なんでそうなる」

唸るような低い声は、滅多に聞いたことがない。ルーギンが、これほど不機嫌をあらわにするのも珍

しい。華麗でもなければ婉曲でもないが、わかりやすくて結構、とはとてもいえない雰囲気だ。
「ですが、こんなことに北嶺を巻き込めません」
「あの男の言葉を信じるのか？　先代の遺命かどうか、知れたものではない。自分の罪を押しつけようとしているだけではないと、証明できますか」
ジェイサルドは無言だ。しかたなく、ヤエトがジェイサルドを弁護することになった。
「できないでしょうね。ですが今、実際に沙漠の反逆者たちが匿われているのだとしたら、責任があるのはジェイサルドでもなければ先代でもない、わたしです。だから、そこは重要な問題ではない」
「では、なにが重要だと？」
「わたしが、かれらを帝国に突き出すかどうか、ということでしょう」
ルーギンは口を開き、そして閉じた。
彼は信じがたいものを見るような眼をした。それから、肩を落とした。
「なるほど」
勝手に理解してくれたらしい。ヤエト自身が心を決めるより早く。
——まぁ、自明だな。
ヤエトは甘い。その点では、筋金入りだ。沙漠の民が、それも滅びたといわれる国々の民が人知れず生き延びていると考えると、ほっとしてしまう。それを、殺してくださいと突き出せるわけがない。
ルーギンもだが、老騎士もヤエトの甘さを承知している。これは、向こうに分のある賭けだ。
「いくつか、説明してもらいたいことがあります」
「なんなりと」
「なぜ、賊徒と化しているのです」
「殿は根城をつきとめられたのでしょう。耕地がありましたか？　家畜の姿はお目にとまりましたか。……あの規模の水場では、自給自足は望めますまい」
「援助をしていないのですか？」
「万事、儂らの世話にはなりたくないという態度を

崩さぬのです。提供しても突き返され……それを、襲われた村落の補償にあてている次第です」

ヤエトは笑いたくなった。好んで匿われているわけではない者たちを、命懸けで守らねばならないということか。なんと滑稽な状況だろう。

しかも、ヤエトが守護者として責任を果たさねばならないのは、その者たちだけではない。

「死者まで出ているとあっては、捨て置けません。話し合う必要がありそうですね」

「御意」

ルーギンががたがたと椅子を引いて来て、腰を下ろした。自棄になっているらしく、冷めた粥の椀を手にとると、ふたりを睨んだ。

「腹が減った。もらいますよ」

大歓迎だ。これで自分が食べずに済む。

「どうぞ。それより二の君の使者ですが……博沙国の方で、裏はとれましたか？」

「防衛線が次々と襲撃されたのは事実のようです」

「我が領で匿っている者たちの仕業かどうかは」

ジェイサルドは首を左右にふった。

「わかりません……長く当地から遠くにあり、変化に気づくのが遅れました。おそらく、現状に不満を抱く難民の一部が合流して人数が膨れあがり、食べていくのが困難になったのでしょう。攻撃的になっているのも、そのせいかと」

ルーギンの意見を聞こうかとそちらを向いて、ヤエトはすぐに、騎士がそれどころでないのを理解した。薬草入りの粥を食べたらしい。すごい形相だ。しかたなく、彼はまたジェイサルドに向き直った。

「《黒狼公》領に帝国から匿ってくれる場所があるという噂が広がっている可能性がありますね」

それで、第二皇子が治める博沙国で問題を起こした者が《黒狼公》領に逃げこんだ理由に説明がつく。この推測が当たっていれば、状況は最悪だ。

「殿、正確には、あのあたりはご領地ではありません。沙漠の手前までが殿のご領地です」

「陛下に召し出されたとき、そんな詭弁で逃れられるとは思えませんね。早急に対処する必要があります。……参ったな」

「ふつうは、そういう方向には参らないんですよ」

諭したのはルーギンだ。粥が一段落ついたらしい。気もち悪いほどやさしい口調である。

「そうでしょうか」

「さっさと突き出しておしまいなさい」

「突き出しても遅いのではないでしょうか」

「やることをやってしまえば、あとは天命にゆだねるばかりでしょう」

ヤエトは焼き菓子をつまんだ。鼻先に掲げて匂いを確認する。変な薬草が混ざっていそうな雰囲気はない。スーリヤの手製だと信じてもよさそうだ。

「天命にゆだねるなど、怖くてとても……わたしは気が弱いのです」

「……またそんな、大胆な嘘をつく」

ヤエトは菓子を口の中に入れた。舌の上で溶ける儚い感触を楽しんでから、ジェイサルドに尋ねる。

「二の君の使者たちは、どうしています」

「正使は、相変わらず芝居見物です。最近は、贔屓の女優ができたそうで、機嫌取りも楽になりました。ただ、座長はそろそろ移動したいと申しております。もう長いので、客足が鈍りはじめたとか」

留まってほしければ銭を寄越せということだろう。

ヤエトは顔をしかめた。

「副使は」

「部下たちと、沙漠沿いの村々を探索中です。まだ手がかりがないとかで、焦っています」

「手がかりがあっては困りますね」

「無論です」

ジェイサルドが手を回しているに違いない。

「芝居の方は……座長が文句をいえない人数に、毎日、券を買ってやりましょう。どうせ金を使うなら、ただ座長のふところに入れてもしかたがありません。……そうだ、工事の人足を集めていましたね。かれ

らを順に招待すれば、慰安にもなります」
「かしこまりました」
「工事とは？」
　今度は得体の知れない団子に手を出しているルーギンを見て、ヤエトは少し怖くなった。あれはたぶん、すごく辛い。口から火が吹ける。ルーギンの機嫌が悪化せねばよいが、と案じながら答えた。
「このあたりは洪水の害が多いのです。水路を作って水を逃がし、灌漑に役立てようと計画しています。上流には水門もいくつか置く予定です。……ジェイサルド、茶を。香草茶の、冷えたのがよい」
「殿はお身体をお冷やしになってはなりません。湯を沸かしますので、暫しお時間を」
　部屋を出て行くジェイサルドを見送って、ヤエトはルーギンを見た。無表情だが、口が半端に開いている。やはり、辛いのだ。
「冷たい方がよかったでしょうに、すみませんね」
「わたしの茶ですか」
「味の見当がつくのでね。もう懲りたでしょう、あの焼き菓子をお食べなさい。作っているのは女官です。ミアーシャ様直伝の製法で、味も安心ですよ」
「ジェイサルドは味音痴だと聞いたことがありましたが、得心しました……」
「妙なことに巻き込んでしまって、すみません」
　ルーギンは眉を上げ、深く息を吐いた。その吐息の匂いだけで口の中が辛くなりそうだ。
「本気でいってるんですか」
「わたしはいつも大真面目です」
「巻き込むもなにも、知らない方が不安ですよ、こんな情報。どうせ、わたしが居合わせなかったら教えてくださらなかったのだろうと思うと、ますます不安ですね。この人は、どうすればいいんだろう」
「放置してくだされればきっと、適当になんとかなると思いますよ」
　ルーギンは首を左右にふった。
「あてにならないね。躊躇せず、さっさとジェイサ

ルドを斬り捨てておけばよかったかな」
「斬り捨てられたら困ります」
「困らないでしょう、あんな男。それとも、斬り捨てられるのはわたしの方だとでも？」
ヤエトは苦笑した。ルーギンも視線を返して笑い、肩をすくめて言葉をつづけた。
「あの男に勝てる気がしないことは、認めざるを得ないな。大丈夫、状況が許す限り、彼とは戦いませんよ。命は惜しむべきものですからね」
「大いに惜しんでください」
「それでもわたしが剣を抜いたのは、あなたの命を惜しんだからです」
騎士は、ヤエトが自分の言葉を理解しているのかをたしかめるように眉を上げた。なにか答えないわけにもいかず、ヤエトは渋々と口を開いた。
「わたしのために懸けてもよいほど、あなたの命は軽くない。王のためにも、今後は控えてください」
「あのね……姫様が先生の命を惜しまないとでも思ってます？　自分が生への執着が薄いからって、そこまで鈍感なのは許せませんよ」
「わたしだって、無駄に死ぬつもりはないですよ」
答えながら、こんな会話を皇女ともしたな、と思った。どうも皆がヤエトを死にたがりだと勘違いしているのではないか。
ルーギンはヤエトに勧められた焼き菓子を口に入れると、ふうん、とつぶやいた。
「なんです？」
「ジェイサルドがすんなり前職を辞したのは、あなたに会ったからかもしれない。《黒狼公》に推挙したのがあの男でも、おどろかないね。奴は陛下の御前で帯剣できる。四大公家並みの特権階級です」
新年祭の前、ジェイサルドは都に着くなり一行と別れ、出仕していた。あり得ない話ではない。
「……この領地を甘っちょろい男に背負わせて、沙漠の民の安全を確保しようと？」
「自分でいいますか？　ま、そうだけど」

ルーギンもずいぶんである。
「皇妹殿下では駄目なのですか？」
「あのかたは甘くない。しかも、先が読めない。どうやら危険な方向へ行こうとなさっている、ということくらいしかね。ジェイサルドは、危険な方へ行かれては困る。旧主の遺命を守り通すには目立ちたくない――そこへ、あなただ」
沙漠の伝説に興味を抱き、夢は楽隠居という扱いやすそうな尚書官。皇帝の勅命で皇女の副官におさまった幸運を喜ばず、権力闘争には興味がない。
お誂え向きの人物だ。しかも、皇女が北嶺王に任じられるにあたって、体裁をととのえるためとはいえ、貴族になると決まってしまった。皇帝をひと押しすれば、ヤエトに《黒狼公》の旧領をという望みくらい、通ったかもしれない。
ヤエトは心の中の『呪うべき人物名簿』の上位にジェイサルドを押し込んでから、尋ねた。
「先代の遺命だというのは、信じてもよいと思われますか？」
「わたし？　わたしなら、ジェイサルドのいうことは信じませんよ。信じる理由がない。でも、先生が信じるというなら、信じます。しかたがないし」
「しかたないって……」
「生徒は師の言葉を信じるものです」
「わたしは舎監だったんですよ、ルーギン」
「ええ。あなたは公正な舎監だった。家格で扱いを変えたりしなかった。一貫して厳格だったけど、弱者を見捨てることはしなかった――だから、わかります。あなたはきっと、叛逆者たちのことも、ただ見捨てたりはしない。人として救おうとする」
「……そんな立派な話ではありませんよ」
ルーギンはわずかに眼を伏せた。
「立派ですよ。わたしなら、きっと切り捨てる。滅ぼした国の王族など、火種にしかならない」
「その通り。切り捨てる方が立派な態度です」
「それはどうかな。どう思われますか、姫」

——姫？

嫌な予感がしてふり向くと、なぜか露台に人影があった。羽音もたてずに鳥を扱ったタルキンの能力の高さには感心するが、これでは、なんのために少年を隣の部屋に遣ったかわからない。

「おもしろそうな話をしているではないか」

腕を組み、いかにも不機嫌そうな面持ちの皇女の視線を無視して、ヤエトはタルキンを睨んだ。

「なぜ、王をここに」

「タルキンが、姫様を抑えられると思う方がおかしい。わたしには、こうなるってわかってましたよ」

ルーギンのあまりといえばあまりのいいぐさに、ヤエトは声を荒げた。

「なにを暢気な！　わかっているなら——」

「いきなり座って飲み食いをはじめるあなたに、いわれたくありませんね。暢気とか」

にこりと笑って、ルーギンはまた焼き菓子を口に含んだ。それ以上ヤエトがなにかいう前に、皇女がつかつかと近寄って来た。卓上をじろりと眺めるので、あわてて進言する。

「なにかお食べになるなら、こちらの焼き菓子を。スーリヤが作ったもので、味は保証します」

「スーリヤ？」

「王のお側にお仕えしている女官です」

皇女は視線を動かし、ヤエトの顔にひたと据えた。

「叛逆者どもを、匿うのか？」

「……叛逆者とは、わたしには考えられません」

「では、なんだ」

するどい口調だ。

——斬り捨てられるかな。

相手は皇家の一員だ。真帝国の正当を揺るがす存在を、許容できるはずがない。

「帝国が滅ぼした国の、民です」

「ただの民ではない。王族だ」

「王族ならば人ではないとお考えでしょうか？」

「王族は、国の象徴として生きるべきだ」

皇女の口から出ると、重い言葉だ。本人がそれを逃れようとして逃れられず、苦しんだことを知っているだけに。

「帝国の敵手だから滅ぼすのですか。侵略したのは帝国の方、かれらは自分たちを守ろうとしたに過ぎないのですよ」

「すでに滅びたものを保護するいわれはない」

「先代《黒狼公》が守ろうとなさった人々です」

「先代は関係ない。そなたはどうするのだ」

「関係ないとは申せません。先代の遺風を踏みにじることはせぬと、ミアーシャ様とお約束しました」

皇女は黙ってヤエトを見た。少し、沈黙が長い。迷っているのだろうか。

竜種としての立場と天秤にかけられるほど、ヤエトという存在を重いと感じているのなら、それも問題だ。薄情でなければ、君主などつとまらない。ヤエトのように、人に利用されてしまう。

「わたしは、そなたを見捨てぬと約束した」

ヤエトの横で、ルーギンが大きなため息をついた。完全に、諦めの境地に達したという表情で。

「なりません、王よ」

「なにがならぬ。そなたは我が腹心ぞ。それを捨てて我が身の保身に走れば、もはや誰もわたしを信じまい。いや、誰かなどというのはどうでもよい。わたしが、わたしを信じられぬ。おのれを恥じる」

感動すべきところなのかもしれないが、なんという武人思考だ、とヤエトは呆れた。きっと都で暮らしていたころの皇女の教育係は、名の知れた将軍とか、そういった人物だったに違いない。

「……罷免していただこうかと思っていたのです」

「誰がするか、間抜け」

「間抜けを一国の相にお抱えになるのは、あまりよろしくないかと」

「大丈夫だ、わたしも馬鹿王だからな」

それは大丈夫とはいわないような気がする。

ルーギンが、かすかに笑った。

「その楽しそうなお仲間には、わたしも入れてもらえるのでしょうか？」
「そなたは阿呆将軍にしてとらす」
「……それはあんまりというものです、姫」
「お待たせいたしました」
扉が開き、ジェイサルドが盆を抱えて入って来た。
老騎士が卓上に並べた茶碗の数は、今、室内にいる人数とぴったり同じだ。
ジェイサルドは茶を注ぎながら静かに告げた。
「……あなたがたは、とても仲がおよろしくていらっしゃる。いつか不幸を招きましょう」
「わかっておらぬな、ジェイサルド」
「は」
皇女はジェイサルドに笑顔を向けた。眼は笑っていない。こういう表情は、父皇帝にそっくりだ。
「幸と不幸は硬貨の裏と表のようなもの。我らの繋がりが不幸を招くほどのものであれば、それは幸いをも招き得る。そなたは我らに幸運を約したのだ」
ジェイサルドは深々と一礼した。
「お言葉、まことにごもっともに存じます」
そうであればよいが、とヤエトは思った。皇女や北嶺を危機に陥れる可能性が高いのは否めない。
帝国の基準では、沙漠の王族はこの世に存在していてはならないのだ。それを匿えば、ヤエトもまた叛逆者と看做されても文句はいえない。こんな状態からは、一刻も早く脱すべきだ。
――公式には無理でも、裏から認めさせる方法はあるだろう。
皇帝の内諾を、もぎ取らねばならない。かなりの難題であることは、あきらかだ。
――まぁ、順番だな。
手近なところからこつこつと、だ。賊の正体と本拠地がわかった以上、領主としても放置はできない。このままでは、沙漠沿いの村落の住民は逃げはじめ、《黒狼公》領は端から崩れていくだろう。
ジェイサルドの名を呼ぶと、老騎士は卓上に落と

していた視線を上げ、ヤエトと眼を合わせた。
その場しのぎの方便を信じてくれる相手ではない。自分の考えを、そのまま告げるしかなかった。
皇女が逃げるあいだくらいは、ルーギンが時間を稼いでくれるだろう。露台には鳥もいる。さっきの今で、タルキンが使命を忘れることはない……と、思いたい。
「先代の遺命をかろんじる気はありませんが、保護されたくないというものを匿うことはできない」
「はい」
「かれらに領主が代替わりしたことを伝えなさい。わたしに従えば保護し、帝国とのあいだも取り持とう、と。従わなければ賊として討伐します」
ルーギンがかすかに笑った。
「討伐する方が簡単だ」
「容易ならざる道を行くか否かは、かれら次第。保護に値する者たちかどうか、わたしがこの眼でたしかめましょう。会談の手配を」
ジェイサルドは胸に手をあてて一礼した。
「すべて、殿のお心のままに」

5

泥のように疲れている、と感じた。
どうでもいいことばかり、鈍った頭の中でぐるぐる回転している。そういえば、泥みたいだといわれたことがあるな……とか。泥のようだとは、のらりくらりと摑みようがないという意味なのだろう。
——おやおや。
去年の厭味が今頃通じるとは。笑いたい気分だが、現実には顔をしかめていた。頭痛がひどい。鳥から降りても、暫し、ヤエトは動けなかった。
世界が回転している。なんということだ。
「殿」
ジェイサルドが歩み寄り、目立たないようにヤエトの腕をとった。

「ご苦労。なにか異常はありませんか」
「万事、予定通りです。騎士団の方は如何です」
「タルキン」
ヤエトが声をかけると、すかさず少年が答えた。
「来ています」
「上空で待機を。気取られぬように」
「少し、降ろした方がよくはありませんかな」
ヤエトは首を左右にふりかけ、あやういところで思い留まった。この上、自分まで回転してどうする。
「伝説が真実なら、ここは《化鳥の騎士団》に滅ぼされた土地です。刺激が強過ぎるでしょう」
直接の被害は受けていないはずの都でさえ、大騒ぎになったのだ。実際に戦った土地で、空の悪魔とも恐れられた傭兵団の物語がどう伝わっているか、わかったものではない。
それがどんな反応を生むか、読み切れる自信はなかった。ただでさえ、今の彼は泥同然なのだ。
「……泥はどうでもいいんだ、泥は」
うっかり、考えたことをそのまま口にしてしまったらしい。ジェイサルドが眉を上げた。
「泥とはなんのことです？」
「春先の洪水を案じていただけです」
北嶺の騎士団に、源流近くの積雪量の観測を依頼したものの、過去の記録がないため比較もできず、急な増水の予兆を読みとれるかどうか。わかるのは、山地の春がまだ遠いことくらいだ。
——これも、今考えることじゃない。
本気で、関係ないことを考えてしまった。
今、ヤエトがいるのは洪水が起きる地域ではない。かつてターンの神を奉じた民が住んでいた、沙漠の廃墟。帝国が侵攻する何百年も前に《化鳥の騎士団》に壊滅させられ、無人となった。おかげで帝国はここの存在にも気づかなかった。
崩れた建物のあいだに、よく見れば天幕がいくつか設置されている。水場の近くには、緑もある。
かすかな人のいとなみが、この先もつづくかどう

か——知らぬ間に、ヤエトはその決定権を握らされてしまった。硝子のように脆く、貴重なものだ。不用意に手放せば割れ砕け、失われてしまう。

なぜこんなことに、と思う。なぜ、自分がこんな判断を迫られているのか。呪うべき人物の名簿は長くなっていくばかりで、ヤエトの仕事は楽にならない。とにかく、諸悪の根源は例の元同僚だ。

——次に都に行ったら、覚えていろ。

あらん限りの権力と人脈と財力を使って、最高に面倒くさい仕事を押しつけてやる。もっとも、都へ行く予定など当面はないのだが。

会談の設定をジェイサルドに命じた三日後の夕刻、もうそれが実現するのだから仕事が速い。条件は先方が出したままである。かれらの現在の根拠地、タールの神殿跡に《黒狼公》が来い、だ。

例によって皇女も同席したがったが、断った。事実はどうあれ、北嶺王はご存じないことという形式は踏みたい。北嶺騎士団の動員は、相の権力濫用で済むが、皇女がこの場に来るのはまずい。絶対に。

「さて、交渉の相手はどこに？」

「あちらに……武装解除はできませんでした。それと、物陰に射手を潜ませているようです」

怯えているのだな、と思った。

そこまで怯えていても、あらたな《黒狼公》との対面に応じてくれた。そう考えればよい。

「結構。タルキン、矢の及ばないところで待機」

「それでは、危急のときに間に合いません」

「大丈夫、ジェイサルドがいます」

かるい口調で請け合うと、本人が腰の剣に手をふれて、重々しく誓った。

「矢の一本どころか、殿には指一本もふれさせぬ」

タルキンは、信じるのですか、といわんばかりの表情でヤエトを見上げた。少年のジェイサルドへの信頼は失墜したようだが、ヤエトは違う。利用価値を認める限り、老騎士は彼を見殺しにはしない。

地上が騒がしくなれば、上空で待機している鳥た

ちが気づく。ヤエトを害すれば、かれらの命運は尽きる。今度こそ、皆殺しだ。

ヤエトは顔をしかめた。

——もう、決めたことだ。

ただ見逃すには、危険過ぎるのだ。領内の争いで済ますことができればよかったが、それも無理だ。ほかで罪をおかした者が合流すれば、膨れ上がった集団は粗暴で危険な方へ向かうだろう。そうなってからでは遅い。いや、すでに遅いくらいだ。

ジェイサルドとスラジャにも承諾させた。保護を受け入れればよし、従わぬようなら敵と看做す、と。恭順を約した者だけは、それで守れる。

妙な気を起こさないでくれればよいのだが、とヤエトは思った。実をいうと、いっそこの場で殺してもらった方が楽な気もするが。

「案ずることはない。行きなさい」

不安げな面持ちのタルキンに、ヤエトはかすかにうなずいて見せた。かすかなのは、頭を動かしたくないからだ。

少年はくちびるを噛み締めた。風が起き、巨鳥が舞い上がる——騎手を置き去りに。

「タルキン」

「俺がお側にいないで、どうやって鳥に合図を送るんですか。ご一緒します」

思いつめた表情で宣言され、これはもう駄目だと考えた。少年を説得する時間は、すでにない。

「不服従の罰を与えることになりますよ」

「はい」

同行を認めたとたん、かがやくような笑顔を向けられてしまい、ヤエトは苦笑せざるを得なかった。

少年はなにを期待しているのだろう。

「殿、あちらです」

ジェイサルドに支えられて、ヤエトは足を進めた。ふたりが向かう先には、藍色の大きな天幕が張られていた。前は広く開いており、中に並ぶ人影が見える。十名ほどだろうか。

止まれ、と声がかかった。
進み出たのは、黒髪を腰まで垂らした女性である。二十代なかばほどだろうか、白い服に黄金と青金石の装身具を着けていた。眸も暗い色だったが、黒というより藍に近い。夜空のようだ、と思う。
視線が合うと、その夜空の奥に光を感じた。
ヤエトは、その光に撃たれたような心地がした。
――同じ力だ。
恩寵の力でこの場所を発見したあの夜、ヤエトが取り込んだあの光と、それはまったく同質だった。つまり相手は恩寵持ちで、ヤエトは彼女が崇める神の力を借りたのだ。
そんなことを考えている場合ではないのだが、どうしても思考を切り替えることができない。
とうに忘れ果てていた、神々の分類学についての知識が、ぼんやりと脳裏に浮かぶ。
数多ある神の御名、そして御力にはそれぞれ対になる関係のものがある――同一線上に発生しながら、反対方向へ作用する恩寵の力の組が、かならず確認されるのだと学んだ。それを近しい関係と呼ぶか遠い関係と呼ぶかは、定説がない。
父に教わったことがある。古王国の神が与えたもうた恩寵とは反対の、未来へ向かう恩寵の力と、それを与えた神が存在するはずだと。
沙漠の西では、そのような恩寵の力は知られていなかった。だが今、はっきりした。
――ターンだ。
太陽神にして予言神といわれた神ならば、過去視の恩寵を与えた神と対であってもおかしくない。もっと早く気づくべきだった。
目の前にいる女は、未来視の恩寵持ちだ。この廃墟の、本来の後継者なのだ。
足が竦んでいるのは、相手に本能的な怯えを感じるからだろう。自分が過去を視るのと同じ正確さで未来が視えるのだとしたら――そんな力は絶対に祝福などではない。神が与えたもうた呪いの力だ。

この女はどうやってその力と折り合いをつけ、既知の明日へ向かって生きているのだろう。

知りたくない、とヤエトは思った。

ふっと光が遠のいた。同時に、ヤエトの頭痛もおさまっていた。これがターンの神のおかげなら、今すぐ信者になってもいい、と短絡な考えが浮かんだものの、受け入れられるはずがないこともわかっていた。対になる力は、近いと同時にもっとも遠い。

女は微笑みながらヤエトに向かって歩きはじめ、手をのばせばふれられそうな距離で立ち止まり、ゆっくりと一礼した。黒髪が風に散り、装身具がふれあってかすかな音をたてた。

「お待ちしておりました」

「……わたしが《黒狼公》です」

口の中がねばついて、舌が口蓋に貼り付きそうだ。正確に発音できたか、自信が持てない。

顔を上げると、女は笑みを深めた。

「存じております。《黒狼公》ヤエト様」

「あなたは？」

「わたしはターンの預言者、真実の舌。しるべの星ウィナエと申します」

ウィナエというのは、今も商用語または共通語といわれる沙漠の言葉にその名残りを残す、古語のひとつだ。隊商が道をあやまたぬよう目印にした、夜空の導き手。その星の名である。

「ウィナエ殿……お会いできて光栄です」

「わたしもですわ、ヤエト様。お会いできる日を、ずっとお待ちしておりました」

女はくるりとふり向くと、天幕に立つ仲間たちに向けて声をはりあげた。

「このかたこそ、預言された救い主です」

ヤエトはよろめきそうになったが、幸い、ジェイサルドがまだ彼の腕を支えていた。

——預言された救い主？

なんの話だ。

「おまえを信じろというのか」

天幕から否定的な声があがった。声の主は、向かって左端に立っている男だ。ヤエトと同年輩だろうか、白っぽく褪せた黄色い髪に、あざやかな紅と青の布を巻きつけている。そのいでたちは、少しばかり南方の呪師を彷彿とさせた。

「わたしが語ったのは、ターンの神よりお預かりした言葉。あなたがたが信じようが信じまいが、それは現実となります。今までの経験で、あなたも学ばれたのではないのですか？」

ウィナエと名告った女の声には張りがあり、よく響いた。大勢を相手に自分の意見を主張し慣れている者の声だし、喋りかただ。

相手が返す言葉に詰まっているのは、預言が現実となるのを経験しているからだ。間違いない。

ヤエトがこの場から走って逃げたいのは、その預言者が彼を救い主と呼んだからである。英雄的な響きだが、感じるのは得体の知れない気もち悪さだ。

預言者がその言葉で示しているのが、彼の隣に立っているジェイサルドであってほしい。

「しるべの星よ、しかし、あなたは語られた。我ら全員が救われるわけではないと」

はじめに声をあげた男の隣に立っていた青年が、おだやかな口調で、しかしあまり穏当ならざる内容を語った。こちらはもう少し若い。ヤエトに向けた眼は青葉の色だ。沙漠の民には珍しい色である。

「……わたしは皆が救われる未来を望みます」

「その望みがかなえられることはないでしょう」

沈黙があたりを支配した。重い、とヤエトは思った。重過ぎる。

天幕の中の人々は、なにを考えているのか。かれらに与えられた預言もわからない。考える材料が不足するにもほどがある。

「失礼ながら、ウィナエ殿。お尋ねしてもよろしいでしょうか」

預言者はふり向いて、うなずいた。

「なんなりと」

「救い主とはなんのことでしょう」
「今は時間がありません。この先、ゆっくりお話しする機会はいくらでも。わたしはあなた様に従いますし、預言を信じた者も従うでしょう。お約束は守ってくださいますね、《黒狼公》様」
「それは無論」
「では、おいでください」
ヤエトがそのまま進もうとすると、女は咎めるように首をふった。
「なりません。悪鬼をともなわれるのは」
「わたしの部下です」
「おひとりで、とお約束をいただきました。皆もそれを存じております。その者の悪名も」
ヤエトはジェイサルドと視線をかわした。老人の表情はまったく動かない。
「ジェイサルド、タルキンとここに」
「御意」
ヤエトは預言者に視線を戻した。あらためて見ると、思っていたほど若くないかもしれない。それとも、預言者という立場が彼女に落ち着きを与えているだけなのだろうか。
「これでよろしいですか」
「結構です。どうぞ、こちらへ」
天幕の中に立っていたのは、八人だった。はじめに声をあげた男は視線を逸らし、ヤエトを見ようとしない。預言者はまず、その男を手で示した。
「鞘のない剣。一族四十五名を率いています」
つづけて、緑の眼の青年を示す。
「泉の守護者。母親の名代としてここにおります」
本名を教えずに紹介を済ませるつもりらしい。
恐れ知らず、叡智の門の番人、炎の手、眠りの樹、蛇の杖、世界の井戸……と、紹介はつづいた。女性は預言者だけで、あとは全員男だ。覚えきれない、と思いながらヤエトは紹介を受けるたびにかるく礼をし、一巡したところでみずから名告った。
「皆様と知遇を得ることがかない、まことに喜ばし

く存じます。わたしが《黒狼公》です」
「先代と、お会いしたことがあります」
発言したのは、泉の守護者と呼ばれた青年だ。
「そうですか」
ほかに答えようがない。ヤエトは先代と個人的な知遇を得たことはなく、血縁ですらないのだ。
「あなたも悪鬼を従えているのですね」
むしろあやつられているような、と答えかけて、思いとどまった。巨鳥が古い歴史に刻まれた恐怖であるならば、沙漠の悪鬼は記憶に新しい、なまなましい恐怖に違いない。へたな言及は身を滅ぼす。
「今は我が配下としてはたらいております」
慎重に答えると、青年は微笑んだ。無難に答えられたようだと安堵する暇もなく、次の問いが来た。
「我が一族の生き残りは、母とわたしのふたりだけ。それでも、匿ってくださると？」
「わたしの言葉はお伝えしてあるはず。従う者には、できる限りの庇護を約束します」
「帝国に歯向かってまでは守りきれぬ、と？」
尋ねたのは、たしか眠りの樹か蛇の杖と紹介された老人だ。どっちだったろうか。
「できる限りというのは、そのままの意味です。帝国貴族といっても無限の権力があるわけではありません。わたしはただの人間です。間違いもおかすでしょうし、不慮の死を遂げることもあるでしょう」
そのとき、預言者が動いた。彼女はヤエトの手をとり、一同を見渡して念を押すように告げた。
「大丈夫、わたしが保証します」
なにを保証するというのだ。寿命か、それとも彼に従った場合の未来をか？
ヤエトは複雑な心境で預言者を見た。女性にしては背が高い。視線に気づいてヤエトを見返す眸の奥にあの光を感じ、彼はたじろいだ。神の言葉を預かるだけでなく、神力を宿しているのではないか。
「貴公に従うとは、具体的には？　なにを要求されるか知りたい」

発言したのは、右端の男性だ。少し、イスヤームに雰囲気が似ている。立派な髭のせいだろう。

「まず、盗賊行為を禁止します。ことが大きくなれば、わたしが守りきれる範囲を超えます」

「儂は関係ないぞ」

さっきの老人がぶつぶつとつぶやいた。たしか、蛇の樹……いや、違う。なんだったかと考えているあいだに、別の男が口を開いた。黒髪のせいで、ぱっと見たところは南方人のようだ。

「盗賊というなら、そなたの部下もそうだろう」

「悪鬼のことでしたら、足は洗っております」

「昔の悪行が、それですべて許されるというものではない。わたしの親族は、奴に殺された」

通行料をけちったのだな、とヤエトは思った。もちろん、口にするわけにはいかない。

「それはお気の毒に。ですが、彼に罪を償う機会を与えるためにも、わたしに従っていただきたい」

黒髪の男は口をつぐんだ。

まだ発言していない人物を、ヤエトは順に眺めた。もう、誰が誰やらさっぱりだ。

その内のひとりが手を挙げた。小太りの身体を縮めて、居づらそうにしている。

「いいかな？　……わたしの一族は、盗賊とは無関係だ。なにを要求されるのだろう？」

「移住していただきます」

「沙漠を……出ろと」

「はい。わたしの領地に、あらたな耕地をつくる計画があります。用水路を通し、灌漑を――」

「わたしは農奴ではない！」

吐き捨てるように叫んだのは、鞘のない剣と呼ばれた男だ。ヤエトは眉を上げた。

「誰の奴隷にもいたしません。ですが、奴隷をおつけすることもしません。ご自身で耕すか、なんらかの生業を身につけるご覚悟を願います。賊徒に身を落とし、人の財を奪って暮らすと仰せであれば、わたしの保護はあなたがたには及びません」

暫しの沈黙の後、太った男が尋ねた。
「街で暮らすという選択肢はないのだね？」
「その道を選ぶことも可能です。ただ、王家のかたにはご遠慮願いたいですね。人目につけば、お命があやうくなりましょう。もちろん、移住先は相談に応じます。ただ、ここは早晩、博沙国の捕吏にみつかるでしょう。早急に引き払っていただきたい」
副使は自由に《黒狼公》領内を調べている。ジェイサルドの部下が間違った方へ誘導しようとしてはいるらしいが、これ以上は時間を稼げそうもない。
「しかし、それであなたが得るものは？」
ヤエトは泉の番人と呼ばれた青年を見た。端麗な面立ちである。肩にかかる程度に伸ばした銀色の髪の先は渦を巻いて、白い服に淡い影を落としていた。
よく見れば衣服はくたびれ、何度か仕立て直したらしい痕跡もあった。世が世なら、街を睥睨する城の奥深く、黄金や宝石に埋もれて暮らしていた人種だ。故国が滅びた頃は、まだ幼児だっただろう。自分が失ったものを、彼は知っているのだろうか。
「あなたがたをお救いできるという、希望を」
答えてから、我ながら胡散臭いと思った。もう少し、下世話な回答をすべき場面だろう。
沈黙を破ったのは、老人だった。
「儂は留まる。今さら、沙漠を捨てられない」
「捨てるのではありません。遠くにあって故郷を想う者は、皆、生まれ育った土地を捨てた者ですか？移り住むとは、そういうことではないのです」
「行きましょう、蛇の杖」
泉の番人が、老人の手をとった。
「しかし……」
「この水場は長くない。大勢で使い過ぎました」
青年はヤエトに視線を向け、言葉をつづけた。
「じきに毒が回ります。この水場の底は、アルハンと繋がっているのですから」
さっきよりもさらに重い沈黙が、天幕を満たした。
――アルハンと繋がっている？

では、帝国が沙漠越えのときに入れた毒が、ここまで回るというのか。それとも——。

——邪竜の血はどうなるのでしょう。

ジェイサルドの言葉が耳によみがえり、ヤエトは背筋が寒くなるのを覚えた。

アルハンの地下に眠る邪竜の心臓から、今も毒の血が流れつづけているのだとしたら。

「いざ行かん！」

声をはりあげたのは、預言者だった。神々しい光に包まれ、聖なる炎のように見えた。

「沙漠の子らよ行け、行って戦いの備えをなせ。その日は近い、もはや猶予はならぬ、行け！」

——戦い？

意外な言葉にヤエトが当惑したそのとき、それまで無言だった男が動いた。たしか、呼び名は炎の手。彼はさっと天幕を飛び出し、手を挙げる。赤い手袋が、夕日を受けてさらに色を濃くした。

「射よ！」

その手がふり下ろされるより前に、ヤエトは衝撃とともに地面にころがされていた。天地がぐるぐると回り、なにが起きているのかわからない。

ジェイサルドが彼を庇って突き倒したのだと気がついたのは、剣が閃いてからだ。

耳に突き刺さるような音がして、投擲用の短刀が砂の上に落ちた。一本ではない。次々と飛んでくる短刀を、ジェイサルドの剣がすべて弾き落とす。

舌打ちして踵を返したのは、赤い手袋の男だ。これだけ近い距離から狙って、仕損じるはずがないと確信していただろうが、彼は必要な情報を手にしていなかったのだ。ジェイサルドの異常なまでの強さと——北嶺の翼ある騎士団の復活を。

口の中に入った砂を吐きながらヤエトが身を起こしたときには、勝敗は決していた。

岩山に潜んでいたという射手が何人かは知らないが身を伏せていても上空からは一目瞭然。射手は下の様子に注目し、空は仰がなかったはずだ。見上げ

れば、鳥たちを発見しただろうに。
　叫び声がして、天幕が倒れた。岩山から、射手が落ちたのだ。呻き声をあげるその身体には矢が突き立っている――黒い矢羽根は、北嶺のものだ。下向きに射るつもりで隠れ場所から姿をあらわした射手たらは、高空からの矢には無防備だった。
　黒い巨鳥が人々の頭をかすめ飛ぶだけで、沙漠の民は硬直し、あるいは悲鳴をあげて地に伏せた。
「奴か!?」
　エイギルの声が聞こえた。
　鳥から飛び下りたのは、たしかに顔見知りの騎士だが、見慣れた温顔とは違う厳しい表情だった。砂を蹴って、ほんの三歩で目標に辿り着く。
　間近に巨大な鳥を見て、赤い手袋の男は腰を抜かしたらしい。立ち上がることもできず、庇うように手を動かすのが精一杯だ。
　だが、手で剣を防ぐことはできない。
　ふり上げられた刃に夕日が映り、血に染まるより早く、濃く、朱を宿したのをヤエトは見た。
　エイギルの剣を止めたかった。
　だが、今は無理だ。《黒狼公》が、必要とあらば厳しい処分も辞さないことを示しておかねばならない。手心をくわえるなと、事前に指示してある。その場で首謀者が発覚すれば、殺せ、と。
　ヤエトは知っている。自分は甘い。どうしようもなく、弱い。この死の責任をとりたくない。
「全員が救われることは、かなわない。そう決まっていたのです」
　ふり返ると、預言者が彼のかたわらに膝をついていた。長い黒髪は、地面に届いている。迫る薄暮の中で、その姿は異様なものに見えた。なにか人ではないものがそこにいる、とヤエトには感じられた。
　預言者は微笑を浮かべてくり返した。
「決まっていたのです」



第



章

1

恐慌を来した沙漠の民をまとめるのには、少し時間がかかった。

天幕の中にいた八人の内、騒ぎで死んだひとりを除いた全員が、《黒狼公》への恭順を誓った。もちろん、預言者もだ。

上辺だけでなければよいがと案じながら、ヤエトはかれらの申し出を受け入れた。

沙漠の民を配する場所は慎重に決めねばならない。それぞれが率いている人数の兼ね合いもあるし、抱えている文化も考慮せねばならない。些末な慣習の差が、決定的な不和に通じることもある。帝国の歴史は憂鬱な先例の宝庫だ。

身近な例でいえば、同じ文化を共有しているはずの北嶺人でさえ、狭苦しい場所での同居に苛立ちを見せた。半年にも満たない期間で、である。集住とは無縁な文化が、不和を促進したに違いない。

しかし、今はまず立ち退かせるのが先決だ。とりあえず、全員をタグワーンの上流域へ向かわせることにした。険しい山岳地帯で、隠れ住むには悪くない。望む者があれば、そのまま住まわせてもよい。

死んだ赤い手袋の男――炎の手には、盗賊騒ぎの責任を押しつけることにした。第二皇子の使者に引き渡すのだ。この男がすべての首謀者です、と。

《黒狼公》領でも盗賊の被害があることは、使者も承知している。盗賊を狩っても不自然ではないし、行き過ぎて殺してしまっても……抗議はされるだろうが、過失として受け止められるだろう。

だが、遺体をそのまま博沙国に持ち帰るわけにはいかない。首を塩漬けですかな、とジェイサルドはエイギルに相談を持ちかけた。北嶺から雪をかためて持って来ましょう、とエイギルは答えた。それともご面相が崩れた方がよろしいか。

問われて、ヤエトは答えた――臭わない方が、使者たちも助かるのではないでしょうか？

疲れる会話だ。

後事をかれらに一任し、ヤエトは邸に戻った。沙漠の民との対話も必要だし、慣習にも興味があるが、ヤエトの身はひとつ。しかもそれが虚弱とあっては無駄な体力は使えない。彼の仕事は別にある。

タルキンには、次の食事は抜きだと申し渡した。育ち盛りには堪えるはずだが、あまりがっかりしていないのが気にかかる。飯抜きは罰にならないのだろうか？ ……考えてみれば、ヤエト自身もあまり食欲はない。疲れ過ぎた、と思う。

「殿、ご無事で！」

出迎えたスラジャは、少し痩せたようだ。沙漠の王族を匿っていたことがヤエトに知れて以来、福々しかった善人面が一転、つねに不安におののいているような表情を浮かべるようになった。叱ればこちらが悪者に見える、そんな顔である。

「正使殿は？」

「ギスケル様なら、ご贔屓の女優のところへ」

邪魔してやれ、とちらりと思ったが、やめた。

「では明朝、お探しの罪人どもを討伐したと報せなさい。お望みなら首級をお渡しするご用意がありますと。副使にも、同じ報せを出してください」

「かしこまりました。ところで、ご首尾は」

「恭順を誓わせました。それより、ターンの神殿についての伝説を、なにか知りませんか？」

スラジャは眼をしばたたいた。

「ターンですか？ いいえ、とくには……」

「預言者を名告る者がいました。ターンの神と預言者にまつわる話があれば、できるだけ知りたい。集めてもらえますね」

ゆっくり話す機会はある、と預言者は断言した。事前の知識もなく、再度対面するのは避けたい。

「かしこまりました」

「ほかに、報告すべきことは？」

「あっ……はい、そうでした。姫様が、お戻りになったらかならずお報せするようにと」
「なにをです」
「いやだから、殿がお戻りになったらご自分に。うっかりするところでした、すぐ行って参ります」
待て、とのばした手は空を摑んだ。スラジャはもう廊下へ出ている。
ヤエトはため息をついた。これで睡眠時間が確実に減った。もう深夜である。連日の激務で、体力は限界だ。皇女につきあう余裕はないのに。
案の定、彼が廊下に出たときにはもう隣室の扉が開いていた。隙間から覗いているのはスーリヤである。おそるおそるという風だったのが、ヤエトの姿を認めたとたん表情をゆるめ、大きく息を吐いた。
「旦那様」
「静かに。王をお起こしせぬように。戻ったことは、お目覚めになったときにお伝えすればよい」
「そんな殺生な。殿のご帰還を即座にお伝えしなければ、首にするといわれました」
スラジャの不安げな善人面が、こんなに気にさわったことはない。
「わたしの代官を、王が首になさると？　そんな権限をお持ちのはずはないですがね。いいでしょう、必要ならわたしが雇い直します」
「必要ならって……殿、それもあんまりです」
哀しげな顔に、スーリヤがあっさり騙された。
「今、お伝えして参ります」
「あっ、こら」
のばした手が、今度は間に合った。スーリヤの腕を摑んで引き寄せると、娘はおどろいたように彼を見上げた。
「黙っていなさい。たのむから」
「でも、とても心配なさって……わたしも、……もし旦那様に、なにかあったらと」
ヤエトは苦笑した。
「わたしはそんなに信用がないのかな。あるじにも、

使用人にも信じてもらえないとは」

「慕われていらっしゃる、ということでしょう」

スラジャが得々と語るのを聞いて、ヤエトは肩を落とした。内容はともかく、声が大きい。この男を早く追い払わないと、皇女が起きてしまう。

「必要な手配をしたら、おまえももう寝なさい」

「はい、そうさせていただきます。スーリヤ、わたしはちゃんと姫様にお伝えしようとしたからね？証人になって貰えるね？」

「はい」

「よろしい。では、おやすみなさいませ、殿」

恭しく一礼してスラジャが廊下を歩み去るのを見送って、ヤエトはため息をついた。スーリヤに視線を戻して、おどろく。泣いているではないか。

「どうした。痛かったか？」

そんな剛力のはずはないがと思いながら、腕を摑んでいた手をはなす。娘は首を左右にふり、袖で目もとを押さえた。

「いいえ……申しわけありません。旦那様のお顔を拝見したら、ほっとして……それだけです」

「そうか。心配をかけたな。許せ」

なんとか微笑もうとしたスーリヤの背後から、不機嫌そうな声が聞こえた。

「戻って来たなら、さっさと報告せよ」

皇女だ。

ヤエトは顔が引きつるのを感じた。心の中で、別れの言葉を告げる。さらば、睡眠時間。布団との逢瀬はまだ先のことになりそうだ。

「もう夜も遅うございます。ご報告は明朝――」

「命令だ」

ぴしりといわれて、最後の抵抗が失敗に終わったことがわかった。彼はスーリヤの肩を摑むと、そっと横に押し遣った。

「スーリヤ、おまえももう休みなさい」

「お茶をお持ちします」

「いや、必要ない。席を外しなさい」

「……かしこまりました」
一礼して立ち去るスーリヤと入れ違いに、ヤエトは部屋に入った。
室内に灯火は少なく、廊下より暗いほどだった。皇女はいつもの男装に上着をひっかけ、露台の縁に置かれた石の長椅子に腰掛けている。月はもう沈んでいるが、星明かりの夜空の下の方が、室内よりよほど明るく感じられた。
ヤエトは扉を閉めると、露台に向かった。
「お寒くはありませんか」
春先とはいえ、夜は冷える。石も冷気を含んでいるだろう。しかし、皇女の一瞥（いちべつ）の方が冷たかった。
「遅い」
「申しわけありません」
「聞こえていたぞ」
「それはご説明の手間が省けてなによりです」
「……そこは、申しわけありません、だろう」
「わたしがお答えする言葉がすべてそれでよろしければ、仰せのようにいたしますが」
皇女は肩を落とした。やっていられないという表情である。
「座れ」
外套を脱ぐ暇がなくてよかった、と思いながらヤエトは皇女の横に腰を下ろした。思った通り、分厚い布越しにも冷たさが染みてくる。
皇女の頭は、彼の肩先に届く程度の位置だ。
「そなたは……」
言葉はそこで途切れて、先につづかない。うながすように、ヤエトは答えた。
「はい」
「女官の名まで覚えているのか」
「……は？」
「わたしは女官の名など覚えない」
「ナオ殿のお名前はご記憶でいらっしゃるようにお見受けいたしますが」
「ナオは乳母だ。ただの召使いではない」

「お付きの女官のことでしたら……、あれは三の君のお邸にいた者です。去年、騒動に巻き込んでしまったのです、わたしが杖代わりにしたせいで」
「兄上の……」
「縁あってミアーシャ様にお預かりいただいていたのですが、そのままというわけにも参りませんので、引き取りました」
慎重に考えて、ここまでかなという範囲を口にした。本来は第三皇子の家宰がヤエトを色仕掛けで陥れるために娼館から買って来た娘で、それも彼が皇女と浅からぬ仲と邪推して選んだようだ……とは、とてもいえない。占いによれば《銀鷲公》の血筋らしい……というのも、余計なことだろう。
「律儀だな、そなたは」
「よくいわれます。しかし……意外なことをお聞きしました。北嶺でお仕えしている女官たちの名も、ご記憶でいらっしゃらないのですか？」
皇女に同行させられた女官たちは、それなりの家柄の貴族の娘がほとんどだ。辺地に行くのだから、実家でも持て余しているとか、家柄のどこかに瑕があるとか、そういう事情はあるらしい。だが、政治的な意図もあるだろうし、名前くらいは覚えてもらわねば、仕える甲斐がないだろう。
「あれはな、難しいのだ」
「は？」
「公平に扱わぬと、やれ誰が贔屓されたとか……。それゆえ、誰の名も呼ばぬのがよいのだ。その場に居合わせた者に用をたのむようにしている」
「なるほど……得心いたしました」
皇女は少し顔をしかめて、つぶやいた。
「こんな話をしようと思っていたのではない」
まぁそうだろう。こんなことで睡眠時間を削られたのでは、たまらない。
「ご報告申し上げることは、あまりないのですが。ほぼ、予定通りというくらいしか」
「そうか」

問いただしてくるかと思ったが、皇女は俯いている。言葉を探しているのか、沈黙はやけに長い。

金髪は光線の加減で色が変わっておもしろいな、とふと思った。ヤエト自身は黒髪で、日射しが強いと多少茶がかって見えるのがせいぜいだ。そういえば、妹が髪色を明るくしようと画策し、やり過ぎてばさばさの白髪になったことがある。当時は馬鹿なことをと思ったものだが、なるほど、こういう髪に憧れたのだろう。気もちはわからないでもない。

ヤエトは、星明かりを浴びて淡い光を帯びた皇女の髪に指を埋めると、それをかるく梳いてみた。

おどろいて顔を上げた皇女と視線が合うと、彼は微笑んで告げた。

「わたしがご報告せずとも、王はご存じでしょう。沙漠へ行かれましたね？　お髪に砂が」

「えっ？　そんなはずはない、ちゃんと――」

ヤエトは笑みを深め、皇女の顔からは表情が消えた。そして、次には怒りだした。

「たばかったな！」

騙そうとしたのは、どっちが先だ。

「おいでになってはなりませんと、あれほど申し上げましたのに」

タルキンが皇女の願いに否といえないように、皇女に仕える騎士たちも、抑止力としてはあまり期待できないようだ。

ため息をつかないように努力しながら、ヤエトは皇女に尋ねた。

「それで？　如何でしたか」

「行ったは行ったが、なにがあったのか、よくわからぬ。下の会話は聞こえなかったし……」

「従えば救うという話をしただけです」

「矢は……当たらなかったのか？」

ヤエトは眉根を寄せた。皇女は心配そうな顔をしているが、ほだされている場合ではない。

「《天地輪》はどうなさったのです」

日没から、と決まっているのだ。潜んでいた射手

に号令がかかったのは、夕日が沈む直前くらいだったと思う。その時点であの場所にいては、邸に戻って《天地輪》にそなえる時間がない。

皇女は居心地悪そうに肩をすくめた。

「うん」

「うん、ではありません。どうなさったのです」

「鳥の背で」

ヤエトは目眩を感じた。長椅子から転がり落ちるかと思ったが、なんとか踏み止まった。

「そのような危険なことを！」

「騎士が一緒だった。危険ではない」

「懲罰を与えます。誰です」

「必要ない。わたしが命じたのだ」

「たとえ主君の命であっても、従ってはならぬこともあるのです。それがわからぬでは、騎士はつとまりません。よって、罰します。誰です？」

皇女は口をつぐんで教えない。ふん、とヤエトは鼻を鳴らした。

「結構。確認すれば、わかることです」

「ヤエト、わたしのせいなのだ」

「王もわきまえてくださらねば。ご自身の責任だとおっしゃるのは、たやすい。ですが、不適切な命令が原因で罰されるのは、王よ、あなた様ではありません。その命令に従った部下なのです」

「……もうわかった、だから騎士は罰するな」

「なりません。示しがつきません」

今後のことがある。皇女の身を危険にさらすなど、あってはならないことなのだ。外へ連れ出しただけでも問題なのに、戻るのが《天地輪》に間に合わないなど、言語道断である。

「わたしが――」

「無論、王がお悪い。ですが、王は我らの主君でいらっしゃいます。罰を与えることはできません。王のぶんまで、騎士が罰されることになるでしょう。今後は、このことをよくお考えになるのですね」

皇女はもう十分に罰を受けたような表情をしてい

た。自分は助かった、よかった……とは思わない性格だから、これは効くだろう。
「……どうしてもか」
「酬いは必要です。手を回して逃がそうなどとなさいませんよう。それもまた不適切なご命令であることを、よくお考えください。ついでに申せば、わたしも馬鹿でした。もっとわきまえのある騎士を――たとえばエイギル殿を置いて行くべきでしたね」
さすがに副団長ならそこまで甘い顔は見せないだろう。現場をまとめるのに必要かと沙漠に来てもらったが、読みをあやまった。
「エイギルが、そなたを狙った者を斬ったのだ」
「エイギル殿でなければ、誰か別の者が斬っていたでしょう。それだけのことです」
「しかし……」
「もう結構です。ご存じでしょうが、今日はとても疲れました。ここで王におつきあいするのが、わたしの馬鹿さ加減に対する罰なのかもしれませんが、それにしても限界というものがございます。お話がこれだけなら、わたしは休ませていただきます」
話を断ち切ると、皇女は傷ついたような表情を見せた。まずい、とヤエトは思った。今のはよくない。
――俺は大人じゃないのか、阿呆が。落ち着け！
たしかに皇女は愚かなことをした。だが、半分以下の歳の少女に苛立ちをぶつけるのも、十分に愚かなことではないか。
「……申しわけありません。言葉が過ぎました」
「いや……。気にするな」
皇女は俯いて、また言葉を探しているようだったが、やがて低い声で告げた。
「大丈夫なのか」
「なにがでしょう」
「そなたらしくない」
「……ですから、なにがでしょうか」
「わたしは、そなたの役には立てぬのか？」
なんの話かさっぱりわからない。苛々（いらいら）した調子を

声に滲ませないようにするのが精一杯だ。
「王がわたしなどの役に立ってくださる必要はありません。わたしが王のお役に立つべき立場です」
皇女はため息をつき、ヤエトを見上げた。
「わからん奴だな、相変わらず」
「申しわけありません」
「わたしのような小娘でも、無理なことだと思う。だから、そなたは口にはせぬであろう。だが、ほんとうは全員を救いたかったのだろう、ヤエト」
「……は？」
「かつて、そなたは申したな。陛下はご自身のお命を守るため、やむを得ず沙漠越えをなさったと。陛下のお気もちを考えれば、無理からぬご決断であったと……だが、自分にはそれを止めることができなかったのかと考えているとも申しておったはず」
皇女の言葉に、ヤエトはおどろいた。そんなことを、自分はこの少女に告げただろうか？
「僭越なことを申しました」
「それは、どうでもよい。そなたは悔いているのであろう。十数年前、おのれの意に反して沙漠の民を見殺しにするしかなかったことを。だから、この機会を逃せなかった。今度こそ、救いたいと思った。今なら救えると。……そうではないか？」
言葉を探すのは、彼の番だった。
暫く考えて、むかついたり呆れたりしてから、ようやくそれを認め、口にすることができた。
「はい」
皇女の言葉は正しい。自分でもほとんど意識していなかったが、これは償いなのだ。
そんな私的な欲求のために、自分がどれほど多くのものを危険にさらしているかと考えると、少し怖くなった。こんなことは、やめねばならないのではないか——今からでも遅くはない。全員まとめて、都に突き出すべきだ。自分が恥知らずと謗られることさえ覚悟すれば済むことだ。
だが、ヤエトの思惑を知らず、皇女は言葉をつづ

けた。ゆっくりと、静かに。
「わたしはな……正直なところ、叛逆者どもの命など、どうでもよい。彼奴らのために、そなたがその身を危険にさらすことの方が、ずっとおそろしい。だが、あの者たちを救うことが、そなたにとって重要なのだとは、理解しているつもりだ」
皇女はヤエトの手をとった。小さな手は、あたたかかった。年頃の貴族の娘の手にしては、硬いのだろうと思う。剣をふるい、鳥を駆る。戦士の手だ。
命の尊さを知らないわけではないが、それに軽重を与え、諦める潔さを知っている。ひとつを救えば、それ以外を捨てねばならぬこともあると、納得しているのだ。その点では、きっとヤエトよりずっと経験を積んでいる。
皇女は大きく息を吐いた。
「だからな、ヤエト。そなたはもっと、わたしをたよってよいのだ。わたしの生まれや身分も、利用すればよい。わからぬのか。……負い目のように、ただ背後に守られているのは、わたしは好かぬ」
返す言葉がなかった。
探しても、見当たらない。軽率に言質を与えてはなりませんとか、主君を利用しろと唆すなど短慮に過ぎますとか、いろいろ思いつきはしたのだが、この場にふさわしいとは思えず諦めた。
ヤエトが黙っていると、皇女は目線を上げて、探るように彼を見た。まるで、叱られたらどうしようと心配しているように。
ため息をついて、彼は眼を伏せた。
眠い。眠いが、もう少し頑張らねばならない。
「なるほど。王のお考えはわかりました」
「……まことに？」
「はい。むしろ、仰せのあるまで気づかなかった自分が阿呆だと思います」
おとなしく守られてくれるような少女ではないと、知っているはずなのに。つい、願望を現実ととり違えてしまう。人はどうしてこう愚かなのか。

「そなたは阿呆ではないと思うが」
「いいえ、かなり重症です。しかし、とりあえずわかりました。ありがとうございます」
「……なにがだ」
「教えてくださったことです」
皇女の身の安全を考えるなら、遠くに隠しては駄目なのだ。それは最低最悪の選択肢と心得ねばならない。なにか責任を感じられるようなつとめを与え、適度な距離に置いておくのが最善だ。
――よし、学習した。
「王にしかおできにならないことがあるのですが、お願いしてもよいでしょうか」
「なんだ」
「二の君に、ご連絡を。是非、一件でご協力をと」
皇女は眼をしばたたいた。ヤエトの言葉が意外だったらしい。それでも、すぐに応じた。
「理由はなにか。申してみよ」
「まず、お言葉に甘えることをお許しください。沙漠の民の生き残りを保護すれば、ご迷惑をおかけするのは承知しておりますが、おっしゃる通りです。かつて見捨てて後悔したものを、また同じように見捨てることはできません。ですが……あまりに危険過ぎることも事実。これを分散させたく存じます」
「二の兄上を巻き込んで、か？」
「御意。二の君には、お味方が必要です。《天地輪》での援護と、沙漠の民の馴致。どちらも二の君には魅力的な申し出となりましょう」
皇女は眉根を寄せた。少し考えていたようだったが、やがて小さくうなずいた。
「よかろう。だが、どうお伝えする？　叛逆者どもを匿う手助けをお願いします、とはいえぬぞ」
「まずは、皇帝陛下のもとに置かれた伝達官を通じて、二の君に予告をなさってください。《天地輪》で擁護する、と。そして、《天地輪》では二の君を糾弾する声に反論するのです。二の君には謀反の気配などなく、兵を増やしているのも沙漠の盗賊が組織だ

って動いているゆえであると……名告って、二の君のお味方をしてください。少し危険ではありますが――避けては通れませんので」

　様子見をしている余裕はない。どんなに隠しても、秘密は漏れる。沙漠の王族を匿っていることが明るみに出れば、ヤエトは終わりだ。当然、彼を見捨てないと宣言した皇女も終わる。命までは取られないだろうが、北嶺の支配権は取り上げられ、おとなしくしていろと皇宮に閉じ込められるのは確実だ。

「危険というのは？」

「二の君を陥れようとする者に、敵視されます。おそらく……誰かが突出すれば叩くという考えを持った者に、標的にされることになるでしょう」

「かまわぬ。むしろ、そのような者とは味方になりたくない。さっさと戦って下してしまいたい」

　ヤエトはこめかみを押さえた。眠いなどといっていられる状況ではない。

「王よ、それはあまりに短慮なお言葉です」

「そなたと話しているときくらい、本音をいわせろ」

　彼がいないところでは、心にもないことを喋っているとでもいうのか。非常に疑わしい。

「……名告って擁護するのには、理由があります。ひとつは、二の君に信用していただくためです」

「それはわかる。事前に連絡をつけるのも、そのためであろう」

「ご明察です。わたしが王の副官であることも、先代《黒狼公》の領地を譲り受け、二の君が治めておいでの博沙国の隣人となったことも、周知の事実。王がお名告りあそばすことで、沙漠の賊についてご存じでいらっしゃることにも信憑性（しんぴょうせい）が生まれます」

「我が臣下の領地でも賊が暴れておる、と証言すればよいのだな」

「御意にございます。できましたら、二の君にご連絡あそばすときに、同じように仰せになってください。それで、恩寵の力を使って同じ内容を確言できるかどうかを確認できます」

恩寵の力を使う限り、嘘はつけない。皇女が心から信じなければ、第二皇子の擁護もできないのだ。

皇女はうなずいた。

「わかった。やってみよう」

「二の君から、どういう理由で援助を申し出たのかとのお尋ねがあるかもしれません。そのときは、直接お会いしてお話しするとお答えください。沙漠の守りをどのように固めておられるか、参考にしたいので《黒狼公》が参ります、と」

「そなたが、二の兄上のところへ行くのか」

「王がお嫌でしたら、わたしがひとりで参りますが、よろしければご同行を」

「行くに決まっておろう」

ヤエトは苦笑した。そうでなければ困る。適度な距離で、はたらいてもらわねばならないのだから。

「ありがとう存じます――ただ、王が行かれることは、二の君にもご内密に願います」

「おもしろそうだな」

「明日の《天地輪》より前に、二の君にご連絡をお願いします。陛下にはまだ知られないよう、伝達官には注意を与えてください」

「わかった」

皇帝は甘くない。それは、わかっている。

第二皇子はどうだろうか――天秤の一方にあの叛逆者たちを並べ、もう一方に置いて釣り合うくらいの貸しをつくらねばならないのだが、人の命や義理の重みは、判断する個人によって違ってくる。分銅のように一定の重量で計算できれば楽なのだが。

「それだけか？　もっとなにかないのか」

今たのんだことだけでも十分だろうと思うのだが、皇女はやる気満々という顔つきで尋ねてきた。

微笑ましいと思ってしまう自分が、少し意外だ。去年なら、面倒くさいと考えただろう。

――まぁ、今も面倒くさくないわけではないか。

面倒だけでなく楽しさも感じているわけだ。だが、感じるといえば、もっと深刻な問題がある。

とてつもなく眠い。
「それでは……もうひとつ、お願いが」
「申してみよ」
「わたしが寝入るまで、手を繋いで物語でもお聞かせくだされば、嬉しいのですが」
皇女は眼をまるくした。
「本気か？」
「少々、甘やかしていただこうと思いまして」
皇女はぽかんとしていた。が、それはわずかのあいだであった。さっと頬に朱がのぼる。また怒った、とヤエトは思った。忙しいことだ。
「からかうな！　まさか、根に持っておるのか」
「なにをでしょう？　根に持たれるようなことをなさったご自覚がおありなのですか？」
笑顔で問い返し、ヤエトは立ち上がった。
「はぐらかすでない。わたしは――」
「もう十分に、お力をお貸しいただきました」
「なにもしておらぬぞ」
「いいえ、してくださいました。わたしを理解し、信じてまかせてくださるそのお気もちに、つくづく感じ入りました。ただ、できますれば――」
「なんだ？」
「――もう少し、お信じいただければと。たとえば、沙漠まで見物においでにならずに済む程度に」
皇女は顔をしかめた。
「それは、そなたの平素の態度にも問題がある」
「まだ誤解なさっておいでのようですね。前にも申しましたように、無駄に命を捨てるつもりはございません。身を守るのに必要な手段を講じないほどの馬鹿と思われるのは、いささか心外です」
「もうよい。その話はわかった」
「おわかりいただけたなら、結構ですが……ほんとうに？」
「くどい！」
「平素の態度を云々なさるのであれば、この程度の念押しは甘受していただかねばなりません」



皇女は立ち上がり、暫しこちらを見上げていたが、不意に長椅子の上に登った。挑戦的に見返されてようやく、皇女の方が少し目線が高くなるからそんなことをしたのだと理解した。

——なんと子どもじみたことを。

呆れていると、皇女は両手を腰にあてた。

「だいたい、ちょっと大人だと思って、偉そうに」

「ちょっとではございません。皇女殿下のご年齢を二倍にしても、わたしの歳には届きません」

「たかだか二十二歳の差に過ぎぬ。わたしが二十二歳になるまで七年しかないのだぞ」

「今のご年齢の半分ほどの歳月が必要ですね」

皇女はめげなかった。

「たった八年で、王はわたしの半分以下のお歳でいらっしゃる……などとはいえぬようになるのだ。それなのに、なんでも知っているような顔をして……ほんとうに腹が立つ！」

「残念ながら、この顔は生まれつきで」

「いっておくがな、そなたはわたしのことなど、これっぽっちもわかっておらぬのだからな」

「至らぬ臣で、申しわけございません」

「もう知らぬ。去ね！」

「御意」

露台から部屋に戻り、退出する前に彼はもういちど皇女の方を見た。まだ長椅子の上に立っている。ヤエトの視線に気づくと、皇女は横柄に尋ねた。

「なんだ」

「お話しさせていただいたおかげで、たいそう気が楽になりました」

「うるさい、さっさと出て行って寝てしまえ！」

「王も、どうかもうお休みください。夢のない眠りと爽やかな目覚めのあらんことを」

一礼して廊下に出ながら、実際、少女は自身が意図した以上のことをやっているのだと考えた。

人には資質というものがある。

ヤエトは年齢も年齢だし、それなりに頭は回る。

可能な範囲で気も回しているつもりだ。だが、人の心を明るくするような芸当は、とてもできない。

皇女はそれを無自覚にやってのける。人の上に立つ者として、実に得がたい資質といえるだろう。

男子であれば、とヤエトは閉じた扉の向こうに残して来た少女を想った――男子であれば。

――皇帝の位を狙えたのではないか？

その資質が人を集めていずれかの勢力に奉戴され、末子であっても危険な状況になっていただろう。女子でよかったのだ。兄皇子たちを始末して、綱渡りをするように命を繋いでいかねばならぬ未来など、皇女にふさわしいとは思えなかった。

――埒もないことを。

疲れているから余分なことを考えるのだ。ヤエトは一刻も早く休むべく、自室へ向かった。

2

博沙王の正使から面会の申し込みがあったのは、午前の早い時刻だった。即座に応じる義理もない。ヤエトは対面を午後に延ばした。代官と諸々の打ち合わせを済ませ、勧められるまま仮眠をとった。身体が熱っぽく、倒れる予感がしたからだ。

いつ高熱を発してもおかしくないという認識はある。しかし同時に、そうそう休める状況ではないともわかっている。困ったことだ。

昼寝をしても疲れがとれた気がしない。寝台から起き上がるために、かつてない努力が必要だった。

有事のときには鳥を飛ばせるよう、側についているのはタルキンだ。水を汲んでおくとか、着替えを用意して皺を伸ばしておくといった心配りは期待できないが、気の利き過ぎる従僕ならば、寝台から起き上がらせてもらえないだろうから、これはこれで結構なことだ。

先に着替えてから顔を洗ったせいで、袖のまわりが濡れてしまったが、どうせ会うのはギスケルだ。

多少の非礼を気にする必要もないだろう。
ヤエトが入室すると、使者は立ち上がった。
「お座りください」
礼儀として口にしたものの、ギスケルはすでに腰を下ろしていた。傲慢というより投げやりという言葉が似合いそうだ。
「ご滞在を、楽しんでおられますか。諸事にとり紛れ、おもてなしをする機会も得られずに今日まで過ごしたこと、まことに遺憾に存じます」
ヤエトは眼をほそめて相手を見た。どう切り出そうかいろいろと考えていたのだが、なんだか面倒になってきた。向こうがなにも気を遣っていないのに、なぜこちらだけ苦労せねばならないのだろう？
――忍耐だな。
生きるとは面倒くさいことであり、それをやり過ごすのに必要なのは、ひたすらの忍耐である。忍耐には褒美が必要で、こういうとき、ヤエトは夢の隠遁所を思い描いて自分を慰めることにしていた。霧深くたちこめる深山幽谷にひっそりと佇むその場所では、風が吹き過ぎるときの葉ずれの音くらいしか聞こえない。たまには獣の声や鳥の声もするだろう。
だが、ヤエトを呼ぶ声だけは、絶対にしないのだ。死ぬまでには辿り着きたいものだが、そのためには、まずこの面倒な役目を勤め上げるしかない。
ヤエトは渋々と現実に戻り、考え得るもっとも無難な言葉を口にした。
「それで、ご用件は？」
「賊を討伐したそうだが、証拠はどこに？」
「首級でしたら、お渡しするご用意が」
「そういう意味ではない。その者が、たしかに我らが追って来た者だという証拠はどこにある」
「博沙国で凶行をおこなったと、証言しました」
「首は喋れん」
ギスケルは尊大に断言した。たしかにね、とヤエトは思った。生首が喋ったら怪談である。
「わたしが会ったときには、まだ首と胴がくっつい

ていたのです。声も聞きましたよ、この耳で」
「とにかく、調査はつづけさせてもらう」
「必要ありません」
「勝手に決められては困るな。必要は、ある」
ヤエトは膝の上で両手を組んだ。
「実におもしろい話ですね」
「おもしろい？」
ギスケルは吐き捨てるように笑い、ヤエトを睨みつけた。いつもの怠惰な雰囲気が消えている。こんな顔もできるのか、と思いながら答えた。
「おもしろいですね。罪人は処分され、証拠の首級は差し上げるとお伝えしました。この上、あなたが我が領地に留まらねばならない理由がどこに？」
「本人だという証拠がない」
「本人だと、わたしがいっているのです」
「公のお言葉だけでは、証拠にはならない」
ヤエトはわずかに眉を上げた。
「勘違いなさっておいでですね」
「なにをだ」
「証拠ではありません。事実です。わたしが語った以上、それは既定事項なのです、ギスケル殿」
ギスケルが言葉に詰まったのは一瞬だった。
「わたしは博沙王から正式に遣わされた正使だ」
「ええ。あなたは罪人を追って来られた。調査と捕縛に協力せよとの博沙王からのご依頼、たしかにうけたまわりました。その賊を我が部下が追いつめ、勢い余って殺してしまいました。首級はお渡しします。お持ち帰りになって、存分にご検分をどうぞ」
「だから、それが本物だという証拠が――」
「わたしの言葉をお疑いですか？」
ギスケルは口をつぐんだ。疑うといえば、はなはだしい侮辱になる。追い出されても文句はいえない。しかし、疑わなければ証拠を手に博沙国へ戻らねばならない。どちらにころんでも、ギスケルはここに留まれないが、彼はここにいたいらしい。
ヤエトは、その理由が知りたい。返答ができない

ところへ追い込んでもしかたがない。黙ってしまった貴族の口をほぐすべく、彼は言葉を継いだ。
「質問を変えましょう。いくらわたしが成り上がりで事情に疎くても、《赤犬公(あかいぬこう)》家が一の君を支持していることくらいは存じております。しかるに、貴殿は《赤犬公》家を名告りながら、二の君の部下だとおっしゃる。矛盾ではありませんか」
「矛盾ではない」
「それでは、筋の通る説明をしてもらいましょう。なんのために、ここに留まろうとなさるのです」
「あるじを満足させるためだ」
「貴殿は、誰のためにはたらいているのです？」
さして難しい問いでもなかろう。第二皇子のためにはたらいているという回答以外は、体面上よろしくない。実情がどうあれ、それ以外の言葉が聞けるとは思っていなかった。
それなのに、ギスケルは答えない。
――どういうことだ？
貴族はやがて、背後の騎士に視線を向けた。
「人払いくらいしないのか。気の利かん男だな」
「貴殿に殺されると主君に叱られます」
「主君？　貴様こそ、誰のためにはたらいている」
「わたしは北嶺王にお仕えしています。ご存じないとは思いませんが」
ギスケルはヤエトを凝視した。まるで、みつめれば彼の顔から嘘があぶり出せるとでもいうようだ。
それから、くり返した。
「人払いを」
ヤエトはため息をついた。
手をふると、護衛の騎士は黙って退室した。扉が閉まる音を背後に聞きながら、ヤエトは尋ねた。
「貴殿がここに留まりたい理由はなんです」
「俺がほんとうのことを教えると思うか」
「嘘をつく予定の人は、『ほんとうのことを教えると思うか』などと疑わせるところからはじめたりはしないでしょう」

ギスケルはただの馬鹿ではなさそうだが、とびぬけて使える男という風でもない。さほどの話術は持ち合わせないだろう。嘘なら、見抜いてやる。

ギスケルは暗い表情で告げた。

「神の、預言だ」

顔をしかめそうになったのをなんとか堪え、ヤエトは先をうながすようにうなずいて見せた。

ギスケルは少しだけ身を乗り出した。

「博沙国に、預言者があらわれた。我らが賊を追ってここに来たのも、そいつが預言したからだ」

「……神の言葉を預かる者が、賊の逃亡先などを示したとおっしゃるのですか？」

「俺にいうな。俺は預言者は嫌いだ」

思わぬところで意見が合いそうだ。

「それでは、二の君が預言をお信じになり、その結果、貴殿がここに寄越されたと？　しかしそれは、貴殿が来たことの説明にはなっても、留まろうとする理由にはなりませんね」

「預言はそれだけじゃない。俺はここである人物と出会うことになるそうだ。その人物こそ、沙漠の賊を一掃する力を秘める、鍵となる存在だと」

さらに声を低めて、ギスケルはつづけた。

「その人物は、俺にこう尋ねるだろう——誰のためにはたらいているのです、と」

反射的に口を押さえたくなった。ついさっき、そんなことをいった気がする。可能なら、なかったことにしたい。

「……それくらい、よくいわれる言葉なのでは？」

ギスケルはいかにも気に食わないという顔をしていたが、使命には忠実らしく、真面目に答えた。

「いわれるか、そんなもの」

まあそうだろう。仕官先がはっきりしている貴族に向かってその質問は、喧嘩を売っているととられてもしかたがない。無論、ヤエトは喧嘩を売ったのだ。喧嘩を売れば買われるだろう、そうすればなにがしかの進展は見られるだろうと踏んだからだ。

まさか、こんな方向に進むとは思わなかった。
「しかし……」
「俺の立場が胡乱であることは、皆が承知している。家が属する派閥と仕官先が違うのだ。あやしまれるさ。だから逆に、誰も問わぬ。問えば、抜き差しならぬ状況になりかねぬと計算する。賢いことだ」
つまり、それを尋ねたおまえは馬鹿だといわれているわけだ。ヤエトは肩をすくめた。
「世の中には賢者が多くて結構なことです」
「預言者は告げた。確認したければ、そちらこそ誰のためにはたらいているのかと問えばよい、と。北嶺王に仕えていると答えたら、間違いないと……その人物に出会うまで、ここを動くわけにいかなかったのだ。賊の捕縛は副使の使命に過ぎん。俺が命じられたのは、預言が告げる人物を連れ帰ることだ。公、どうか我が王にお力添えを願いたい」
言葉を終える前に、貴族は椅子から腰を落として跪いた。さっきまでの横柄さはどこへやら、成り上がり者に頭を垂れている。
ヤエトは無言だった。言葉がみつからないのだ。
――預言者が第二皇子の行動を左右した……。
信じたのだろうか。それとも、ギスケルという男を体よく追い払うために利用したのか。あるいは、半々か。それ以外に理由があるのか。
「預言者の言葉を信じるのですか」
「俺が信じるのではない。二の君がお信じになられ、俺に命じられた。命令とあらば、しかたなかろう」
素晴らしい割り切りっぷりだ。
「預言はそれだけですか」
「そうだ」
「わたしが否といえば？」
「いわせないように、俺が来た」
ギスケルは顔を上げたが、ヤエトと視線が合うといかにも嫌そうに表情を歪めた。同行してほしいのかしてほしくないのか、どっちなのだ。問えばおそらく、俺が同行を望むのではない、二の君がお望み

なのだというだけだろう。
うんざりだ。
「ひとつ、お教えしておきましょう。わたしも預言は嫌いです」
「……俺が騎士として正式に剣を佩いたとき、予祝の言葉を売りに来た者がいた。親爺が銭をけちって追い払ったら、その者が告げたのだ。騎士殿は、いずれ主家を滅ぼすことになりましょう……とな」
ギスケルは立ち上がり、ヤエトを見下ろした。
「だから、俺は預言は好かん」
「その者は、預言者だったのですか」
「知るか。どのみち、俺を雇う者はいない。親でさえ、たのむから一の君には仕官するなといった。二の君のところへ行けと」
《赤犬公》家の人間が第二皇子のところにいる事情が、まさかそんなものだったとは。
「……それで結局、貴殿は誰のためにはたらいているのです。まだ答えていただいていませんが」
「二の君にお仕えしているといっただろう。親はそのまま頑張れというが、俺はそろそろ主家を変えたい。二の君は、主君としては悪くない。滅ぼしてしまうのはどうかと思う」
ヤエトが呆然としていると、ギスケルはつまらなさそうな口調で告げた。
「貴様がおとなしく二の君のところへ行かぬのであれば、北嶺王に雇っていただく」
ぽかんと口を開けてしまいそうになるのを、なんとか堪えた。どういう脅しだ。
「左様なことは、させません」
「断りづらい紹介状を束にして持って行くさ。俺をどこかに押しつけたい奴なら、いくらでもいる。いっておくが、《赤犬公》家は無力ではない」
あまりの馬鹿らしさに、頭が痛くなりそうだ。
「やめなさい。自分の未来を自分で閉ざしてどうします。そんな呪いは忘れなさい」
「忘れられるか」

「死んだ言葉にうち負かされて、平気なのですか。あなたは生きている人間だ。日々の積み重ねが自身の未来をつくるのだと信じられなくてどうします。呪詛に囚われて、自分からその未来を現実にしようとするのは、不幸なことです。やめなさい」

「そんなに簡単に――」

「簡単だなどと、誰がいいました。だいたい、予祝の言葉を呪いに変えるなど、未来を私するおこないで、神の言葉を預かる者のなすべきこととも思えません。そんなものを信じて実現させようとしているのだと、なぜ気づかないのです」

そこまでいってから、ヤエトは額を押さえた。頭が痛くなりそうどころか、ほんとうに痛くなってきた。なんでこんな男のために怒ってやらねばならないのだ。自分の単純さに呆れる。

「――俺だって、信じたいわけではない」

「では、信じない方向でよろしく」

ギスケルは遠慮のない態度でヤエトをじろじろと眺めてから、口調をあらためて尋ねた。

「博沙国へ行ってくれるか」

即答は、できなかった。

博沙国へ行くと決めたのは、第二皇子の人物を見きわめるために必要だと考えてのことだったが、まさかこんな展開になるとは。

このまま応じれば、預言を信じたように見えてしまう。それは望ましくない。

ヤエトは厄介な使者を眺めた。荒唐無稽なことをいっているが、だから逆に嘘だと思えない。ギスケルという人物をヤエトはわずかに知るばかりだが、今の説明で、いろいろなことが腑に落ちるのだ。

その場の衝動と直感でしか動かない人間に育つには、おまえの未来はあらかじめ決められていると教え込めばよいのだな、と思う。目の前に、見事な実例が立っている。決まった明日しか訪れないなら、なにをしても無駄だと思うだろう。自分の行為がもたらす結果を、計算しようとはしないはずだ――す

べてが、すでに決まっているとなれば。
そして、一見すると愚かな、不幸な男が育つ。
「二の君のもとへ来たという預言者は、どんな人物でしたか。お会いになったことがありますか」
「女だった。長い黒髪の……悪くない身体つきをしていたな。手を出す気にはなれなかったが」
——全員が救われることは、かなわない。
黒髪の預言者の声音が、今その場で聞いてでもいるかのように耳によみがえった。西日を浴びて赤く染まった姿、恍惚としたその表情も。
——そう決まっていたのです。
預言が現実になる瞬間が、彼女にとっては至福の時間なのだろう。それは理解できた。勝手に幸せになってくれればよいと思う。
困るのは、今後の彼女の幸せに、どうやら自分が深くかかわっているらしいと推測できることだ。
「それなら、会ったことがあります」
ギスケルは笑った。
「嫌な未来でも告げられたか」
「寿命を保証してもらったような気がします」
「気がする、か。それで、返答は」
「もともと、ご挨拶に伺わねばならぬとは思っておりました。沙漠に面する博沙国と我が領は、共通の問題を抱えています。話し合いの場をもうけるとすれば、博沙王が我が領にいらっしゃるより、わたしが伺うのが当たり前。違いますか？」
「なんの話だ？」
「預言者は、実現して当然のことを口にしたに過ぎない、ということです。後押しするために、貴殿という使者まで送りださせた。罪人が我が領へ逃げこんだという餌までつけて。ここまでやって、預言とやらが実現しなかったらおかしいとは思いませんか。預言者は、はじめからわたしを狙っていた。だから、条件として『北嶺王にお仕えしている』という言葉を組み込んだ——我が領内で、北嶺王にお仕えしていると間違いなく答えるのは誰です」

ヤエトの言葉に、ギスケルは眼をしばたたいた。気もちに揺らぎが窺える。
「しかし……」
「預言者には、なんらかの能力があるのかもしれません。それは認めましょう。ただ、絶対の力だと信じる必要はない。いや、信じてはならないのです」
ギスケルは少し考えるように眼を閉じたが、すぐにまたその眼を見開いた。大きな眼だなぁ、とヤエトは思った。なんだか派手な顔だと思っていたが、眼が大きいせいだったのか。
「博沙国へ行くなら、預言者の言葉を信じさせておいた方がよかろう。そうすれば、皆がおまえを大事にする。二の君のお力になる、賓客として」
「わたしは預言が嫌いだと、申し上げたはずです。正確には、先行きを勝手に決められるのが嫌いです。さて、それではもう博沙国にお戻りください。貴殿の便宜をはかるよう、部下に申しつけましょう」
立ち上がったヤエトを、ギスケルが見上げた。
「おまえに仕えようといったら、どうする」
一瞥すると、貴族はわずかにたじろいだ。内心の冷たさが視線に滲み出てしまったようだ。これだから氷の尚書官などといわれてしまうのだろうが、年甲斐もなく世を拗ねた女癖の悪い三流貴族を、どうして自分が雇わねばならないのだ。
「お断りです。では失礼」
これ以上なにか面倒なことをいわれる前にと、ヤエトは急いで部屋を出た。廊下に控えていた騎士のひとりに、ギスケルを邸から丁重に叩き出せと命じる。そのまま、自分は代官を探しに行った。
スラジャとは中庭でばったり出会った。
「叩き出すぞ」
「ギスケル様をですか」
「ほかに誰が？」
いつもの善人面を少ししかめて、スラジャはヤエトを眺めた。
「殿様は、少し気が立っておいでのようですね」

「相性が悪いのでしょう」
「ギスケル様とですか」
じろりと睨んでも、この男には効果がない。
はいはい、と合点したようにうなずいて、彼はヤエトの腕を摑み、くるりと回して屋内に向かわせた。背がたりていれば肩を摑んだのだろうが、生憎ヤエトは無駄に背が高く、スラジャは無駄なく小柄な男なのだ。腹は少々無駄にふくれ気味だが。
「承知しました。副使様もきちんと叩き出します、ご安心を。ですから、また少しお休みください」
しかし、ここでなすがままになる気はない。ヤエトはその場に踏み止まって尋ねた。
「ジェイサルドとのつきあいは、長いのですか？」
代官は肩をすくめた。
「長いといえば、長いですね。ただ、盗賊団の主だった者たちの中では、短い方でしたよ」
「その者たちは——」
「死にましたよ」
「誰も、残っていない？」
「そうですね」
盗賊は命懸けの商売だが、それだけが理由ではないだろう。
「おまえはどうして生き延びたのです」
「危険なところへは同行しなかったからでしょうかね？　お頭は、元が盗賊だって知られてます。隠してはいますがね、知ってる者は知ってます。でも、わたしがその仲間だったことを知ってる者は滅多にいません。だからでしょう」
ぱちぱちと、いかにも無害そうに眼をしばたたいて、男は笑った。
ヤエトはじっとその顔を見た。ジェイサルドもだが、この男も嘘つきだ。だから、静かに命じた。
「嘘は禁じます」
「……殿は、困ったおかただ」
「よくいわれます。話しなさい」
スラジャは小さくため息をついた。

「仲間を売ったからですよ。お頭がアルハンに行くといって抜けてからね……皆、すっかり堕落した。昔通りじゃなくなった。一緒にいたら、いつか捕まると思いました。それで、見限ったんですよ。密告して、一網打尽です。あっけないもんでしたよ」

ヤエトは首を左右にふった。嘘くさい。

「三枚舌の異名をとるそうじゃないですか。もうひとつくらい話をでっちあげてごらんなさい」

「おお、無茶な仰せだ。そうですねぇ……じゃあ、これはどうです。先代にお会いしたのは、仲間内じゃわたしが最初だったんですよ。悪鬼に通行料を払いたいと、仲立ちを探してらしてね。常識でしたからね、通行料は。帝国のお人がというのは珍しいなと思いましたが……悪鬼の縄張りは沙漠の東側で、帝国人はそっちには滅多に行きませんでしたから」

「それで？」

つづきをうながすと、スラジャは微笑んで、昔をなつかしむような表情をした。

「小遣い稼ぎのつもりで、ふっかけましたよ。金離れのいい旦那でねぇ、言い値で払ってくれました。もっと儲けさせてもらおうと、ああだこうだつきまとってたら、いわれたんです。『これだけ払ったんだ、通行料では済まない、面会料にしろ』ってね。剣も突き付けられましたよ。しかたなく繋ぎをつけたら、お頭に向かってこうですよ。『おまえが悪鬼か。その高名を見込んで話があるのだ、ちょっと国を転覆させてみないか』……ってね」

そこでスラジャは肩をすくめ、そこから先はふたりだけでお話しでしたから、わたしは存じませんよ、といいわけがましくいった。

「生き延びた理屈の説明がないようですが」

「じゃあ一味を畳むぜ、っていって畳めるような所帯じゃなかったんですよ。お頭について行くと、即座に心を決めたのは数人でした。アルハンに仕官するといわれて、ではご一緒しますってほどおめでたい奴も、そうはいません」

「おまえは？」
「わたしは話の外ですよ。繋ぎ役で、一味と一緒に暮らしてませんからね。おまえはどうする、と訊かれもしませんでした。次の繋ぎの準備をしていた矢先、お頭が元仲間の首級を手土産に、アルハンに仕官したという噂が届きましてね。これはまずいと、急いで沙漠を出たんです。おかげで、帝国の皆さんがおいでになったときにも、死なずに済みました」
たしかに、沙漠にいれば命はなかっただろう。
「数名はお頭に同行したそうですが、主だった仲間は、同行を断ったときに全滅です。おめでたくないから生き延びて来た奴らばかりでしたからね」
「少しおめでたいくらいの方が長生きできたと？……今度は、なかなかよくできた話ですね」
「そういう教訓もありってことで。さて、舌三枚ぶんお話ししましたよ。これで勘弁してください。それにしても、なんで急にそんなことを？」
預言が気になって、とはいえなかった。
神の力が増しているなら、遠からぬ未来、ジェイサルドはみずからの名を与えた鬼神と再会することになるだろうという気がした。人ならざる者が住まうべき世界との境界が崩れれば、鬼神はかならずジェイサルドのもとへ来る。自分の名に導かれて。
昔の名を誰にも教えなかったというが、誰かが知っている可能性はないか——そんなことを考えたのだが、甘かったな、と思った。
ジェイサルドは誰にもたよらない。彼の名は、ほんとうに彼自身しか知らなかったのだろう。
「匿っていた者たちのことですが」
「はい」
「ジェイサルドは、元悪鬼だと知られています。とりあえずは彼にまかせて来ましたが、世話役には他の者をあてたいところです」
「でも、奴らにいうことを聞かせるなら、お頭が適任ですよ。今じゃそう殺しもしませんし」
ヤエトはスラジャのいかにも善人風の顔を凝視し

て、吐息を漏らした。
「そうでしょうね。人を恫喝し、支配するのはお手のものでしょう。ですが、わたしは人殺しの盗賊に仕官を許したわけではないのです」
「そんな。今さらなにを」
「今さらでもなんでもです」
スラジャは当惑したように肩をすくめ、かるく手をひろげて見せた。
「でも……わたしらは盗賊です。わたしだって、自分で手を汚したことこそありませんが、何度も手引きをしました。人殺しの仲間です」
「そうではない」
相手の言葉を断ち切ると、ヤエトは視線を上げた。中庭を囲む建物の二階の窓に、空が映っている。硝子の中の空は、いかにも窮屈そうに見えた。
「わたしがあなたがたに望むのは、未来です。人殺しの盗賊一味ではできないことをしてください。わたしに仕えるというのは、そういうことです」
スラジャはぽかんと口を開けていたが、やがて表情を引き締めて答えた。
「わかりました。ご命令とあらば、やってみましょう。ですがね、わたしらの過去から逃げられないのはわたしらだけじゃない、殿様もなんですよ」
「ええ」
ヤエトは口の中で答えた。わかっている。わかっているから、拒みたくなるのだ。
どうして人は過去に囚われるのか。まだ訪れてもいない未来を既定のものと受け入れてしまうのか。
理由はわからないが、そういうものだとは知っている。だからこそ、いっているのだ。
怨恨ほど、解消しづらいものはない。
先代が匿おうとした亡国の王たちが、容易には援助を受け入れようとしなかったのは、相手が裏切り者の一味だったせいもあるだろう。それはきっと、永遠に忘れられることがない。
今回うまくいったのは、先頭に立つのがヤエトで、

盗賊の残党でも、見るからに侵略者の帝国人風でもない上に、預言者の後押しがあったからだろう。

恨みを忘れないことで、かれらも過去に縛られている。縛られることで、未来も決してしまう。その結び目がほどけることはないだろう――わかっていても、ヤエトにはどうすることもできない。

「わかっています」

つぶやいて、彼は眼を伏せた。

預言などなくても、人は不自由だ。こんなにも。

3

日没の少し前、ヤエトは皇女の部屋を訪れた。彼の顔色を見るなり、スーリヤは追い返そうとした。

「どうかお部屋でお休みください。終わったら、お呼びいたします」

皇女はもう《天地輪》の準備に入っているらしい。

「邪魔はしない。静かにしているよ」

「ですから、お部屋でお休みくださいませ」

「時間がとれたら立ち会うと、許可はいただいてあるはずだ。聞いていないか？」

「それは……でも、お顔の色がそんなに悪くていらっしゃるのに、見過ごしたなんて知られたら、姫様に叱られてしまいます」

スーリヤも少し知恵が回るようになったらしい。断る理由に、ヤエトの主君を持ち出すとは。

「大丈夫、わたしの責任にするから」

「旦那様の責任になんて、できません」

「それは困ったな……。じゃあ、わたしの代わりに怒られてくれ」

「え」

ヤエトはにっこり笑って、スーリヤを部屋から押し出した。《天地輪》のあいだ、恩寵の力があるスーリヤが同じ部屋にいるのは却ってよくないとかで、いつも席を外しているというし、問題ないだろう。

ヤエトなら、邪魔になりようがない。過去視の恩

寵持ちである彼は、皇家の恩寵とは微塵も関係しないからだ。邪魔はしないというより、できないという方が正確だ。

「困ります、……旦那様！」

鼻先で扉を閉めるのは、少しかわいそうな気もした。だが、《天地輪》を一回はじかに見ておきたいのだ。同席して問題がないのも確認すべきだし、今を逃すともう機会がない。

皇女は部屋の奥に置かれた椅子に座っていた。ヤエトが入室したのを認めるように視線がかすかに動いたが、それだけだ。あとは、なんの反応もない。

開け放たれた窓の外、空は夕映えの赤に染まっている。まだ明るいのは日没直後だからだ。

ぎりぎりで間に合ったというところか。

ヤエトは呼吸をととのえ、竜気にあてられないように祈りながら部屋の隅に座ると、皇女の様子を観察した。

一見したところ、皇女は黙って座っているだけのようだが、それは見かけ上のことだ。全身を、光が駆け巡っている。とくに明るいのは額で、まるで星が宿っているかのようだ。

よく見ると、皇女の身体を包む光の流れは、少しずつ違う色味を帯びているのがわかる。明るさも、違う。すべての流れを縒りあわせるようにまとめている光が、もっとも目立っていた。無色に近いが、かなり明るい。

――第二皇子かな。

全体を制御しているのが第二皇子なら、それでもおかしくない。皇女の光も、なんとなくわかった。そんなに明るくはないが、あたたかみのある光をはなっている。第三皇子の光も見分けられればと思ったが、これは無理のようだ――強さを感じる光のどれかには違いないのだが。第三皇子は、皇帝の伝達官を乗っ取り、遠隔操作で北嶺の朝議を支配することまでやってのけた。彼に与えられた恩寵の力が、弱いはずがない。

皇妹が覗き見をしているくらいのことは覚悟していたが、それもなさそうだ。彼女ほどの力なら、あきらかにそれとわかるだろう。

光の流れは明るくなったり暗くなったり、そして速くなったり遅くなったりしている。すべてが同調しているのではないから、それぞれの発言に呼応して、そういう反応が見えるのかもしれない。

当初、皇女を示すと思われる光は安定した光量でゆっくり流れていたが、次第に明滅をくり返し、速さも変化を見せるようになった。

——第二皇子を弁護しているんだな。

光が一斉にまたたくこともあり、議事の進行はあまり統制がとれているとはいえないようだ。第二皇子らしい光はかなりしっかりと全体を支えていたが、ひょっとすると、それで精一杯なのかもしれない。議論に積極的に参加しているようには、あまり見えなかった。光の正体に関しての憶測が当たっているかどうかはともかく、それぞれの光には個性が感じられ、興味深い。

もっと早く、こうすべきだった。そうすれば、皇女に協力を仰いで、いろんなことを試せた。

——いや、まだ終わったわけではない。

これからも《天地輪》はつづくのだ。観察の正確性を高める時間はある。

おそらく、彼以外の者は皇家の恩寵をこうして視覚的に把握することはできないのだろう。それができるなら、とっくに話題になっているはずだ。

先祖はどんな契約をしたのだろうか。

古王国が帝国にみずからを差し出して、併呑（へいどん）されるに至るまでの歴史的経過は淡白なもので、史書の記述もあっさりしている。国家としての主権は主張せず、争わず、すべてを譲り渡す——非破壊と非暴力、生命をはじめとする財産の保証、そして平等の確保がおもな条件だったはずだ。

それ以外に、ヤエトの一族だけが皇帝とかわした約束が、あったはずなのだ。

彼が知るのは、子どもの頃の記憶に刻まれた悪夢の向こう、虜囚となった先祖が語る言葉だけだ。

——陛下と陛下のご一族は、我が一族を守り育ててくださるお約束です。わたしの忠誠と、この力とを捧げるのと引き換えに。

これでは解釈に幅があり過ぎる。こんな曖昧な言葉ではなく、もっと厳密な契約があったに違いないのだが……恩寵の力が薄れるにつれ、契約があったこと自体が忘れられて久しいのだろう。

誰も、知らなかった。

窓の向こうの空は明るさを失い、夕映えの紅ばかりが濃く、深くなっていく。その空を背景に、端座したまま動かない皇女の姿はかがやきを増し、この世ならざる存在であるかに思われた。

——神の力だ。

唐突に、そう思った。

人が持ってはならない。神の力だ。それが強まっているのは、人の世に危機が迫っているからだ。

——血と悲鳴、死と破壊、絶望の朝。

考え過ぎだと思おうとした。そう思いたいだけなのか、そう思うべきなのか、それで正解なのか間違っているのか……。

惑いながら、彼は待った。

皇女の全身から潮が引くように光が消えて、小さな身体がいつもよりさらに小さく見え、その肩が大きく上下したのを見て、彼は静かに立ち上がった。扉を開け、外で待っていたスーリヤにうなずく。

「終わりました」

「灯火を……」

「わたしがやります。王にお話があります」

火種を受け取って部屋に戻ろうとする、その袖をとられた。

「あの、……お茶をお持ちします。いつも、そうするのです。終わった後は、身体が冷えていらして……ですから、熱いのをお持ちします。旦那様にも」

ヤエトが微笑むと、スーリヤもはにかんだような

笑みを見せて一礼した。裾をさばいて早足に廊下を去る後ろ姿を見送ってから、誰も入れるなと衛士に念を押し、扉を閉じた。

灯火を手にしてみると、室内の暗さはいや増した。壁にある灯り受けに火を入れ、小卓に燭台を置く。揺れる炎の光を受けても、皇女の貌は白い。彼は自分の上着を脱ぎ、少女の肩にかけた。

「……ヤエトか」

「はい」

「部屋にいたのは、知っていたぞ」

「恐れ入ります……脈をおとりしても？」

皇女は眼をしばたたき、その言葉でようやく現実に戻って来たとでもいうように、顔を上げてヤエトを見た。

「かまわぬが」

「では、失礼つかまつります」

床に膝をつき、手首に指を回す。

——遅い。

尋常でないほど、脈の間隔が遠い。《天地輪》の最中には、これがもっと遅くなるのかもしれない。いや、《天地輪》に限ったことではない、竜種の恩寵の力を行使するそのたび、かれらはこうして脈を遅くし、心臓を眠らせるのだ。

——まるで死のうとしているようだ。

指の腹で脈を探りながら、ヤエトは祈りたい気分になった。恩寵の力が負担になるのは、なにも自分ばかりではない。神の力は人の身には過ぎたものなのだ。歳の割に小柄な妹を、兄皇子たちは気遣ってくれているだろうか。

外から、スーリヤの声が聞こえた。

「お茶をお持ちしました」

返事を待たずに、扉が開く。スーリヤは部屋に入りかけて立ち止まり、案じるように尋ねた。

「お加減が……？」

どう見えただろう、とヤエトは思った。ヤエトが具合を悪くして、皇女の足もとに座りこんだと勘違

いしてもおかしくない。
だが、皇女は自分のことと考えたようだ。
「大事ない。茶はそこへ置け」
「はい。なにか、ご用はございませんか」
今度はヤエトが答えた。
「いや、いい。退がりなさい。呼ぶまでは、誰も入れぬように」
「かしこまりました」
彼が皇女の手をはなして立ち上がるあいだに、スーリヤは慎ましくお辞儀をして扉を閉めていた。
皇女はヤエトを見上げて尋ねた。
「なぜ急に、脈など？」
「お顔の色がつねならず、案じられましたので」
「そなたにいわれてもな……」
苦笑混じりに座れと命じられ、ヤエトは小卓を挟んで皇女と差し向いになった。見たことのない菓子が、かわいらしい意匠の皿に盛られている。香草茶は火傷しそうなほど熱い。こんなに熱しては香りが飛びかねないのに、うまく残っているのが不思議だ。
「早速で申しわけありませんが、ご首尾を」
「二の兄上は、わたしのことを疑っておいでのようだ。お手助けすると申し上げても、あまりお心を動かされたようではなかった」
ヤエトは茶碗をふうふう吹く息を止め、顔を上げた。はっきりした拒絶ではないだけに、うまく受け止めかねているのだろう。皇女の表情は暗い。
第二皇子の反応は、ヤエトにとっては予測の内だ。急に助力を申し出られて、あやしまない方がおかしい。あまり接点のない兄妹なのだから。しかし、無碍に断ることもできないはずだ。
「断られはしなかったのでしょう？」
「うん」
「上首尾です。《天地輪》ではどうでした？」
萎れているときの皇女は、ひどく幼く見える。つい、励ますような口調になってしまった。
「いつものごとくだ。二の兄上が、沙漠に跋扈する

賊の討伐を口実に兵を集め、叛乱を狙っていると示唆されたので、わたしは割って入った。北嶺の相である《黒狼公》は、博沙国と境を接する領地を治めているが、同じく盗賊の害に苦しんでいる、と。兵を集めるのはゆえのないことではない、《黒狼公》は今後、博沙国と連係してことに当たりたいと報告して来た、とな。これでよかったのか？」

「はい」

「だが……」

皇女は俯いていた顔を上げた。くちびるを、尖らせている。

「如何なさいました？」

「そなたは臆病者ゆえ、過剰に怯えているのだろうといわれた」

ヤエトは眼をしばたたいた。皇女は気を悪くしているようだ。

——なんだ。そんなことで萎れているのか。

「弁護してくださったのですね」

「そなたが臆病者だなど、北嶺の者は誰も信じぬ」

「そうでもないと思いますが」

「淡々と冷静に他人事のように申すな！」

「努力します」

皇女は大きく息を吐いた。

「とにかく。そなたの申した通りにしたぞ。二の兄上には、《黒狼公》がそちらをお訪ねすると申し上げた。あまり歓迎してくださる風でもなかったが」

「王はこちらにお留まりになりますか？」

「まさか！　わたしも行く」

ヤエトは用心深く茶を啜ってから指摘した。

「その程度のことでお気もちを乱しておられるようでは、お連れできません」

「その程度とはなんだ……そなたは勇敢だぞ。不当に見下されるいわれはなかろう」

よくいわれるのは、無駄にという表現が上にくっついてのことだが、まぁ、それはいい。

「庇ってくださるのは光栄に存じますが、皇家の皆

様は、ご自身を尚武官の上等なものとお思いになりこそすれ、上級の尚書官とはお考えにはなりますまい。わたしが尚書官である以上、勇気がない、戦にも行かず刃も交えず危険も知らずといわれるのは、当たり前のことなのです」

聞いている皇女の顔が、だんだん歪んでいく。泣かれると困るが、まさかこれで泣きはしないだろう。いや、どうだろうか。皇女の考えることはともかく、感じることはどうもわからない。

「ヤエト」

「はい」

「淡々と、冷静に、他人事のように申すなと、命じたばかりだぞ」

「申しわけありません」

「そなたはもう少し誇りを持て」

少し迷ったが、口論の時間がもったいなかったので、万能の返答を採択した。

「御意」

楽なのは結構だが、楽をしたのがまるわかりなのが困る。皇女はいかにも不服そうな顔だ。ヤエトは急いで話の鉾先を逸らした。

「ところで、王は外交の基本をどうお考えですか」

臣下の名誉が問題になるのは、そういう局面においてだ。皇女がヤエトの名誉を気にするなら、こちらの問題をより深く理解してくれねば困る。

「わたしは……兄上たちのように、政治を学ばせてもらったわけではないから」

「正解をお聞かせ願いたいのではありません。王がどうお考えかを、お教えいただきたいのです」

「はなから間違うと決めてかかったようなことを」

「学ばずに偶然得た正解に、価値はございません。あれかこれかと思い惑われてこその学問です」

ため息とともに皇女は答えた。

「平衡をとること、だと思う」

いきなり、悪くない回答が出てきた。

「慧眼でいらっしゃいます」

「……学ばずに正解を口にしても駄目だと、聞かされたばかりだぞ」
「いいえ。王は、ご自分で学ばれたのでしょう。ご立派なことです」
皇宮で、少女は耳を澄ましていたのだろう。小娘の存在など気にも留めずに喋る者が多いといっていたから、耳学問には悪くない環境だったわけだ。
皇女も褒められて表情をゆるめたところに、ヤエトはすかさず次の問いを投げた。
「平衡をとるために必要なことがなにか、おわかりになりますか？」
「それは……そうだな、よく知ること、かな」
「正確な情報の入手は重要な大前提です」
その流通速度が速いからこそ、皇家は強い。そして、次に強みを持つのは北嶺となった。しかし、情報があればよいというものではない。情報が有用なのは、あくまで正しい判断の役に立つからだ。
「その前提でどう動くかと問われれば……それはそのときに応じて、としかわたしには考えられぬ」
「外交の基本とは、孤立を避けることです」
「孤立……」
「孤立すれば、よってたかって叩き潰されてもおかしくはありません。そうなったときに、助けを求める相手もいないことになります。孤高を気取るのは下策と申せましょう」
「なるほど。隊商双六と同じことだな。はじめに勝ち過ぎるのも、孤立のようなものか」
「はい。今、孤立なさっておいでなのは？」
「それは、二の兄上だが……」
まだ釈然としない表情の皇女に少し考えさせておいて、ヤエトは茶を啜った。ようやく、ちょうどよい熱さになった。
「兄君たちが争われるのを、王はお望みではないはず。平衡をとるための近道は、王が進んで二の君と結ばれることです」
皇女の表情に、理解の色がひろがった。

「二の兄上おひとりにお味方するように見えて、その実、そうではないということか」
「御意にございます。この騒ぎがうまくかたづいた暁には、北嶺は各種紛争のお手助けをする準備があると、大いに喧伝なさればよろしいでしょう」
「しかし……」
「なにか、お気がかりなことが？」
「それでは、昔を辿るだけではないか。かつての北嶺が国ごと傭兵団となったのは、輸出できるものがそれ以外にはなかったからと、そなたが申したのだぞ。民の命を商材にせよと申しておるのか？」
聡いのも考えものだ。ヤエトはため息を押し殺し、皇女の眼をまっすぐに見て答えた。
「ほかに、売れるものがございますか」
「探せばなにかあるだろう」
「均衡状態が崩れるのが力のせいであれば、それを押し戻すのも力。北嶺が素の状態で持ち得る力とは、経済力でも政治力でもない。軍事力でしかあり得ません。これは、北嶺という土地の宿命です。王が悩みになる必要はございません。皇女殿下以外の誰が上に立つ者であっても、同じことです」
「違う」
皇女は断言し、負けずに見返してきた。
「違う、とは？」
「わたしが行ったから、三の兄上は北嶺に注目なさった。与し易いと、北方蛮族を煽った。だから、鳥を飛ばさねばならなくなった。鳥が飛ばねば、北嶺には軍事力もなかった」
「軍事力があることをお喜びになるべきです」
「しかし――」
「王よ、心得ていただかねばならぬことがございます。すべての考察に先立つ、大原則です」
「なんだ」
「人は、愚かな生き物だということです」
皇女は黙っていた。
うなずきもしないが否定もせず、無心で彼の言葉

を受け止めようとしているように見えた。
「……戦はあらゆるものを消費し、破壊します。誰も得などしません。すぐれた戦士を育てるために必要な経費がどれほどのものか、おわかりですか？それを浪費するなど、あってはならぬこと。戦は高い。命のやりとりとは、とてつもなく高価なものなのです。少しの見返りではとても割に合いません。なのに世に戦が絶えることがないのは、なぜか。それは、人が愚かな生き物だからなのです」
皇女は眉根を寄せて考えていたが、やがて尋ねた。
「しかし、戦で国を手に入れたり、地位や金品を勝ち取ったりするではないか」
「戦によって権力や利得を得たと勘違いする者はいるでしょうが、左様な暴力で勝ち得たものは、早晩失われると決まっております」
「そうか？」
「その者の一生が尽きる前に失われることがなければ、幸運というべきでしょう。遅くとも、死して後、裁きはくだります。偶像は破壊され、一族は粛正され、追従を口にしていた者たちも、自分は関係ないと青ざめて逃げていく。歴史が教えております」
「魂が救われぬとは、申さぬのか」
ヤエトは肩をすくめた。
「魂の問題は、わたしの関知するところではございません。力不足で申しわけありませんが、お教えできるのは歴史の語る事実だけです」
「生きているあいだだけでも、贅沢できればよいという者もいるだろうがな」
「愚かだからでしょう」
「……なるほど」
「人は、とても愚かなのです。だから、放っておいても戦がなくなるなど、期待はできません。であれば、進んで介入するしかないのです。そこで必要になるのが外交の力。軍事力は、その材料とお考えくださればよいでしょう。鳥の機動力を背景にした軍事力なくして、北嶺に外交的価値はございません」

皇女は眼を伏せた。暫しの沈黙の後、ヤエトに向けた眼差しには、一抹のせつなさが滲んでいた。
「空にも、自由はないのだな」
「はい」
「人の心にだけ、許されるのか」
ヤエトは微笑した。それは去年、彼が教えたことだ。あのとき、それでは嫌だと皇女は反論した。心の中に自由があっても意味がない、と。
「わたしはそう心得ております」
皇女は小さく息を吐いた。
「そなたのいわんとすることは理解したと思う。二の兄上を、今の状態からお救いせねばならぬ。それにあたって、せいぜい翼ある騎士団の威力を見せつけるがよいと、そういうことだろう?」
「御意にございます」
「我が北嶺の力を、大きめに見積もらせるのだな」
ヤエトはうなずいた。
皇女は彼を見てため息をついた。
「やるべきことは、わかった。しかし、二の兄上を困らせている賊の大元は、あの沙漠の叛逆者たちなのだろう? もう解決したも同然ではないのか」
「そうとばかりも申せぬのです。博沙国を襲っている賊は、別の系統ではないかと考えております」
「ああ……そうか。けっこうな距離だしな」
第二皇子が治める博沙国と《黒狼公》領は、たしかに境を接してはいる。だが、それぞれが荒漠と広がる無人地帯を抱えているのだ。
「流れて来た者の話によれば、博沙国では沙漠の民への警戒が強まるあまり、取り締まりの名を借りての暴行や金品の強奪が起き、暮らすには物騒になったとか。流民は増えるばかりです。先代が匿っていた王族は、かれらとは関係がなさそうです。博沙国で起きている凶事の糸を引いているのは、別の誰かであると考えるべきでしょう」
「では、戦いにはなるのだな」
「おそらく。避けられる限りは避けますが。わたし

は臆病者の尚書官ですゆえ」
「馬鹿を申せ」
皇女は笑ってとりあわない。ヤエトは咳払いをひとつしてから、言葉をつづけた。
「一応、ご注意申し上げておきます」
「うん？　なんだ」
「目立つことで、北嶺もまた孤立する可能性はございます」
「だからなんだ」
「ですから……ご覚悟をと」
「兄上たちが殺しあわれるのを看過できぬだろうと申したのはそなただぞ。できぬことは、できぬ。ならば、できることをやるしかなかろう」
「なにかお考えでもおありなのですか？」
「わたしに考えが？　もの知らずの小娘は、ものを考える頭など持たぬものだそうだぞ」
肩からすべり落ちたヤエトの上着を膝の上に拾い上げ、皇女は笑みを含んだままの顔を彼に向けた。
「孤立するどころか、相手にされぬ。女の考えなど、耳を貸すだけ時間の無駄だそうな」
——よほどいじめられたな、これは。
名告って第二皇子を庇ったことを、気概のある行為とは見てもらえなかったのだ。臆病な側近に唆された、愚かな小娘という扱いを受けたのだろう。皇女の性格では、我慢のならない状況だったはずだ。
「申しわけありません」
下げた頭を元に戻すと、皇女と視線が合った。一瞬、皇帝を思いだしてぎょっとした——眼が笑っていないのだ。かなり怒っている。対象が自分ではないとわかっていても、うっかり魂が抜けてしまいそうだ。いや、むしろ抜けたい。巻き込まれたくない。
眼差しはそのまま、ほがらかに皇女は告げた。
「謝ることはない。それをひっくり返すのだぞ、これから。胸が躍るではないか」

4

ルーギンが元気な鳥を連れてやって来たのは、その翌日だった。落ち合ったのは、いつかタルキンがみつけた場所である。

事前に予告した公式訪問なのだから、邸に人を揃えて堂々と出て行ってもよかったのだが、あの邸は鳥を使うための設計ではない。中庭からは飛び立ちづらいし、露台に詰めるにも限界がある。ルーギン以外に、随行する騎士は六名。最小限の作戦行動はとれる数を確保しつつ、滞在が長引いて入れ替え制になっても大丈夫なように調整してくれと依頼したところ、出てきたのがこの人数だった。

本来はもっと数を揃えたいらしいが、鳥不足はどうしようもない。

「若いのも、多少は使えるようになったかな」

つまり、鳥の発情期がだいたい終わったということだ。それなら皇女も北嶺に戻れるのではないか、と提案しかけたが、時間の無駄なのでやめた。

当の皇女は、鳥たちに挨拶をする、と鳥の群れの中に入って行ってしまった。今は巨大な嘴だの翼だのに囲まれて、至福の表情である。

ああしていると年相応の女の子だという気もするし、貴族の娘が巨鳥に囲まれてあんな顔をするかという疑念も生じる。つまり、変な光景ではある。

「王はお忍びですので……わたし付きの従者ということにします、表向きは」

「あの調子なら、誰も疑わないでしょう」

皇女が甘やかされたじゃじゃ馬だとは伝わっているだろうが、それ以上のことは、兄たちも大して知らないだろう。進んで粗末な服に身を包み、鳥の糞を運んだりするとは誰も思わないはずだ。

実のところ、糞運びはやめてもらいたいのだが、鳥に乗る者は全員が厩舎長に躾けられていて、せっかくの糞を無駄にしないよう、集めて乾燥させる癖がついている。倹約は美徳とはいえ、皇女にそんなことをさせたと皇帝に知れたら、首が飛びそうだ。

「伝達官を装っていただくことも考えたのですが」
「とんでもない！ 紫の肩衣を騙るなんて」
「……と、叱られたので、諦めました」
皇女にも、同じことをいわれた。伝達官の恰好をしていれば下にも置かぬもてなしが期待でき、いろいろと助かるのだが……。ヤエトはため息をつき、ルーギンはうっすらと笑った。
「相変わらず苦労が尽きないという顔だ」
「北嶺の方は、どうです」
うーん、とルーギンは首をかしげた。
「いつも通りのような、そうでないような……。とにかく混乱してるね。厩舎長が熟慮の末に決定した繁殖計画が、ほとんどなりゆきまかせの鳥まかせになってしまったそうだし」
大量に名前が並んだ一覧表を思いだしたついでに、その組み合わせに異論を唱えたり希望を述べたりといった輩を相手にした時期の記憶までよみがえってしまい、ヤエトはなんともいえない気分になった。自分にいわれてもわからない、と厩舎長に丸投げしてもまた誰かが同じようなことを訴えに来たものだが……あの苦労が、実を結ばなかったとは。
「村の再建も、あまり進んでいない。やはり、鳥の数が少な過ぎるからだろうね」
「その上、《黒狼公》がやたらと鳥を呼び出すし……ですか？」
ルーギンは、にやりと笑った。
「その通り。使える鳥は増えても、やらねばならないことは、それ以上の量だ。ああそうだ、氷はね、売り物になるようなのを作るのに、ぎりぎり間に合うそうですよ。氷室の大きさにも余裕があるし、たっぷり保管できるんじゃないかな」
「それはよかった」
売り物になるのは軍事力だけだと皇女には伝えたが、材料は多いほどいい。
「それで思いだした。ナグウィンから伝言が」
「なんです？」

「氷を専売させてくれと」
「あとで考えましょう。高値で売れる時期はまだ先でしょうし、急ぐ必要はありません」
答えてから、ヤエトは眉根を寄せた。行商人のナグウィンは、したたかな人物だ。この要求には、なにか裏があるに違いない。
馬車でのろのろと山道を運んでは、氷が溶けてしまう。一瞬で長距離を移動する方法もあるにはあるが、あれを商売に使うことが許されているとは思えない。ひょっとすると、商売の話ではないのだろうか……輸送に使うという名目で、鳥の貸し出しを狙っているのかも。それも、ありそうだ。
「ヤエト、エイギルを呼んだのか？」
鳥たちのあいだから戻って来た皇女が、北東の空を顎で示した。なにも見えない……と思う。
「いいえ」
視線を向けられ、ルーギンも首を左右にふった。
「わたしも、なにも聞いていませんが」
「そうか。だが、来るぞ」
皇女の言葉通り、ほどなく鳥が到着したが、乗っていたのはエイギルだけではなかった。
「どういうことだ」
詰問したのはルーギンだ。エイギルは膝をつき、頭を垂れた。
「この者が、どうしてもと申すので……」
その背後に、同乗者が立っていた。銀の髪に若葉の眸は特徴的で、見忘れようがない——泉の守護者と名告った青年だ。
「無理をいったのは、わたしだ。彼に罪はない」
こんな会話を最近したばかりのような気がする、と思いながらヤエトはちらりと皇女を見た。向こうも同じことを考えていたようで、視線が合うと、すぐに逸らされてしまった。
——やれやれ。
「なんのご用でしょう」
ヤエトを見ると、青年は腰に佩いていた長い剣を

剣帯からはずして砂の上に横たえ、跪拝した。恭順の姿勢は結構だが、大袈裟だ。

「どうかわたしもお連れください」

「行き先を教えたのか」

ルーギンの問いはエイギルに向けられたものだが、エイギルの否定より、青年が答える方が早かった。

「しるべの星の導きです」

「しるべの星？」

怪訝そうに問い返した皇女に、ヤエトは手を小さくふった。この青年には、皇女の面は割れていない。従者のふりをはじめるなら、今からだ。

皇女は察したらしく、顔を伏せて後ろに下がった。

「しるべの星とはなんです」

ルーギンの問いには、ヤエトが答えた。

「沙漠の民を率いている預言者の呼び名です。……なにか、預言があったのですか」

「公が沙漠へ向かわれる、とだけ」

それからどうなる、こうなる、という指定はないようだ。ヤエトはほっとした。

「なるほど。それで？」

「お役に立ちに参りました。沙漠へ行かれるのなら、沙漠の民をお連れになるべきと」

沙漠へ行くわけではない、博沙国へ行くのだ……と答えかけて、ヤエトは躊躇した。彼がどういっても、この青年の中ではもう決まったことだ。ヤエトは沙漠へ行く——預言者が、そう告げたのだから。

青年は頭を下げたまま、熱心に言葉を継いだ。

「公が蒙られるのが不利益ばかりではないことを、かならず実証してご覧に入れます」

「剣なら、たりているが？」

ルーギンが口を挟むと、青年は平然と答えた。

「剣で斬れるものばかりが敵ではない」

ルーギンは曖昧な笑みを浮かべて首をかしげた。剣で斬れないものが出てくるのか、と訊いているようだ。知るか、といいたい。ヤエトは肩をすくめて無言の問いを受け流し、現実的な提案をした。

「少し、ふたりで話させてくれませんか」
「武器を取り上げてもよければ」
青年は背中に挟んだ短刀も鞘ごと抜くと、長剣と一緒に剣帯を巻きつけてまとめ、さっとルーギンに放った。ルーギンはそれを受け止め、エイギルに顎をしゃくって命じた。
「あらためろ」
青年に侮辱を与えているように感じて謝罪したくなったが、我慢した。これは自分のための措置だ。ヤエトがそれを罪といえば、騎士の立場がない。
身体検査が終わり、騎士たちが声の聞こえない距離に下がると、ヤエトは青年の前に腰を下ろした。
「名を、訊いても？」
「ファルバーン」
躊躇がない。こうまで潔いと、却って対処に困る。
「あなたは、アルハンの生き残りなのでは？」
「はい」
これも即答である。
世が世なら、王太子殿下……いや、アルハンの王だ。ジェイサルドが沙漠の民を匿っていることを白状したとき、アルハンの最後の王妃と王子が含まれている、といっていたのを、ヤエトは忘れていない。天幕で、青年は母の名代として参加したと口にした。母というのが、元王妃に違いない。
それと、泉の守護者という彼の呼び名だ。
沙漠の都市国家は、どこも例外なく水場のまわりに発展した。だが、その中でも質量ともに豊富な水に恵まれたことで有名だったのが、アルハンだ。
踏み潰した都市国家の名などいちいち覚えていないという帝国貴族たちも、アルハンまでは忘れまい。沙漠の東端に近いからでもあり、激戦地だったからでもあり……降将のジェイサルドがその勇猛果敢な戦ぶりで名高いからでもあるだろうが、なにより、豊富な水の恵みを享受した場所だからだ。
皆が存分に喉をうるおし、身体を洗い、たっぷり汲んだ。そして、毒を入れて立ち去ったのだ。

年格好から見て、この王子はアルハンの滅亡を覚えていないのかもしれない。故国が滅びたのは、生まれたての赤子か、自分の足で歩くのがやっとの幼児だったくらいの頃なのではないか。

「なぜ、同行しようと？」

「公に恩ばかり受けるのでは、気が済まないので」

「恩、と受け取ってくださいますか」

脅迫されたと思う者もいるだろう。その覚悟はあった——実際、仕掛けたのは向こうが先とはいえ、従わない者を殺しているのだし。

「はい。公は、我らの恩人と心得ます」

ファルバーンは迷わない。迷うのはヤエトの方だ。

「立ち入った質問になりますが……清浄神の恩寵を、賜っていますか」

青年はうなずいた。

「おそらく」

「……おそらく？」

「母は……清浄神の恩寵を維持するためには、汚穢（おわい）にふれてはならないと。たとえば、服も一回着たらそれきりだったとか。王宮では、そのように暮らしていたそうです。でも、今はとても——」

ファルバーンは自分の姿を見下ろした。薄汚れた着衣に、あちこち擦り切れた皮の長靴。それを恥じている様子ではないことに、好感が持てた。王族として生まれても、その意識に凝り固まっていない。柔軟に、今の人生に対応しようとしている。

「安心しました」

「……は？」

「袖を通した服を、二度は着ない……などといわれたら、わたしの財力では養えないかと」

「ああ……」

拍子抜けしたような顔をしている青年に、ヤエトはさらに突っ込んだ質問をした。

「具体的には、なにができるのです」

「水の浄化です。どんな泥水でも、清水に変えてご覧に入れます。沙漠に行かれるのでしたら、きっと

重宝なさるでしょう」
　勢いよく売り込まれ、ヤエトは苦笑した。
「素晴らしい。でも、そのことは知られない方がよい。誰かにいいましたか？」
「いいえ。その……今まで、母以外とあまり長時間、話したことが、なくて」
「預言者は？」
「しるべの星とは、まだ出会ってから二十日ほどです。あのかたは不思議なかただから……母も心を許して、話をしたくらいですし」
「なるほど」
　――汚穢を嫌っているのだろうな。
　元王妃は昔の生活や意識を捨てきれないだろう。彼女にとって、世界は汚穢のかたまりだ。その彼女が息子以外と話をするのは、きっと大事件だ。
「しかし、なぜ明かしてはいけないのですか？」
　――皇帝が怖がるからさ。
　心中では即答したが、そのまま答えるわけにもいかない。真上皇帝がなにより怖がっているのは、沙漠の向こうに置いてきた兄だ。血の呪縛だ。すべてを引きちぎるために、彼は沙漠を踏破し、隊商都市を滅ぼし尽くした。誰も通れぬよう、水源に猛毒まで入れた。せめて自分が死ぬまでは追手がかからぬようにとの、時間稼ぎにほかならない。
　その水をきれいにしてしまう男がいると知ったら、皇帝はどうするだろう？
「昔、全智の神から失せもの探しの恩寵を賜った男がいたのですよ。沙漠の西にあった、小さな国に。今から三百年ほど前の話です」
　面食らっている青年にかまわず、ヤエトは話をつづけた。
「人が手に入れたことのあるものなら、男はなんでもみつけました。ちりぢりになっていても、壊れていても。くだらない玩具から高価な宝石まで、誰のものでもみつけました。男の評判は国中に、いや国境を越えてどこまでも広がり、数多の人々にすがら



れ、声が嗄れるまで答えつづけたそうです。やがて彼は、ある国の王から呼び出されたといいます」

亡国の王子に、ヤエトがしてやれるのは、恩寵持ちとしての心得を教えることくらいだ。

「王は、男に命じました。若さを見つけよ、と。男はそれを王の過ぎ去りし日々の中に見、そのように答えました。王は怒り、衛兵に男を殺せと命じました。すると男はいったのです。ありがたい、ようやく自由になれる——恩寵の力は神の力。人の世にあっては強力過ぎる毒ともなり、恩寵の使い手を滅ぼすことさえあるのです」

たとえば、北嶺人に鳥と心を繋ぐなと命じても、無理な話だろう。皇家の人々もそうだ。伝達官に、職務を捨てろとはいえない。それはすでに、あって当然のものと認識された、この世のものだ。

アルハンの王家に与えられた恩寵も、アルハンという国が存続している限り、隠すべきものではなかったかもしれない。だが、今は駄目だ。

「なにも危険など」

「皇帝に呼び出されても、誰もあなたを庇えない。息果てるまで浄化の力を使わされないとは、限らないのです。わたしは、できない約束はしませんよ。それに……他所者がいうことではないでしょうが、伝え聞いたところでは、清浄神の恩寵が与えられたのは、邪竜に穢された水を浄めるためだとか。人の力では浄化し得ぬ汚穢を拭い去る、神与の力であり、恵みではありませんか。かるがるしく使ったり、喧伝したりするものではないとわたしは思います」

ファルバーンは真面目な顔でヤエトの言葉を聞いていたが、やがて意を決したように告げた。

「心得ました。仰せのように」

「そうしてください。その——」

ヤエトは少し迷った。ファルバーンが不審げに見返すので、迷いを晴らさぬまま言葉にした。

「——邪竜の穢れを浄化しない状態が、あの戦からずっとつづいていると考えてよいのですか。それに

よって、なにか深刻な影響があったりは？」
　一族を本来あるべき場所から追い出しておいて、それをいうのか、と反論されても無理はない。しかし、青年は短く答えた。
「はい」
　また、これだ。いっそ反論してほしい。
「影響があるとしたら、どのような？」
「アルハンは、沙漠の地下を流れる水脈の根源。穢れは沙漠を満たします。ターンの神殿跡の水場も、すでに穢れが及び……力の及ぶ限りは浄化しましたが、また徐々に汚染が進むでしょう」
　では、この青年と母親をアルハンに戻さねばならない。ヤエトの考えが読めたのだろう、ファルバーンは静かに首を左右にふった。
「我らはもうアルハンには戻れません」
「なぜ？」
「王族として、守らねばならなかった場所です。それを守りきれず、生き延びたのです。民に素性を知られれば、かならず死ねと罵倒されました。……母とわたしには、生きていてもよい場所がない。公は、それを与えてくださった」
　過大評価である。ヤエトにそんな意図はない。先代から押しつけられた案件を、ろくな申し送りもなく、吟味の時間もなく、ただ引き取っただけだ。
　しかし、ファルバーンは真剣だった。
「同道を、お許しください」
　ヤエトは少し迷った。世慣れてはいないだろうが、沙漠のことは詳しいはずだ。悪天候への対処など、皇女の騎士団は即応できないかもしれない。役に立つ機会はあるはずだ。
　なにより、清浄神の恩寵に興味があった。浄めの力を失ったアルハンがどうなっているか、この機会に確認したい。対応が必要となれば、この青年の力にすがるしかないのだ。
「もうひとつだけ、確認してもよいですか」
「はい」

「しるべの星は、なんの預言も与えなかったのですか、あなたには？」
「今回は、ただ公が沙漠に向かわれると……それだけ、わたしに教えてくださいました」
「今回は？　それ以外に、預言を受けたことは」
会ってから二十日程度という言葉を思いだして先をうながすと、青年はうなずいて答えた。
「はじめてお会いしたときに、わたしを戦士とお呼びくださいました。救い主のために戦う者、と」
好奇心のおもむくまま質問をするのは、これを限りにやめるべきだ、とヤエトは強く思った。
どうしても、あの預言者に踊らされているような気分が拭えない。神のお告げだからと、すべて諦めることができればよいのだが。
「わたしは、預言者のなさりようを好みません」
青年は心の底からおどろいたという顔をした。
「なぜです」
「確固とした未来への道があって、歩くも歩かないも自分の自由にならない。そういう状況が、好きではないからでしょうね」
「しかし、神のお告げに逆らうことは」
「できないでしょう。だから告げずにいてほしいのです。神ならぬ身で知るべきではない未来を、あのかたは容易に口になさる。それが困る」
砂を払いながら立ち上がると、ヤエトはルーギンに声をかけた。
「連れて行きます。同乗できる騎士がいるか、様子を見てください」
ルーギンはうなずいて、部下を呼んだ。そして、遅れて立ち上がった青年に、預かっていた剣を差し出した。沙漠の民らしく、反りのついた曲刀だ。
「よい剣だ」
青年は無言で受け取ると、彼を連れに来た騎士に従って歩み去った。エイギルが同乗して来るくらいだから大丈夫だろうが、鳥との相性だけは、人の都合で調節できない。

「エイギルはもう帰しても？」
「あの青年を乗せてくれる鳥がみつかれば。ここに置いて行くわけにはいきません。元王族です」
ルーギンは顔をしかめて上品に不快を表現すると、青年の方を見て首をかしげた。
「若いな。故国を覚えていないんじゃないか」
「母親とふたりだけ、生き残ったそうです」
「それはそれは。恨み言をたっぷり聞かされて育っていそうだ。気をつけないと」
「そんな風には見えませんでしたが」
「先生は善良な人ですからね」
「無駄に？」
「そう。わたしは無駄に邪悪な血を引いているので、なんでも疑ってしまうのかな」
「この場合、疑う方が正しいことだと思います」
「たまに、もっと善良になりたいと思うことがありますよ。ああ、鳥が決まったようだ。エイギル、帰っていいぞ。……いや待て、公にお渡しするものがあるといっていなかったか？」
副団長は一礼して進み出、懐から紙包みを出した。
「これを、交替の騎士より言付かって参りました」
「なんです」
「ナオ殿からだそうです。いよいよ昏倒できないというときに、お使いくださいと。つまり……治すための薬ではなく、倒れないための薬だと」
受け取ろうとしたヤエトの指先は風をつまんだだけで、肝心の紙包みはルーギンに攫われていた。
「これは従者に渡しておいた方がよいでしょう。本人に使わせると、きっと毎日服用します」
さっと手をひらめかせた先には、皇女がぬかりなく待ち構えていた。遅滞なく、紙包みはその懐中へと消えた。
「エイギル様、ナオ様にお伝えください。治療のための薬をお願いしたはずですが、と」
従者ごっこがお気に召したらしい。丁寧な口調で話す皇女に、エイギルも調子をあわせた。

「症状がわからねば処方できぬと断られたそうだ」
「けちくさいことを……」
そういう問題ではないと思う。皇女が勝手にヤエトに薬を処方させようとしていたことは、叱るべきだろうか。いや、ありがたがるべきなのだろう。
「とにかく、よろしくお伝えください」
ヤエトの言葉に、エイギルは心得ましたとうなずき、踵を返した。彼は、今夜にも北嶺に戻るはずだ。いかに身体が資本の頑健な騎士たちでも、休暇が必要だろうと考えていると、袖を引かれた。
皇女だ。
「呼び名を決めておいた方がよい」
「は？」
「わたしの名だ。王とか姫様とか呼ぶわけにはいかんだろう」
「チビでいいでしょう」
ルーギンがあっさり口にしたとたん、皇女の機嫌が急降下した。なにもいわないが、表情でわかる。
たしかに、ヤエトもルーギンも背が高いので、あいだに挟まると皇女はよけいに小さく見える。
「嫌だ」
「僭越だぞ、チビ。鳥を用意しろ。すぐに発つ」
ひらひらと手をふって自分の鳥の方に歩き出したルーギンは、あからさまに今の状況を楽しんでいる。皇女はむっとしたが、大声で反論するわけにもいかず、押し黙って鳥の方に向かった。
ヤエトは皇女と同乗することになっている。皇女のクラルは卵を抱いているとかで、今回かれらを乗せるのは若い雄だ。いかにも気が荒そうだったが、皇女がひと睨みすると、おとなしく足を畳んで腰を落とした。なんとなく鳥に同情したい気分だ。
「騎乗！」
ルーギンの号令一下、騎士たちは鳥に飛び乗った。また隊列を組むのだろうが、どうせヤエトと皇女の鳥は最後尾のはずだ。
ヤエトが鞍に落ち着くのを待って鳥を立たせると、

皇女もその背に乗った。ファルバーンを同乗させる騎士も後方に位置することになるらしく、鳥を下がらせている。

「出立！」

何度経験しても、飛翔の瞬間は魔法のようだ。足の下で鳥の筋肉がしなり、翼がひろがる。たちまち風を孕み、舞い上がる——これが魔法でなくて、なんだというのだろう。

これだけは、例の元同僚に感謝せねばならないかもしれない。都の尚書局にいたら、鳥に乗ることもなかっただろう。ルーギンとの再会も、皇女との出会いもなく、面倒な預言にもかかわらずに済んだはずだが……預言だけは、どこにいても追って来たかもしれないと思う。

未来視は、過去視と対になる力だ。ふたつの力は分かちがたく、その引力を逃れるすべはない。

——皇家や北嶺の恩寵にも、対になる力はあるのだろうか。

心が繋がる力の反対は、心を遠ざける力だろうか。なんとなく、しっくりこない。かならず対になる力があるという学説自体が、あやまりなのか。

眼下に広がる沙漠は、陽光を受けてときに銀色に、あるいは黄金にかがやいている。数多の死を呑みこみ、邪竜の骸を隠しているとは思えないほど美しい。

「ヤエト」

「はい、なんでしょう」

「チビと呼んでも返事はせぬからな」

まだその話か。ヤエトは苦笑して答えた。

「心得ました」

「その……わたしの背は伸びると思うか？」

こういうときは親族の身長が参考になるものだが、皇女の父である皇帝には、とくに背が高い、あるいは低いという印象を抱いたことはない。皇女と同母の第三皇子も同様だ。だが、正確なところはわからない。立ち位置の高さが違ったり、相手が座っていたりして、まともに比較できたことがないからだ。

「なんとも申し上げかねます。お母上は、背は？」
「……低かったのだ」
　地の底から響くような声である。まさか皇女が背丈を気にしているとは思わなかった。なんと答えるべきか少し悩んだが、なにも皇女につきあって本気で懊悩することもあるまいと、思いついたことをそのまま口にした。
「一般に、女性は小柄な方が好かれるそうですが、王はお喜びにならないでしょうね」
「なんだ、その、わたしが変わり者みたいな……」
「変わり者でいらっしゃらないのであれば、お喜びください」
「背が伸びないと決めたように申すのは、やめよ」
「御意」
　これで終わりにしてくれるほど、皇女は甘くない。少し間を置いて、話はつづいた。
「……そなたはどうしてそのように、にょきにょきと背が高くなったのだ」
「無駄に、でございますか」
「無駄かどうかはわからんが」
「持ち運ぶときに邪魔だそうです、背が高いと」
「持ち運ぶ……」
「一般に、女性の方が抱え上げられる機会も多そうです。やはり小柄な方がよろしいのでは？　そう申し上げても、お喜びいただけるとは思えませんが」
「喜ばせるための言葉は、好かん」
「なるほど」
「誰かを喜ばせるために、背が低かったり高かったりしたいわけでもない。わたしが、その……背丈がもう少しほしいだけなのだ」
「左様でございますか」
「だいたい、そなたは持ち運ばれ過ぎだ」
　べつに持ち運ばれたくてそうしているわけではないのだが、たしかに、運ばれ過ぎだとは思う。
「御意にございます」
「わたしはそなたを持ち運んだことがないが」

「お手をお貸しいただいたことは、ございます。畏れ多いことです」
「背が伸びたら、わたしもそなたを運んでみたい」
「体重が増加せぬよう、気をつけます」
「多少なら太ってもかまわんぞ。力もつける」
話がどんどん変な方向へ進んでいる気がする。いや、気のせいではないだろう。いくらヤエトが男子としての尊厳に疎い男であっても、半分以下の歳の少女に、いつか運んでみたいと思われるのは、なにかが間違っていると考えざるを得ない。
「寛大なお言葉ですが、王よ」
「なんだ？」
「王のような地位にあられるかたは、ご自分で人を持ち運ぶといったことがあってはなりません。それは部下に命じてなすべきことです」
「つまらんことを申すな」
「人生には、つまらぬことが多うございます」
「わたしの人生は楽しいことばかりだぞ」
「それはなにより。ですが、わたしを持ち運んだかたがたがその作業を楽しまれたという話は、寡聞にして耳にしたことがありません」
「……それもそうか」
思いのほかすんなり引き下がったと安堵したとたん、ふり向かれた。
「なにか？」
「持ち運ぶのは、そなたの加減が悪いときだからな。誰も楽しみはせぬだろう」
なるほど、とヤエトは思った。実に論理的だ。
「ご賢察です」
「わたしが逗留しているあいだは、倒れておらぬようだな。このあたりの気候が合っているのか？」
「季節がよいのでしょう」
冬の北嶺や残暑の都に比べたら、どこだって楽園のようなものだ。
そうか、とつぶやいて皇女はまた前を向いた。隊列を組んで飛ぶといっても、わずかに八羽。いつぞ

や北嶺から都へ向かったときに比べると、ずいぶん寂しく、たよりない眺めではある。

よく晴れた空には雲ひとつなく、沙漠は微風にうねっているように見える。美しいが単調で、あまり長く飛ぶと寝てしまいそうだ。

「それにしても……《黒狼公》領は、なかなかよい土地ではないか。美しいところだ」

「お褒めいただき光栄です」

「沙漠も、たまに飛ぶだけならよいが……やはり、緑がないのは寂しいものだな」

「北嶺にも、もっと緑をお望みですか」

大木がなく、氷雪に鎖される期間が長い北嶺は、皇女の好みではなさそうだと考えていると、もっと現実的かつ為政者らしい答が返った。

「うん。そうしたら、食料の自給も困難でなくなるだろうに」

またしても、なるほど、とヤエトは思った。どうも、今日の皇女は血の巡りがよいらしい。

「御意にございます」

それから暫し、皇女は無言だった。沈黙を破ったのは、ヤエトである。

「《天地輪》ですが、鳥たちもさまたげになるでしょうか？」

恩寵の力がある者が同室するだけで、不安定になるのだ。鳥も、影響をおよぼすかもしれない。

だが、皇女は事態をかるく見ているようだ。

「大丈夫ではないかな。北嶺にいたあいだ、《天地輪》で困ったことはなかったぞ」

「最上層のお部屋でしたら、厩舎からはずいぶん距離があります。今回は、うまく場所がとれるかわかりません」

「まさか賓客を厩舎の近くに泊まらせはすまい」

「鳥が、ふつうの厩舎に入れられるでしょうか？敷地のどこかに天幕を張って、ということになるかもしれません。鳥たちを落ち着かせるためにも、一緒に寝泊まりした方が――」

「あのな、ヤエト。そなたは四大公家の当主なのだぞ……そろそろ、そのあたりをわきまえよ。鳥が天幕に入れられるなら、騎士たちの誰かが番をする。だがな、そなたは違う。仮にも《黒狼公》を、鳥と一緒に天幕に泊めましたなど……あり得ぬ」

呆れたようにいって、皇女はまた、ヤエトをふり返った。そして、笑った。

「おかしいでしょうか」

「うん。愉快だ」

「楽しんでいただけたようで、幸いです。……では、《天地輪》には通常通りご参加いただけるものと考えましょう。王はわたしの従者ということになりますから、わたしの部屋をお使いになればよいですね。控えのつづき部屋があれば、なおよいのですが」

「要求すればよい」

「……なるほど」

今日の皇女は冴えに冴えている。

「従者が歯ぎしりをするので、つづき部屋がないと困るとでも申せ。誰だったか忘れたが、将軍の誰かがそうやって部屋をもぎ取っていた」

「歯ぎしり……ですか？」

「鼾の方がよければ、それでもかまわぬぞ」

「寝言にしておきましょう」

ヤエトとしては気をつかったつもりだったのだが、皇女はふんと鼻を鳴らした。

「ぬるいな。とにかく、鳥は《天地輪》のさまたげにはならぬはずだ。鳥に乗ったまま参加したときも、とくに支障は――」

部下に思いださせたくないことに言及してしまったと、皇女は途中で気づいたらしい。声が低くなり、結びの言葉もなく途切れた。まあよい、先例があるなら鳥の心配はせずに済む。結構なことだ。

だが、皇女と同室で寝るわけにはいかない。つづき部屋は、絶対に確保せねばならないのだ。これは危ない、とヤエトは冷や汗をかいた。自分で自分を危地に叩き込むところだ。皇女と同じ部屋で寝たな

どと、皇帝に知れたら今度こそ命がない。
「とにかく……《天地輪》ですが、わたしが博沙国へ発ったことは、包み隠さずにお話しください。伝達官を同道していないことになっているので、発った、というところで抑えてくださいますよう」
「わかっておる」
「それと……少し危険ですが、揺さぶりをかけてみようかと思います」
「なに？」
「三の君のお姿を、さる大貴族の邸で見かけたという噂があると《天地輪》でおっしゃってください」
皇女の顔から、一瞬、表情が消えた。
「事実だな」
「事実です」
それを視たせいで、ヤエトは倒れた。皇女もそのことを知っている。嘘ではないと信じているはず。
「三の兄上も、孤立なさっておいでなのだろうな」
皇女のつぶやきに、ヤエトは答えなかった。
たしかに第三皇子は孤立している。誰よりもだ。もとより貴族の支持もなく、後継者争いの有力候補とはいいがたかったが、あの新年祭ではっきりした。皇帝の寵がないどころか、疎まれているといってもいい措置だ。その上、仲が良かったはずの同母の皇女にも、別れを意味する花を送られている。
「宮廷で、力をつけておいでとは……聞いたが」
それも事実だ。皇家の中では孤立している。有力貴族にも縁がない。だから、宮廷に目をつけた。かわいそうな若様という役を演じて、女性の同情心に付け込んでいる。女性は馬鹿にならない情報源だ。愚かであっても噂は握っているし、聡明ならば、夫や息子を動かすくらいの芸当はやってのける。
帝国貴族に生まれても、女性というだけで政治の表舞台には立てない。抑圧されている不平等感を意識させれば、心強い味方のできあがりだ。
当然、第三皇子はそこを狙っているだろう。虐げられた者に、彼は敏感だ。仲間内ですら忌避され、

恐怖される呪師を味方につけた彼なら、貴婦人たちを引き入れるくらい、たやすいことだ。ミアーシャからの報告のはしばしに、その徴候が見えていた。

不満や不安を正確に見抜き、強者に搾取されることへ疑念を抱かせる。それ自体は、悪いことではない——彼が、おのれの野望の達成のために、すべてを利用する心づもりなのでさえなければ。

——危険な人物だ。

第三皇子については、皇女がなにを望もうと関係ない。とことん孤立させる。

「はっきりさせましょう」

それだけ、ヤエトは告げた。

血縁よりも部下をとる、ヤエトを信じると皇女は何度も約束してくれた。それは貴重な、ありがたいことだが、いざというとき、皇女はほんとうに慣れ親しんだ兄を見捨てることができるのか。

第三皇子を刺激して、例の光のどれが彼なのかを見きわめたいという欲もあったが、それ以上に、皇女に覚悟を決めさせたかった。

——そんなことをせずに済めばよかったが……。

日に照り映える皇女の金髪を見下ろして、ヤエトはそっと息を吐いた。

——覚悟が必要なのは、自分の方かもしれない。

皇女に兄よりも自分を選ばせて、後悔しないだろうか。そうすべきという確信は、あるのか？

あと何年、自分は生きられるのだろう。

保証します、という預言者の声を思いだし、彼は眼を閉じた。自分がもっと生きるかもしれないというのは、馴染まない仮定だった。とうに死んでいるはずなのに生きていて、いつ死んでもおかしくないと考えつづけて来たことを、今さら自覚する。

——死にたくないと思うことは、恥ではない。

皇女にあれだけいわれても、まだ眼が覚めていないようだ。自分が死にたくないのかどうかすら、よくわからない。

暫し、彼はぼんやりとそれについて考えていたが、

ふと、そんな場合ではないと気がついた。次に皇女と内密に話せるのがいつか、わかったものではないのだ。今のうちに話しておくべきことがある。

「しるべの星は……」

つぶやいた声が嗄れているのにおどろいて、彼は咳払いをした。思ったより長く無言でいたようだ。

「失礼しました。しるべの星、つまり沙漠の預言者ですが、彼女はあの遺跡に暮らしていた一族の末裔らしいのです。太陽神にして予言する神、未来を告げる神。ターンの神の恩寵を与えられし者です」

皇女はふり向いた。

「未来？　まさか」

「騙りではないと思います。古王国の……わたしの恩寵と対になる力です。その力の源泉たる神も、対になる存在です。ですから、わかります」

「それで？」

探るように、皇女はヤエトの表情を窺っている。その視線から逃れたくて、彼は眼を閉じた。

「いつかお話ししたことを、ご記憶でいらっしゃいますか。わたしが都で幻視した、昔の言葉です。沙漠を軍旅が渡り、魔物が世界に姿をあらわす、と」

「覚えておる」

「戦いの備えをなせ、と預言者は皆に命じました。その日は近い、猶予はない、と。そのときは、帝国との戦いかと疑ったのですが、預言者はわたしへの服従を皆に指示していたくらいです。叛逆の狙いはないでしょう。その日は近いというのは、ひょっとすると……そちらにかかわる言葉なのでは、と」

「なにやらの封じがゆるんだ、というような話だったな、たしか」

「はい」

ヤエト、と皇女は彼の名を呼んだ。しかたなく目蓋を上げると、紫色の眼が間近に見えた。迷いのない色だ、と思う。

「相変わらず、そなたはわたしに話していないことがたくさんあるのだな」

「まことに」
「あのな。また命じてやらねばならぬのか？　もっと、わたしをたよれ。……それで、そなたはどうしたい。兄上のことなど放っておいて、その預言者とやらを問いつめに行きたいのではないか」
「わかりません」
思わず、本音で答えていた。
気にはなる。確認したいとも思う。だが、確実な未来を手渡されるのは嫌だ。かかわりたくない。なまじ相手の力を信じられるから困る。
「そなたがわからぬというのも、珍しいな」
「腑甲斐ないことで申しわけありません。それより、お話ししておくべきことが」
「まだあるのか？」
「本題を、後回しにしてしまいました。どうやら預言者は、二の君のところにも姿をあらわしていたようなのです」
皇女は呆れたような顔をした。
「神出鬼没だな」
「同一人物かどうか、確認はとれていません。ただ、二の君の正使によれば、彼が我が領に遣わされたのは、沙漠の賊を討伐するにはある人物の協力が必要だと、預言者が二の君に告げたからだ、と」
「そなたか」
「どうも、そのようです」
「なら、迷うことはないな」
「……は？」
「その者は確実な未来を視るのであろう？　恩寵の力で嘘はつけぬのだから、これから行く先で、我らは成功するのだ。それに預言者自身が認めていることだ、その女を問いつめに行くのも後回しでかまわぬのだろう。つまり、猶予はないといっても、そこまで急ぐ必要はないということだ」
皇女はヤエトを見た。口調はかるいが、視線でわかる。彼を案じてくれているのだ。
強張っていた顔が、勝手にゆるんだ。まったく、

この少女にはかなわない。
「王は……」
「うん？」
「慧眼でいらっしゃいます」
「そうか。もっと褒めてよいぞ。そうだ、その預言者とやらのところに行くときには、わたしも連れて行け。よいな？」
ヤエトがうなずくのを認めてから、皇女は前に向き直った。
だが、と彼は思った——預言者と話すときが来れば、自分はひとりで行くような気がした。それが、正しいふるまいであると感じられた。
かれらは互いの影のようなものなのだ。出会えば、どちらかが光のあたる主体となり、もう一方がその足もとに落ちる影となる。それが必然だ。
救い主、と彼女は彼を呼んだ。あなたに従いますと宣言した。だが、彼女の方が影の立場になるとは、どうしても思えない。
今の積み重ねが過去となり、それが未来を変え得るとヤエトは考えてきた。だが、絶対に実現するとわかっている未来が視えているなら、話は別だ。
過去はつねに、約束された未来の後に従うだけの影となるだろう。

第



章

1

「形式ばった挨拶はいらぬ」

それが、第二皇子の第一声だった。

肩の長さに切り揃えた髪はまっすぐで、癖がない。皇女や皇妹、第三皇子といった巻き毛一族を見慣れていたせいか、なんとなく不思議な感じだ。真上皇帝も、豪華な巻き毛の持ち主だったはずだし——と考えて、ああそうか、とヤエトは納得した。

——こんなところにも、実は皇家のお血筋ではないのかも、という噂の種子があるわけか。

背は高い。上背は父皇帝よりあるだろう。今年で二十三歳、とうに妻を迎えていてもおかしくない年齢だが、まだ独身だと聞いている。

親族が黙ってはいないだろうに、と思いながらヤエトは皇子を見上げた。膝をついて礼をとったところ、いきなり挨拶不要といわれたのだが、このまま立ってもよいのだろうか？

少し迷ったが、結局は立ち上がり、両手を組んで一礼した。このへんで妥協してもらいたい。

「このたびは、急な来訪をこころよく受け入れてくださり、ありがとう存じます」

「卑賊の根絶ができぬばかりに、そちらにまで苦労をかけることになった。腑甲斐ないことである」

「その賊の討伐にご助勢したく存じます。我が王より北嶺の兵を借り受けて参りました」

話の進めかたがいささか性急かとは思ったが、第二皇子は気分を害した風もなく答えた。

「北嶺の翼ある騎士団が来てくれたとなれば千人力と、部下たちも喜んでおる。こちらも早速だが、今夜にでも討伐の具体策について話がしたい。しかし、今は《天地輪》を控え、気ぜわしい。それを終えたら会食としよう。それまで旅の疲れを癒してほしい」

「心得ました」

第二皇子は先に退室した。案内役を仰せつかったらしい男がさりげなく進み出て、こちらへ、と別の出口を示す。ヤエトとルーギン、鳥の番をしている二名を除いた北嶺の騎士四名と従者扱いの皇女、それにファルバーンが無言で後に従った。

「《黒狼公》様、《金獅子公》家のルーギン様は、主閣にお部屋をご用意いたしました。それ以外のかたがたは、騎士の宿舎に部屋をあけてございます」

主閣というのは、砦の中心にある建物のことだ。

第二皇子の居城は、草木も生えない岩山のあいだに横たわる、巨大な迷路のような建造物だ。元からこの場所にあった関所に大規模な改築をほどこし、今の形になったのは、ここ十年ほどのあいだのことだと聞いた。

――やはり、皇帝は沙漠を恐れている。

そう感じてしまう。無人に近いはずの沙漠に、本来ならここまでの防備は必要ない。

「二名ずつ、交替で鳥の世話をする。厩舎にも、寝具の用意をたのむ」

ルーギンの要求に、男はうなずいた。

「万事、仰せの通りにせよとの御命を賜っております。お食事も、そちらにお運びした方が？」

「そうしてくれ」

「かしこまりました。長旅で、さぞお疲れでしょう。蒸し風呂のご用意がございます、是非お使いください。あるじの心尽くしです」

ルーギンとヤエトは同室……といってよいのか、四部屋ものつづき部屋をあてがわれた。これこそ無駄に豪華、というものだ。外観の素っ気なさからは想像できないほど、調度品の質は高い。隊商都市が栄えていた頃の遺物であろう。今では稀少な沙漠産の細工物が、ずらりと並んでいる。

床に敷かれた厚地の絨毯も、特殊な織り機で熟練の工人が何年もかけて織ったというふれこみで売られるような品だ。しかも、その織り機も工人も、すでにこの世には存在しない。踏むのがためらわれて

入口で立ち止まっているヤエトにはかまわず、ルーギンは室内をあらためはじめた。同行していたファルバーンが、如才なく手助けをする。

「慣れたものだな」

皇女が声をかけると、ファルバーンは答えた。

「母が神経質なのだ」

なるほど、穢れに敏感な親と暮らすのだから、まめに気を配るようになっても不思議はない。

「わたしたちが風呂を使っているあいだ、ふたりともこの部屋を出ないように」

ヤエトの言葉を、すかさずルーギンが混ぜ返した。

「そこのチビが攫われないようにしろ、としっかり命じないと」

皇女の機嫌は、また急降下した。ファルバーンに問うように見られ、ヤエトはうなずいた。

「たのみます」

チビを、と口にしたら楽しそうな気もしたが、自分の年齢と立場を考えて我慢した。

皇女をファルバーンにまかせるのは不安だが、心尽くしとまで念を押されたのだ、入浴は命令に近い。鳥臭いのをなんとかしろということだろう。

風呂も、豪勢なつくりだった。みごとな彫刻が並び、はっきりいって、落ち着かない。出てくる汗も冷や汗が半分ではないかと思う。

蒸気にあてられ、ころがされ、召使いに身体を拭かれ。人にさわられるのは好かないが、拒否できる状況ではない。砂を含んでざりざりいっていた髪も、きれいに洗い流された。ヤエトはともかく、ルーギンの長い髪は扱いが大変そうだ。視線が合うと、騎士はやわらかな声で眠そうに告げた。

「公は、もう少し太った方がいいですね」

細長いことは自覚しているが、べつにこうなりたくてなっているわけではない。

「太らないと、我が王とお約束しましたので」

眠そうだった眼が、ぱっちりと開いた。

「なんでまた……」



「あなたのせいですよ」
もうよいと召使いを退け、湯着の上に上着をかさねて浴場を出た。湿った前髪を引っ張りながら、切らねばなぁと思う。湯着の襟がじっとり濡れているのは、髪が伸び過ぎている証拠だろう。
少し湯あたりしたのかもしれず、ふらふらと廊下を歩いていると、ルーギンが追いついて来た。
「なにが、わたしのせいなんです」
なんの話だと返しかけたが、すぐに思いだした。
「あなたがたが、わたしを不用意に持ち運ぶからです。一回はご自分も持ち運んでみたいものだと仰せになったので、では太らないようにします、と」
「……わけがわからない」
「わたしもです。それより、部屋へ戻れるか不安になっているのですが」
「大丈夫です。わたしは一回通った道は忘れません。しかし、持ち運ぶなら、先生が姫様をでしょう」
「わたしは皇女殿下を持ち運びたいなどという畏れ多い考えは持ちませんので」
「いや、是非持つべきです。どんどん鍛えてください。健康になれば倒れなくなるし、いいかも？」
なにがいいかも、だ。身体を鍛えようとして運動すれば、そのままひっくり返るに決まっている。
「もうひとつ、あなたのせいでさせられた約束があったことを思いだしましたよ」
「なんです？」
「鳥です。太らなければ同乗させてやると」
「……ああ！　でも、奴はそんなこと忘れてます。いい奴だけど馬鹿だから」
「密告しましょうか、あの鳥に」
ルーギンは楽しげに答えた。
「先生は鳥と心が繋がらないじゃないですか」
「いざとなったら、王にお願いして伝言します」
「汚いですよ、権力を笠に着て」
「では厩舎長に伝言をたのみましょう」
「厩舎長こそ、北嶺の影の権力者じゃないですか」

馬鹿なことを喋っているあいだに部屋に着いた。廊下は迷路のようで、ルーギンがいなければ、案内を断った自分の無謀を悔いることになっただろう。

部屋に入ったとたん、召使いが飲み物と着替えを運んで来た。着替えは従者に手伝わせるからと召使いを追い出し、ヤエトはきれいに畳まれた布のかたまりを持ち上げた。着用せねば非礼にあたるだろう。びらびらっと広がったのは、どう見ても袖だ。どこまでいっても、これからは逃れられないらしい。

「荷物に着替えを入れなくてもよかったかな」

「よほど鳥臭かったのでしょう、我々が」

皇女が、自分の袖を嗅いだ。

「なにも臭わんぞ」

さりげなくファルバーンも同じ動作をしているのに気づいて吹き出しそうになったが、堪えた。

ふと窓の外を見れば、もう日没が近い。ヤエトは皇女に近寄ると、小声で告げた。

「そろそろ時間です。狭い方が集中しやすくてよいでしょう。あちらの控えの部屋をお使いください」

「そなたは？」

「着替えてから参ります」

ルーギンが、おい、とファルバーンに声をかけた。

「帝国騎士の従者の心得を教えてやる。来い」

横柄な態度をとると決めたときのルーギンは、徹底している。ファルバーンはむっとしたようだったが、すぐに表情を消し、隣室へと移動した。

皇女が低い声でつぶやいた。

「あの男は恩寵持ちだな」

ヤエトはぎょっとした。話したか？　いや、自分は話していない。本人が話すとも思えない。

「なぜ、おわかりに？」

「《天地輪》の準備で気を練っておるとな、人の心にふれるような感がある。つねなら、わからぬ。自分の伝達官以外は感じぬのだ。恩寵の力が特別に強くとも——たとえば叔母上などでさえ、存在を感じることはない。《天地輪》では逆に、身近にいる竜種に

過敏になってしまうのだが……そなたやあの男は、それらとはまったく違う風に感じられる」
「どのような」
つい好奇心に駆られて尋ねると、皇女は上目遣いに彼を見た。
「聳える壁といえば、わたしの感じたものに近かろう。こちらの気を通さぬのだ、そなたらは」
そういえば、とヤエトは思いだした。伝達官にも似たようなことをいわれた。まるで壁のようだ、と。
「ご不便をおかけしてはいませんか」
「確固として動かざるものがあるというのは、悪くないぞ。あの者には、おどろかされたがな。あると思わぬ場所に壁があれば、誰でもそうだ」
「左様でございますか」
答えながら、ヤエトは皇女の言葉の意味を噛み締めていた。ファルバーンが恩寵持ちと発覚した、という方ではない。恩寵持ちがそこにいると、皇女以外の竜種にも知られてしまいかねない。その可能性を、今、突き付けられたのだ。
――そんなにはっきりと、わかるものなのか。
別の神の恩寵の力が壁として感じられるのは、神の恩寵は一種類しか享けることができず、竜種の恩寵の力は心と心を繋ぎあわせるからだろう。理屈はわかるが、想像もしていなかった。
皇女は恩寵の力が強い方ではない。そして、第二皇子は皇子たちの中ではもっとも恩寵の力が強いと聞いた。彼なら、ヤエトの存在を感知してしまうのでは。《黒狼公》が恩寵持ちだと――。
「ヤエト」
呼ばれて、はっとした。時間がない。
「くだらぬ話につきあわせてしまい、申しわけありませんでした。どうぞ、ご準備を」
「《天地輪》でもなければ気がつかぬ。大丈夫だ」
見上げる皇女の眼差しに気遣いを感じ、ヤエトは自分が情けなくなった。
「……まったく、王のおっしゃる通りです」

「なにがだ？」
「たかだか二十二年やそこら先に生まれたからといって、威張る理由にはならないということです」
「無理はするな。まずいと思うなら、わたしに呼ばれたとでもいって、北嶺へ逃れればよい」
皇女は彼を怯えさせるものの正体を知っている。
恩寵持ちだと知られることへの恐れは、ヤエトの人生を縛る鎖のようなものだ。死すら、そこから逃れる窮極の脱出口に思えるほどの恐怖だ。
だが、足下にある穴の前で、いつまでも立ち竦んではいられない。乗り越えると決めたのだ。
「万が一、あやしまれることがあっても、なんとでも申し開きはできるはず。お信じください。わたしも、我が王を信じます」
「……わかった」
皇女はこの《天地輪》で、第三皇子を攻撃せねばならない。そういう約束だ。
十数年、一族の中でもっとも親しく時を過ごし、誰よりも信用していたはずの兄を、裏切らされるのだ。何百年もの昔の記憶や、ありもしない未来に怯えている部下を気遣うどころではないだろうに。
ヤエトは皇女を奥の部屋に押し込むと、自分はルーギンが移動した方の部屋を覗いた。そちらも調度は華美で、落ち着かない。
ルーギンはといえば、豪勢な椅子にゆったりと身を預けていた。水色の地に金糸の縫い取りをした服は、あつらえたように似合っている。新年祭で着ていたものに優るとも劣らない品だ。第二皇子の財源は潤沢だと、誇示されているのだろうか。
「奥の部屋を使います。邪魔が入らないように見張ってもらえますか」
「おまかせを。おや、まだ着替えていないのですか。湯冷めしますよ。おい、お手伝いしろ」
ファルバーンは顎で使われるのに辟易しているようだったが、それでもヤエトを椅子に座らせると、手巾で髪を拭きはじめた。

ヤエトに用意されていた服は、やたら布の分量が多くて、どこが袖口なのかわからないとか、重みで肩が凝りそうだとかいう、地味だが切実な問題を抱えていた。濃紺の長衣に白い上着の組み合わせというのも嬉しくない。逆の方が、汚れが目立たなくてよいのに。立ち居振る舞いの試験を受ける心境だ。

これも高価そうな姿見を、ファルバーンがヤエトの前に置いた。動かしやすいように、脚部を折り畳んで運べるつくりだ。それでも素材は金物だから、重さはあるだろう——などと鏡の枠の外のことばかり考えているのは、あまり自分を見たくないからだ。見慣れない装束を纏った姿は、滑稽とか似合わないとかいう印象を超えて、他人のようにしか感じられない。これが、周囲が見る自分なのか、と思う。なんだか妙な生き物だ。

手を動かし、袖がどれくらい広がるのかを確かめていると、ルーギンが口を開いた。

「この者を、会食の席にも連れて行きましょう。あっちの従者を同行するより、よさそうです。二の君の幕僚には、高位の貴族も多い。長時間同席すれば、部下同士もお互いを眺めるものです」

なるほど、と思った。宮廷に出入りしていれば、主従ともに皇女を見覚えている可能性は高い。しかし、従者をともなわないのも不自然だ。ファルバーンを連れて行くのが順当だろう。

「しかし、……君はかまわないのか？」

名を明かしてもよいのかわからず、目線だけ合わせて尋ねると、ファルバーンはうなずいた。

「行きます。軍議なら、お役に立ちます」

「勝手に口を開くなよ」

ルーギンがすかさず口を挟み、青年の顔をしかめさせた。騎士は厳しい口調で言葉をつづけた。

「今ではない。会食の席での話だ」

「沙漠のことなら、わたしの方が——」

「わきまえろ。ここに駐留しているかれらとて、沙漠に無知ではない。それがひとつ。もうひとつは、

おまえが貴族の会話に口を挟むのは、非礼であるということだ。だから、気づいたことがあったら、わたしの耳にささやけ」

豪勢な椅子に身を沈めたまま、ルーギンはいつものように胡散臭い笑顔をヤエトに向けた。

「それでよろしいですね、公」

「将軍は――」

はじめてかもしれない、と思いながらヤエトはルーギンの役職名を口にした。なんだか妙な気分だ。

「――そこの者を、買っておられるのですか？」

「買うか買わないかを決めるには、真価を見る必要があるでしょう。知恵があるかどうかはまだ見ていない。それは、これから……かな」

口をつぐんで佇立するファルバーンを見上げて、値踏みをするようなことをいう。だが、青年は表情も変えない。ルーギンはこういう人物だと割り切ることにしたらしい。

「忍耐力は買ってあげてください」

「先生は、ちょっと基準が低い。北嶺人に慣れ過ぎたかな。奴らに忍耐の二文字はないからね」

そうかもしれない。セルクが同じ扱いを受けたら、そのへんに置いてある、一般庶民が一生かかっても稼ぎだせないような値がつくであろう置き物だの家具だのを投げ飛ばし、厩舎に走って行って鳥に乗るなり、勝手に北嶺に帰還するに違いない。

そしてたぶん、途中で反省して戻って来る。

ついでにいうと、戻って来なければよかったのに、と思われることになるだろう。

「否定はできませんね。しかし、彼の意見を聞けるのは心強いでしょう。軍事において、わたしは役に立ちません。なにも期待しないでください」

ルーギンはにっこりしたが、では期待しません、とはいわなかった。あくまでヤエトにさぼらせないつもりのようだ。

ヤエトはファルバーンに視線を向けた。

「正体を見破られる心配はありませんか」

「……今まで、わたしの本来の生まれをはっきりさせたことはありませんでした。あの天幕の日だけです、母以外の誰かを前に、自分の生まれを推測されるような言動をしたのは」

青年の口調は抑制が効いていたが、その底には、強い感情が秘められているようだ。

汚穢に怯える母親とふたり、身の上を隠して、二十年近くを生き抜いてきたのだ。厳しい日々だったことは、想像にかたくない。

緊張しても無理はないと同情し、感心もしながら、しかしヤエトの思考は別の方向へただよっていた。

あの日、全員が初対面だったとも思えないが、それに近い状態の者が多かったのではないか。それをまとめたのが、あの預言者だったのだ——彼女はそれぞれを訪ねて自分を認めさせ、そして告げたのか。全員が助かることは、かなわないのだと。

あのとき感じた正体不明の恐れ、人ではないものにふれてしまったような違和感がよみがえり、背筋にぞくりと寒気がはしった。

ヤエトは無理に自分を現実に引き戻した。

「そうだったのですか。少しも気づきませんでした。とても、堂々としていましたよ」

「自分では、心臓が破裂するのではないかと。……とにかく、わたしの生まれを知る者は、このあたりにはいないでしょう」

「外見上の特徴で発覚する、ということは？」

尋ねたのはルーギンだ。とたんにファルバーンの口調がぞんざいになる。

「この髪の色は、王族特有のものではない」

「眼は？」

「……緑が濃いのは、珍しいと思う」

「伏し目がちにしておくのだな」

さらりと解決策を提示して、ルーギンはヤエトを見た。

「案ずるほどのこともなさそうですね。二の君の幕僚に沙漠の民が多いとは思えません。帝国貴族ばか

りに決まっています。それより、あっちを放っておいても、いいのかな？」

よくない。急いでヤエトは控えの間に向かった。

狭い……といっても、かるく運動ができる程度の広さはある。ただし、従者のためと用途が決まっているせいだろう、調度は簡素だ。飾りのない小振りの寝台と棚、それに大きな物入れ。敷物は寝台の足下に円形のがひとつ、窓は小さくて硝子がない。内開きの戸の向こうには、鉄製の柵がはまっている。

「遅い。万が一にも誰かが入って来られぬよう、その物入れを扉の前に動かす。手伝え」

謝ったり反対したりする隙はなかった。

ふたりは力を合わせ、物入れを動かした。皇女が息をはずませているのに気づき、大丈夫だろうか、と心配になる。恩寵の力を使うためには、呼吸を極限まで遅くする必要がある。

「お座りください」

小振りの寝台に腰を掛けさせたとたん、あ、と皇女が小さく声をあげ、硬直した。ヤエトも中腰のまま動きを止めた。止めたというより、動けなくなったという方が正確だろう。

皇女の身体に光が宿った。

——《天地輪》だ。

十全に準備がととのわないまま、とりこまれたのだ。皇女はかすかに顔を歪めた。胸が一回だけ大きく上下し、そのまま呼吸が止まったかに見える。

見えるだけだと思いながら、同時に不安にもなった。運動をした直後には無理なのではないか。

しかし、光は順調にからみあい、本数を増やしていく。なんとかなりそうだ。

近過ぎて逆に全体像を見づらいので、彼は扉の前に移動させた物入れに、よいしょと座り、縒りをかけるように捩れながら合わさっていく光の筋を見分けようとした。全体をまとめている光は、前回以上にかがやいて見える。見慣れた皇女の光と、それから……三本、四本と数えていって、ぎょっとした。

——九本？

皇子は七人、それに皇女を合わせても光の束は八本のはず。実際、前回は八本だったのだ。

数え直しても同じだった。今は九本ある。

皇女と意志を通じさせる手段があれば、と思った。無言でひとり増えているのか、それとも皇帝が参加しているのか。宣言はあるのか、ないのか。

もどかしいが、とにかく黙って観察する以外、どうしようもなかった。へたに集中を破って、邪魔をするわけにもいかない。《天地輪》への参加は皇女の義務だ。

眺める内に、恩寵の光が少女をとらえる網のように見えはじめる。封じ込めてしまうのではないか。このまま、この小さな部屋に。恩寵の力だけで世界と繋がって、自分自身が何者かも忘れて……。

それは彼の記憶に刻まれた情景の再現だ。なかば開いたままの窓の外、薄れゆく残照を宿した空は、あの鏡のように感じられた。闇に包まれた部屋の中、灯火を受けておぼろに浮かび上がった、目隠しをした白い横顔を映す、古い鏡。

ふと、ヤエトは疑問に思った。

——なんのための、鏡だったのか。

先祖は視力を失っていた。あんな巨大な鏡を必要としていたはずがない。では、なぜあそこに？

同じ場所に立ち、過去を覗いてみたい——そんなことを考える自分におどろいた。だが今、彼は切実に望んでいた。あの崩れかけた塔を再訪したい。なにも知らず、暴走する力に引きずり回されるだけだった頃とは違う。あらためて視ることで、過去の恐怖と訣別（けつべつ）できそうな気さえした。

だが、あの光景にはすでに手が届かない。彼の力の前に時間の経過は無意味だが、距離は絶対の障壁である——それすら、あの人物はかるがると飛び越していたが。

——視える限りのものを。

少年だった自分が視た過去の中、先祖は皇祖が暗

殺されそうになった時まで、その場所までの時間と距離を同時に飛び越えた。彼は、恩寵の力の使いかたを熟知していたのだろう。

自分にも指導者がいればよいのに、と思う。竜種のように系統立てて学び、訓練できれば。

ヤエトは皇女を覆う光を眺め直した。

全体をまとめているのが第二皇子と仮定するなら、その光が増したのは……近いからでは？

ヤエトは、薄暗い室内にとぐろを巻く九本の光を仔細に眺め直した。竜種の恩寵の力は、距離を跳躍するものだ。

しかし、いくら神与の力でも、無限遠まで届くとは思えない。距離が関係しなければ、沙漠の向こうとだって繋がってしまう。

皇帝があんなに恐れた兄、西の皇帝のもとには、彼の伝達官がいるはずだ。やあ弟よ、裏切り者の叛逆者よ、と毎日のように声が届けられても、おかしくはないと考えかけて、ヤエトは顔をしかめた。これは例が悪かった。西の皇帝が、自分を裏切った弟の伝達官を生かしたままでいるとは思えない。

——伝達官の死はつらいものよ、いつだって。

皇妹の声が、耳によみがえる。彼女も、西の皇帝のもとに伝達官を置いていただろう。血族同士の争いに、伝達官は必然として巻き込まれる。

伝達官同士は、仲間の死を感じるのだろうか。

——でも、死んだのでしょう。

ヤエトは大きく息を吐いた。自分は竜種の恩寵持ちでなくてよかった、と思った。彼に与えられた恩寵の力も、死や喪失と無縁ではない。だが、彼の感覚がとらえるのは、すでに過ぎ去って失われたもの、完全に手後れとなったものだけだ。

——預言者ともなれば……。

彼女が視る死は避けられない。どんなに強く抱きしめようと、腕の中から失われる。そういう未来だ。

うねる光を眺めながら、ヤエトは恩寵の力というものの容赦のなさについて考えつづけた。

神は、ほんとうに人を愛してくれているのだろうか。いや、恩寵の力は神が望んだものではない――人が、みずから望み、獲得したものだ。

その力が、人を追い込む。

明滅する光は、議論が激しくなっていることを示しているように思われた。皇女の光が中心というわけではない。皇女は火をつけただけ。燃え広がるための素地はすでにできていたのだろう。

にわか貴族のヤエトでさえ、宮廷で第三皇子が暗躍しているという話を聞き込んだのだ。残る六人の皇子たちが、なにも知らないはずはない。使いどころを決めかねて温存していたところへ、皇女が持ち出した。第三皇子が貴族の邸で姿を見られた、と。もう黙っている必要はなくなった。この光の乱れようは、それぞれが手持ちの札を切りあい、優位に立とうと争っている証拠だ。

不意に、ヤエトは気がついた――これこそが《天地輪》の狙いなのではないか、と。

どんなに優秀な幕僚を抱えていても、皇子自身がその場の流れに即応できるかが問われる。助言を求めることはできない。判断は本人にまかされる。

――それぞれ、上に立つ者としての器量を見せてくれよう。

皇帝の言葉の意味が、今ごろわかった。

皇子たち自身の人物が、あからさまになる。そういう機会を、皇帝は用意したのだ。誰に仕えるかを選び、賭けろと命じたも同然。

名誉と命、未来を託す相手をみきわめる機会。それが、《天地輪》なのだ。

2

会食の席で、大量の貴族に紹介された。第二皇子の部下である。全員を覚えるのは、即座に諦めた。

並んだ食事は贅(ぜい)を凝らしたもので、お上品に食べながら適当に趣向を褒めたりする必要もあるが、袖

をひっかけたり汁を飛ばしたりしないよう気遣うので、精一杯である。

高位の貴族は竜種に倣ってか、滅多に名前では呼び合わない。当然、ヤエトも《黒狼公》としか名告らないし、公とだけ呼ばれる。おそらく、陰では尚書卿とも呼ばれているのだろう。

ただし、より上位の者は下位の者を名指しする。名前を知ることは支配することという呪術だ。

おもしろい、とヤエトは思う。

帝国の歴史で名前の呪術が有効だったことはない。沙漠を渡って来てはじめて、呪師が名前を使って呪をかける、という事態に遭遇したのだ。それなのに、まるでその呪術にあらかじめ備えてでもいたかのように、竜種は名前を隠している。臣従の誓いで、臣下があるじにおのれの名を告げるのも慣例だ。

考えてみれば、北嶺でも名前の扱いには注意が払われていた。皆がヤエトを尚書官殿と呼んでいたのは、彼が帝国から来た偉い人だと思われていたからだろう。ルーギンも名前では呼ばれず、団長殿と呼ばれていた。長老は長老であってヤエトも未だに名を知らないし、厩舎長の本名を誰かが呼んでいるのを聞いたこともない。朝議で皆が名を呼び合っていたのは、かれらが対等の存在だからだろう。

ヤエトはあらためて周囲を観察した。

席が近いのは、へたに名を呼べば失礼にあたる相手ばかりだ。ヤエトの席は、細長い卓の端に座る第二皇子の右隣。ヤエトよりひとつ下座にルーギンが座り、正面とその隣は博沙国の相と将軍だ。

博沙国には相が一名、将軍が二名いる。砦の両側にある岩山の、北東へ向かう右翼が右将軍の管轄、南へ向かうのは左翼で左将軍の管轄となる。どちらも稜線沿いに塞が並び、兵士が常駐して沙漠を見張っているという。沙漠に向かっての左右であるのも興味深いが、それもまた今考えることではない。

襲撃を受けているのは、その岩山の塞だ。

塞には、信号を送る手段が用意されている。岩山

が途切れる場所は急所でもあるが、ここには大きめの砦があり、伝達官が駐留しているという。それを聞いて、ヤエトは少々おどろいた。竜種はそれぞれ二名の伝達官を持つと決まっている。大量の伝達官を抱えているのは、皇帝くらいだ。

「陛下のご許可はいただいてあります」

ヤエトの正面に座っている博沙国の相は、白い髭の老人だった。どう見ても生粋の帝国貴族だが、武人ではないようだ。おそらく、元は学舎の博士だろう。第二皇子の傅として《銀鷲公》が雇った博士が、そのまま第一の家臣になったというところか。ごく稀に、武芸の道に進まず学問をおさめる貴族がいて、学舎はそういう存在の受け皿でもある。

老人の隣に座る左将軍はたのもしげな壮年の男性。右将軍はルーギンと変わらない年代に見える。席は、ルーギンを挟んだ向こうだ。

隣でなくてよかった、と思う。右将軍は甲高い声で馬鹿みたいなことを口走り、自分のいったことを自分で笑う。話題が切れても笑うが、その笑い声がまた神経質で癇にさわる。正直にいえば、なぜ将軍位にいるのだろうと疑念を抱かされる人物だ。

第二皇子なら有為の人材に困ることはないと思うが……右将軍も、実は戦闘では使えるのだろうか？

「塞は、それぞれ最寄りの砦に所属しております。塞と塞のあいだの通信が砦に達するのは……ひと呼吸のあいだと申し上げれば大袈裟ですが、お考えになるよりずっと速いでしょう」

伝達官を配しての即時通信に、塞の通信。帝国らしく、情報の伝達速度と精度に重きを置いた守備だが、効果がなければ見直しは必要だ。

ここまでの話では、襲撃の報を受けて急行しても間に合わず、塞の守備兵を殺した敵をとらえることはおろか、姿を見たこともないというのだ。

――まるで、魔法だ。

なんらかの恩寵の力が関係しているのかもしれない、と思いつくなり面倒になった。ここでも、恩寵

の力が強まっているようで……という説を唱えるのか。しかし、どう説明する？　預言者を呼ぶか？

ヤエトは額をそっと撫でた。眉間に寄ってしまった皺を、なかったことにしたい。渋面の理由が、料理の味や接待の質のせいと誤解されては困る。

「通信の手段は？」

「夜間は炬火、昼間は旗と凧ですな」

「凧？」

ルーギンが意外そうな声をあげると、老人はいかにも嬉しそうにうなずいた。そうだろう、知らないだろう、という顔だ。

「湖の国が、それを連絡手段にしていましたね」

「おお、公は博識でいらっしゃる。その通りです」

反射的に口を挟んでから後悔したが、老人はべつに気分を害した風もない。なんのことだ、という顔をしているルーギンに、ヤエトは説明してやった。

「沙漠の西の話です。湖の国という名で記録に残る地域が、滅多に雨が降らず、風がやむことを知らぬといわれる気候でね。隣国との防衛線に、一定間隔で塞を並べていたのですが、その塞と塞のあいだの連絡法が、凧だったといわれているのです」

「ああ。敵影ありなら何色の凧、とか？」

「そうです。このあたりの気候なら、合いそうです」

北嶺では使えない手だ。北方人が攻めて来るのは吹雪の季節。炬火、旗、凧、どれも通信の役には立たない。視界は最悪、しかも相手は吹雪を制御し、雷を落とすのだ。

老人は優雅な手つきで食べ物をとり、うなずいた。ヤエト同様、ひらひらした袖の服を着ているが、動きに無駄がなく、危なげもない。これも慣れというものだろうか。

「塞は帝国が来る前からあったもの。補修はしましたがな。通信もこの土地の領主がやらせていたものを引き継いだのみで、我らの工夫ではありません」

「通信がうまくいっても、防げないと？」

ルーギンの問いに、左将軍が憂鬱そうに答えた。

「巧妙な手を使ってくるのです。敵影ありとの連絡を受けて、そちらへ兵を集めるとします。すると、手薄になったところが襲われ、守備兵が皆殺しに……そちらに捕吏を送ったと思いますがな」

「はい。当方にて、賊の首領と思われる者を処分いたしました。首級は使者殿が持ち帰られるでしょう。迅速にお帰りいただけるよう、手配はしましたが……それが仇になりました。我らが出発を決めたときには、使者殿は旅立っておいでで、ご同行をお願いすることはできませんでした」

鳥を使ったヤエトたちは、馬で帰るギスケルより数倍速い。途中で拾ってやることも可能だったろうが、わざわざ探してまで合流したい相手ではない。

「しかし、以後も襲撃はやまぬのです。それどころか、頻繁になりましてな……」

――援助があるのではないか？

真っ先に、ジェイサルドを疑った。部下を疑うは気分がよくないが、なんといっても先例がある。

しかし、彼は同郷の民には厭われ、憎まれてすらいるようだ。ここは、アルハンに近い。ジェイサルドを信用する者がいるとは思えない。

賊は、先代《黒狼公》の救いの手をも撥ね除けた者たちだと考えるべきだ。ジェイサルドならずとも、帝国の人間による懐柔は不可能に近いだろう。

失われた過去に縛られながら、自由なつもりでいる者たち。古い憎しみがかれらの今を固定し、殺伐とした未来へ導くことに、気づかない。

それをいうならこちらの側もだが、とヤエトは卓を囲んだ貴族たちの顔を見ながら思った。それぞれが、ことなる立場と利害を抱えている。

共通点といえば、この席上にいるのは生粋の帝国人ばかりであることくらいで、それはそれで不自然なのだ。土地の民が権力の座から遠過ぎる。

「塞に詰めているのは何名ですか？」

ルーギンの問いに答えたのは、老人だった。

「格付けによりますが、基本は常時六名ですな」

「手薄というと、応援に出たところをやられるのですか。何名、残ります」
今度は左将軍が答えた。
「二名です。塞には徴兵したての練度の低い兵を充てるので、襲われたら終わりです。しかし、騎士と入れ替えるわけにもいかず。奴らに騎馬での戦いなど……とても望めたものではない」
「はじめの敵影は囮なのですね」
「左様。これ見よがしに砂を蹴立てて来るのです。それに備えぬわけにも参りませんしな」
「なるほど。敵も馬鹿ではないということか」
ルーギンが難しい顔でうなずいて、沈黙が降りる――と、右将軍が神経質な笑い声をたてた。
全員の視線が自分に集まったと気づき、彼は軽口を叩いた。
「案外、なにも考えておらぬのかも」
なにも考えてないのはおまえだ、と皆が思ったに違いない――が、誰もそれを口にするほど慎みを失ってはいなかった。
「そうであれば、よろしいのですがな」
老人が丁重に話題を引き取り、王よ、と第二皇子に呼びかけた。
表情が変わらない男というのが、ヤエトの第二皇子に対する印象だ。初対面のときから、ずっと同じ顔をしている。上に立つ者としては悪いことではないが、交渉相手としては読みづらく、難しい。
「せっかくのお申し出です、《黒狼公》がお連れになった兵に、偵察をお願いしてみては。上空からでしたら、敵の根拠地の発見も望めるでしょう」
第二皇子は、やはり表情を変えずに告げた。
「そうだな。お願いできるだろうか、公」
「お許しいただければ、早速、明日にでも」
「十騎にも満たないのでは、偵察くらいしかできることはありますまい」
厭味っぽくつぶやいたのは、左将軍である。
ルーギンの口の端が上がるのを視界の隅に認め、

ヤエトはぎょっとした。今の笑顔は、ことさら胡散臭い。ろくでもないことを考えているに違いない。

「仰せの通りです」

笑みを消さないまま、ルーギンは酒杯を持ち上げた。注ぎ足した回数を数えておけばよかった。

左将軍は、当惑したようだ。厭味をいった相手から悩殺級の笑顔を向けられたのだから、当たり前である。だが、ゆるみかけた表情は、つづく言葉を聞いて即座に引き締まった。

「しかし、あまり多くを連れて来るのも憚られるのでね。二十騎もいれば、この砦も制圧してしまいかねません。そんな下心があると疑われるのも、我らの本意ではありませんから」

ねっ？　という顔でこちらを見られても困る。

ルーギンの視線に応じて全員がヤエトを見るのは、もっと困る。しかも、第二皇子の表情はまったく変わらない。なにを考えているのかさっぱりだ。

――なんだこの拷問は！

ヤエトが即応しなかったため、空白が生じた。とたんに、右将軍が神経質な笑い声をあげた。皆そっちを見ろと念じたが、視線はヤエトに集まったままだった。役に立たない。

「あまり大口を叩かれては困ります」

しかたなく、本心とほとんど変わらないところを告げてルーギンに釘を刺してから、ヤエトは第二皇子の方に視線を戻した。

「鳥たちは北嶺の宝です。いたずらに多数を率いるわけには参りません。このたびは、援護程度にお考えください。北嶺の本気をご覧になりたければ、いつ、どこが戦場になるかを明確にお示しくださいますよう。さすれば、まともな編成でご助勢することもできましょう。ただし、我が王にお許しをいただければ、ということになりますが」

「先のことはよい」

第二皇子の返答は、妙に印象的だった。

やはり表情は変わらないし、声にも感情はこめら

れていない。あっさりし過ぎて、逆に相手を刺激する効果があるのかもしれない。

皇女とも、第三皇子や皇帝とも違う。一瞬で人の懐に踏み入るところがない。彼我の隔てが明確だ。

だが今、第二皇子はまっすぐにヤエトを見ていた。隔ては消えないまでも、視界には入ったと感じた。

「聞いた通りだ。こちらは守る一方で、相手の根拠地もつきとめられないでいる。公の鳥たちで、発見してほしい。その先は、それから考えよう。……では、席を変えよう」

食後の飲み物は別室で、ということだ。ヤエトはびらびらした袖を空になった皿にひっかけないよう注意して立ち上がり、さりげなくルーギンに近寄ると、耳もとでささやいた。

「酒は禁止です。いいですね」

「勧められたら断れない」

平然と答える騎士を睨んで、ヤエトは告げた。

「呑んだら、ばらします」

「なにをです？」

「ラキニー様にふられたという話です」

ルーギンの笑顔が強張った。

「……鬼ですね、先生は」

「氷だそうですよ？」

案内されるまま、ふたりは別室へ向かった。ファルバーンは同行を断られた。護衛は全員、元の部屋に留め置かれたし、下座で食事をしていた者たちは別の方向へ退室していく。ひょっとすると、これからが本番かもしれない——ごく限られた人々による、きわどい話し合いになる可能性がある。

気合いを入れねばと思いながら一歩足を踏み入れるなり、ヤエトは呆然とした。

会食をした部屋も豪勢なつくりだったが、こちらはさらに凄まじい。壁という壁は、彫刻で埋まっている。特徴的な幾何学紋様だ。柱から天井へと繋がる弧には青金石が象眼されていた。

——沙漠の様式だ。

あの紋様は祈りなのだ、と教わったことがある。沙漠の民は、神への祈りの永続を願い、その韻律を図形に変換した。継ぎ目の見えない連続紋様は、都市ごとに違う形をしているという。

しかし、この彫刻の原形を作った者たちは、滅びた。壮麗な祈りの芸術は、かれらを守れなかった。祈りは今や呪いにひとしく、ヤエトは部屋全体から異様な圧迫感を覚えた。気を抜くと、幻視にとらわれかねない。別の意味で気合いが必要だ。

部屋の中央では湯が沸かされており、若い娘たちが柄のほそい柄杓を手に、その湯を椀に注いでいた。そのたびに、芳香がたちのぼる。

——花茶だ。

酒ではなくてほっとするの半分、緊張するの半分。微妙なところだ。これは厳密な作法がある。一応はルーギンに叩きこまれたが、流れるような所作までは再現できない。正直なところ、すぐにでも口実をもうけて辞去したかった。椀を受け取るのは左右どちらの手だったか。右と思いながら左を出すとか、いかにもやらかしそうで困る。

第二皇子は着座しない。誰かを待つそぶりだが、と部屋の奥に視線をやって、はっとした。

奥の壁と見えたのは透かし彫りの衝立で、その向こうには身を屈めねば通り抜けられないほど小さな扉がある。今まさに、そこをくぐって姿をあらわす人影があった。

祈りの紋様を透かして見えたのは、白一色の装い。結い上げた白銀の髪がほつれ、しなやかな首にはらりと垂れている。なめらかな肌膚は、それ自体が内側からかがやいているようだ。鎖骨のあいだに落ちた影まで、銀色に見える。水晶の装身具が揺れ、しゅっ、と衣擦れの音が響いた。長い裳裾が床を掃く。

衝立を回り、白い人影は第二皇子の横に並んだ。紫の眼がヤエトを認め、次いで彼の後ろに立つルーギンに向けられた。

一瞬、動揺が走ったような気がしたが、たぶん勘

違いだろう。そんなかわいらしい女性ではない。
「遅れてごめんなさい」
皇妹ラキニーの声は、やわらかだった。記憶にあるよりも、さらに。
彼女は完璧な美貌をヤエトに向け、微笑んだ。部屋中の灯りが消えて、皇妹だけが光源になったかのような錯覚に陥る。もちろん、そんなはずはない。この部屋にはもっと若く、見目も悪くない、いや平均よりあきらかに美しい娘たちが何人も控えているのだが、それが霞む。
――化け物だ。
しかも、竜気はさらに強まっているようだ。彼女の全身を包む、途方もない力が感じられる。
美しい化け物の視線は、ヤエトをとらえていた。しっかりと、逃げ場のないように。
「お久しぶりね、《黒狼公》。またお会いできて、とても嬉しいわ」

3

「叔母上が？」
「いらしてます。勘付かれはしませんか？　つまり……王がここにおいでだと知られることは？」
皇女は眉根を寄せ、なにかを案じるような顔をしたが、ヤエトの疑念については否定した。
「ないと思う。それより、ルーギンは？」
「皇妹殿下に呼ばれました。お話があるとかで」
食後の一服とやらは、皇妹に現状を報告するための場だったらしい。公的には、ただ竜種であるに過ぎない皇妹は、軍議には列席できないのだ。馬鹿らしいとヤエトは思うが、これが帝国の限界だ。
第二皇子が規定数以上の伝達官を使っているため、恩寵の力にすぐれた皇妹が様子を見に来たというが、それだけではないだろう。しかし、表向きは目新しい話も出ず、彼は早々に解放された。
「……今度こそ、叔母上に引き抜かれてしまうので

はあるまいな。どうせ、まだ惚れているのだろう」
ヤエトは眼をしばたたいた。
「ご存じなのですか？」
それ以前の問題として、皇妹とルーギンがそういう関係だったことを、皇女は知らないと聞かされていたのだが……去年の夏、あれだけ一緒に行動していたら、気づいても不思議はないだろう。
「都でな。祭りのときに、聞かせてくださった。叔母上は――」
いいさして、皇女は口を閉じた。
ヤエトは少し身構えた。皇妹はルーギンに、帝国を裏からあやつろうと持ちかけたのだ。彼女は、姪にはなんと語ったのか。
ふたりが話しているのは、また控えの部屋である。ファルバーンは廊下に通じる扉の前で警護をすると主張したので、好きにさせている。
灯火は少なく、控えの間には灯り受け自体がない。光源は、持ち込んだ燭台ひとつきりである。夜の明るさだけは自分の邸が勝ったな、とヤエトは思った。例の契約のせいで、蠟燭を格安で買えるからだが。
この光量では、下を向かれるともう皇女の表情が見えない。金色の巻き毛の向こうに、顔の輪郭がうっすらと見てとれる程度である。
「一緒に暮らそう、と。誘ったそうなのだが」
ヤエトが聞かされた話より、ずっと魅力的なのではないだろうか。あの顔で、あの声で、いわれたら……たいがいの男は断れない。
「そなたはルーギンに聞いたのか。あやつは、なんと申しておった？」
「皇妹殿下に……ふられた、と」
皇女は、大きなため息をついた。
「どちらも、自分のせいにしたくないのだな」
「……は？」
「ふったといえば、自分の責任だろう。ふられたといえば、相手のせいになる。相手を立てているとも見えるが、わたしはそうは思わない。自分が負わさ

れた痛手の責任は、相手にあると思いたいのだ」
ヤエトはぽかんとして皇女を見下ろした。
返事がないのを不審に思ったのか、皇女は顔を上げた。ヤエトの阿呆面を見て、さらにいぶかしく感じたのだろう。眉根を寄せ、尋ねた。
「なんだ？」
「いえ……」
「はっきり申せ」
「女の子でいらっしゃるな……と」
そんな言葉ではうまく表現できないのだが、ほかに思いつかない。皇女の洞察力は、日々するどくなっているのではないか。ことに、人の心のやわらかい部分を推しはかるのが、うまい。
「妙なことを。……とにかく、ルーギンのことは考えるだけ無駄だな。本人にまかせるしかない」
「引き抜かれたら、気もちよく送りだしてやるのですか？」
皇女はくちびるを尖らせた。
「しかたなかろう。それで幸せになれるなら」
「彼に、幸せになってもらいたいとお思いですか」
「あの男はな、たまに、この世の不幸をすべて背負っているような顔をして笑うのだ。やりきれん」
ああ、とヤエトは思った。いい表現だ。たしかに、ルーギンにはそんなところがある。
「王は、おやさしいかたですね」
ヤエトが微笑むと、皇女は尖らせていた口を結んで、上目遣いに尋ねた。
「そなたは、やさしくないのか」
「そうですね。彼個人のことを思いやるなら……幸せになってほしいとは、わたしも思います」
「個人よりも全体だ、とでも論じそうだ」
「ご明察です」
皇女は息を吐いた。
「もう黙れ。これ以上聞くと、苛立つ予感がする」
「賢明なご判断です」
皇女には有力な後ろ楯が存在しない。父である皇

帝は最強の後援者だが、その権力が失墜したとき——つまり、皇帝の没後を考えると頭が痛い。

野心と実力がある貴族は、皇子たちの誰かにつきたがる。皇女の後援を引き受ける者がいないなら、でっちあげるしかない。だからこそ、皇帝はヤエトを《黒狼公》に叙爵し、友よと呼びかけることまでした。だが、所詮は不自然な人事だ。皇帝が薨去すれば、ヤエトの身分など水面の泡にひとしい。

確実かつ安定した皇女の後ろ楯となり得るのは、ルーギンの方だ。その彼が皇妹に引き抜かれでもしたら、万事休すである。

それを説明しても、ルーギンの心には訴えないだろう。彼自身が口にしたことだ——皇女は、ルーギンが《金獅子公》家の人間だから手元に置きたい、などとは考えない。だからこそ、彼は皇女のもとに残った。それを考えていそうな皇妹と別れた。

——ああ見えて、頑固だからな。

彼の決意は、容易には覆らないだろう。

「そなたは竜気に敏感だというが、なにも感じなかったのか、叔母上の姿を見るまでは？」

「はい。お役に立てず恐縮ですが」

そこまで敏感でなくて幸いと考えるべきだろう。頭痛や吐き気に悩まされる機会が激増するのはあきらかだ。周囲も困るだろうが、ヤエトも困る。

「竜種の恩寵の力を使っていても、同じか？」

ヤエトは記憶をさらってみた。竜気を感じる範囲は、かなり限定されているように思われる。少なくとも、室外の竜気を察知したことはない。

「あまり変わらないかと存じます」

「そうか。次の《天地輪》のときにでも、九番目が叔母上かどうか、確認できるかと思ったのだが」

皇女は、九番目の存在を知らなかった。

予定通り、皇女は第三皇子の姿がさる大貴族の邸で見かけられたという話を持ち出し、その大貴族とは誰かと詰問されたらどうしようと考えながら、皆の反応を待ったという。問われても知らぬふりで黙

っていればよいのだと思いながら、それでも、どう答えようと必死で考えていたのだそうだ。

だが、話は皇女が思ったようには進まなかった。

——《金獅子公》のことだろう、その情報はこちらにも入っている。

と、返した声があったのだ。もちろん、どの兄かはわからない。しかも、こうつづいた。

——三(ウィルト)は、宮廷でも噂を流しているそうだな。二(ウィダ)が、叛逆の準備をしているとか。姑息なことをする奴だ。

——とはいえ、二が軍を増強しているのは事実だろう。三でなくとも不審に思う。

——軍を増強していない者がいるとでも？ 一(ウォノム)、四(ロタク)、五(ウェクト)、六(スウェス)、七(メトゥ)……どちらを向いても兵を募り、武器を買い、馬を集めているのは周知の通り。いや、周知はされていないか。

——三は軍を増強していないな。

——兵を集めれば陛下に吊るされるだろうよ。だから、口だけで戦っているのに違いない。

——賢明なことだと思っているのだろうが、口は災いを呼び寄せる。ほどほどにせねば、いずれそのせいで命を落とすだろう。

——本人は命を拾うつもりだ。軍の増強も同じこと。皆、命を捨てるよりは拾いたいだろう。

——七は軍を強化していないと聞いた。

——七は四、五と同じ胎(はら)から生まれたのだ。察するべきだとは思わぬか。

——まあ待て、なにもそうやって三人を連帯させる必要はないだろう。考えなしに糾弾するな。

——なに、どうせすぐに決裂する。血よりも濃いものはないが、血の濃さは遠慮を忘れさせる。容赦のないことをいって、どんな深い恨みを呑ませているか、わからないだろう。剣呑(けんのん)、剣呑。

——教えてやってどうする。親切なことだな。

——親切にもするだろう。我らは七の兄だ。あわれにも最後に生まれたため、若くして渾沌(こんとん)の渦に叩

き込まれた末弟を導いてやっても不自然ではあるまい。血よりも濃い繋がりはないのだからな。

——断ち切るより、呑みこもうとするほどの繋がりだがな。罪深いことだ。

——罪ではない。必然だ。

皇女の話によれば、だいたいそんな流れで会話は進んだという。今までの《天地輪》で、いちばん疲れた、と皇女はいった。ある程度は腹蔵のないところが語られたから、その意味ではつかえが取れた気もするが……疲れた、と。

なるほど、皇女がおとなしくなるはずだ。

この流れを、九番目が誘導したかどうかはわからない。むしろ、あやしいのは第三皇子だろう。

皇女の糾弾は完全に宙に浮いた。なかったことにはできないが、話の鉾先は逸れてしまった。

「九番目が皇妹殿下でいらっしゃる可能性は、低いでしょう。陛下は大胆にして細心なおかた。たとえお妹君とはいえ、無条件に《天地輪》への出入りを許すとは思えません」

「そうか？」

「状況が変われば、皇妹殿下を閉め出す必要がでるかもしれないと、陛下ならばお考えになることでしょう。陛下ご自身がそっと見守っていらしたのだと考えるのが、妥当ではないかと」

皇妹がこの場所に姿をあらわしたのは、皇帝の耳目となるためかもしれない。当然、第二皇子謀反の噂は皇帝も知っているだろう。皇妹なら、公的な立場にとらわれず、自由にふるまえる。慣習の壁が立ちふさがり、たとえば軍議には立ち入れないが、彼女の私的な「お願い」を拒否できる人物はいない。気づいたことがあれば、即座に皇帝に情報を送れる。理想的な間諜（かんちょう）だ。

だが、皇帝の思惑だけで動くような女性でもないだろう。たとえば去年は、姪の顔を見がてら辺境視察をこなしながら、同時に騎士団長の引き抜きを画策していたのだ。疑いはじめると、きりがない。皇

妹なら、なんだってやってのけそうな気がする。
「二の君が術式を組み直しておいでなら、皇妹殿下が九番目でいらしたとも考えられますが」
「それはない。二の兄上は女嫌いだ」
初耳だ。ミアーシャの報告にもそんなことは書いていなかったと記憶を掘り返し、ヤエトは眉根を寄せた。そういえば、第二皇子には浮いた噂がなく、個人的な情報がほとんど流れないと……。
――なるほど、そういうことか。
「存じませんでした」
「わたしも最近知ったのだ。正確には、兄上ご自身にいわれた。女はくだらん、とな」
「はぁ……」
「どうやら、一の兄上の母君が女嫌いの原因らしいな。わたしも苦手だ。理解できぬでもない」
同情的な口調である。第一皇子の母といえば、悪評紛々たるラハーマ妃であるが、それにしても。
「しかし、皇妹殿下は別なのでは」
「それがな、女嫌いの原因の第二がご自分を育てられた乳母、第三が叔母上だと仰せだった」
「皇妹殿下が苦手とは、珍しい……」
「そなたは叔母上のことが好きだったかな？」
「好き嫌いを考える前に、竜気にあたって倒れます」
皇女は笑った。
「まあよい。九番目よりも、どの光がどの発言をしたかを特定する方法を考えた方がよさそうだ」
「速記は、おできになりますか？」
「できぬし、できても書けぬ。《天地輪》の最中は身体の感覚が薄くなって、自由には動けぬのだ」
これは聞き流せない。おのずと声も厳しくなる。
「王よ、今さら申し上げたくはありませんが」
「なんだか知らぬが、黙っておれ」
「いいえ。二度と、鳥の背で《天地輪》の時刻を迎えるなどということは、なさいませんよう」
ちょっと危ないのではないか、どころの騒ぎではない。思った以上に危険なことだ。

「わかった、わかった」
「真面目にお聞きください。次に同じことがあれば、職も身分も返上します」
「許すわけがなかろう。勝手なことを申すな」
勝手なことをしているのは、どっちだ。
「以前も申し上げましたが、臣下は主君の鏡。勝手なさりようを映してご覧に入れるのも、我がつとめ。身勝手なおこないが、どれほど周囲を困らせるかを、王は理解なさるべきです」
皇女はうんざりした表情を隠さなかった。
「……つとめとか、するべきとか、そなたの言葉は義務ばっかりだ」
「人生とは、義務と義務と義務で構成されているものとお考えください」
「自由は？」
「お心の中に、お留めくださいますよう」
大袈裟にため息をついて、皇女は命じた。
「それでは我が鏡よ。軍議の様子も映してみよ」
「軍議というほど具体的な話はありませんでした」
ヤエトは会食の席上で出た話をざっとまとめ、根拠地を探してほしいと依頼されたことを伝えた。
皇女は眉根を寄せた。
「そんな状態が長くつづいているのであれば、二の兄上はずいぶん無能ということになる」
「戦にも長けておいでと聞いておりましたので、妙なのではないかとは思いましたが……沙漠の民が、よほど巧妙になっているのかもしれません」
「有能な指揮官がいるのかな」
――たとえば、確実な未来を視ることができる人物とか。
そうでなければよいが、と思う。
皇女はもう少し現実的なあたりを考えていたようだ。馬が問題だな、とつぶやいて顔を上げる。
「戦場の選びかたを間違っている。騎士の強さは馬に乗ってこそだ。岩山の斜面に、馬が通れるような道はなかった。防備のためだろうが、不便は双方に

かかる。北嶺とはわけが違う」

北嶺において、道の整備は進んでいない。皇女が北嶺人とうまくやっていけないようなら、山岳地帯から麓へ抜ける道を広げ、増やしていくよう献策するつもりだった。だが、実際には皇女は北嶺のあるじとして受け入れられている。それなら、道はない方がよい。鳥という輸送手段を握っている限り、それを持ち得ない侵略者に対して有利になれるからだ。

「塞の兵は、ほとんどが徴兵したばかりの土地の民だとか。ともあれ、我々に求められているのは敵の根拠地を特定することです。それなら、わたしが襲撃を受けたことがある場所へ行けば――」

「必要なかろう。そなたの力は、ここぞというときのために温存しておくがよい。ルーギンが戻って来るまでに考えをまとめておこう。地図はないか？」

ルーギンが朝帰りをしたら徹夜です、とは献言しづらい。しかし、ヤエトの体力は限界が近い。

「……ファルバーンに取って来させましょう」

隣室へつづく扉を開け、ヤエトはぎょっとした。ルーギンは、もう戻っていた。しかも、呑んでいる。見るからに、しこたま呑んでいる。

「戻っていたのか」

皇女が声をかけると騎士は立ち上がり、優雅に一礼した。動きは変わらない。あれ、と思って見直したが、やはり目は据わっている。こんなルーギンを見るのは久しぶりだ。またなにかあったのだとは類推できるが、……訊いてもよいものだろうか？

「そなたが帰って来るのを待っていたのだぞ」

「それは失礼を。姫のお邪魔をしてはなるまいと、おとなしくここに控えておりました」

皇女はヤエトの方をふり返った。

「あれも、わたしの鏡なのか？」

「王もお酒を嗜まれるようですゆえ」

「わたしが酔っぱらいのようにおっしゃる」

「ようにもなにも、しっかり酔っぱらいでしょう」

ヤエトが歩み寄ると、ルーギンは卓上の酒瓶をさ

っと膝の上に抱えて座り直した。
「先生はすぐ、わたしの酒を取るんです」
「わたしは舎監ではありましたが、教師ではなかったのですと、何回申しましたかね？」
敵か味方かさだかならぬ相手の懐で、いきなり酔いつぶれてよいものか。つぶれてませんと返されるのはわかっているが、敢えて問いたい。
だが、ルーギンはヤエトの心中を察するどころか、拗ねたように答えた。
「そうやって教え諭すような口ぶりが、先生です」
背後で笑い声がしたので、ヤエトはくるりとふり向いた。皇女はあわてて表情をあらためた。
「なにか、おもしろいことでも？」
「それはつまり……全般に」
「笑っている場合だとお思いですか？」
「……なぜ、わたしが怒られるのだ」
「怒っていません、質問しているのです」
「そのへんも、先生っぽいです」
後ろから茶々を入れられて、ヤエトはすっかり、なにもかもどうでもいいという気分になった。
やってもやっても仕事がなくならないとか、最善を尽くしているつもりなのに現実は自分の対処できる範囲を超えているとか、同じことを何回注意しても右から左に聞き流されるとか、注意している自分はなんなのだとか、そもそもこんなに真面目に仕事をして自分は隠居に近づけると思っているのか、とか——現状を見れば、隠居したいというのは口先ばかりだろうと思われてもしかたがない。なりゆきで、うっかり仕事をしてしまうと弁解しても、誰も信じはしないだろう。真剣味がたりない。
すべてを投げ捨て、世界の果てまで逃走すべきではないのか。今すぐに——そう、今ならできる。
彼は油断していたルーギンの手から酒杯を取り上げ、その中身を睨みつけた。半透明の濁り酒に映った自分の顔は、隠しようもなく不機嫌そのものだ。
「ほら、やっぱり取り上げる」

ルーギンの声を聞いて、表情はさらに不快そうに変化した。やってられるか、といわんばかりだ。

身体が無理でも、精神はこれで逃走できるはずだ。戻ったときが大変そうだとちらりと考えたが、先のことは考えないと決めた。さらば理性。

「では、らしくないことをしてみましょうか」

くいと杯を煽ったとたん、喉が燃えるように熱くなった。その熱が身体の中心を通過して下がっていく——それに少し遅れて、熱が顔にのぼり、頭に達した。湯気が出そうだ、と思った。視界が歪む。

「ヤエト」

いつの間にか、皇女が彼の前にいて、顔を覗いている。呆れているのだろうか。

「顔が真っ赤だ」

「酔っぱらったということです」

ヤエトは答えた。答えたつもりだが、ちゃんと相手にそう聞こえているかまでは責任が持てない。

「斜めになってますよ。揺れてる、揺れてる」

ルーギンの声は、すっかり素面である。ヤエトが酒を呑んだ拍子に、酔いが吹っ飛んだのだろう。簡単に正気に戻れて結構なことだ。

こちらは、そうはいかない。これからが本番だ。

すでに視界は半分以上が霞んでいるし、耳もなにかが詰まったようになってよく聞こえないし、心臓は口から飛び出しそうだし、なにしろ久々のことで、酒を呑むとどうなるか、すっかり忘れていた。そういう意味で、新鮮な体験ではある。

これは苦しい。心臓がもたない。呼吸もできない。もう無理だ、と思ったところで意識が飛んだ。

4

虚空に投げ出されたようなこころもとなさを感じ、ヤエトは眼を開いた。

ひょっとすると今度こそ死んだかな、と思う。それくらい、身体の感覚がない。自分が自分であると

いう意識を手放せば、終わりだ。
あたりは虚である。暗いわけではない。暗さすらないというだけだ。もちろん、明るくもない。なにもない。
死にかけたことはあっても、ここまでなにもない空間を意識したことはない。この虚無の中にほどけ、均質化される……それが死というものなのか。
皇女が怒るだろうな、と思った。
まだ死んでよいとは命じていないと、声まで聞こえた気がした。
ヤエト、と皇女の声が呼ぶので、彼は答えた。はい、我が王よ——だが、それは声にならない。
そのまま、どれくらいたったのか。
遠くに光があった。郷愁の念を覚えるような——なつかしさ、あたたかさ、そして一抹のせつなさを含んだかがやきだ。
ヤエトはその光に吸い寄せられていた。みずからの意志で動いたわけではなかったが、気づけば光のかたわらにいて、その中を覗いていた。
光と見えていたのは鏡だった。巨大な鏡だ。幼い頃に幻視した光景に出てくるような——と思う間に、鏡の縁どりの形も色も、まさにあの塔の部屋に置かれたものと同じに変化していた。
幽閉された先祖も、苦悶する皇祖もいない。薬の匂いも水音もなく、ただ鏡だけがある。
ヤエトは鏡を覗いた。
鏡の中には、こちら側にはない景色があった。半透明の、硝子でできたような階段が見えた。それは果てのない深淵へと下っていた。時折、光を反射してちらちらと光っている。
その階段の天辺、鏡の足下に、人影があった。こちらに背を向けて座っている。長い白い髪が、たよりなげに風になびいていた。額のぐるりに、白い布を巻いている。いや、あれは目隠しだ。
あの人だ、と思った。一族の無事と引き換えに皇祖にその力を捧げて幽閉されたあの人物だ、と。

だが同時に思った。そうではないのだ。

姿は借りものに過ぎない。ヤエトが理解できる形が、彼の記憶から掬い上げられ、選ばれただけだ。

本質は、人ではない。

——神だ。

容赦もなく変更も効かない過去の真実のみを示す神、オルムスト。古王国の文字でしるすなら、たった一文字『真実』と書けばよい。

時が刻んだ階段の最上段から、神は過去を見下ろしている。

慕わしさを感じたのも道理だ。ヤエトの中には、この神の力が流れているのだから。

神の顔がわずかに動き、ヤエトの視線は自然にその方向を追った。その瞬間、光が満ちた。

あふれる光のせいで、影のできる隙もない。圧力すら感じるほどの、強い光だった。

光が少しおさまってみれば、大地は業火に包まれ、地上は廃墟と化していた。天高く吹き上がる深紅の炎を見上げ、人々は不安に怯えている。炎の中に黒黒と浮かび上がる影は巨大で、全体を見渡すことはできない。竜だ、とささやく声がした。

邪悪な竜が、天界から墜ちた。

見上げれば天体の運行は変わりなく、空は静寂と規律に支配されていた。泣きたいほど美しい夜空。天界は、地上とは別世界だ。

「見て来たんだ」

不意に耳もとで声が聞こえた気がして、ヤエトはっとした。しかし、鏡のこちら側は無人である。

彼は鏡の向こうを覗き直した。浮かび上がったのは、見覚えのある人影だった。

布でまとめた黒い髪、その下から覗く黒い眸。そしてなによりも強い印象を残す、その声。

「あれで世界が歪んだ。そうだろう」

忘れようもない。去年、都で幻視した男だ。ヤエトの心に、不吉な未来を刻んだ人物だ——さて、この光景は去年視た景色より過去か、未来か。

南方人が立っているのは水辺である。ヤエトは見たこともないが、なぜかそれが海だとわかった。海には雪が降っている。淡彩で描かれたような風景の中で、男の存在だけが重く、明瞭だった。

彼の問いかけの先に立つ人影は、肯定も否定もしなかった。冷たい貌に笑みを浮かべ、黙って南方人を見返しているだけだ。

子どもというほど若くはなく、大人というにはどこか幼さを残した容貌だ。古びた象牙のようになめらかな肌を、白い衣服に包んでいる。髪の色は淡く、これもほとんど白に近い。双眸は不機嫌な空のような青灰色だった。明るいが、その明るさの質は星の光に似ている。あまりにも遠く、冷たい。

「そうなんだろう？」

南方人が問いをくり返す。静かに降りつづける雪が、彼の声が本来持つべきゆたかさを削いでいた。雪の中では、音は響かない。吸い込まれてしまう。

もう答えないのかと思うほど長い沈黙を経て、白い青年がついに言葉を発した。

「見たなら、わかるだろう。あれが、いわゆる魔界を生んだ。その通り、世界は歪んで戻らない」

「魔王の眷属を、退ける方法を知りたい」

「ない」

にべもなかった。だが、南方人は食い下がった。

「あるはずだ。つい最近まで、なんの問題もなかったんだ。あの罅は、あんなに昔からあったのに」

「あれは人とかわした契約に従っているだけだ。おまえが戦っているジャヤヴァーラとやらは――」

「戦ってはいない」

南方人のつぶやきを、白い青年は無視した。

「――復讐に目が眩んだ女が、間違った契約の果てに産んだ娘だ。地上を魔界にしてしまおう、生命を蹂躙せよ、好きなように暴れよ……と持ちかけられれば、欲深な魔物は逆らえない。そういう契約だ」

「だから、その契約をなんとかする方法を」

「ない」

ふたたび、即答だった。

「そんな……なにか方法があるはずだ」

南方人を見て相手は薄く笑い、遠くを指さした。

「あの場所は、世界の罅だ。母神の堕天により、世界は引き裂かれた。天地の二界に地下魔界が生じて三界となったが、天界とは断絶した。地上の声は天界に届かない。どんなに祈っても、騒いでも。黒の御子ほどの力をもってさえ、無理だった。おまえも知っているはずだ」

「それは、もちろん……」

「考えたことがないのか。なぜ氷姫は北の大地の主だったか。あの姫は大地に選ばれ、土地にあふれる神力の焦点となった。それゆえ、自分の土地では万物の支配者たり得るが、一歩でもそこから出れば、無力な娘に過ぎない。沙漠の神々も、似たようなものだ。凝った神力が神となったかれらは、所詮その土地からは離れられぬ。力も、都市をはなれるほど弱くなる。……力は、大地から生まれるゆえに」

ああ、と南方人はささやいた。そんな声さえ、世界をふるわせる力があった。鏡の向こうの、遠い過去から響いてくる声だとわかっていても、こちら側にいるヤエトの心を波立たせた。

黒い眼を伏せ、南方人はふたたび声を漏らした。

「ああ……」

「天地が引き裂かれた後、大地に満ちる力のすべて、新たな神々を生んだ神力の源泉は、魔界にある。ことわりの内側にいる者が、ことわり自体を正すことはできぬ。罅を消さんとすれば、自滅する」

黒い岩場を波が洗っていた。降るそばから雪は冷たく暗い水にさらわれ、海の一部になっていく。南方人の髪やその衣服の肩、袖の上にも雪は降り積もろうとしたが、すぐに溶けて形を失った。

「それでも、なにか方法があるはずだ」

「方法か……」

白い青年の声は、風の音に似ていた。確固としていながら稀薄、曖昧でいながら鋭利。相反するもの

を孕む、その存在自体があやうく見える。
「ジャヤヴァーラは契約の要だ。生きていれば契約にのっとって、次から次へと魔物が出て来る。しかし、殺せば魔物は制限を失い自由になる。つまり、殺さねばならないが、鰾を閉じるのと同時が望ましい。鰾が閉じれば魔物は力を失い、消えるだろう」
「だから、その鰾を閉じる方法は！」
南方人は癇癪を起こしかけている。白い青年の方は、表情も変わらず口調も乱れないままだ。
「地上にも、天界に生まれた神はいる。ほんのわずかだが。天地が引き裂かれたときに地上にいたか、太古の戦に負けて封じられたか……。理由はいろいろだ。そういう者たちから助力を得るのだな」
「どうやって見分けるんだ」
「地上の神は対を持つ。墜ちた母神でさえ、最後にはふたつに分かれた……以来、神力が凝って生まれる神は、かならず対になる。かれらは相反する要素を含み得ぬ。それゆえ純粋で、強いが弱い」
南方人は途方に暮れたように首をふった。
「わからない、俺には」
「対のない神を探せ。力の及ぶ範囲が土地に縛られぬ神を探せ。自慢の声で口説くがよい」
「シルヴァーリエン」
立ち去りかけていた青年の動きが止まった。無表情にふり向いた彼に、南方人は尋ねた。
「あなたは？　地上の神なのか、それとも――」
風が向きを変えて横ざまに吹きつけた。騒がしく服の裾がはためき、白い髪と雪が青年の頬を叩く。
「知っているはずだ。わたしは人でもなく魔でもないが、神でもない。三界のどこにもわたしの居場所はない。妖魔の棲む異界はこの世のおぼろな鏡像だ。わたしもまた同様に、名前を持つ影に過ぎぬ」
「でも――」
「おまえも手を引け」
子どもに教え諭すような口調だった。
「人の世のことだ。人にまかせろ」

「皆、魔物たちが這い出るのは、ジャヤヴァーラのせいだと思っている。誰が誰と結んだの、女王に叛逆したのと陥れ、密告し、宮廷はまともに機能していない……今では、有力者同士が会ったという話だけで首が落ちるありさまだ」

「放っておけ」

「駄目だ。誰かに伝えなければ」

切羽詰まった声に、聞いている方が苦しくなる。だが、ヤエトが彼にしてやれることはない。

ジャヤヴァーラは遥か昔に倒され、世界は救われた。魔物は伝説の中に姿を消した。彼は発見したのだろう、罅を閉じる方法を。

今はそのことを知らずに求めている。自分の知識を伝えられる誰か、助言してくれる誰か。協力者と理解者を探している。

だからなのか、とヤエトは思った。時の流れに刻まれた彼の切望が、ヤエトを引き寄せる。過去視の力を通じ、導かれてしまう。だから、彼はこの男を視てしまうのだ。訴えを、聞いてしまうのだ。

すがりつくような声を無視できる者がいるとは思えない——だが、白い青年の答は変わらなかった。

「人の世のことは、人がなせばよい」

「あなたも半分は人だろう！」

「だが、人として生きたことはない」

淡々とした口調だったが、南方人は返す言葉に詰まった。暫しの躊躇の後、彼は答えた。

「俺は違う」

雪が溶けるように、白い青年の輪郭が大気に滲んだ。最後に、微笑を含んだ声だけが残った。

「おまえの魂は変わらず熱いな、うたびとよ」

南方人の姿も見る間に遠くなり、闇の底に沈む。

静寂があたりを支配した。

ヤエトは今の話を吟味した。筋は通っている。去年の幻視で、南方人は女王を倒し、罅を閉じる手段も見いだしていたのだ。

きっと、真実なのだろうと思う。信じがたいが。

——真実は、信じられる必要などない。

知られる必要すらない。信じ、知らねば困るというのは、今を生きる者たちの勝手な都合である。

しかし、ヤエトもまた今を生きる存在である以上、自分の都合というものがあった。

——恩寵の力が強まっているとは、魔界の蓋が開きかけているということだ。

南方人の姿は消えても、声はまだしっかりと耳に残っている。滅びてしまう、と彼は訴えた。皆、死んでしまうと。それほどの災いが、来るのか。

悪名をとどろかせた死の女王、骨の城の女主人、親殺しのジャヤヴァーラは魔物を率いていた——たしかに、昔語りではそう伝えられていた。比喩的な表現ではなく、事実、魔物そのものだったとは。誰が信じるだろう。魔物など、子どもを怖がらせるための作り話だ。皆、そう思っている。

だが、違うのだ。

ジェイサルドが鬼神と呼ぶのは、おそらく魔界の魔物のことだ。彼がそんなところに迷い込んだのも、彼我の境界が曖昧になっているせいだろう。名前の交換を持ちかけたのは、魔物の方——奴らは、封印をこじ開けにかかっている。

——この身を道しるべに、この世にあらわれんとしているのではないか、と感じるのです。

仕官を望んで告げられたジェイサルドの言葉が、一気に重くなった。事態は着々と進行しているのだ。誰も気づかないところで、ひっそりと。

かつて、契約の要であったというジャヤヴァーラは、とうに死んでいる。次に出て来るとき、魔物たちは自由だ。はじめから、完全に。

ぞっとした。

あの南方人は、やり遂げた。だから、方法はある。あるからこそ、あの男は時の彼方に届けと、自分の言葉を刻んだに違いない。

——未来の誰かが、この伝言を受け取る機会が増えるように。

その誰かが、自分だった。受け取ってしまったのだから、解決策を探さねばならない。

ヤエトは途方に暮れた。

神に訴え、自分の問いに答を与えてほしいと望んでも無駄だろう。

オルムストは過去だけを眺めている。未来はおろか、今この瞬間というものすら、神は関知しない。神託なき神、と学者たちが呼ぶほどだ。

これほど確実に祈りが届く神はいない。言葉にした端から祈りは神のものとなる。だが、神は民を救わない。現実に背を向け、過去だけをみつめつづける。だから、古王国は帝国の前に膝を屈さねばならなかった。過去の遺産のすべてを、ただ眺めるだけで今日や明日へ繋げるのを怠ったゆえに、かれらは帝国の勢いに抗し得なかった。過去を崇め、過去視の力を崇め……そして未来を失ったのだ。

——自分で、なさねば。

だが、なんのために？

それを、心から望んでいるといえるのか。

ヤエトは迷った。迷う自分を情けなく感じたが、剝き出しの心はごまかせない。

この鏡は、過去を覗くための枠に過ぎない。神の後ろ姿と、堆積しつづける時間の層を眺めるための覗き穴。自分の中にあるものはこれなのだ。生まれながらにそなえた恩寵の力の構造だ。

望めば、なんでも視えるだろう。鏡の奥の膨大な情報に索引はない。必要なものを探し当てるのはヤエト自身の仕事だが、努力次第で回答は手に入る。

しかし、引き換えにするものはなんだ？

現世に戻る苦痛を、ヤエトは想った。身体があって、よかったことなどあるだろうか。苦しいだけだ。必要な情報に辿り着くために、どれほどの苦しみを課されるだろう。自分は耐えきれるだろうか？　最後までやり通せないなら、意味がないのだ。

どうせ自分は、ほどなく死ぬ。それまでのあいだなら、まだ魔界の蓋は開かずに済むのではないか。

苦しい道を選ぶ必要はない。自分の死後、世界がどうなろうと知ったことではないではないか。

ヤエトは上方を見上げた。鏡の向こうの空は透明で、どこまでも深く、遠くつづいていた。

——美しいな。

皇女の声が、聞こえた。風の中に立つ姿が、見えるような気がした。

いや、気がするのではなかった。オルムストが顔を上げれば、目隠しに遮られたはずの視線の先に、皇女の顔があった。風に散る金の巻き毛、寒さに赤らんだ頬。淡い色の空、峡谷を渡る鳥たちの声、谷底を流れる川の水音までもが、はっきりと聞こえた。あのときの光景が、彼の前に広がっていた。

——世界は美しいな、ヤエト。

はい、と彼は答えようとしていた。お言葉通り、美しゅうございます、我が王よ。

彼が死んでも、世界はなくならない。それまでの人生で出会い、別れた人々がいる。

かれらは生きていく。

だから、ヤエトも生きねばならない。生きて死ぬまでのあいだに、自分には、なすべきことがある。いや——義務ではない。それは権利だ。彼が望み得る自由の、ひとつのかたちだ。

あの人々が生きる世界を守りたいと、ほんの一瞬でも心の底から思えるなら、それは偽善ではない。ごまかしでもない。誰のためでもない。

過去を知りたいと望みながら、そのための力を恐れていた。興味は鏡の向こうにあるのに、覗くのが怖くて竦んでいた。

少しずつ考えを変え、ようやく鏡の前に立つところまで来られたのだ。ここが、彼の場所だ。

苦痛に怯えることも、苦しむことも。死を恐れることすら、今なら受け入れられる気がした。生きたいと、当たり前に感じることも。

——死にたくないと思うことは、恥ではないのだぞ。

皇女の声に、彼は答えていた。はい、と。

――わたしは、生きたい。

生きよう、とヤエトは思った。与えられた、この恩寵の力とともに。

鏡の向こうで、神がゆっくりと立ち上がった。ひらひらとたなびく白い目隠しの端を手で辿り、結び目の根元を探る。ヤエトの目の前で、神は目隠しをほどいた。指先から、ほどけた布を風が攫った。それは、あたかも長い身体をくねらせて宙を駆ける竜蛇のごとくに、上空に消えていった。

鏡の奥の空は、叡智の光に満ちていた。問いかけは、かならずその答と表裏をなす。鏡の向こうとこちらのように、問いが動けば答も動く。答は問いの影であり、逆もまた真である。

その瞬間、世界のすべては彼の前に開かれて、わからないことなどなにもないように思われた。

背を向けたまま、神が鏡に手をあてた。つられるように、ヤエトも動く。そして、はっとした。

――身体がある？

同時に、凄まじい反射を感じた。

意識が反転した。

なんの前触れもない。ただ戻った。現実に。

ヤエトは愕然としていた。高いところからどさりと落とされたような感触が残っている。意識が飛ぶ前よりはましになったが、心臓は狂おしく存在を主張していた。手足の先は痺れて感覚がない。

皇女とルーギンが床に座っているのが見えた。視界はぼやけているが、半分は灯火が少ないせいだ。まだ夜か、と考えながら眼を閉じた。とても起き上がれそうにない。

頭が重い。どこが痛いとかそういう状況ではない。頭のすべてが腫れ上がっているように感じた。顔が二倍になっていてもおどろかない。

「……囮部隊は少人数で馬を使っている。これは間違いないでしょう。ただ、囮しか発見されないのがおかしいですね」

「夜のあいだに、忍び寄っているとか」
「沙漠の夜は明るいですよ。このあたりは隠れるところもない。しかも、あの間隔で塞があり、昼夜を問わず見張りの兵が立っている」
地図を手に入れたのだな、と思った。きっと場所を示しながら話しているに違いない。
「そうだな。囮に気をとられているあいだに馬で来ているのかもしれないが……」
皇女の声は、自信がなさそうだ。自分でも、説得力がないと感じるのだろう。話を引き取ったルーギンが、その仮説を一蹴した。
「沙漠で馬を走らせれば、砂煙が立たないということはありません。いくら囮が目立っていても、気づかれる。無理ですよ、姫。……なかなかやり甲斐のある相手のようですね。逃走法も、わからない。騎士たちも、黙って見送りはしないでしょう。馬を出せる砦が要所にあり、全域に緊急出動が可能とか」
少し沈黙があって、皇女がつぶやいた。
「やはり、兄上の部下たちが、よほど使えぬのかな。帝国の騎士は強いものと思っていたが、わたしが将軍たちの昔話を信じ過ぎただけか」
「敵の本隊が人数を揃えていると考えるのが間違いかもしれませんね。塞に詰めているのは、徴兵されたばかりの兵だそうですし」
「しかし――」
「殺して、入れ替わるのかもしれません」
皇女は口をつぐんだようだ。
ルーギンの口調はいつもと変わらず、やわらかい。だが、告げる内容には容赦がない。
「塞と塞のあいだでは朝夕に連絡をとりあう決まりがあり、朝は信号の確認、夕は中間地点まで互いに兵を出して割り符を合わせる作業をするそうです。中間地点までの巡邏をかねて、互いを監視しているわけですが……信号も割り符も盗めばよいことですし、少しずつ塞を乗っ取りますね、わたしなら。立ち去る兵が捕まらないのは、立ち去っていないから

と考えれば、理屈は通ります。皆殺しにして死体を隠し、軍から支給された甲(かぶと)をつけて、入れ替わる。現場は混乱しているでしょうし、楽な任務です」

どこから、そんな発想が出てくるのか。おお、と声をあげたくらいだから、皇女も感心したらしい。

「そうか。……それは考えなかった」

「戦いぶりを見るに、先方には人数の余裕がありません。ですから、あまり多くを乗っ取るわけにはいかないでしょうし、時間もかけられない。入れ替わりが発覚したらそれまでです。見破られる機会は多い……消耗品の支給に休暇。これから春先の農繁期です、ある程度は農地に人を戻さないと、暴動が起きます。家族が訴え出たりするものですよ、早く亭主を帰してくれと。そうなっては、ごまかせない」

見て来たような話しぶりだが、たぶん、似たような状況に遭遇したことがあるのだろう。皇女が太守となるまで、ルーギンは各地を転戦していたのだ。

「しかし、襲われた塞の兵は皆殺しにされたか、重傷で未だ動けぬと聞いた。入れ替われば、そうはならぬはずだ」

「それは囮ですよ、姫。入れ替わっている塞では、被害は表面化しないのです。囮の方の塞には、新しい兵が配置されます。顔見知りではないから、入れ替わりにも気づきづらくなる」

「……事実とすれば、巧妙だな」

「なかなかに。ですが、こう考えても、やはり寄せて来るときの移動手段はわかりませんね」

「沙漠から来るのではない、とか？」

ルーギンは首を左右にふった。

「手前も険しい岩山です。沙漠よりは身を隠す場所がありますが……警戒していなければともかく、くり返し、襲撃が成功するのは不自然です」

「……入れ替わりは、あるな。わたしはそう思う」

皇女の声は、今度は確信に満ちていた。ひとつずつ、事実を積んでいくように言葉をつづける。

「小規模な塞は兵の補充も容易だし、潰しても潰し

てもよみがえる。奪える物品も乏しい。敵がなにも考えずに目の前の塞を潰して満足していると思うのは、油断だろう。なにか大きな仕掛けのための準備だと考えた方がよい」

ふたりの話を聞きながら、ヤエトはぼんやり考えていた。天界の神の特徴はなんだといっていたか。

――土地に縛られず、対になる神がいない。

アルハンの清浄神ヤーリルは、駄目だろう。天界から墜ちた邪竜の心臓で汚染された水を、浄化するためにあらわれた神だという。つまり、天地分裂後の神だ。オルムストとターンも違うはずだ。この二柱は対になる。

北嶺のツェートーは、土地に縛られて動けない。あれも除外すべきだ。同じ竜でも、白い青年がいっていた母神とやらとは別の存在なのだろう。竜という共通する要素のせいで、別々の神話や伝説が混ざってしまうのは、よくあることだ。

「では、もっと嫌な可能性を考えましょう」

ルーギンの声に、ヤエトはとりとめのない思考を中断し、ふたりの会話に耳をかたむけた。

「なんだ、それは？」

「はじめから内通している兵が入り込んでいて、なに食わぬ顔で同僚を殺していた場合です」

「……たしかに嫌な可能性だな」

「兵を増やしたそうですしね。徴兵されそうな農家あたりに、それとなく流れ者が紛れこんで、飯を食わせてもらったお礼に兵役をこなそうとでも申し出れば、誰も断りません。喜んで飛びつくでしょう」

また、見て来たような具体的な話だ。ルーギンが経験豊富な指揮官であることを、思いださざるを得ない。だから、まかせておけばよいと思うのだが、どうしても耳をそばだててしまう。

「兵の生死を厳密に確認していないのかもしれないな……信号のやりとりで連絡が緊密なのが、逆に油断を生んでいるのか。旗や凧、割り符さえきちんとしていれば、疑う理由もないでしょう」

「しかし、それなら別働隊の囮を使う必要はないだろう。静かに入れ替わった方が得策ではないか」
「なにか大きな仕掛けがあるのだろうと仰せになったのは、姫ですよ。囮が何回も動けば、味方はどうなります？　また囮だ、と気を抜くでしょう。どんなに注意しても、絶対にそうなる。そこが狙い目です。塞の乗っ取りは、砂煙に慣れさせるための布石。そのうち、大部隊が来ます。もっとも、大部隊といえるほど人数を揃えられるのかは疑問ですが……人数がいれば、こんな面倒な作戦はとりません。囮を追わせて沙漠で戦えば、地の利は沙漠の民にあります。決戦の時も所も選べるなら、勝ちはかたい。それをしないのですから、兵力は乏しいと見ました」
「なるほど」
「何度も塞を襲うことで、目標は塞だと思い込ませる。囮を見せることで、どうせあの砂煙も囮だと思わせる――敵の狙いははっきりしています」
「砦か……」
「御意」
ヤエトは肘をつき、半身を少しだけ起こした。起きたというより、かろうじて布団からはなれた……かもしれない、という体勢だ。ひどい頭痛に襲われて後悔しながら、口を開く。はじめは空咳しか出なかったが、じきに声が出るようになった。
「申し、……上げたい、ことが」
「酔っぱらいは寝ているがよい」
皇女の声は冷ややかだ。ルーギンが苦笑して立ち上がり、ヤエトの枕許に歩み寄ると膝をついた。
何回か咳をして痰と格闘した後、ヤエトは嗄れた声で告げた。
「万全の守備が沙漠の民を圧迫しているのでしょうが……砦を抜くとして、なんの利益があると？」
「そこまでは、わかりません。水場の問題かもしれませんね。どう思う？」
ルーギンが尋ねたのは、ファルバーンだった。青年は表情を変えずに答えた。

「ここから近い水場といえば、元はアルハンだった場所だろう。あそこは汚染されている」
「だが、それなりの人数が、その水で暮らしているはず……ということになるな」
「そのようだ。浄化の手段を持つ者がいるのだろうが、水を使い過ぎれば追いつかない。人が増えるほど事態はまずくなる。汚染された水を飲みつづけると、まず、手足に震えが来る。それから、幻覚に襲われるようになる。しまいには、幻の方がほんとうだと思い込む。体力がなければ寝込んで死ぬ。体力のある者は沙漠に迷い出て、やはり死ぬ」
ファルバーンの口調は冷静で、それだけに寒々しい現実が感じられた。すべて経験済みなのだろう、と思う。浄化の力が追いつかず、穢れた水で人が死んでいくのを、彼は眺めて来たのだ。
ルーギンはわずかに眉根を寄せてつぶやいた。
「蟻も這い出ることができない防衛線が問題か」
「なんのことだ?」
「博沙国の守りの固さゆえに、沙漠の民には戦う以外の選択肢がない、ということです」
皇女の問いに答えて、ルーギンは立ち上がろうとしたが、その服の裾をヤエトは摑んだ。かろうじて、間に合った。本題はこれからだ。
「なんです?」
「危険です」
「なにが」
「《金獅子公》です」
ルーギンの雰囲気が硬化した。
「あの男がどうかしましたか」
「王から《天地輪》での話は……?」
「いいえ、なにも」
ヤエトは眼を閉じた。頭が痛い。ほんとうに、痛いのだ。だが、これは指摘しておかねばならない。
「三の君と《金獅子公》の接触は、ひろく知られていたようです。もっと早く気づくべきでした。……ご父君が、陥れられるかもしれません」

「結構なことじゃないですか」
「あなたも、連座させられるでしょう」
「あの男が滅びるなら本望です」
「わたしが困る」
皇女が立ち上がった。叫ばないでくれと思いながら身構えたが、少女は思いのほか冷静で、声をはりあげることはしなかった。
「そなたが父を憎んでいることは知っている。叔母上から、聞いた」
「左様でしたか。しかし、なぜそんな話に？」
「そなたといれば安全だと教わったのだ。絶対に、わたしに手を出したりはせぬからと」
騎士は苦笑した。
「実にあのかたらしい」
「ルーギン……どういえばよいか、わからぬ。わからぬが……ただ、そなたが《金獅子公》を憎いなら、それはそれでよい。しかたのないことだ。だが、憎さのあまり、自分まで不幸になろうとするな」
騎士は眼をみはった。ヤエトも一瞬、頭痛を忘れた。
皇女はたまに、一足飛びに問題の焦点を突く。
「姫……」
「父を叩き落とす覚悟があるなら、足を摑まれて一緒に落ちるなどというみっともない真似だけは、するな。それができぬなら、父を許せ。許せぬまでも、せめて許すふりをせよ……いつか、心が形に従うこともあろう」
「姫、わたしはあの男を許しません」
「絶対に？」
「絶対に」
ルーギンに迷いはなかった。いつものように胡散臭い笑みも浮かべず、彼はまともに答えていた。
皇女も、まっすぐに言葉を返した。
「それでも、そなたは幸せになってよいのだ」
今度は騎士は答えなかった。上辺だけ肯定するような返事をしても皇女には見破られるだろうが、多

少はとりつくろえばよいのに。
皇女はため息をつくと、告げた。
「ルーギン、そなたは都へ行け」
「しかし――」
抗議しかけた騎士の口を、皇女は視線でふさいだ。
「三の兄上が大貴族のところで姿を見られた、と話を持ち出したのはわたしだ。名告ってはいないがな。《金獅子公》のことだと誰かが応じた。即座にだ。ヤエトの疑念はもっともだ。そなたの父は、陥れられようとしているに違いない。報せて、力になってやれ。なにも《金獅子公》を蹴落とすための策とは限らぬ。そなたを除き、わたしの力を削ごうという作戦やも知れぬのだ。心してかかれ」
「姫、ですが」
「命令だ。《金獅子公》が家名を失えば、経緯次第ではそなたも同じ道を辿るのだぞ。そんなことで我が騎士を失うつもりはない。行け！　行って、解決して来い。そなたを信じている」
ルーギンは立ち上がると、あらためて皇女の前に膝をつくと、低い声で宣言した。
「御命、たしかに承りました。ご信頼に応え、かならずや目的を果たして参ります。この剣に懸けて」
皇女は笑顔でそれに応えた。
「それでよい。行って参れ」
騎士は剣をおさめて一礼すると、ヤエトを見た。
「姫を、お願いします」
うなずくしかなかった。《金獅子公》のもとへ派遣できるのはルーギンだけだ。ほかの誰でも、あの大貴族がまともに話を聞きはしないだろう。皇女が皇帝のところに置いている伝達官を使うわけにもいかない。あれは皇帝との連絡用だ。まさか皇帝に《金獅子公》を呼び出させ、胡乱な噂があるのだが……と、やらせるわけにはいかない。それこそ、揉み消しようのない大事になってしまう。
都まで、一日もあれば着く。騎士が部屋を出て扉が閉まると、皇女は困ったようにヤエトを見た。

「あれで、よかったと思うか？」
ヤエトは無言でファルバーンを見た。視線が合うと、青年はうなずいた。
「扉を守ろう。なにかあれば声をかけてください」
察しがよくて助かる。皇女がただの従者でないことも、気づいているだろうが。
青年が部屋を出ると、皇女はヤエトが横になっている寝台の縁に背を預け、床に座った。いくら高級な絨毯が敷いてあるといってもどうかと思うが、こまかいことを注意していられる状況でもない。
ヤエトは息を吐いた。
「ご立派でいらっしゃいました」
「ルーギンの幸せを望むかどうかについて、そなたと話したばかりだったな……」
「望むと、お答えでした」
「だが、わたしのしたことが、あの者に幸せをもたらすかはわからぬ」
「幸せは、人から与えられるものではありません」
皇女を励ますつもりで口にしたが、むしろ否定の言葉ととられるかもしれない。寝台に背を向けている皇女の表情を窺うことはできず、ただ返答までの間が長いことで、失敗したなと感じただけだった。
「ルーギンは、叔母上よりわたしに仕えることを選んだのだ。せめてそれに報いられる程度には、よき主君でありたいと思う」
十分ですと答えるのは容易だが、皇女が自身で納得せねば意味がない。ヤエトは話を変えた。
「《金獅子公》は、三の君を陥れようとして、逆にはめられたのかもしれません」
「……また、三の兄上だというのか」
「嘘をつけぬ《天地輪》で、はっきり《金獅子公》の名を出したのです。よほど確固たる証拠を握っているか、本人かのどちらかでしょう」
「しかし、兄上に利があるのか？」
「三の君は姿を見られただけ。実際、疚しいことはなにもしておいでではないかもしれません。昨年の

件があります、陛下の監視も厳しいはず。《金獅子公》は、どうでしょう？　探られたら痛い腹が、いくらでもあるのではないかと」

表向きはどの皇子とも結んでいないが、あの大貴族になんの野心もないはずがない。かならず、どこかの勢力と繋がっている。

「そうか……」

皇女にはいえないが、第三皇子は妹を憎んでいるに違いない。父の監視下に置かれている自分に比べ、妹は北嶺王だ。彼は妹を祝福できる器ではない。

気に入らないものは除く人だと、かつて皇女は兄を評した。実際は、それより陰険な性格だろう。皇女の手駒を取り上げ、自由を奪い、自分よりもさらにみじめな境遇に陥れたいと考える。自分を傷つけたものを、彼は許さない。たとえ皇女にそんな意図がなかったとしても。

「そなたは、三の兄上に厳しいな。殺されかけたからか？」

そういえば、あのときも死にそうだったな、と思い出す。今よりまずい状態だったかもしれない。いや、確実にまずかった。

「王はわたしを、どうしようもない死にたがりだとお考えだったのでは？　死にたがりであれば、命を狙われるのは望むところ。やり遂げてくださった方がよかったのにと恨むのがせいぜいでしょう」

「ならば、それ以外の理由を申してみよ」

「お名前を……あなた様の心の自由を奪おうとなさったかただからです」

同母の妹が信じて預けた伝達官を殺し、妹自身には死よりもむごい運命を与えようとした――それなのに、皇女はまだ第三皇子を信じたいというのか。

ひょっとすると自分は第三皇子よりも皇女に、兄に向けられたその無邪気な信頼に苛立っているのかもしれないと気がついて、ヤエトは顔をしかめた。

――馬鹿か、俺は。

皇女が兄を信じるのは当たり前とわかっている。

それを踏まえて、すべてを考えるべきだ。そして今は、なにを考えることもできないほど頭が痛い。あまりの頭痛に吐き気までしてきた。

「わたしは、死にたがりではありません」

つぶやくと、皇女は肩越しに彼をふり返った。

「そうであれば、わたしも嬉しい」

「では、お喜びください」

なんとか笑顔を捻り出して、ヤエトは答えた。だんだん頭がぼうっとして、なんの話をしているのかわからなくなってきた。

「とにかく、ルーギンをお信じになると仰せになったのです。最後まで信じてやってください。彼のことは彼にまかせ、王はここで、王のおできになることを。しかし、考えてみればここには王はおいでにならないはずですので……そうですね、従者としてのおつとめを、よろしくお願いします」

皇女は首をかしげた。

「なにをせよと？」

「博沙王のご依頼を果たすため、明日は偵察に参りましょう。《黒狼公》の鳥を御するのは、お付きの従者の仕事です」

「……動けるのか、その状態で」

「いざとなれば、ナオ殿の薬があります」

皇女は立ち上がり、ヤエトを見下ろした。

「実のところ、そなたにつける薬はないのではないかと思う」

5

結局、偵察には行けなかった。翌日、ヤエトは熱を出したのだ。

朝食の招きを断ったとき、偵察は急がないといわれたと応対に出たファルバーンに聞かされ、皇女は安堵したようだ。ナオの薬を使いたくないらしい。治すための薬ではないのだ。効果が切れれば、服用前より体調は悪化するだろう。

しかし、朝食につづいて昼食の招きも断らねばならなかったため、発熱したことを第二皇子に報せないわけにはいかなくなった。

第二皇子はいたわりの言葉と見舞いの果物に、医師まで遣わしてくれた。至れり尽せりだ。

医師の来訪を告げたファルバーンの表情の険しさに、ヤエトは自分がそんなに死にそうな顔色をしているのかと疑った。だが、青年は顔を寄せると、物騒な言葉をささやいた。

「毒です。大きな荷物を持っているので、あらためました。薬瓶と見せかけていますが、毒です」

「ああ……薬と毒は似たようなものですよ。使う時期と量を間違えば、薬も毒になる」

「違います。呪毒です」

安堵させてくれよ、とヤエトは思った。なんなのだ、その耳慣れない言葉は。

「穢れそのものです。内側から、人を食らいます。わかります——水薬ですので」

なるほど、粉だと察知できないのか、とヤエトは思った。そして、今にも死にそうな自分を殺すのに、わざわざ毒など使わなくても、とひそかに思った。

「《黒狼公》は、特別の薬師から処方された薬しか使わぬからと、追い払いなさい」

ついでに思いついて、つけたした。

「北嶺の将軍が昨晩遅くに発ったのも、わたしの身を案じて薬を取りに行ってくださったのだと」

「引きずり込んで、誰の依頼か吐かせなくても？」

「それをすると、後がない。追い返せば、気づいていないふりができる……選択肢は多い方がよい」

ファルバーンはうなずいて扉の方へ戻ると、ヤエトの命令通り、医師を追い払った。控えの部屋にいた皇女がやって来て、なんの騒ぎだ、とファルバーンに尋ねた。ファルバーンが正直に説明すると、皇女は猛烈な勢いで怒りはじめた。

「お静かに願います」

声をかけると、皇女はふり向いた。毛が逆立って

いるのではないかと思う。それくらいの雰囲気だ。
「これが黙っていられるか！」
「二の君のご意向と決まったものでもありません」
「部下の行動の責任をとらず、なにが王だ。兄上に申し上げて来る」
「いけません。ファルバーン、お止めしてくれ」
青年は苦もなく皇女の腕を捻り上げた。皇女は少しおどろいたようだが、すぐに足で相手を蹴りつけようとしはじめた。臑だの膝の裏だのを狙っているあいだはいいが、足のあいだを狙うのはどうなのか。いったい誰だ、やんごとない立場の少女にこんな実戦的な知識を植え付けたのは。
いや、そんなことはどうでもよい。ヤエトは痛む額をさすりながら考えた。
——皇女がいては、まずい。
ヤエトを亡き者にしたがっているのが誰かはわからないが、皇女がいると知られて無事で済むとは思えない。ファルバーンの正体が割れるのもまずい。
つまり、ふたりで逃げてくれると都合がよい。
「今さらですが、ご紹介しておきましょう。王よ、あなたの腕をとらえているのは、アルハン王家の末裔、最後の王の息子にして清浄神の恩寵を享けし者、ファルバーンです。ファルバーン、そちらの小さな淑女はわたしがお仕えしている北嶺王にして真上皇帝陛下のご息女にあらせられる」
皇女の動きが止まった。
「ヤエト、なにをたくらんでいる」
「人聞きの悪いことを。王を無事にここからお逃がしする手段を、必死で考えているところです」
「狙われているのはそなたであろう！」
「王がここにおいでと知られたら、狙いも変わるでしょう。《黒狼公》の薬を取りに行くからとでも理屈をつけて、鳥に乗って逃れてください」
「できるか！」
「ファルバーンをお連れください。まだ、帝国にとっては叛逆者です。それを連れて博沙王を訪ねたと、

喧伝されても困ります」
　皇女はヤエトを睨みつけた。
「わたしはただの従者だ。あるじの側を離れるのも不自然であろう」
「わたしは護衛です」
　ファルバーンと皇女は視線を合わせた。一瞬で、休戦協定が結ばれたらしい。ファルバーンは皇女を自由にした。なんということだ。
「ファルバーン、聞きなさい。わたしが《黒狼公》としてある程度の権力をふるえるのは、そちらの北嶺王の存在あってこそです。わたしが死んでも、沙漠の民のことは心配いりません。部下たちがなんとかしてくれます。ですが、北嶺王に万が一のことがあれば、わたしはもちろん、部下たちにも沙汰が下る。逆に、皇女殿下のお命をお救いすれば、あなたと母上には恩赦が与えられるでしょう。皇女殿下が、かならず真上陛下にお口添えしてくださいます」
「ヤエト」
「わたしはファルバーンに話しているのです。王はお静かになさってください」
　ファルバーンが、考え深げに口を開いた。
「わたしは、公をお守りするためにここにいる」
「それなら王も守ってもらわねば」
「この少年は、従者です」
　平然といってのけられ、ヤエトはもちろん、皇女も眼をまるくした。青年は、なんでもないことのように言葉をつづけた。
「従者ではないと知られればまずいのですから、従者で結構。ご命令とあらば、従者もあわせて守ります。しかし、それ以上の奇異な行動をとれば、却って相手に疑われる。すでに、厩舎への道が閉ざされていないとも限らない」
「疑われても、逃げ延びてもらった方がよい」
「わたしはそうは思わない」
　すかさず口を挟んだ皇女に、ファルバーンはにこりと笑って見せた。

「わたしもです。意見が合ったな、チビ」
皇女はファルバーンを睨んだだけで、文句はいわなかった。怒りを向ける対象は、いくらでもある。
ヤエトは息を吐いた。かれらの意見もそれなりに妥当なもので、今は逆らう元気がない。気力体力は温存しておくべきだろう。この先にそなえて。
「……では、護衛と従者らしくふるまってください。ただ、わたしがそれを許すのは、あなたがたに逃げてもらうためです。三人揃って捕まったら終わりです。逃げるというのがお嫌であれば、わたしを助けるために助勢を得に行くのだとお考えください」
「助勢？　騎士たちと合流するのか」
「それでなんとかなればよいですがね……」
同行した騎士は少数だ。数ではかなわない。
「誰の差し金だと思う」
「わかりません。首謀者の権力が強いほど、今後の措置は臆面もない方向へ進むでしょう」
薬を装って毒を盛るなどという迂遠な方法はとらず、口実をつけてヤエトを捕縛しようとするとかだが、そこまで口にすると、では脱出しましょうという話になりそうだから、黙っていることにした。起き上がることを考えただけで、吐き気がする。逃げるなら自分は置いて行ってほしい。
しかし、皇女も同じような結論に至ったらしい。
「逃げるか」
「わたしを持ち運ぶのは、王がもう少しお育ちになってからになさった方がよいでしょう」
「たわけが。人にやらせよと申したのはそなたであろう。そこの護衛に運ばせれば話は済む」
「《黒狼公》が逃げるのは、いよいよそれ以外に手段がなくなったときにしたいのです」
「なぜだ」
ヤエトは額をさすりながら答えた。
「まだ、当地での目標をひとつも果たしておりません。二の君の孤立を解消することも、北嶺の武力を見せつけることも、恩を売ることもなにもです」

「恩も売るのか」
「高く買ってもらいたいものですね。売ることができるものは、限られておりますから」
「鳥か」
「鳥は売れません、王よ」
「面倒くさい奴だな。さっさと正解を教えよ」
「信頼です」
皇女は眼をしばたたいた。
壁にもたれてやりとりを見守っていたファルバーンも、わずかに居住まいを正したようだ。
「助力すると宣言したら、それをやり遂げる。途中で状況が変わっても、多少なら退却してはなりません。多勢に無勢であっても」
「信頼を、金で売るのか」
「金は物の交換を仲介するために便利な道具に過ぎません。信頼で購えるものは、物品だけだとお思いですか？　仰せになったでしょう、二の君は今回の申し出を、あまり信じてくださっていないようだと。このまま姿をくらませば、不信は募るばかり」
皇女がくすりと笑った。
「なのに、そなたはわたしに逃げよというのだな」
「王は、ここにおいでにならないはずのおかたです。それゆえ、お帰りになっても問題ありません。むしろ、帰っていただかねば困るのです。わたしは《黒狼公》として、北嶺王に鳥と兵をお借りした上で、博沙王たる二の君にご助勢するため、はるばるここまで参りました。食い逃げはできません」
「では、わたしがここにいると明かしてしまえばよいであろ――」
「絶対に駄目です」
ヤエトは急いで皇女の言葉を遮った。
「なぜだ」
「陛下のお言葉によれば、王が任地を出るのは望ましくないことのはず。博沙国においでになると知られては、どこからどんな難癖をつけられるか……」
「かまわぬ」

「いいえ、かまいます。王は北嶺国を背負っておいでなのですよ。都に戻れと陛下に命じられでもしたら、如何なさるおつもりですか。駄目です。左様なことをなさるのであれば、自害します」

皇女は頭を抱えた。ああもう、とつぶやいたようだが、それはこちらの台詞だと思う。

——ああもう！

どうにでもなればよいのだ。相変わらず頭痛はひどい。この状態でまともに考えられるはずがない。

しかし、そうもいってはいられない。

扉の外で案内を乞う声があり、ファルバーンは急いでそちらへ向かった。ほそく開いた扉の向こうから、低い話し声が聞こえる。ややあって、戻って来たファルバーンは冷静に告げた。

「皇妹殿下がお見えです」

ヤエトは皇女と顔を見合わせた。

「ご面会できぬほど、加減が悪いとお断りを」

「わたしが叔母上にお話ししてみようか」

「なりません」

行け、とファルバーンに目線で指示してから、ヤエトは手で目もとを覆った。この頭痛はどうやったらどこかへ行ってくれるのだろう。酒を呑んだ自分が悪かった。ほんとうに反省している。今すぐ頭痛が治るならば、二度と呑まないと誓ってもいい。もっとも、今すぐに頭痛が消えなくても、生き延びられたら二度と呑まないだろう。もちろんだ。

「叔母上のお指図だと？」

「そうは思いませんが……お命が危なくなるというのでもない限り、明かされませぬように」

皇妹が信じられないのは、彼を殺そうとたくらんでいる人物かどうかとは、別の次元の話である。

戻って来たファルバーンが伝えた皇妹の言葉は、ヤエトの頭痛をさらに悪化させるものだった。

「重体の病人にすがって泣いている小さな女の子がいたら、引き剝がして北嶺に連れ帰っておやりなさい、といわれました……」

——ばれてる。

ヤエトはもう考える気もなくした。皇妹は気づいていないだろうと思った自分が間違っていたのだ。しかし、彼女に手の内を明かす気にもなれない。

「小さな女の子だと？」

皇女は変なところにひっかかったが、ヤエトは無視して寝ることにした。こう頭痛がひどくては、どうしようもない。

不安定な眠りと曖昧な夢の狭間で揺られること暫し、気がつくと室内は暗くなっている。頭痛が少しはましになったから、寝た甲斐はあったと思う。

なにごとも性急に済ませたがる第二皇子は、偵察ならおまかせをといっておきながら、ひっくり返って役に立たない《黒狼公》をどう思うだろう——と考えて、ヤエトは眉根を寄せた。

——性急な人のはずだ。

朝食の誘いを断ったときはまだ、それほど具合が悪いとは明かしていなかった。なのに、使いの者は、偵察は今日でなくてもよいといった……。

扉のところに来ているのは、第二皇子ではなく、別の誰かの命令で動いている者だ。ヤエトの命を狙っている者は、偵察されては困るのだろう。

本物の第二皇子は、ヤエトが偵察に出かけないという報告を聞いて、苛立っているはずだ。

——しかし、誰だ。

皇妹ではない。彼女なら、ヤエトを殺すより、うまく利用しようとするだろう。短絡に殺したがるのは、もっと単純な思考しかできない者だ。

——それどころではないのだがなぁ……。

鏡の視せた光景が生々しいあいだに、天界に出自を持つ神を探すという仕事に着手しておかねば、雑事に押し流されて、忘れてしまいそうだ。

といって、皇女や自分自身が生き延びないと、そちらの任も果たせなくなってしまう。

なんたる忙しさだ。仕事をかたづければ暇になるはずだったのに、やればやるほど仕事は増える。

どうすれば楽に隠居できるのかという深遠な問いに頭を悩ませていると、皇女に声をかけられた。
「具合はどうだ」
「多少は持ち直したようです」
頭痛の程度は、動かなくても痛いという段階から、動くと痛いという段階に変化した。素晴らしい。
「そうか。よかった」
「ご心配をおかけしました。……ファルバーン？」
「ここに」
「騎士たちからなにか連絡は？」
「ありません」
おかしい、と思ったのが表情に出たのだろう、ファルバーンは言葉をつづけた。
「公と従者だけを置いて、様子を見に行くわけにも参りませんので」
「正しい判断です。……もう《天地輪》は終わりましたか？」
だしぬけな問いだったが、皇女はうなずいた。
「終わった。今回は、あまり騒ぎは起きなかった。《金獅子公》の話も出なかった」
「二の君は、わたしについてなにか仰せでしたか」
「今日は偵察に行ってもらう予定だったが、旅の疲れがあるらしく、日延べすることになったと」
——やはり、第二皇子は早く済ませたいのだ。
偵察を遅らせたい、できればやめてもらいたい、という人物がいる。その人物は、第二皇子の家臣団の中ではそれなりの位置にいる人物だろう。下っ端ではあり得ない。
「鳥たちの様子を探れますか？」
「うーん……なんだか寝ているようだな」
「起こして、騒がせることはできますか」
暫し、皇女は無言で眼を閉じていたが、やがて、どうしよう、とつぶやいた。
「駄目だ、反応せぬ。いったいなにが？」
「薬でも与えられているのでは」
巨大な鳥を朦朧（もうろう）とさせる薬を調合するなど、誰に

とってもはじめての経験だろう。用量を間違っていなければよいが。これ以上、鳥は失えない。

騎士たちも無力化されているのだろう。いくら剣の腕が立っても、毒とは戦いようがない。

皇女の表情が暗くなった。同じところに思い至ったのだろう。様子を見てくると飛び出さないだけ、自制が効いている証拠だ。

「首謀者を暴き出しましょう」

ヤエトはゆっくりと身を起こした。よし、頭は痛まない——いや勘違いだった、と早合点を呪いながら奥歯を噛み締め、寝台の上に座った。

「ファルバーン、姿見をここへ」

青年が命じられるまま隣室に姿見を取りに行っているあいだに、ヤエトは皇女の視線をとらえた。珍しく、怯えの色が見える。彼がなにをいいだすか、予測しているのだろう。

「お力を、お貸しください」

「しかし——」

「ターンの神は、わたしに恩寵を賜った古王国の神と対になる存在です。あの遺跡から、神力を得られます。ずいぶん恩寵の御しかたもわかって来ました。体力の損耗も抑えられるでしょう」

「だが、ヤエト——」

「うまくいくにせよ、いかぬにせよ、王は北嶺の伝達官にご連絡を。北嶺から鳥と兵をお呼びください。わたしが北嶺と連絡をとれると思っている者はいないでしょう。伝達官を連れていませんから。敵の油断を利用しない手はありません」

「わかった。だが、その兵はどう使うのだ」

「それは、王のご判断で」

皇女は眼をみはった。なにかいおうと口を開いたが、少女の心の内が言葉になることはなかった。

もっと自分をたよれ、と皇女はくり返しヤエトに命じた。その言葉は正しい。ヤエトはもう少し自分のあるじを信頼し、判断をさせるべきなのだ。

なにもかも教え諭して導くばかりでは、駄目にな

ってしまう。彼が側にいないとき、どうする？ たとえば《天地輪》でもそうだ、臣下の助言を聞く機会を与えられなくても、皇女が自信を持ってふるまえるようになってほしい。

ヤエトは皇女の意志を決定する存在ではない。

皇女ならできると信じて、まかせよう。

信頼を売れといっておきながら、おのれの主君を信じられないのでは、話にならない。

「わたしの助言が必要でしたら、ナオ殿の薬をお使いください」

薬を使うかどうかも皇女の判断にまかせるのだから、実際には状況はなにも変わってはいない。だが、明言しておけば気が楽になるはずだ。

「……わかった」

目に見えて皇女の緊張がとけたので、ヤエトは苦笑した。少し嬉しいと感じた自分を笑ったのだ。

たよられるのが嬉しいなどというのは、これからを考えれば邪魔な感情だ。

「ファルバーン、姿見をもっとそちらへ寄せてください。扉と向かい合うように。もう少し近く。わたしの手が楽に届くと助かります」

毛足の長い絨毯に苦労しながら、青年が鏡を置き直した。ヤエトはそれに手をあてた。

ゆっくりと、息を吐く。そうしながら、彼に呼吸法を教えてくれた伝達官のことを想う。さしたる苦労も見せずに、さっと皇女の言葉を伝えていた。一瞬で、自分を空の器にすることができるほどの修練を積んでいたのだ。

第三皇子の邸で世話になった伝達官も、切り替えは早かった。ウィーシャは……彼女はつねに器のままでいるようなものだった。だから、乗っ取られてしまったのだろうか？

「邪魔が入らぬようたのみます、ファルバーン」

「はい」

もう一方の手を、あらためて皇女にさしのべた。

「お手を、我が王よ」

先祖が幽閉されていた塔の部屋に、鏡があった理由はなにか。憶測が当たっているかどうか、これではっきりするはずだ。

「視える限りのものを、追いましょう」

「ヤエト」

「王のお力がなければ、できぬことです」

なぜ、と彼は皇女がかさねた手を握りながら不思議に思った——なぜ、つらそうな顔をするのだろう。

そのまま眼を閉じ、鏡の向こうに神を想う。

息を吐いて、自分を器にする。空にする。

——ほら来た。

光の筋が届いた。廃墟となった神殿から来るのだろう、以前より微弱なことは否めないが、やはり独力で力を使うよりずっといい。頭痛が吹き飛び、意識が明晰になる。

——さあ、視せてくれ。

扉の前に立つファルバーンを念じ、あの時をたぐり寄せる。と同時に、自分を飛ばした——鏡の反射に想いをかさね、時だけでなく、空間をも飛んだ。

遠かったファルバーンの姿が間近になり、その肩越しに男が見えた。黒い髪に布を巻いた、年輩の南方人だ。不満げに尋ねている。

「特別な薬だと？」

「そうだ」

よし、間違いない。ファルバーンに追い返された医師だと確認して、ヤエトはさらに時を戻した。

医師が歩いていく。後ろへ移動する。迷路のような建物を、脇目もふらずに後ずさる。後ろを向いたまま部屋に入る。荷物を置き、また出て行く。

——さあ、どこだ？

かつて、彼の先祖が皇帝の暗殺をたくらんだ者を追ったように——返り討ちにされた暗殺者が依頼を受けるところまで、さらにその背後に控える存在まで時を巻き戻して見届けたように、ヤエトは時間を戻っていた。

自分がいる場所の過去しか視られないという制限

は、今は無意味だ。竜種の力は距離を飛ぶ。古王国の恩寵は時間を飛ぶ。契約によって結びついたふたつの力は、双方を飛び越す。

それを外へ押し出すために必要だったのが、鏡なのだ。古来、鏡は呪具であった。異界を覗くための窓であると同時に、呪を跳ね返すためにも、力を集める道具としても使われた——ヤエトはいろいろな例を知っている。自分が使うことになるとは、思いもよらなかったが。

荷物を置いて身軽になった医師の辿った時間を、ヤエトはさらに速度を上げて巻き戻しつづけた。医師は砦の奥へと戻る。そして、ついに辿り着いた。

「後悔すると思うわよ、あなた」

皇妹の声に、ぎょっとして時が止まった。

医師が戻った部屋の中にいる人影は、彼を含めて三人。皇妹と、右将軍だ。

——もっとだ。

ヤエトはさらに時を戻し、そこに自分を引っ掛けた。過去へ遡るための力を鈎にしてその場所に掛け、固定してから時の流れを正常な方向に、普通の速度で押してやった感じだ。これで、会話が聞ける。

「あの預言者を始末すべきだったな」

医師の声だ。医師も人が変わって見える。背を伸ばし、顔を上げてゆったりと室内を歩く姿は、ファルバーンに追い返されたときとは印象がまったく違う。若い男が、ちょっとした化粧と所作で変装していたというのか……それにしても、見事な変身だ。

「左将軍も余分なものを拾って来おって」

「あれは生粋の武人だもの、難しいことを考えるおつむはないわ」

「わたしは武人ではないと？」

問い返した右将軍に、皇妹はやわらかに微笑んで答えた。

「賢い男と愚かな男だったら、わたしがどちらを好きか、わかっているでしょう？」

答になっていなかったが、右将軍はその話題をそ

れ以上つづける気はなかったらしい。ああ、と鬱陶しげに自分の顔の前で手をふった。

「うるさい、……うるさい」

「かわいそうな人」

言葉とは裏腹に軽蔑の色を浮かべ、皇妹は右将軍の耳もとでささやいた。

「この男はもうもたないわよ。三日もすれば壊れるわ。自分のしていることがわかっているの、おまえ」

右将軍の口が、動いた。顔面の、それ以外の部分とは無関係に、口だけが動いた……そんな印象だ。

「もちろん。これは実験です」

「陛下が疑っておいでなのは？」

「もとより」

右将軍の眼はなにも映していないようだ。なのに、声はゆたかに響く。

――誰だ？

誰かが右将軍の口を借りている。

「《銀鷲公》の血筋は、実に便利です。竜気が強いのに、ろくな訓練を受けていない。伝達官などより、ずっと簡単に入り込める」

「恩寵の力を皇家が独占するのも考えものね」

ため息をついて、皇妹は身を起こした。医師を演じていた南方人に向き直り、遠慮なく尋ねる。

「《金獅子公》はどうなっているの？」

「わたしはなにも存じません」

「あら、そうなの？　彼の息子が、原因不明の病に倒れたと聞いたわ。いかにも、そなたの手口だけれど……なんでも、夜になると暗いところから呼ばれるのですって。名前をね」

「ご長男はお元気なのですから、《金獅子公》のお家は安泰。それに、殿下も……ご長男さえご無事でいらっしゃれば、とお望みなのでは？」

皇妹はかすかに眉をひそめたが、その問いには答えず、ふたたび右将軍に尋ねた。

「あの男を使えると思ったの？」

「《金獅子公》ですか？　それは順番が違う。向こう



がこちらに声をかけた。だから応えてやった。応えかたが少しばかり彼の思惑と違っていても、しかたのないことではありませんか」
「彼は、自分より偉かったり強かったりする者は嫌い。自分より弱くて卑屈な人間も嫌い」
「自分のことしか好きではない？　なら、わたしと同じですね」
皇妹は声をあげて笑った。
「駄目よおまえ、それは間違っているわ」
「どこがでしょう」
「たくさんよ。まず、彼は愛を知っている男よ。自分のことは愛しているし、自分の分身としての家族も愛しているわ。脅しのためとはいえ、息子に手を出したのは、高くつくでしょう」
「脅しだなんて」
「おまえは愛を知らない、だから彼とは違う……」
皇妹の声は冷たく、容赦がなかった。
彼女の口からこぼれる言葉が、こんなに冷酷に響いたのを聞いたことがあっただろうか。
「重要な差よ、かわいい子。おまえは自分自身をすら愛していない。だから、愛を理解できない」
「それがなにかの障害になりますか？」
皇妹はいつものやさしげな口調に戻って答えた。
「わかっていないのね。それに、わたしを目の前にして、自分のことしか好きではないなんて口走るのは、礼儀にはずれたことよ。わたしのことだけは愛していると、嘘でもいわなければ」
「それは失礼をいたしました」
「いいのよ、かわいい甥が少し口下手なくらい、許してあげるわ」
――甥。
彼女の甥は七人いる。その内の誰か、まだ名指しはされていないが、もはや特定されたも同然だ。
伝達官よりも楽に入り込めるといった。手下として使っている南方人の顔にも、見覚えがある。その上、協力を申し出たと《金獅子公》の名まで出た。

——第三皇子か。

ヤエトは皇女の手を握り直した。皇女がひるんだら、この場に留まれないかもしれない。だが、過去の情景は遠ざかることなく、遅滞することもなく、忠実にできごとをなぞって進んだ。

「このあわれな男と《金獅子公》が繋がるように、手引きしてやったのね？」

「偉いと嫌い……なのでしょうね。《銀鷲公》と彼が支持している第二皇子を追い落とすための手蔓があると教えたら、すぐに乗って来ましたから」

「何度か接触させて、既成事実を作って……でもいいの？　おまえも疑われるでしょう。《金獅子公》といるところを、誰かに見られたそうじゃない」

「多少の危険は覚悟の上です」

皇妹は両手で右将軍の頬を挟むと、彼の上に屈み込み、吐息がかかりそうなほど顔を近付けた。

「ほんとうに危険なことですよ、おまえ」

《金獅子公》がわたしの名を出せば、次男が死にます。どんな砦の奥に隠して、護衛の兵で十重二十重に囲もうとも、彼のかわいい息子は死ぬ。愛を知っているというのは不便なことですね、叔母上」

「あわれで残酷なことね」

「子が親の野望のために殺されることですか？」

「愛を知らぬということがよ。……それで、二の君の名前はわかったの？」

右将軍から身を離した皇妹に、南方人が答えた。

「殿下からお聞きできるかと思っていたのですが」

皇妹は笑った。

「無理よ。そなたとは取り引きしないわ」

「皇子殿下とは？」

「さっきもいったでしょう。賢い男と愚かな男、わたしがどちらを好きだと思うの？　わたしをこんなことに巻き込まないで」

「お命を、頂戴することもできるのですが」

「そなたも死ぬわよ」

答えるなり、皇妹は数歩の距離を一気に詰めて、

南方人の胸に手をあてた。わずかにたじろいだ男の顔に顔を寄せ、彼女はささやいた。やわらかな声で、微笑さえ浮かべて。

「そなたがわたしを殺す方法はひとつかふたつ。けれど、わたしがそなたを殺す方法は無限にあるの。どれか試してみたい？」

「恩寵の力は通じませんよ」

皇妹の背後で、右将軍が立ち上がった。押し殺した悲鳴のような声が、部屋に響く。

「……叔母上！」

「知っているのよ？　そなたはあの子に名前を預けたでしょう。だから竜種の恩寵に乗せて、常識で考えられないほど、その邪悪な術を効果的に使えるようになったの。でもね、そなたも知っているだろうけれど、わたしの力はあの子の比じゃない。あの子を苦しめるくらい、簡単なことよ。もちろん――」

皇妹のもう一方の手が南方人の頬をなぞり、そのくちびるをたしかめるように撫でた。南方人は無言だった。彼の顔は、苦痛に歪んでいた。

「――あの子を通じて、そなたの命を奪うのもね。そなたの術で、わたしを即座に殺せる？　わたしはね、やりたいと思ったその瞬間に、実行できるわ。人に死を念じさせるのは、そなただけの特権だとでも思っていたの？　傲慢ね。しかも無知だわ。試してみましょうか。どんな死にかたがよくって？　そうね、深い泥沼にでも恋をするのはどう？　すてきよ、恋人の腕に抱かれて死ねるのだから。口の中、喉の奥、肺の中までびっしりと恋人に満たされるの。そなたのような下衆には、もったいないわね？」

がたん、と椅子が動いた。右将軍が座ったのだ。あやつりの糸が切れた人形のような動きだった。

「……叔母上、おやめください。その男は、まだ使いようがある」

「たとえばわたしを呪うとか？」

南方人は荒い息を吐きながら告げた。

「あなたの名は隠されていない」

「そうよ。奪えるものなら奪ってご覧なさい。なにを怯えているの？　人に恐れられる呪われた存在が、まるで風にふるえる蝶のようね。あわれだこと」

「……後悔するぞ」

「楽しいことをほざくじゃないの。わたしを呪う？　それとも、支配してみる？　名告ってあげる、わたしはラキニーよ」

耳元で名をささやかれ、南方人が、ぶるっとふるえた。

皇妹は儚げな笑みを浮かべ、南方人の仕草に傷ついたかのように眼を伏せた。

「そなたが呪えるのは、ひとりずつ。ふたりを同時に呪うことはできないの。そして、途中で術をやめてしまった者を呪うことは、二度とできなくなるわ。だから、わたしを呪うなら、《金獅子公》の次男は手放さねばならないわね？　あの子どもは、そなたの呪いから守られることになるわ。次は娘の方を狙う？　それとも長男？《金獅子公》が、そんなに無防備でいてくれるかしら。彼は怯えない。彼は怒るわ……教えてあげましょうか、無礼な扱いを受けて、わたしも怒っているのよ。とてもね。少し、嫌がらせをしないと気がおさまらないわ」

皇妹は言葉を切った。室内の竜気が、音をたてて動いた。皇妹の背を包み、天井や壁へ届くほど広がっていく。まるで巨大な翼だ。

「子どもを自由になさい」

皇妹の命令に、南方人は声も出ない。泳がせた視線の先で、右将軍が首を上下に動かした。

「いい子ね。きちんとできているかどうか、都へ戻って確認するわ。そのときに《金獅子公》は宥めてあげる。いうことをきいた、ご褒美よ」

あざやかな紫色の眼をほそめ、皇妹はわずかに身を引いて、南方人を眺めた。

「わたしの力が羨ましい？　それとも、わたしが欲しい？　もの欲しそうな顔ね……」

皇妹のくちびるが、弦月のように弧を描いた。

「見飽きたわ」
吐き捨てるなり、南方人の存在はもう忘れたように、彼女は右将軍の方に向き直った。そして、もういちど同じことを告げた。
「かわいそうな人」
「……うるさい……わたしは……」
右将軍は頭を抱えている。かきむしっている。自分の中に入り込んで来た異質なものを、指でえぐり出せると思っているかのようだ。
「聞こえているの、おまえ？　わたしは様子を見に来ただけで、利用されに来たんじゃないの。だからいっているの、巻き込まないでと。お願いよ」
「わかった、わかりました！」
右将軍はまた悲鳴のような声をあげて立ち上がり、すぐに座った。はっとしたように表情が変わった。
「……なんだか頭がぼうっとするのです」
「疲れているのでしょう」
皇妹の声はやさしげだったが、とても本心からいっているとは思えない。
それでも騙されたくなるほど、彼女は美しい。その表情や所作のひとつずつが、自分だけに向けられていると勘違いしたくなる。当然、右将軍は頭をかきむしることも忘れ、彼女を見上げている。見蕩れている、というべきだろう。
なるほど、もの欲しそうな顔など見飽きるはずだ。
「気は変わらないの？」
「襲撃は今夜。《黒狼公》は、その前に始末する」
「あら、困るわ。襲撃は明日に延ばしてちょうだい。夜がいいなら、明日の夜ね。わたしは巻き込まれたくないの。何回いったら、わかるのかしら？」
「明日……いや、今夜……」
「明日よ」
皇妹が念を押した。右将軍は、今夜、明日、とくり返している。
「《黒狼公》は、襲撃のついでに始末すればよいのではない？　病人なのだし、鳥たちも眠らせたのでし

よう？　援兵を呼ぶ手段もないのよ、彼には」
「あの男は……許せない……邪魔だ……」
皇妹は悩ましげに息を吐き、南方人に告げた。
「そなたのあるじは重症ね」
「兵数は多くない。確実に始末したいと殿下が仰せなら、わたしはそれに従うまで」
「その多くない兵で、あの子を倒せるの？」
「できる」
右将軍が甲高い声で笑った。
「できる、できる！　塞の連絡は繋がらぬ、味方の兵はその塞を伝って来るのだ！　左将軍は囮部隊を撃退して悦に入るだろう。助けを呼ぶ炬火は燃えぬ、燃料は始末した。紛失の咎めを恐れて、誰も訴え出て来ない。そのために死ぬのに！」
皇妹は頭を左右にふったが、口ではこういった。
「兵の入れ替えは、おもしろい考えね」
「右将軍の管轄なさる塞の方が被害が多いですな、などとぬかしおった奴らに一泡吹かせてやりますぞ。軍略の天才と呼ばれたわたしを、家柄に寄り掛かるだけの能無しとは思い違いもはなはだしい」
皇妹は静かに右将軍の頭を撫でて、子どもにするように、しいっと声をかけた。
「静かになさい」
「今夜から、わたしが博沙王だ。博沙国を独立させるのだ。わたしが王だ……」
「明日よ」
「明日から……」
皇妹は微笑んで、うなずいた。そのまま扉へ向かい、そこでふり返ると告げた。
「後悔すると思うわよ、あなた」
その言葉が右将軍に向けられたものか、それとも南方人か、あるいは右将軍の口を借りていた——おそらくは第三皇子とおぼしき人物に向けられているのかは、わからなかった。
きっと全員に告げたのだろう。
皇妹はそのまま部屋を出た。彼女の後を追おうか

と少し迷ったが、ヤエトはやめておくことにした。午後の来訪を出迎えていたら、いったいなにが起きただろうか。命を狙われていると忠告を？　いや、それなら医師に扮した南方人より先に来たはずだ。

南方人がことを達成したかどうか、確認しに来たのかもしれない。面会もせずに追い払ったから、毒を盛られたと勘違いしている可能性はある。

なんにせよ、皇妹はもうこの砦にはいないだろう。巻き込まれないために、発ったはずだ。

ヤエトはたぐり寄せていた時間を、特定の過去にひっかけていた力を、解放した。

とたん、反動に襲われた。

鏡が揺れ、自分が寝台から落ちそうになっていることに気づく。前のめりになった彼の手を握っている皇女の顔も蒼白だ。

「終わった、手を貸せ！」

一瞬、意識が飛んだ。

――まだ駄目だ。

まだ倒れるわけにはいかない。皇女が今の光景を正確に理解しているか、確認しなければ。

「……右将軍は、去年のウィーシャの……ように」

「わかっておる」

「呪毒を用意したのは、……呪師です。見覚えがある顔でした……」

胸元に、かるい衝撃を感じた。見下ろすと、皇女の金色の頭頂がそこにあった。薄暗い部屋の中、少女の金髪だけが、やけに明るく見えた。

「わかっておる……三の兄上だ」

声がくぐもっているのは、ヤエトの胸に顔を押し当てているからだろう。

慰めてやりたいが、すべがない。ほとんど感覚がない手を無理に持ち上げ、頭を撫で、髪を梳いた。そのまま頬をなぞり、顔を上げさせた。

皇女は泣いていなかった。堪えたのだろうと思うと、なおさらあわれだった。だが、同情など皇女は望んでいないだろう。ヤエトは声を絞り出した。

「二の君に、お報せせねば」
「都に置いてある伝達官を使う」
「……お信じくだされば、よいのですが」
「信頼を、押し売りしてやる。そなたは少し眠れ。……よく頑張ったな、ヤエト」
王も、と答えたつもりで言葉にならないまま、ヤエトは意識を失った。

6

次に気がついたときには、室内は蠟燭がひとつ灯されているだけの状態だった。
ヤエトが起き上がろうとしているのを察し、ファルバーンが手を貸してくれた。
「水を」
「あまり、ないのですが」
「よい。好きなだけ飲ませてやれ」
皇女が光の届く範囲に入って来た。ヤエトを見て、うなずく。
「思ったより早かったな。具合はどうだ」
「大丈夫です」
答えてみたが、これは口癖のようなものだ。どうせ相手も聞き流しているだけだろう。この応酬はやめるべきだと思う。時間の無駄だ。
ヤエトは慎重に自分の状態を吟味した。頭痛はひどい。予測通りだ。熱も出ている。関節という関節が、ここ、ここ！　ここが関節だよ！　と自己主張をしている。どこが最強の関節か、決定戦をくりひろげているかのようだ。もちろん判定はヤエトの役割で、彼が痛いなぁと思う関節が勝ち点をかさねていくことになる。
どんなに競っても頭痛には勝てないと思うが、いや自分はなにを馬鹿なことを考えているのだ、たしかに熱がある……と思った。
額にあてられた皇女の手は、ひんやりとして心地良かった。

「襲撃は？」
「始まったようだ。あれだけ念押しされていたのに、やはり今夜だったな」
　ヤエトはぼんやりと室内を見回した。無理に起きていても、彼にできることはなにもない。皇女ひとりなら心の支えになるべく頑張るが、ファルバーンがいる。よろよろで使い物にならないヤエトより、ずっと役に立つだろう。
「そうですか」
　口にしてから、なにに対して答えたのだろうと思った。かなり、ぼけている。
「北嶺からは五十羽来る。とても間に合わぬが」
「骨くらいは拾ってもらえるでしょう」
「まだ肉も残っていると思うぞ」
「王はお命も残しておいてくださらないと、北嶺の皆が困ります」
「わかっておる」
　念押しするのもくどいかと思ったので、ヤエトはそのまま黙った。背中が寒い。寒いのに暑い。寝具が重い。上質な素材で仕立てられた衣服でさえ、過敏になった皮膚には耐えられない刺激となる。寝返りをうちたいが、身動きをしたときのもろもろの痛みを考えると、その勇気がない。
　慣れないものだなぁ、と思う。熱は、何度出しても駄目だ。慣れない。少しは楽になればよいのに。もう百回目だからなんともないです、とか。
「二の兄上は、信頼できる部下と左将軍の砦へ移動なさった」
「左将軍の砦？」
「そちら側は、あまり入れ替えがないようだ。右将軍が担当していた側の防衛線から、攻めて来ているらしい。この砦に入れるだけ入れておいて、出口を塞いでから一網打尽になさるとのことだ」
　なるほど。それは効率がよい。
　しかし、それならなぜ、皇女はここにいるのか。
「王……」

「そなたのためだけではないからな！　鳥たちも、動かせぬのだ。騎士たちも」

尋ねもしないうちに答えてくれるのだから助かる。

「安否を確認なさったのですか？」

「二の兄上にお願いして、連れて来た。隣の部屋に寝かせてある。この棟に通じる廊下と外周の通路への入口は、すべて封鎖した」

ヤエトは砦の全体図を頭の中に思い描こうとして、それが無理だと気がついた。熱があるせいではなく、そもそも理解していないからだ。

「迷路のようですからね」

「右将軍は熟知しておろうが、兵に事前に教えておくとすれば、二の兄上の寝所であろう。なんと、ここからはひどく遠いのだ。我らは、ほんとうに疑われておったようだ」

「今はどうでしょう」

皇女は肩をすくめた。

「以前よりは、ましであろう」

「……ファルバーン」

はい、と青年が顔を覗かせた。

「騎士や鳥が与えられた毒は、わたしに用意されたものと同じでしょうか？」

予想もしない問いを受けた、という顔だ。

ヤエトは大きく息を吐き、自分の息の熱さに満足した。久々に、ここまで熱が出た。酒を呑んでひっくり返ったときなど、問題にならない。

「清浄神は、邪竜の血を浄めるために恩寵を……ですから、邪竜が最後に生んだ魔王の力は、それに近いものではないですか」

「……は？」

ヤエトは苛立った。自分の中では当たり前のことなのに、論理だてて説明できないとは。屈辱だ。

「血も水です。浄めなさい、毒の種類が同じなら」

それだけいって、ヤエトは眼を閉じた。通じなくてもかまわない。もう喋るのは限界だ。

「試してみよ」

「……チビの命令を受ける筋合いはない」
「もうそれはやめよといっておろう！」
話し声が遠ざかる。試しに行ったのだろう。
暫くは、ヤエトもぼんやりと起きてなにか考えていたが、自分が考えていることがなんなのかわからなくなって、寝入ってしまった。
眠りと目覚めの狭間で、大きな鏡を見たような気がする。それとも、それはまだ部屋の隅に立て掛けてあった姿見が、乏しい光を反射したのが目蓋に残っていただけなのか。
白い人影が鏡の前に立っていた。神かと思ったが、神なら向こう側にいるはずだ。では、これは先祖の姿かと思う間に、人影はヤエト自身になった。鏡の前に立っているのではなく、鏡に映る影だった。
鏡の中のヤエトは、ひらべったくのされている。ああ、全身が痛いのはそのせいか、と思った。
次に意識が戻ったのは、揺り起こされたからだった。
「逃げるぞ」
話しかけているのは皇女だが、彼の腕を引いているのはファルバーンのようだ。
「敵が火をかけだした」
「どうやって？」
「いくらでも方法はあるだろう」
ファルバーンに背負われた衝撃で、頭がひどく痛んだ。あまりの痛みに、それ以外がすべて吹き飛んだほどだ。鐘になったみたいだな、とヤエトは思った。ガランガランと鳴らされている気がする。
「逃げる、経路です。それに、鳥は」
「ファルバーンの解毒が効いた。少しは動ける」
後ろ半分にしか答がない。しかたがない、とヤエトは思った。黙って燃やされるわけにはいかない。迷うのを承知で、逃げてみるしかないのだ。
「自分で歩きます」
「無茶だ」
「残ると主張しないだけ、感心してください」

まともに戦えるのがファルバーンしかいないなら、彼の動きを制限するわけにはいかない。

「わかりました」

こら、と皇女が叱ったが、ファルバーンはヤエトを寝台に座らせると、剣を握った。

「廊下の様子を見て来ます」

ヤエトは大きく息を吐いた。世界が揺れている。頭痛が少しだけおさまった。正確には、身体のそれ以外の部分が自己主張をはじめたせいで、頭痛まで気にしていられなくなったというべきだろう。立とう、立つぞ、と自分に命じたとたんに、これだ。頑張れ頭痛。情けないぞ。

よし、とつぶやいて立ち上がると、目眩がした。相変わらず背中はぞくぞくしているし、足に力は入らないし、床はふわふわしているし、関節は痛いし、あたりに現実感がない。これは夢なのではないだろうかと思いながら、尋ねた。

「騎士たちは？」

「そなたよりは、ましだな……わたしがもう少し育っていれば、いつかそなたを運んでやるという約束が果たせたのにな」

「やはり、楽しそうな仕事ではありませんね」

皇女はちらりと笑みを見せた。

「まったくだ」

そこから先、ヤエトは前を行く騎士の背を見ながら自力で歩くことしか考えなかった。正直にいうと、痛い、気もち悪い、もう死ぬ、いっそ殺せとも考えていたが。

たまに周囲の歩みが滞ると、叫び声がしたり、剣戟の響きが聞こえてきたりした。鳥の姿におどろいて腰を抜かす兵もいれば、勇気をふるって飛びかかり、返り討ちにされる者もいる。重傷を負い、倒れて苦悶の声をあげ、あるいは静かな骸となった敵兵を押し退けて一行は進む。

とはいえ、敵兵との遭遇は多くない。ルーギンが予測していたように、数が少ないのだろう。交戦し

たのは、おもに単独で略奪に走っている兵だ。
迷路のような廊下の窓越しに見える遠い炎が、彼に昔のことを思いださせた。
沙漠越えだ。
あのときも、火が燃えていた。人が、戦っていた。物資をまとめるためには、破壊に酔う兵士たちを止めねばならず、鉄の規律を誇る皇帝直属の騎士団の助力を乞わざるを得ないこともあった。
騎士たちは睨みを効かせるだけで、物資の搬送は手伝わなかった。そんなことは騎士の仕事ではない、というわけだ。騎士の仕事は戦うこと。弱音を吐かず、逃げず、恐れず、強さを見せつけることだ。それは、昔も今も変わらない。
だから、ヤエトの周囲を歩いている騎士たちの衰弱の程度がどれくらいか、正確には読めない。かれらは具合が悪いとか、もう死にたいほどつらいとか、隠居したいとかは口にしない生き物なのだ。それでも、後衛をつとめるという名目に逆らわず後ろを歩く程度には、弱っているのだと見当がつく。元気なら、先陣を切って戦うはずだ。
前後左右を騎士たちにかためられ、さらにその前に鳥たちもいる。ヤエトからは、最前列に立っているであろう皇女やファルバーンの姿は見えない。
鳥たちも弱っているのだろうか。そうでなければ、騎士を背に乗せるはずだ——いや、それは却って危険だろうか。大きさが大きさだ。身動きがとれなくなるし、剣をふるえば天井にぶつかる。数名は杖を兼ねて槍を手にしているが、部屋を出たときは持っていなかったはずだ。いつの間に、と思う。
ずっと歩いているのだから寝てはいないはずだが、観察力はかなり落ちているようだ。
進むべき方向を、先頭のふたりは理解しているのだろうか。逃げ道を探すために過去を覗いてみてはどうだろう。
ナオが言付けてくれたという薬を使えば——しかし、使うかどうかは皇女にまかせてしまった。

第一、過去が視えたといって、なにが解決するのか。この廊下を往来する人々を幻視したとして、その中から、誰が出口への再短距離を辿るか、どうやって判断する？

無理だ。役には立たない。元気になっても、多少は速く歩けるかもという程度だ。反動でひっくり返るなら、薬は使わない方がいいだろう。

足手纏いにしかならず、ただ守られることしかできないのは、情けなくも心細いものだな、と思う。

歩きつづけることしかできない。

それさえできなくなったら、死ぬときだ。置いて行けと騎士に命じ、皇女の安全を祈りながら。

この頭痛と悪寒と吐き気と目眩と関節痛と……すべての痛みとお別れできるのだ。せいせいする。

涙がこぼれた。

ヤエトは眼をこすった。煙が染みる。まずい、このままでは火よりも先に煙にやられてしまう。隣を歩く騎士が小さく咳き込み、少しだけ足を速めた。

ヤエトも必死で足を前に出した。悪い夢をみているようだ。歩こうとしても、ちっとも進まない。気もちは走りたいのに、身体が動かないのだ。

誰かが彼の脇に手を入れた。さっき咳き込んでいた騎士だ。反対隣を歩いていた騎士も、ヤエトの腕を抱えて自分の肩にかけた。

「尚書卿、まだお休みになるのは早いですぞ」

聞き覚えのある声だ。たしか、都でタルキンと鳥たちの番をしていたとき、家名のあるような貴族はそれぞれ通り名を持つのだと教えてくれた、あの騎士だ。ヤエトはうなずき、微笑もうとしたが、はたしてそれができているのかは自信が持てなかった。

――信じろ。

皇女が薬を使わない理由はなんだ。この場を切り抜けるつもりだから――誰も死なせず、生き延びる心づもりでいるからだ。無理にもしゃんとさせる薬は、彼の体力を根こそぎ奪うだろうが、死ぬ気でいるなら先々など案ずる必要はない。

——皇女の判断を信じるのだ。
すでにヤエトの足はほとんど動いていない。彼にできるのは念じつづけることだけだ。
信じて、皆で生き延びるのだ、と。
なまぬるく煙たい空気が、不意に動いた。どこかから、風が吹きつける。
——外気だ。
「……危険……」
ファルバーンの声が聞こえる。その声を打ち消すように、鳥の羽撃く音がした。廊下から、外に出たのだろう。
——狙われ放題だ。
屋根のある通路は守備側の陣地、戸外は攻撃側の通路、すなわち陥れるべき罠として設計されているはずだ。廊下の窓はそのまま矢狭間となり、身を隠しながら外の敵を狙える。みつかったら終わりだ。
第二皇子はなにをしているのだろう。砦が燃えるのを、傍観するつもりなのか？
「それは承知の上だ」
皇女の声が、はっきりと聞こえた。次いで、また鳥の羽撃き。煙と異臭に押し出されるようにして、ヤエトたちも外に出た。
「これでは守りきれない」
「煙にまかれて死ぬよりよかろう。敵も中には留まれまい。彼奴らとて、黒焦げになるつもりはなかろう。それに、屋根の下では空が見えぬ」
「……空？」
「翼があっても、空がなければ羽撃けぬ」
そこは妙な形の中庭のような場所だった。敵が迷い込むのを狙って作られた、行き止まりだろう。本来なら、建物に出入りするための扉は固く閉じられていたはずだ。
「なにをするつもりだ」
「飛べるか？」
皇女はファルバーンを無視して鳥に声をかけた。
鳥たちは、次々と啼いた。

「うん。大丈夫だ、無理はするな。レトー、おまえは若くて元気だ。さあ、上から様子を見ておいで。わたしの眼になるのだぞ」

一羽の鳥が、くわっと声をあげ、飛びたった。

本来の力強さはなかったが、鳥は飛んだ。みるみる高度を上げ、砦の上空を旋回する。

夜明けが訪れていた。

夜の底を焦がす炎は赤く、朝焼けの空と競り合ってでもいるかのようだ。たちのぼる黒煙は、嵐を運ぶ雲に似ていた。

あの鳥に心を乗せることができればいいのに、とヤエトは思った。切望した。

皇女はそれができる。鳥とともに空を飛べるのだ。今までになく、羨ましく感じた。

——熱のせいだ。

戸外の風と熱気が混ざりあい、暑いのか寒いのかわからない。ヤエトはふるえながら、彼の両脇を支える騎士たちに告げた。

「なにをしている。鳥たちで王を囲め。円陣を組め。お守りせよ！」

叫んだつもりで、語尾がふるえた。倒れかけた彼を、ファルバーンが鳥の足もとに運んで座らせた。

ヤエトは抗議しようとしたが、自分がなにを苛立っているのか、本来なにをなすべきなのか、ほとんど判断できなくなっていることはわかっていた。

誰かに勝手に動かされるのが、嫌だっただけだ。

ヤエト、と声が頭上から降ってきた。

「そなたにも、わたしが視るのと同じものが視えればよいのに」

はい、と彼は答えた。

眼を閉じて、彼は皇女が視ているものを想像しようとした。この砦に来るときに見えた、あの不毛な岩山。そこに点々と並ぶ、塞の影。北西にひろがる砂の海、そして河。いや……河は見なかった。自分の領地と混ざっているようだ。

「そなえよ」

今度は、皇女は全員に告げていた。
「敵も戸外に出ている。あの東の角の向こうに、訓練された一隊がいるようだ。おそらく、我らに気づいている。こちらへ来るだろう」
皇女は鳥に声をかけた。
「リール、おまえは飛べるな？　レトーと上から攻撃だ。たのむぞ」
もう一羽、鳥が飛び立った。ファルバーンが皇女の肩にふれた。
「中に戻ってはどうだ。入口で防衛すれば、多勢に無勢でも戦える」
「鳥は、広い場所の方が得意だ。それに、わたしは空のないところでこやつらを死なせたくない」
皇女は少し間を置いてからファルバーンに告げた。
「そなたは行ってもよい。わたしの部下ではないのだからな。ひとりなら逃げられるであろう」
「……今さら見捨てられるか」
「《黒狼公》をたのむ」
「いわれずとも」
頭の上で勝手に進む会話に、ヤエトはもう苛立つ元気もなかった。呼吸が苦しい。空気が悪いせいだろう。ただでさえ弱っている肺が、もう無理だと悲鳴をあげている。必死に息を吸おうとして、やめろ、と自分に命じねばならなかった。吸ってばかりでは駄目だ。吐かなければ。
「盾、構え！」
金属がふれあう音がした。
「敵も弓矢は不足のようだ。弓兵は数名。斉射の一回は覚悟せよ。二の矢をつがえる前に突っ込んで、蹴散らしてやるがよい」
その直後、ひゅうと空気を切る音が聞こえた。鳥たちが声をあげて駆け出し、騎士もその後につづいた――突っ込んで蹴散らせというのは、鳥への指示だったのか？
あっという間に、中庭は戦場となった。
上空からも巨大な鳥に襲われ、半分がた崩れかけ

た兵士を、甲高い声が叱咤した。

「行け！　土地を取り戻したいのだろう！　奴らを倒せ！」

一羽が、槍に突かれて倒れた。鳥も無敵の化け物ではないと知ったせいだろう、敵は勢いづき、恐慌もおさまりかけた。

「公！」

誰かが呼んでいる。ヤエトの視界には空しか入って来ない。いつの間にか、寝転がってしまっていたようだ。座っているのもだるかったのだろう。

寝ていても、だるい。

身体が重くてたまらなかった。こんなもの、脱ぎ捨ててしまいたい。空を飛びたい。

翼があれば、と思った。皇女は彼を翼と呼んでくれたが、実際には、ヤエトは翼でもなんでもない。彼は動けず、飛ぶこともできない。今だけではなく、いつだって——恩寵の力すら、その場所にとらわれる。皇女の力を借りてようやく動けるのだ。

ほんとうに、翼ならよかった。どんな危険な場所からでも、空へ逃がしてやれる力があれば。

空を切り裂いて飛ぶ、あの黒い鳥のように——。

「公！　……逃げろ！」

ファルバーンの声の必死さに、一瞬、我に返った。なんとか身を起こすと、喊声を上げて駆けて来る兵の姿が目に入った。剣をふり上げている。

「公！」

ファルバーンは声だけ聞こえて姿が見えない。別の敵を抑えるので精一杯なのだろう、とぼんやり考えた。それにしても、敵兵の足がやけに遅い。まっすぐ走って来るのに、ちっとも来ない。だからこんなにいろいろ考えられる——いや、危機的な瞬間を迎え、思考の速度が上がっているだけなのか。

この期に及んで、他人事のように状況を観察し、分析している自分がおかしくて、彼は笑った。そして笑いながら死ねるなら悪くないな、と思った。

いよいよ間近に敵兵が迫ったその瞬間、するどく

風を切る音と、どっ、という重い音が聞こえた。
敵兵の胸に矢が突き立っている。矢羽根は黒だ。男は血を吐き、泳ぐように腕をふり回しながらも足は止めず、そのままヤエトの上に倒れて来た。
横に転がって、かろうじて避けたヤエトの耳に、次の矢が突き立つ音がした。今度は男の背だ。へたをすればヤエトに当たっていただろう。
――来た。
黒い矢羽根は北嶺の、巨鳥の羽根を使ったものだ。なぜかはわからないが、援兵が間に合ったのだ。
低空飛行をした鳥からひとりの騎手が飛び降り、そのまま敵陣に飛び込んだ。風になびく長い金髪が、光の尾のようだ。
「遅参つかまつりました、姫」
「ルーギン!?」
「はい。わたしが参りましたからには、ご安心を」
「姫様ーっ！」
上空から響き渡る大声は、なぜだろう……セルクの声にしか聞こえない。
――なんで内政担当の奴がここにいるんだ？
そこで少しばかり気を失ったらしい。
「ヤエト！　ヤエト！」
はい、と答えたつもりだが、声になっていたかはわからない。それでも薄目を開けると、皇女の顔が見えた。無事だったのかと思ったところで、本格的に意識が遠のいた。

7

敵が距離を詰めずに矢を射ていたら面倒なことになっただろうが、上空で待ち構えていた二羽が、それを許さなかった――敵陣の後背を襲い、無理に突撃させたのだと、意識が戻ったときに教えられた。得意げな口ぶりから、皇女が考えた策なのだろう。
鳥を眼にして敵の位置を探り、あの場でとっさに組み立てた作戦にしては上出来だが、ヤエトが意識

を取り戻すなり、そんなこまかい報告から入るのはどうかと思う。だいたい、敵が屋内から来ていたら終わりだったのだが……、そんな話よりも確認したいことがある。

「なぜ、ルーギンが？」

「途中で、ラキニー様よりご連絡をいただいてね」

答えたのは本人だった。

「……しかし、それは無理だと聞いたことが」

「以前はね。でも、今は力が増したから、と。もっとも、あまり長話はできないそうで、姫が二の君を陥れる策に巻き込まれそうだから、ただちに戻れと伺っただけです」

「《金獅子公》は？」

「報せるだけは、引き受けてくださると。ひとつ、借りになってしまったな」

ヤエトは皇女の方に視線を戻した。

「叔母上の……その、そなたが視せてくれたことは、すべてルーギンに話したと思う」

皇女は少し不安げな表情を見せた。

「姫」

ルーギンは励ますような笑みを浮かべている。いつもの、いかにもな笑顔とは少し違う。なんだか爽やかさが増して男っぽい雰囲気だ。いつもの笑顔もかなりあれだが、これはこれですごくあれだ。皇女はよく平気でいられるものだと思う。

「皇妹殿下は、西の……旧帝国の、竜種の受難を生き延びられたのです。きわどいこともなさったと伺っております。今さら、おどろきはしません。あのかたは、ご自分のなさりたいことを、なさりたいようになさる。それだけです」

「そうは申すがな……」

《金獅子公》がかかわる話だ、半端に伏せることもできなかったのだろうが、気は進まなかったはずだ。

「そういうかたなのですよ、姫」

ルーギンはさらりというが、あの女性と対等につきあって、ふったのふられたのという話になる彼を、

尊敬すべきか恐怖すべきかわからない。
ため息をついて、皇女はヤエトを見た。
「以前は、叔母上の真似もできると思っていたがな。諦めた。あれは無理だ」
皇女にあれができるなら、ヤエトなど必要ない。本気で隠居させてもらう。
かれらは未だに博沙国にいた。第二皇子は無事だそうだ。当然、皇女は顔を合わせている。名告ってはいないというが、正体はばれているだろう。
やれやれ、と思いながら次の質問に移った。
「倒れる直前のことは、よく覚えていないのですが、援兵として到着したのは貴殿だけではありませんでした……よね？」
「セルクのことなら、途中で出会ったのですがね。公の領地から来たそうです」
「……はぁ？」
セルクが遊びに来るのを許した覚えなどない。
彼がぽかんとしているのがよほどおもしろかったのだろう、皇女はくすっと笑って、種を明かした。
「交替要員として、沙漠の民の移動を手伝いに来たらしい。ま、本音はそなたの領地を見たかったのだろう。そこでうかうかと、預言者にな」
たちまち眉根が寄ってしまう。ああいう影響を受けやすい男を近付けてはならない存在だ。
「……なにを吹き込まれたのです」
「わたしが危ないから、助けに行けと。エイギルが止めたそうだが、同じく応援に来ていた北嶺人を三名ほど引き連れて、一目散に飛んで来たらしい。おかげで助かったのだから、あまり怒るな」
どう返せばよいか、ヤエトにはわからなかった。
預言者は本物だ。彼女の神が、皇女が危ないと教えたのも、嘘ではないだろう。過去視の神オルムストが神託なき神といわれる以上、その反対を行くターンの神は、おそらく必要以上に指図する神だ。
そのせいでセルクは勝手に鳥を戦闘に使った。帝国人と北嶺人で仲間割れして……エイギルよりも預

言者の言葉を聞き入れた。すべて、よろしくない。
——やめさせねばならない。
じわじわと、預言者に乗っ取られてしまう。
危機感を覚えているのは、ヤエトだけなのか。皆、暢気に笑っているが、預言者の言葉が上官の命令よりも強くなったらどうする。自分が判断しなくて済む状態に惹かれる者は多いのだ。
——始末するか。
それも難しい。なにしろ、相手は未来を読む。向こうが自分から始末されてやろうと思わない限り、命を奪うのは至難の業だ。
第一、苦労して救っておいて、やっぱり殺しますというのも馬鹿らしい。なんとかうまく共存するすべを探さねばならない——とそこまで一気に考えて、ヤエトは深いため息をつき、布団に沈み込んだ。
目が覚めるなり、また新しい仕事をみつけている。いいかげんにしろと自分にいいたい。
「ま、わたしは嘘はつかなかったよね」
ルーギンが、唐突にそんなことをいった。なんの話だと思って見返すと、騎士はにこりと笑った。
「二十騎もいたら、この砦は制圧できてしまうと。それより少ない数で、できましたよ？」
それは本来の守備兵が守っておらず、稜線から駆け付けるはずの兵たちも来なかったからだが、敢えて指摘する必要もないだろう。どうせルーギンも冗談でいっているのだ。……たぶん。
「これぐらい体調が戻れば、もう出かけられるでしょうか」
「うん？　もう戻るのか」
「いえ、まだ博沙国でやることが」
少し揉めたが、結局、ヤエトは自分の意志を通すことができた。まず、セルクと彼が連れて来た北嶺人は全員、即座に帰国。向こう一年、なにがあっても北嶺から出ないようにと申し渡された。
そしてもうひとつ。皇女の……表向きは《黒狼公》の一行は、第二皇子をともなって、かつてアル

ハンがあった場所へ行く、ということだ。
第二皇子側に拒否されたら困ると思ったのだが、意外にも快諾された。しかも、鳥を使って移動するなら、護衛は北嶺の騎士団にまかせるという。大した信用だ。皇女の押し売りはうまくいったらしい。
ヤエトはまだふらついているので、落ちそうになっても止められるよう、ルーギンの鳥に同乗することになった。例によって、男と乗ってもつまらないと文句をいわれたが、ヤエトは適当に流した。
行かねばならないと思った理由のひとつは、偵察されては困るという雰囲気を、第二皇子に敵対する側が見せていたからだ。偵察に行くとしたら、アルハンをまず見るつもりだった。誰でもそう考える。
かつて水の城と讃えられたアルハンは、沙漠越えのときに徹底した破壊を受け、今は散在する水場と瓦礫が残るばかりである。
水場は淀んでひどい状態になっているが、瓦礫のあいだには数十人の難民が隠れ住んでいた。
――汚染された水を飲みつづけると、まず、手足に震えが来る。それから、幻覚に襲われるようになる。しまいには、幻の方がほんとうだと思い込む。体力がなければ寝込んで死ぬ。体力のある者は沙漠に迷い出て、やはり死ぬ。
ファルバーンの言葉は真実だった。
アルハンでかろうじて生き延びている民のほとんどは、すでに身体の自由を失いかけた者、現実と幻覚の境界がわからなくなっている者、あるいはもう動けない者などだった。
声をかける、逃げる、あるいは石を投げるなどの意思表示ができた者はわずかであった。投石をしたのは老人で、顔色は灰色だった。石は第二皇子の進む先に飛んだため、護衛は即座に剣把に手をかけたが、皇子は無表情に止めた。
「捨て置け」
老人は逃げなかった。おそらく足が自由に動かせないのだろう。汚物にまみれていた。

反抗的な態度を見せたのは、その老人だけだ。とても、ここから兵を出せたとは思えない。

全員の感想を、第二皇子が代弁した。

「囮の兵がここから来たというのは、まことか？」

「多少は動ける程度に健康な者が、囮の役を買って出たのだと思います」

そして、ほとんどが死んだ。

最後の戦闘で、騎馬の部隊は左将軍が守る砦へ向かった。陽動のはずだったのだろうが、そこですでに準備を終えた帝国兵に遭遇した。騎馬の陣容を見たところで、かれらは諦めてもよかったのだ。

それでも突撃したのは、かれらに囮役をやらせていた右将軍との約束があったからだろう。これで終わりだからと。これからは自由に博沙国に出入りできるといわれていたはずだ。

「水のためか」

「浄化の力を持つ者はいたと思います。おそらく、かつての王家の血につらなる者に、恩寵の力が発現したのです。そして、それをたよって人が集まってしまった……」

増えた人数を、その人物は支えきれなかった。

そこへ、持ちかけられたのだろう。博沙王の砦を落とすから、力を貸さないかと。

滅びた故国に舞い戻っていた難民たちにとって、それは歓迎すべき話だっただろう。帝国を苦しめることができる。しかも、水が手に入る。

塞に潜り込んでいたのは、土地の民だった。自由な暮らしを取り戻すためにと唆し、武力で身をたてるしかない乱暴者を集めたらしい。

そういう不平や不満を抱えた輩をたくみに見いだし、利用するのがうまいのは誰か。兵の入れ替わりや囮戦術を考案したのが右将軍だったとしても、全体を眺めて調整していたのは第三皇子だったのではないか……。だが、証拠はない。南方人の呪師の行方も、わからなかった。

はっきりいえるのは、付け入られる隙がこの土地

にはあった、ということだ。

第二皇子とその部下たちは、民とのあいだに信頼関係を築けていなかった。《黒狼公》領に来た使者を見てもわかる。貴族の正使と、そうでない副使は、徹底して別行動をとっていたではないか。

幻視の中で右将軍がいっていたように、徴兵された男たちは備品の紛失を報告できなかった。上官は、入れ替わった兵を見分けられなかった。

そのことを、第二皇子は理解しているだろうか。

第二皇子の表情は、相変わらず動かない。無言であたりを見回している。なにを考えているのか、まったく読めない。

――だが、やるしかない。

「お尋ねしたいことが、ございます」

第二皇子はヤエトを見た。紫の眼は、ヤエトが知遇を得てしまった竜種たちの中でも、もっとも冷たい色合いだ。

「ここに暮らす者たちを、帝国への叛逆者と思われますか？」

第二皇子は答えない。

ヤエトはさらに言葉をかさねた。

「わたしは部下にいわれました。沙漠の手前までが《黒狼公》の領地で、その先は違うのだと――ですが、それをあらためたく存じます」

「あらためるとは？」

ようやく聞けた声にも感情の色はなかった。

右将軍は、乱戦の中で戦死、ということになっている。すでに《天地輪》で報告がなされた。

彼の戦死は事実だ。砦を守って死んだのではなく、攻めようとして死んだ。そこが違うだけだ。

嘘のつけない《天地輪》で、右将軍が王になろうとたくらんだなどと、いきなり持ち出すわけにはいかない。彼は《銀鷲公》の家系につらなる有力な貴族だ。当然、《銀鷲公》が巻き込まれる。その右将軍と《金獅子公》が接触していたという話が出れば、今度はルーギンが沙汰を受ける可能性が出る。真相

にふれるのは、あまりにも危険だ。
幸い、《天地輪》でその話題を追求する者はおらず、右将軍は戦死、で終わった。
沙漠の民をうまく制圧できず、砦にまで肉迫させたとして、第二皇子の評価は下がっただろう。それでも、後ろ楯である《銀鷲公》の力を大幅に削ぐよりはよいからと、第二皇子自身がそれを望んだ。
「沙漠の民も、帝国の民にしてしまえばよい。そうは思われませんか」
第二皇子は周囲を見渡し、かすかに笑った。
「この病人たちを引き取って、治療せよと申すか」
「実に都合がよろしい話と存じます」
「なに？」
「元気であれば、反抗するでしょう。水の問題がなくとも、攻めて来ます。恨みと憎しみが消えることはないでしょう。かれらは故郷を滅ぼされたのです――ですが、王がこの者たちに住む場所を与え、治療してやれば、どうでしょう？　反発はやわらぎ、王を恩人と思う者も出てくるはずです。沙漠の守りに、不必要に多くの兵を割く必要もなくなります」
暫しの沈黙の後、第二皇子は声をあげて笑った。
「わかった。陛下にお話ししよう。それが望みであろう？」
淡白で、短気で、帝国人らしく現実的。気もちの切り替えは早く、後に引きずらない……どうやら、それが第二皇子らしい。少なくとも今のところ、ヤエトにはそう思えた。
「ご賢察です」
「女に仕えているというから、どんな阿呆かと思っていたが、捨てたものではないな。我が相の申した通りだ」
「相……？」
あの、嬉しそうに凧の話をしていた老人がなにを、といぶかしく思うヤエトに、第二皇子は告げた。
「あれは、わたしの師だ。たまに、乞われて学舎に教授しに行っていたそうだ。そこでそなたを知った



と申しておった。口の固い、文句をいわない、察しのよい男だそうだな、《黒狼公》」
「どなたかとお間違えでは……」
「華の騎士を庇って処分を受けたと聞いた」
庇ったというと美談になる。そんな話ではないのだが、詳しく説明するわけにもいかない。《金獅子公》の流した噂の責任を押しつけられただけで、それも局内で有力な人脈もなにもない平の尚書官だったから……とは。
「どうかお忘れください。お考えになっておいでのような話ではございません。それに、お妹君はたいへんにご聡明でいらっしゃいます」
「女はくだらん」
一刀両断である。呆気にとられたヤエトを見て、第二皇子はまた、うっすらと笑った。砦では見せなかった表情の変化があらわれたのは、ヤエトを多少は信用したせいか、それとも沙漠の広さゆえか。
「お言葉ですが、皇女殿下は違います」
「妹のことは見直すよう努力する。借りができた」
そういいながら、鳥たちの陰からこちらを窺っている皇女の方に、ちらりと視線をやった。
あの従者の正体は皇女だと、確実にばれている。
「奮戦したそうではないか。勇ましいことだ」
「あってはならないことですが……」
「皇家の伝統だ、あるべきことであろう。影から影へと渡り歩いて策を弄するばかりの弟より、ずっと男らしい」
迂闊に同意するわけにもいかず、しかし皇女が聞けば喜ぶかも、いやここに至るまでの話を聞けば女だからと馬鹿にしてと烈火のごとく怒り出すかも、と考えながら、ヤエトは答えた。
「お考え違いをなさっておいでです。皇家の歴史は策謀の歴史。皇祖をはじめとする皇家の偉大な統治者は、すべて戦の上手だったと伝えられます。戦の上手とはすなわち、戦はせぬが吉と心得ることに始まります。兵と兵が剣を合わせる戦場を、いかに少

なくするか。それが——」
「史学の博士を顔色なからしめるほどの歴史馬鹿だとも聞いていたが、その通りだな」
遮られてようやく、皇女に対するときと同じ調子で語っていたことに気づいた。
「……恐れ入ります。本来、史官として俸禄をいただいておりましたもので、つい」
「よい。そなたと知遇を得たことは幸運だった。次も敵味方ではなく、同じ側に立ちたいものだ」
「身に余る光栄です」
答えながら、次もそうとは限らないのだと感じた。少し歩み寄れたという甘えを見透かされ、痛烈に批判された気がした。
「わたしはもう帰らせてもらう」
「御意。……誰か、博沙王を砦までお送りせよ」
鳥に乗って飛び去る第二皇子とその護衛を見送ってから、皇女がヤエトの方に寄って来た。
「首尾はどうだった」
「陛下にお話ししてくださるそうです」
「やったな！」
これで、沙漠の民を保護しようとしただけで、叛逆者の同類と看做される危険が、少しは弱まった。贅沢はいうまい、と思う。一歩ずつ、だ。
第二皇子にはわかるはずだ。こんなに近いアルハンの水場を、彼の部下たちが発見できなかったのは、土地の者が協力しなかったからだ。目印の乏しい沙漠で、騎士たちを騙すのは容易だろう。みつかりませんという土地の民を、愚か者め、役に立たんと見下して、そこで終わっていてはどうにもならない。
改革のための気づきは得たはずだ。無自覚に遠ざけるより、うまく利用する方が有意義だと、現実的な彼なら割り切るだろう。それで、沙漠との対立構造が緩和されれば、こちらも助かる。
「それより、鳥たちのあいだでこそこそと、なにをなさっていたのです？」
「ああ、食料をな。ほら、鞍袋に携行食を仕込んで

あるだろう。せめてあれを、ここの民に与えたいと思って。……見ろ、皆、飢えた顔だ」

かろうじて正気を保っている者たちが、遠巻きにこちらを見ている。たしかに、眼のかがやきばかりが目立つその表情は、飢えを感じさせた。

「国が滅びるとは、こういうことです」

「……うん？」

ヤエトが帝国を嫌いではないのは、帝国は滅多にこういう滅ぼしかたをしないから……だった。だが、沙漠越えは違った。殲滅（せんめつ）という言葉でしか表現できない、そういう戦がつづいた。

「人はひとりでは生きてはいけない……だから寄り集まって、国ができる。人が、国を作るのです」

「うん」

「人はひとりでは弱い。国が滅ぶと、弱い者はさらに弱くなる。誰にも手助けしてもらえないからです。人が集まって国となったとき、弱者を弱者のままにしては、意味がない。国のなすべきことは、なによりもまず弱者を救うことなのです。不幸に沈んだまま這い上がれない存在をなくしてこそ、国というものに意義が生まれます。その国に生きていることに、民が誇りを持てるようになります――」

「そして、その国を治めていることに、統治する者が誇りを持てるようになる」

見下ろすと、皇女は真面目な顔で飢えた民をみつめていた。そして、つぶやいた。

「帝国の、皇家の一員であることを、誇りに思っていたい。こういう光景を、できるだけなくしたい」

ヤエトはこの若いあるじに聞かせようとして語っているわけではなかった。自分の考えを、まとめていただけだった。

――わたしを越えて行かれるだろう。

はっきりと予感した。皇女はきっと、彼を必要としなくなる。そう遠くない未来に。

「そのために、我らがお手助けします」

彼が皇女を導くのではなく、皇女が彼に進むべき

道をさし示す日が、じきに来る。手助けという言葉の含む意味は、変質していくだろう。

「今日の糧を与えるところから、であろうな」

少し距離を置いて見守っていたルーギンに視線をやると、騎士はうなずいた。彼は歩み寄ると、皇女の手から携行食を取り上げた。

「万が一ということがございます。わたしにおまかせを、姫」

皇女はため息をついた。

「安全な距離を置いて眺めていろ、というのだろう。わかった、そなたには命を救われたからな。今日は、ということを聞いてやろう。ヤエトも来るか？」

「わたしはファルバーンと用事があります。ちょっと歴史的な構造物に興味がありまして、案内をと」

歴史と聞いただけで、皇女はにっこりした。

「行って来い。無理はするな」

巻き込まれまいとしているのが、あからさま過ぎる。ヤエトは苦笑を見せないように努力しながら踵を返し、ファルバーンのいる方へ移動した。

アルハンに来たもうひとつの目的を、果たさねばならない。

「みつかりましたか」

青年はうなずき、膝をついた。ヤエトには、見分けがつかない。砂が流れ、埋もれかけた石の破片が覗いているだけで、目立つ特徴はなかった。

石片には紋様が刻まれていた。砂に洗われてところどころが欠け、摩滅してもいたが、それはきっとこの街の祈りをあらわすものだったのだろう。都市は祈りであふれていたに違いない。

「感じます、この下です」

「ここから浄化できますか？」

ファルバーンは眼を閉じた。眉間に、かすかに皺が寄っている。銀の髪がさらさらと風になびいて、青年の肩から胸許へとこぼれ落ちた。

アルハンの澄んだ水は、穢れた水があってこそ生まれた。ここは逆説的な場所だ。

魔界の蓋が開きかけている今、湧き水の穢れも増しているだろう。だが、同時にファルバーンに与えられた恩寵の力も増しているはずだ。

「以前も、やってはみたのです」

ぽつりと、ファルバーンは告げた。

「ええ。そうでしょうね」

「ご存じだったのですか？」

「死ねといわれた、と聞きました。そんなことをあなたがた母子にいうのは、アルハンを捨てきれぬ民に違いない。アルハンに行ったなら……なにもせずに立ち去るには、あなたは責任感が強過ぎる」

青年の表情は暗い。過去を思いだしているのだろうか。長いあいだ、彼は黙っていた。

ヤエトはそっと言葉をつづけた。

「民を二の君が引き取ってくれたとしても、ここから沙漠全域の水が穢されるのでは、放っておくわけにはいきません。たとえ民が認めなくても、あなたにはこの土地の神より賜った恩寵の力がある。その力を奪うことは誰にもできません」

そして、誰かに肩代わりしてもらうこともできない。それが恩寵の力というものだ。

無言のまま、ファルバーンは両手を地面についた。恩寵の力がはたらいているのかどうか、ヤエトにはまったくわからない。彼には無縁の力だからだ。

やがて、青年は大きく息を吐いた。

「……可能な限りは、やりました。ただ、どれくらいもつかは、わかりません」

「ありがとう」

「公のためではありません」

「すべての地上に生きる者のためになる行為です」

怪訝そうな表情を見せたファルバーンに、ヤエトは静かに告げた。

「近いうちに、お話しします」

皇女にも、話さねばならない。ルーギンにも。

彼が視た光景――世界の罅と呼ばれるものがどこかにあり、それを修復しないと魔物たちが魔界から

あらわれて地上を荒しはじめるという……子どもを脅すための作り話のような、真実を。

預言者にも会わねばならない。彼女が神から与えられた幻視を語ってもらえば、なすべきことがわかるだろう。正直にいって気は重いが、やるしかない。

ヤエトはうずくまったままのファルバーンの周囲に、昔日のアルハンの面影を追って眼を凝らした。なにも幻視の力を使う必要はない。沙漠越えのときの記憶と、知識さえあれば見えてくる。

祈りの紋様で飾られた家々、吹き上がる泉水。人工の泉の地下には送水管が通され、水量を調節するための仕掛けがあった。実際に動くところを見るのはかなわなかったが、想像はできる。

ここはきっと城だったのだ、と思う。一回袖を通した服は二度と着ないという王家の人々が、下界からは隔絶された生活を送っていた場所だ。そしてその城の地下では、名もない者たちがすべての穢れを背負い、粛々と死ぬために暮らしていた。その中に、ジェイサルドもいた。だが彼は死なずに城を出た。そして、戻った。この国を滅ぼすために。

ヤエトは眼を閉じた。

——滅ぶべくして滅んだのだ。

清浄神の恩寵を、大袈裟なものにし過ぎた。たしかに、穢れた水を浄化する力は素晴らしい。だが、アルハンは違う道を進むべきだったのだ。ありもしない穢れを名なしの子どもに押しつけ、それを殺して安心していた。清浄神の恩寵は、かれらが後から考えだした、そんな穢れや浄めに左右されるものではなかったはずだ。

これだけ沙漠の縁に近ければ、交渉次第で生き延びられただろう。皇帝を守る盾になると誓い、恭順を示せば救われた。だが、アルハンの王はそうしなかった。沙漠越えの軍も彼にとっては穢れだったのだ。そして、あいだに立つべき者は、アルハンに恨みを抱きこそすれ愛着はなかった。

滅ぶべくして滅んだとしかいえない。

アルハンは間違った。帝国は——北嶺は、あるいは《黒狼公》領は、間違わずにいられるだろうか。

「ヤエト、行くぞ」

皇女の声に、彼は顔を上げた。ファルバーンも立ち上がる。

ゆっくりと歩きながら、ヤエトは考えた。

鏡の向こうに隠されているのが過去だとしたら、未だ映らざるものが未来、映っているものは今だ。

彼が幻視した鏡の向こうで、空は秩序と叡智を示し、その侵すべからざる超越性をあらわしていた。だが、現実の空はどうか。

愚かな争いが絶えない大地の上に広がっていても、空だけは自由のための場所であってほしい。

今日も——そして、明日も。

気がつけば、彼は立ち止まっていた。空だけでは駄目なのだ。この廃墟が語っている。自由は大地にあまねく広がらねばならない。

「どうした、ヤエト。帰りたくないのか？　きっと皆、気を揉んでいるぞ」

待ちきれずに走って来た皇女が、そんなことをいった。皆とは誰だろう。ジェイサルドとか。……彼にも気の重い報告をせねばならない。間違いなく魔物は来る、そなえよ、と。しかし、どうやって？

「王も、そろそろ北嶺にお戻りにならねばなりませんね。お姿をお見せにならなくなって、長いはず。それこそ、皆が案じているに違いありません」

「そうだな……セルクに聞いたところでは、繁殖期はもう終わりだそうだ。卵を抱いている雌が多少、残っているが……そうそう、クラルの雛がな、孵ったそうだぞ。てのひらに乗るくらいで、ぴいぴい啼いて、それはかわいらしいそうだ。楽しみだな」

「では、まっすぐお戻りになりますか」

「そうだな、一回戻って、今度はクラルに乗って、公式訪問がしたいな」

「博沙国ですか？　歓迎してもらえるかどうか」

皇女はくちびるを尖らせた。

「そなたは、ほんとうにわからん奴だな！《黒狼公》領に決まっておろう。せっかく行ったのに、あの部屋しか見ていないのだぞ。聞けば街には芝居の一座がいて、たいそうな評判をとっているとか。是非、見物したいものだ」

スーリヤに聞いたのか。そういえば、使用人に休暇を与え、芝居見物でもさせろと指示した記憶がある。工事の人足ばかりを動員していたら客席がむさ苦しくなり、ギスケルが不平をいったとか。

そのギスケルも、そろそろ帰り着く頃だ。預言は真実だったというなら、反論したい。博沙を救ったのはヤエトではない、皇女だ、と。もっとも、ギスケル風情に皇女の存在を明かす気はないが。

「丁重に追い返して差し上げましょう。きっと、王じきじきのご決定を必要とする書類が山積みです。物見遊山をなさる暇など、おありではないはず」

「ああ……嫌なことを思いださせるな」

見るからにげんなりした皇女を見下ろして、ヤエトは微笑みかけた。

「こう申し上げて、おなぐさめすることになるかわかりませんが、わたしも王とご同様です。いいえ、それ以上かもしれません。書類の溜まる場所が、いくつもございます。そろそろ北嶺にも参りませんと」

「そうだな。そなたも雛鳥を見たいだろう。早く戻って来い」

「ミムウェ様」

「……うん？」

「世界は、美しゅうございますね」

だしぬけになんだと呆れられるかと思ったが、皇女は真面目な顔でうなずいた。

「そうだな。わたしもそう思う」

明日も生きていられるとは限らない。

だから尊いのだと思っていた。彼が知っていたのは死で終わる世界――未来のない世界だった。

これからは、その先にも夢をみよう。

自分がいつ死ぬかわからなくても、関係ない。彼

が地上を去っても、世界は美しいのだから。
「それを、忘れずにいられればよいと思います」
「そのことなら、案ずるまでもない。わたしが思いださせてやればよいのだろう」
ヤエトははっとして皇女を見た。少女は風に向かって立っている。断崖の上でそうしていたように。
「世界は美しかったと、ちゃんと覚えている。だがな……わたしが忘れそうになったら、思いださせるのはそなたの役目だぞ？」
「王が、お忘れになることはないと存じます」
ヤエトの答が意外だったのか、皇女は彼をふり仰ぎ、暫し、ふたりは無言でみつめあった。
変わらずにいること、忘れないことは難しい。でも今は、それができそうな気がした。明日も、その次の日も、信じていたい——それが奇蹟を希うようなものであったとしても。
おおい、と遠くから声が聞こえた。
「そろそろ行くぞ、チビ！」
ヤエトの口の端に笑みが浮かび、皇女は逆にくちびるを尖らせた。奴め調子に乗りおって、覚えておれ、とつぶやきながら、皇女は歩きはじめた。
風に舞う砂を含んで黄ばんだ空を見上げ、ヤエトは祈るようにつぶやいた。
「わたしも忘れません……きっと」
この日、世界が美しいと感じたことだけは。
（了）

あとがき

本格隠居願望ファンタジー『翼の帰る処』シリーズ、通算四冊目です。

このシリーズには、隠された「隠居願望」を刺激する効果があるらしく、そうだねぇ、隠居したいものだねぇ、とお感じになるかたが多いようです。

残念ながら、隠居生活の第一歩を踏み出してみました！……などという体験談は届きません。やはり願望から実践までのあいだには深い溝があるようです。

主人公も同様のようで、理想が遠ざかるばかりの展開に、かるく絶望しかけています。こんな状態で隠居を目指しているといえるのか？　と自問自答してみたり。冷静なようでいて衝動的なところもあり、年齢の割に子どもっぽい人だと思われるかもしれません。

自分が子どもだった頃、大人は別世界の存在だと思っていたことを覚えています。二十歳を過ぎた人たちは、すごく大人なんだと思い込んでいました。でも、自分が四十を過ぎた今は、とてもそんな風には思えません。わたしのまわりの同年輩の人たちは、大人らしくふるまうべきときはそうできても、ちょっとしたことですぐ子どもに戻ります。

つまり、自分を場面にあわせて制御でき、大人を装えるのが大人。装えないのが子ども

なのではないでしょうか。社会性は経験を積むことで獲得できますから、年齢が高いほど大人を装える人は増えるけれど、完全に年齢と比例しているわけではないだろう……というのが、最近のわたしの「大人／子ども」観です。

ヤエト先生の社会性は……あまり高いとはいえないような気がします。経験ではなく、知識で対応している感じ。それでときどき耐えきれず、子ども全開に。逆に皇女は宮廷で揉まれているので、若くても経験は豊富。見くびられるわけにはいかないと、大人ぶっていることも多いでしょう。それでも歳相応の表情を見せるのは、ヤエトに気を許しているからだろうなぁ、と考えながら書いています。

ところで、思ったより早く続刊が出たというお褒めの言葉と一緒に、上下同時刊行をというご意見もよく伺います。

一刻も早くつづきが読みたいと思ってくださるのはとても光栄なのですが、すみません、二冊同時刊行は無理です。原稿は書けます。二回とも二冊まとめて書いていますから、それは問題ありません。ただ、校正が……。実は二冊同時、過去に経験があります。二度とできない、と実感済みなのです。二か月連続が、わたしの能力で対応できる上限です。

だいたい、上下巻になること自体が間違いなんですよ。薄くて軽くてぺらーっとしてさらーっと読める一冊の本にしたいんですよ、わたしは！

と、せつせつと内田さんに訴えたら、爽やかに笑いとばされました。
「あはは、そうですねぇ～」
って！　無理っていわれてるような気がしますぞ。
「だって妹尾先生、無理でしょう」
はい。わかっています。ちょっと夢見がちになっていただけです。
しかしですね。今後、「一冊で一区切り」なボリュームの話で、読者の皆様にご満足いただけるでしょうか？　駄目なんじゃないでしょうか。内田さんも、たぶん無理でしょうと仰せになりました。こんなところで意見が一致したくないのに！
となると、最低でも上下の組み合わせというスタイルは次も踏襲せざるを得ず、上下で済めばまだしも勢いがつき過ぎて上中下になったら……と考えると、ちょっとしたホラーです。厚くなる、増える未来はいくらでも想像がつくのが困りものです。
書くのはともかく、校正がですね……。ああ、赤の入らないゲラを出してみたいといったら、これも内田さんに爽やかに笑い飛ばされました。無理ですね。うん。わかってるんです……わかってるんですけどね！　人は夢がないと生きていけないの！
まぁ、なにごとも一歩ずつ。寝言は寝てからいえ、本にするときの心配は書いてからしろと思うことにしましょう。書いてみたら案外、一冊でみっちり読みごたえもあって――はいはいすみません、無理ですね、わかってます。現実は厳しいのです。

実りのない逃避はこのへんにして、今回も美しいイラストを描いてくださったこときさんに、あらためて感謝の言葉を。カバーもすてきなのですが、口絵！　口絵！　口絵が好き過ぎて、ファイルをいただいてからずっとデスクトップにしています。作者特権です。ありがとうございます！　ああ小説書いててよかった！

読者の皆様にも、この本を読んでよかったと、そう思っていただければよいのですが。読書の時間を楽しめた——あの世界へたしかに行けた、と。

世界を創るのは作者の特権なのでしょうが、逆にいえば、その創られた世界へ旅立つことは読者の特権なのではないでしょうか。この本があなたにとって、世界へと没入するよろこびを感じられるものであれば、とても嬉しいです。

二〇〇九年八月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス



幻狼 GENROU FANTASIA NOVELS

翼の帰る処（ところ） 上・下

NOVEL 妹尾ゆふ子

ILLUST ことき

「過去を視る」力を持つ帝国の史官・ヤエト。病弱な彼は、赴任先の北嶺で地味な隠居生活を送ることを夢見ていた。しかし、政治に疎い北嶺の民に悩まされ、さらには北嶺に太守として来た勝ち気な皇女に振り回され休まる間もない。だが、北嶺を知るにつれ、ヤエトはこの地に帝国の秘密が眠ることに気づいていく…。歴史の光陰が織りなす壮大なるファンタジーロマンの扉がいま開かれる──。

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

翼の帰る処2
―鏡の中の空― 上

NOVEL 妹尾ゆふ子

ILLUST ことき

蛮族との戦で傷ついた北嶺郡の復興のため、病弱な体を押しながらも奮闘するヤエト。そんな彼に、皇女の推薦で貴族に出世するという「悪い知らせ」が飛び込んでくる。失意の中、新年祭のために皇女と都に向かった彼は、その式典の最中、さらなる衝撃の事実を知らされることとなる……。妹尾ゆふ子の人気ファンタジー、待望の続編が登場!!

幻狼ファンタジアノベルス



幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

世界画廊の住人

NOVEL **栗原ちひろ**

ILLUST **石据カチル**

記憶喪失の画家リンと出会った錬金術師見習いのセツリは、神殺しを目的とする深淵派のカルヴァスに追われ『世界画廊』逃げ込む。異界への扉が絵の数だけ存在するその場所で、白い王女アイカの絵に心惹かれたセツリ。リンの不思議な力よって絵の中に入り、アイカの悲しい境遇を知って額縁の外に連れ出そうとするが…。やがて辿り着く、世界の禁じられた真理。その先にあるものは――！

幻狼ファンタジアノベルス



幻 GENROU 狼
FANTASIA NOVELS

オタクホスト桜木玲音の災難

NOVEL 佐々木禎子
ILLUST 村崎久都

新宿歌舞伎町のホスト・桜木玲音は、実は『二次元キャラにしか萌えられない』という生粋のオタク。行方不明のキャバ嬢探しやらストーカー相談やら、次々と舞い込む厄介事に、玲音はガンマニアの弁護士、腐女子のコスプレイヤー、ネット中毒のゴスロリSEら、オタク仲間たちとともに立ち向かう！
すべての愛すべきオタクたちに捧げる抱腹絶倒のラプソディ――。

幻 GENROU 狼
FANTASIA NOVELS

第一回

幻狼大賞 作品募集

夢に向かって挑戦していくその力を「幻狼大賞」に、ぶつけてよう!!
あなたの熱意が小説界の未来を切り開きます！

Novel 小説部門

幻狼大賞 **100万円**

優秀賞 **50万円**

奨励賞 **10万円**

学生特別優秀賞（学生のみ） **30万円**

学生特別奨励賞（学生のみ） **10万円**

Illustration イラスト部門

優秀賞 **30万円**

奨励賞 **5万円**

学生特別奨励賞（学生のみ） **5万円**

「学生特別優秀賞」「学生特別奨励賞」は本募集に応募された作品のうち、優れた内容ではあるものの上位の賞にはあと一歩届かなかった作品に対し、応募及び受賞時点で学生である方を対象に特別に選考される賞です。

幻狼大賞 作品募集

募集作品 ジャンルを問わず、エンターテインメント作品を募集。商業的に未発表作品であることが条件（同人誌や営利目的でない個人のＷＥＢサイト上で掲載された作品も応募不可）

応募締切 2010年3月末日　当日消印有効

発　　表 2010年6月末日（予定）
幻冬舎コミックスＨＰ、幻冬舎コミックス頒布物上にて

選　　考 幻狼ファンタジアノベルス編集部

募集要項

小説部門

◆フォーマットは、縦書き1600字（40文字×40行）を１枚とし、80～120枚以内。
◆用紙のサイズはA4を使用してください。
◆データの形式は問いませんが、フロッピー、CD等、データのみの応募はできません。必ずプリントアウト原稿でご応募ください。
◆原稿用紙は左肩をダブルクリップで綴じ、右下に必ず通し番号をふってください。
◆本文原稿のはじめには以下のような応募者プロフィールを2枚つけてください。
1枚目：応募用紙をA4の紙に貼り付ける。
2枚目：応募作品のあらすじ（800文字以内）。
◆感熱紙はご遠慮ください。また、鉛筆書きは不可です。誤字・脱字等の無いよう、しっかり推敲しましょう。
◆1人2作品までの応募と致します。

イラスト部門

◆用紙のサイズはA4以上を使用してください。
◆カラーイラスト2点、モノクロイラスト2点を1セットとしてご応募ください。
◆CG作品の場合は使用ツールとそのバージョンを明記のうえ、CD、DVD等のデータディスクとプリントアウトを同封してください。
◆応募用紙は作品の前に付けてください。
◆1人2作品までの応募と致します。
◆原稿返却を希望される方は、返送先の住所・氏名を書き、送料分の切手（作品を送る時と同額の切手）を貼った返信用封筒を同封してください。
◆発送の際は、作品が折り曲がらないよう、厚紙を添え、ビニール袋に入れることをお勧めします。

送付先

〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
幻冬舎コミックス　編集二部
「第１回　幻狼大賞」係

【注意事項】●同一作品による他の文学賞への二重応募は認められません。●条件を満たさない応募作品は選考対象外となります。●入賞作品の出版権及び映像化、コミック化、ゲーム化、ドラマCD化などの二次使用権は、すべて（株）幻冬舎コミックスに帰属します。別途、規定の印税をお支払い致します。●応募用紙は弊社HPより、プリントアウトして下さい。※いただいた情報は、応募者の皆さんの許可無く、編集以外の第三者に譲渡・提供することはありません。

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部



Colophon

翼の帰る処［ところ］2——鏡の中の空——下

THE HOME OF THE WINGS——Volume two——Lower volume

二〇〇九年八月三十一日——第一刷発行

著者——**妹尾ゆふ子** せのおゆふこ

発行人——**伊藤嘉彦**

発行元——**株式会社 幻冬舎コミックス**
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六四三四（編集）

発売元——**株式会社 幻冬舎**
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六二二二（営業）
振替 〇〇一二〇—八—七六七六四三

コンセプトデザイン——**コードデザインスタジオ**

印刷・製本所——**共同印刷株式会社**

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は
送料当社負担でお取替致します。
幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2009
ISBN978-4-344-81740-1 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344817401

1920293009001

ISBN978-4-344-81740-1

C0293 ¥900E

Published by
GENTOSHA COMICS

定価—本体900円+税
発行—幻冬舎コミックス
発売—幻冬舎



翼の帰る処 2 下
——鏡の中の空——

THE HOME OF THE WINGS——Volume two——Lower volume

四大公家のひとつ《黒狼公》となったヤエトのもとに、砂漠に巣食う盗賊を捕縛しようと第二皇子の使いがやってくる。その盗賊団と接触を試みたヤエトは、自らの恩寵の力と対になる未来視の力を持つ女性と出会い…。一方、兄である皇子同士の激しい後継争いを目の当たりにし、衝撃を受けた皇女は、ヤエトの助けを得ながら、自らの進むべき道を模索し始める。
——陰謀と謎が渦巻く中、ヤエトの過去視の力が視た『真実』とは!?